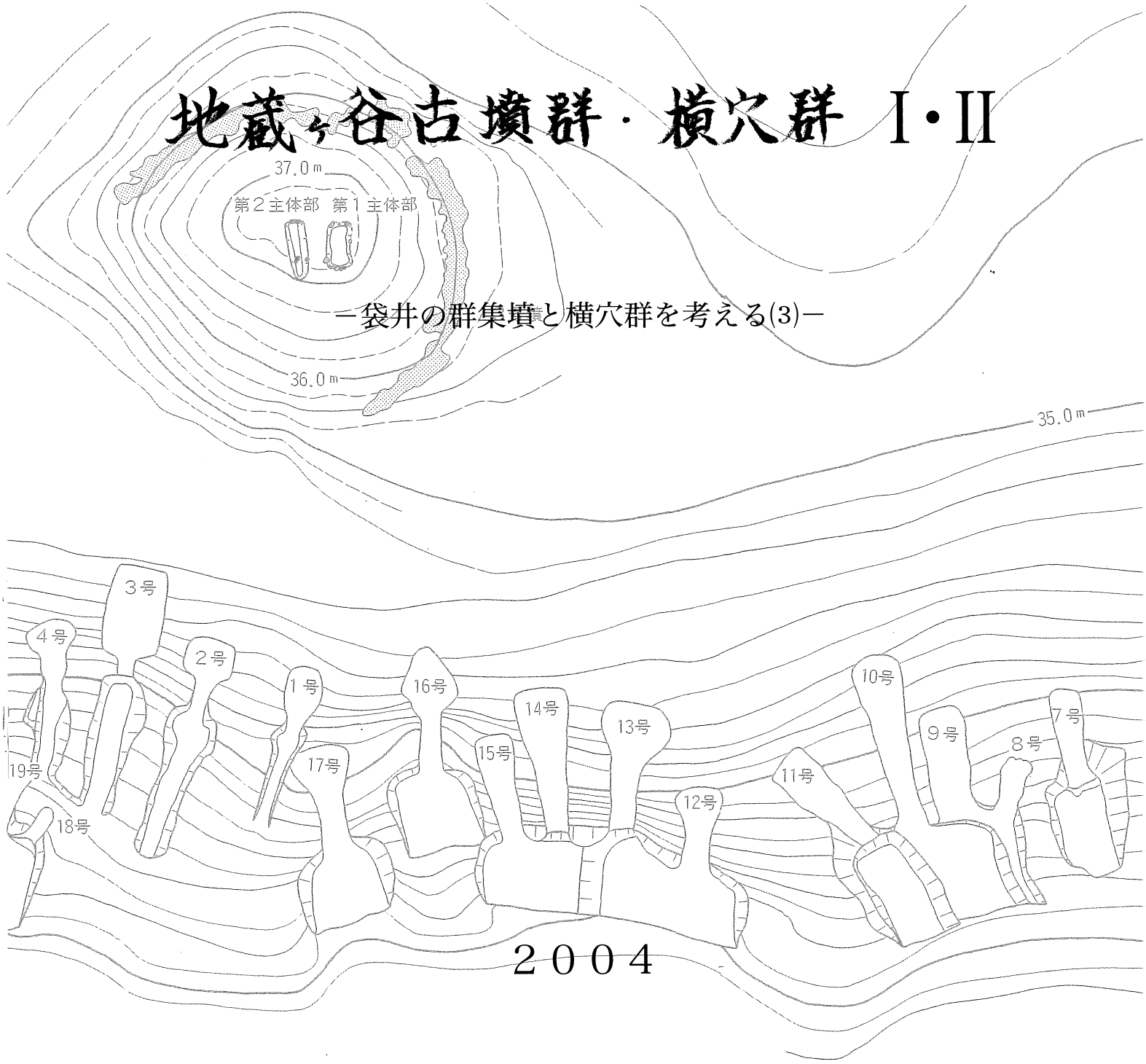
袋井市考古資料集　第４集

地蔵ヶ谷古墳群・横穴群 Ⅰ・Ⅱ

－袋井の群集墳と横穴群を考える(3)－



２００４

袋井市教育委員会

袋井市考古資料集　第４集

地蔵ヶ谷古墳群・横穴群 Ⅰ・Ⅱ

－袋井の群集墳と横穴群を考える(3)－

２００４

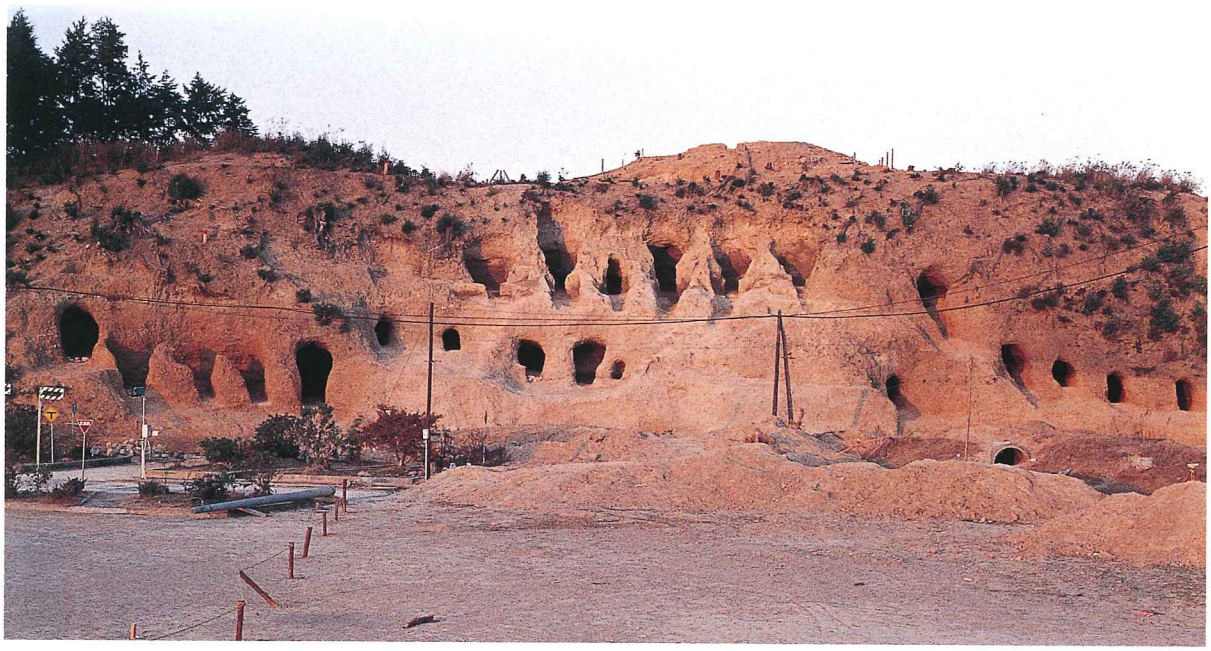
袋井市教育委員会

• 発掘された地蔵ヶ谷横穴群 •



(1)地蔵ヶ谷古墳群・横穴群遠景

西から撮影した空中遠景写真です。左が東海道線、右が東海道新幹線で、右上に見える給水タンクの下あたりの切通の丘陵地に地蔵ヶ谷横穴群がありましたが、新幹線と南幼稚園の建設でほとんど消滅しています。右下の赤い屋根は袋井南小学校の体育館で、これより手前が古墳時代後期の大集落である大門・掛之上遺跡群が展開しています。



(2)地蔵ヶ谷古墳群・横穴群完掘状況

昭和37年度の東海道新幹線と、昭和46年度の南幼稚園建設の２回の発掘調査で27基もの横穴墓が発見されました。副葬品についても、有名な装飾須恵器の壷や金色にかがやく冠、豊富な武器や玉類などが出土しています。遠江地域の横穴墓は６世紀前葉～８世紀初頭の間で造られましたが、地蔵ヶ谷横穴墓群の中にも６世紀前葉に造られた袋井市最古の横穴墓が含まれていることが発掘調査の結果で判明しました。写真は第２次発掘調査の完掘状況で、南西方向からの撮影です。

• 地蔵ヶ谷横穴群出土の素晴らしい副葬品の数々 •



⑴地蔵ヶ谷22号横穴内から土器が多数出土

横穴墓からは、主に須恵器などの土器類や、耳環や玉類などの装飾品、鉄刀や鉄鏃などの武器類が出土します。当時の人々が死後の世界に持っていこうとした貴重な品々の様子が横穴墓の発掘調査から分かります。



⑵地蔵ヶ谷10号横穴内出土の冠帽

この銅版に金を付けた、金色にかがやく冠は、レントゲン撮影の結果細かな彫物があることが分かっています。小さな穴が外縁に付けられていることから、小玉が糸で結ばれちりばめられていたと考えられます。



⑶地蔵ヶ谷５号横穴出土の首飾

紺、白、薄茶色などのさまざまな色彩をもち、管玉、丸玉、勾玉の色々な形のおしゃれな玉類が、貴人の頸を飾っていました。死後の世界も豊かな生活を望んだのでしょうか。



⑷地蔵ヶ谷22号横穴出土の土器類

横穴墓からは葬式に使用されたさまざまな器が、出土します。形も茶碗形、高坏形、壺形、急須形などが見られます。これらの器は、食物を盛ったり、酒を入れたりする形のものが多いことから、死者と生者が共に食事を交わした葬式の様子を伺い知ることができます。

例　　言

1．本書は、昭和46年に袋井市教育委員会が実施した袋井市南幼稚園建設に伴う地蔵ヶ谷古墳群・横穴群の第２次発掘調査報告書である。さらに、昭和36年に静岡県教育委員会が実施した東海道新幹線建設に伴う地蔵ヶ谷古墳群・横穴群の第１次発掘調査もあわせて報告する。また、付載として昭和42年調査の茶園改植に伴う宝野金山古墳、昭和45年調査の久能東山古墳群の発掘調査結果についても掲載した。すでに報告済みではあるが、地蔵ヶ谷古墳群の刀の整理をしていたところ金山古墳群の直刀と八幡山横穴群の須恵器が確認されたのでこれについても掲載した。

2．各遺跡の発掘調査の担当者は、地蔵ヶ谷古墳群第２次発掘調査については袋井市教育委員会の川合正一（当時）、第１次発掘調査は平野和男・山村宏・大谷純仁、宝野金山古墳の発掘調査は大谷純仁、久能東山古墳群の発掘調査は大川清の各氏である。

3．本書刊行に係る事務については、袋井市教育委員会社会教育課文化財係が行った。

4．本書の編集は松井一明が行った。

5．挿図・図版については各担当者と調査関係者が作図したものを基に松井が作成した。写真撮影については現地写真は各担当者が撮影したものを、久能東山古墳群関係については大川氏が撮影したものを使用した。遺物については松井が撮影したものを使用した。遺物実測図の一部に前田庄一氏作図のものを使用した。

6．すでに刊行されている概要報告書と古墳・横穴の号名については、重複する号名や別の古墳群の名称になったものもありかなり繁雑になっているため、本報告書で整理を図った。今後、本報告書をもって正式な号名としたい。

7．本書の執筆は松井が行ったが、久能東山古墳群については大川清氏提供の原稿を基にして編集して掲載した。

8．本調査で得た資料については、久能東山古墳群以外はすべて袋井市教育委員会が保管している。

9．本書作成にあたっては下記の方々・関係機関にご教示、資料の提供を賜った。（敬称略）
池上悟、伊藤寿夫、伊藤雅文、伊藤美鈴、今津節生、井村広巳、大川清、大谷晃二、大谷純仁、大谷宏治、岡林孝作、川井正一、加藤理文、鬼沢勝人、後藤健一、柴田稔、鈴木敏則、鈴木敏中、鈴木哲司、白澤崇、塚本和弘、戸塚和美、永井義博、中野宥、長野康敏、平野吾郎、廣川達麻、前田庄一、松本一男、向坂鋼二、安村俊史、山崎克巳、山本宏司、米田文孝、磐田市埋蔵文化財センター、掛川市教育委員会、静岡市立登呂博物館、静岡県横穴墓研究会

目　　次

第１章　はじめに …… 1
第２章　周辺の古墳群の様相 …… 2
第３章　遺構（古墳群・横穴群） …… 5
　第１節　古墳群（方形周溝墓） …… 5
　　ⅰ）墳丘　ⅱ）主体部　ⅲ）副葬品　ⅳ）方形周溝墓
　第２節　横穴群 …… 7
　　ⅰ）墓前域・小単位群・築造時期・形態　ⅱ）内部施設と副葬品の配置
第４章　遺物 …… 47
　第１節　土器・陶器 …… 47
　　ⅰ）須恵器・土師器・山茶碗　ⅱ）弥生土器
　第２節　鉄製品・装身具 …… 50
　　ⅰ）馬具　ⅱ）直刀　ⅲ）鉄鏃　ⅳ）刀子　ⅴ）鉄釘　ⅵ）耳環・玉類・冠
第５章　袋井の群集墳と横穴墓を考える(3) …… 79
　第１節　地蔵ヶ谷横穴群から見た遠江の横穴墓の特徴 …… 79
　　ⅰ）はじめに　ⅱ）主要横穴群の小単位群分析　ⅲ）墳丘をもつ横穴墓
　　ⅳ）木棺の位置と改葬横穴墓　ⅴ）まとめ
　第２節　地蔵ヶ谷10号横穴出土の冠帽 …… 101
　　ⅰ）はじめに　ⅱ）地蔵ヶ谷10号横穴出土の冠帽の復元
　　ⅲ）静岡県内出土の冠・冠帽　ⅳ）まとめ

付載１　宝野金山古墳発掘調査報告 …… 109
　　１．はじめに　２．横穴式石室　３．遺物　４．まとめ
付載２　金山古墳群・八幡山横穴群出土の遺物 …… 117
　　１．はじめに　２．遺物　３．まとめ
付載３　久能東山古墳群発掘調査報告 …… 121
　　１．はじめに　２．調査の経過　３．位置と環境　４．遺跡　５．遺物　６．まとめ

挿　図　目　次

第１図　袋井市域の古墳時代の主要遺跡・古墳群分布図 …… 3
第２図　地蔵ヶ谷古墳群・横穴群位置図 …… 4
第３図　地蔵ヶ谷古墳群・横穴群全体図 …… 17・18
第４図　３号墳実測図 …… 19
第５図　４号墳実測図 …… 20
第６図　５号墳実測図 …… 21
第７図　３号墳主体部実測図 …… 22
第８図　４号墳主体部実測図 …… 23
第９図　５号墳主体部実測図 …… 24
第10図　１号方形周溝墓実測図 …… 25
第11図　井守塚５号墳実測図 …… 26
第12図　井守塚５号墳主体部実測図 …… 27
第13図　１号・６号横穴実測図 …… 28
第14図　２号・12号横穴実測図 …… 29
第15図　３号・18号横穴実測図 …… 30
第16図　４号・13号横穴実測図 …… 31
第17図　５号横穴実測図 …… 32
第18図　７号・８号横穴実測図 …… 33
第19図　９号・10号横穴実測図 …… 34
第20図　11号横穴実測図 …… 35
第21図　14号・15号横穴実測図 …… 36
第22図　16号・19号横穴実測図 …… 37
第23図　17号・26号横穴実測図 …… 38
第24図　20号・21号横穴実測図 …… 39
第25図　22号・24号横穴実測図 …… 40
第26図　23号・25号横穴実測図 …… 41
第27図　27号横穴実測図 …… 42
第28図　属性分析図１ …… 43
第29図　属性分析図２ …… 44
第30図　横穴内部の敷石・閉塞石・瓶類出土位置模式図１ …… 45
第31図　横穴内部の敷石・閉塞石・瓶類出土位置模式図２ …… 46
第32図　土器実測図１ …… 53
第33図　土器実測図２ …… 54
第34図　土器実測図３ …… 55
第35図　土器実測図４ …… 56
第36図　土器実測図５ …… 57
第37図　土器実測図６ …… 58
第38図　土器実測図７ …… 59

第39図　土器実測図８ …… 60
第40図　土器実測図９ …… 61
第41図　土器実測図10 …… 62
第42図　土器実測図11 …… 63
第43図　土器実測図12 …… 64
第44図　土器実測図13 …… 65
第45図　土器実測図14 …… 66
第46図　土器実測図15 …… 67
第47図　土器実測図16 …… 68
第48図　土器実測図17 …… 69
第49図　土器実測図18 …… 70
第50図　土器実測図19 …… 71
第51図　土器実測図20 …… 72
第52図　金属製品・玉類実測図１ …… 73
第53図　金属製品・玉類実測図２ …… 74
第54図　金属製品・玉類実測図３ …… 75
第55図　金属製品・玉類実測図４ …… 76
第56図　金属製品・玉類実測図５ …… 77
第57図　金属製品・玉類実測図６ …… 78
第58図　遠江の主要横穴群分布図 …… 80
第59図　単位群分析横穴群１ …… 82
第60図　単位群分析横穴群２ …… 84
第61図　墳丘横穴墓集成図 …… 87
第62図　棺の位置のわかる横穴墓集成図１ …… 91
第63図　棺の位置のわかる横穴墓集成図２ …… 92
第64図　棺の位置のわかる横穴墓集成図３ …… 93
第65図　棺の位置のわかる横穴墓集成図４ …… 94
第66図　棺の位置のわかる横穴墓集成図５ …… 95
第67図　棺の位置のわかる横穴墓集成図６ …… 96
第68図　棺の位置のわかる横穴墓集成図７ …… 97
第69図　地蔵ヶ谷10号横穴出土の冠帽復元図と県内出土の冠・冠帽集成図 …… 103
付編１
第１図　宝野金山古墳群位置図 …… 111
第２図　横穴式石室実測図 …… 112
第３図　宝野金山古墳群土器実測図１ …… 113
第４図　宝野金山古墳群（菩提山横穴）土器実測図２ …… 114
第５図　宝野金山古墳群土器実測図３ …… 115
第６図　宝野金山古墳群金属製品実測図１ …… 116
付編２
第１図　金山古墳群・横穴群位置図 …… 118

第２図　八幡山横穴群位置図 …… 119
第３図　金山古墳群・横穴群鉄製品・八幡山横穴群土器実測図 …… 120
付編３
第１図　久能東山古墳群位置図 …… 123
第２図　１号墳実測図 …… 128
第３図　２号墳実測図 …… 129
第４図　４号墳実測図 …… 130
第５図　５号墳実測図 …… 131
第６図　６号墳実測図 …… 132
第７図　６号墳主体部２～４実測図 …… 133
第８図　７号墳実測図 …… 134
第９図　土器・金属製品実測図 …… 137

写真図版目次

巻頭カラー図版１　(１)地蔵ヶ谷古墳群・横穴群遠景　(２)地蔵ヶ谷古墳群・横穴群完掘状況
巻頭カラー図版２　(１)地蔵ヶ谷22号横穴内から土器が多数出土
(２)地蔵ヶ谷10号横穴出土の冠帽　(３)地蔵ヶ谷５号横穴出土の頸飾
(４)地蔵ヶ谷22号横穴出土の土器類
図版１　(１)第２次調査前全景　(２)第２次調査完掘全景
図版２　(１)１号横穴内部　(２)１号横穴墓前域　(３)１号横穴土器出土状況
図版３　(１)２号横穴閉塞石下部　(２)２号横穴墓前域　(３)２号横穴内部
図版４　(１)３号横穴　(２)３号横穴内部　(３)３号横穴羨門
図版５　(１)４号横穴　(２)４号横穴墓前域　(３)５号横穴
図版６　(１)５号横穴内部　(２)５号横穴閉塞石根石　(３)５号横穴玉類出土状況
図版７　(１)６号横穴内部　(２)６号横穴閉塞石　(３)６号横穴土器出土状況
図版８　(１)８～10号横穴墓前域　(２)７号横穴　(３)７号横穴閉塞石
図版９　(１)８号横穴　(２)９号横穴内部　(３)10号横穴
図版10　(１)10号横穴土器出土状況　(２)10号横穴金銅透彫金具(冠帽)出土状況　(３)11号横穴
図版11　(１)11号横穴内部　(２)11号横穴土器出土状況　(３)12～15号横穴墓前域
図版12　(１)12号横穴　(２)12号横穴内部　(３)12号横穴土器出土状況
図版13　(１)13号横穴　(２)13号横穴内部　(３)14号横穴
図版14　(１)14号横穴土器出土状況　(２)15号横穴内部　(３)16号横穴内部
図版15　(１)17号横穴　(２)17号横穴内部　(３)17号横穴閉塞石
図版16　(１)18～20号横穴墓前域　(２)18号横穴　(３)19号横穴
図版17　(１)19号横穴内部　(２)20号横穴　(３)21・22号横穴墓前域
図版18　(１)21号横穴　(２)21号横穴内部　(３)21号横穴土器出土状況
図版19　(１)22号横穴　(２)22号横穴内部　(３)22号横穴土器出土状況
図版20　(１)23～27号横穴墓前域　(２)23号横穴内部　(３)23号横穴閉塞石
図版21　(１)24号横穴内部　(２)24号横穴土器出土状況　(３)25号横穴内部
図版22　(１)25号横穴墓前域土器出土状況　(２)26号横穴　(３)26号横穴土器出土状況

図版23　(1)27号横穴　　(2)27号横穴内部　　(3)27号横穴玉類出土状況
図版24　(1)3号墳　　(2)3号墳葺石　　(3)1号方形周溝墓
図版25　(1)1号方形周溝墓出土土器棺　　(2)4・5号墳遠景　　(3)4号墳
図版26　(1)4号墳第2主体部　　(2)4号墳第2主体部鉄鏃出土状況　　(3)5号墳葺石
図版27　(1)5号墳主体部　　(2)5号墳主体部　　(3)井守塚5号墳
図版28　(1)井守塚5号墳第1主体部　　(2)井守塚5号墳第1主体部鉄刀出土状況
(3)井守塚5号墳第2主体部馬具等出土状況
図版29　遺物写真(1)　土器
図版30　遺物写真(2)　土器
図版31　遺物写真(3)　土器
図版32　遺物写真(4)　土器
図版33　遺物写真(5)　土器
図版34　遺物写真(6)　土器
図版35　遺物写真(7)　土器
図版36　遺物写真(8)　土器
図版37　遺物写真(9)　土器
図版38　遺物写真(10)　土器
図版39　遺物写真(11)　土器
図版40　遺物写真(12)　土器
図版41　遺物写真(13)　土器
図版42　遺物写真(14)　土器
図版43　遺物写真(15)　土器
図版44　遺物写真(16)　土器・鉄製品・玉類
図版45　遺物写真(17)　鉄製品・玉類
図版46　遺物写真(18)　鉄製品
図版47　宝野金山古墳群遺物写真(1)　土器
図版48　宝野金山古墳群遺物写真(2)　土器
図版49　宝野金山古墳群遺物写真(3)　鉄製品　　金山横穴群遺物写真　鉄製品
図版50　(1)久能東山古墳群全景　　(2)1号墳全景　　(3)1号墳主体部
図版51　(1)2号墳全景　　(2)2号墳主体部上層集石　　(3)2号墳主体部
図版52　(1)3号墳全景　　(2)3号墳周溝　　(3)4号墳全景
図版53　(1)4号墳主体部　　(2)5号墳主体部
図版54　(1)5号墳全景　　(2)1号墳鉇・鉄鉾出土状態　　(3)1号墳鉄鏃出土状態
図版55　(1)6号墳全景　　(2)6号墳主体部2～4
図版56　(1)6号墳全景主体部1　　(2)6号墳主体部1内玉類出土状態
図版57　(1)6号墳主体部3　　(2)6号墳鏡(内行花文鏡)出土状態
図版58　(1)6号墳主体部5　　(2)6号墳主体部5内坏出土状態
(3)6号墳主体部2石斧出土状態
図版59　(1)6号墳前方部須恵器出土状態　　(2)7号墳全景
図版60　(1)7号墳全景　　(2)遺物写真(1)　鏡・鉄製品・玉類
図版61　遺物写真(2)　土器・石器

地蔵ヶ谷古墳群・横穴群発掘調査報告書

第１章　はじめに

袋井市の遺跡の数は、現在判明している限りで約300箇所を数え、その内６割以上が横穴墓群・群集墳であり静岡県下でも有数な古墳群の所在地といえる。しかも、横穴墓群や群集墳ばかりでなく、大門大塚古墳や川会坊主山古墳などの地域の首長墳が存在し、首長墳と古墳群との関連を考えるうえでも興味深い地域であるといえる。今回調査を実施した地蔵ヶ谷古墳群付近には大門大塚古墳や団子塚古墳群など５世紀末～６世紀前半の有力な首長古墳が所在しているばかりでなく、金山横穴群・長者平古墳群なども発掘調査され、袋井市域の古墳文化を知るうえで非常に重要な地域となっている。しかしながら、この地区は袋井の市街地に近いせいか開発も古い時期から進み、次第に古墳群が失われつつある。

地蔵ヶ谷古墳・横穴群については現在の袋井南幼稚園及び東海道新幹線用地内の丘陵上に立地した木棺直葬墳と、丘陵斜面部に立地した横穴群とにわかれる。昭和37年３月16日～３月31日に実施された東海道新幹線用地内に伴う第１次発掘調査地点では、木棺直葬墳３基と横穴墓５基が調査された。昭和46年３月～４月に古墳、同７～11月に横穴群の調査が実施された袋井南幼稚園の建設地の第２次発掘調査地点では、木棺直葬墳１基と横穴墓11基が発掘調査された。

第１次発掘調査地点については、現在地蔵ヶ谷古墳群・横穴群が所在する丘陵と、井守塚古墳群が所在する丘陵の２地点の調査が実施されている。本報告書の井守塚５号墳とした古墳は、第１次発掘調査報告書においては地蔵ヶ谷１号墳と報告された古墳である。しかし、この古墳については、1989年刊行の静岡県文化財地図Ⅱでは井守塚古墳群のなかに含まれるものに変更されているため、本報告書でも井守塚５号墳として報告する。第１次発掘調査の調査結果については、すでに静岡県教育委員会により1965年刊行の『東海道新幹線静岡県内工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』にほぼ掲載されているが、本報告書では未報告の資料もあるためこれらの資料も含めて再整理し掲載した。

第２次発掘調査地点は、地蔵ヶ谷古墳群・横穴群のみが所在する丘陵が対象となり、本報告書の主体をなす調査であった。本調査地点は袋井南幼稚園の建設工事に伴うもので袋井市教育委員会が調査主体者であり、当時の袋井市教育委員会の事業として総力をあげて発掘調査を行ったと伝えられている。昭和40年代の横穴墓の調査としては大規模なもので当時からかなり注目されていた横穴群の調査であったが、担当者の川井正一氏がその概略を1976年刊行の『森町考古』10号に発表したにすぎなかった。その後、静岡県教育委員会が実施した横穴墓の悉皆調査に伴い地蔵ヶ谷横穴群出土遺物についても一部再整理が行われ、土器の一部が1983年刊行の『遠江の横穴群』に掲載された。

平成10年11月10日に南幼稚園の西側丘陵のガケ地対策の工事に伴う試掘調査を行ったところ、22号横穴と27号横穴が残っていたこと、丘陵頂部に近い場所の新発見と思われる横穴墓（28号横穴？）の閉塞石が見つかった。これらの横穴墓はコンクリート壁内に保存された。

平成14年５月13日～５月27日には寺院建設に伴う試掘調査が実施され、残った地蔵ヶ谷古墳群・横穴群のほぼ全域の様相が明らかとなった。すなわち、２号墳の主体部１基、１号墳は前方後円墳ではなくて２基の円墳（１号墳・７号墳)、６号墳については位置が変更されるという結果が得られた。

以上の調査の結果から本報告書が刊行できたわけであるが、劣悪な環境のもと現地調査にたずさった担当者と、その後の整理を進めてきた関係者の努力に感謝いたしたい。

第２章　周辺の古墳群の様相

地蔵ヶ谷古墳群の周辺部には袋井市でも有数な古墳群・横穴群が所在し、しかも発掘調査が実施されたものが数多く所在する。発掘調査が実施された５世紀後半～６世紀中頃の木棺直葬墳は愛野向山古墳Ａ・Ｂ・Ｃ群で30基以上のほか、雲座古墳Ｄ群、高尾向山古墳群、高尾団子塚古墳群、金山古墳群、井守塚古墳群、谷坂古墳群などの各古墳群で２～４基程度発掘調査が実施されている。ほかに発掘調査は実施されていないが、変形獣形鏡を出土したといわれる渋垂神社上古墳群や大門山古墳群も５世紀後半～６世紀中頃の木棺直葬の古墳群と考えられる。

同時期の首長墓としては５世紀後半では全長40mクラスの前方後円墳になる狐塚古墳、高尾向山６号墳古墳、６世紀前半～中頃では遠江では初期の横穴式石室を採用する直径26mの大門大塚古墳、直径20mクラスの御所森古墳や高尾団子塚９号墳等が知られている。首長墓のグループとしては古墳の分布から見ると狐塚古墳・大門大塚古墳・御所森古墳と高尾向山６号墳古墳・高尾団子塚９号墳の２グループに分けられそうであるが、高尾向山６号墳の年代については出土品が知られていないことからはっきりとした築造年代はわからない。

大門大塚古墳については主体部や周溝の範囲確認調査、明治時代の出土であるが鏡・馬具・直刀・玉類・須恵器など豊富な副葬品が知られ６世紀中頃の首長墓としてはこの地域では最有力視してもよい古墳である。高尾団子塚９号墳は帽・捩環頭大刀・馬具・挂甲・鉄鏃・玉類・須恵器などが出土し、首長墓としての豊富な内容の副葬品をもつが、主体部は木棺直葬であり墳丘規模や群集墳の古墳群形態を採用することから考え合わせると、大門大塚古墳よりやや下位に位置付けられる。

６世紀後半以降の横穴群としては地蔵ヶ谷横穴群や愛野向山横穴群が30基前後の数で存在する。小規模なものとしては金山Ｂ横穴群で11基、金山Ａ横穴群で５基、山本山古墳群で、ほぼ同時期の横穴式石室の古墳と併存する形で４基程度からなる１小単位の横穴群が見つかっている。周辺部にも菩提山横穴群などの小規模横穴群がいくつか所在するが実態はよくわからない。

横穴式石室を採用する後期群集墳は50基以上の規模を誇る長者平古墳群を中心として、豊沢地区に山本山古墳群や今回報告する宝野金山古墳群に見られたように小規模な群集墳を含みながら比較的数多く分布している。山本山古墳群で一見混在するような状況に見えるが、横穴墓と横穴式石室墳は時期差があり、原則としては横穴墓と後期群集墳が混在して築造されることはなかったと考えられる。

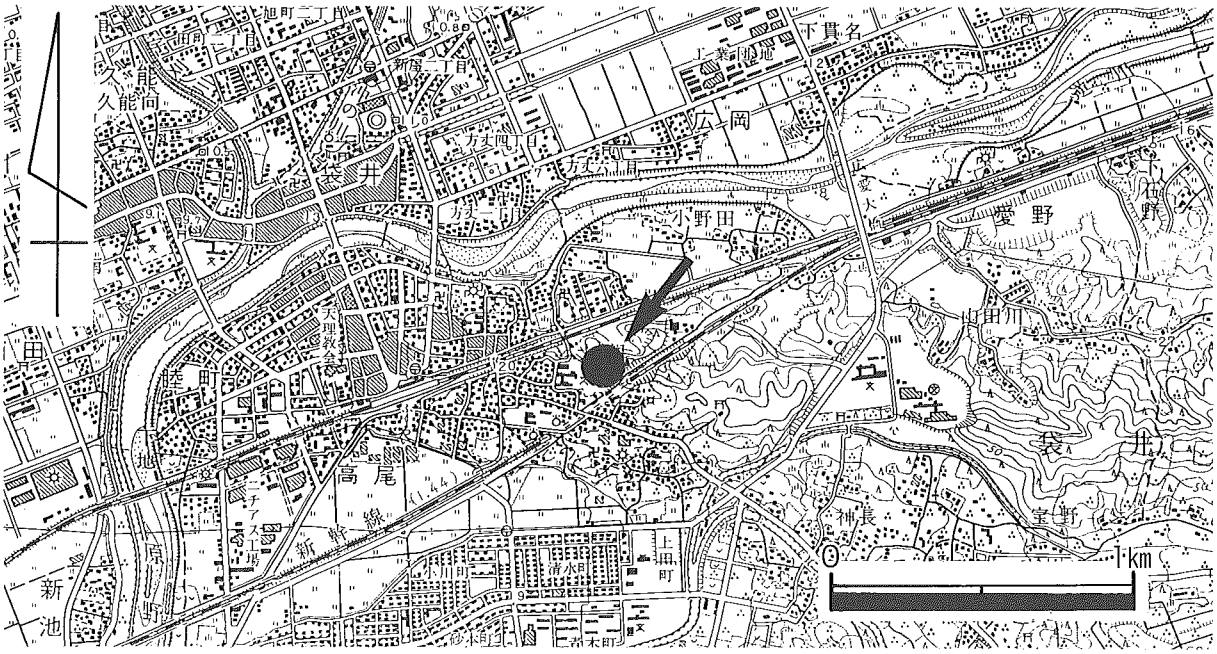
なお、北原古墳群・団子塚古墳群・高尾向山古墳群においては横穴式木室を採用した古墳が近年の発掘調査で多数見つかり、磐田原台地以東でかなり集中的にみられる地域となってきている。このような群集墳レベルの横穴式木室古墳以外にも、首長墓レベルである掛川市堀ノ内13号墳が近年の発掘調査でも見つかっている。中・東遠州地域での横穴式木室の出現は、前方後円墳を採用する西遠江地域の三方ヶ原東縁古墳群の横穴式木室の様相と連動する動きを見せるが、時期は中・東遠江地域のものが若干後出する状況となっている。

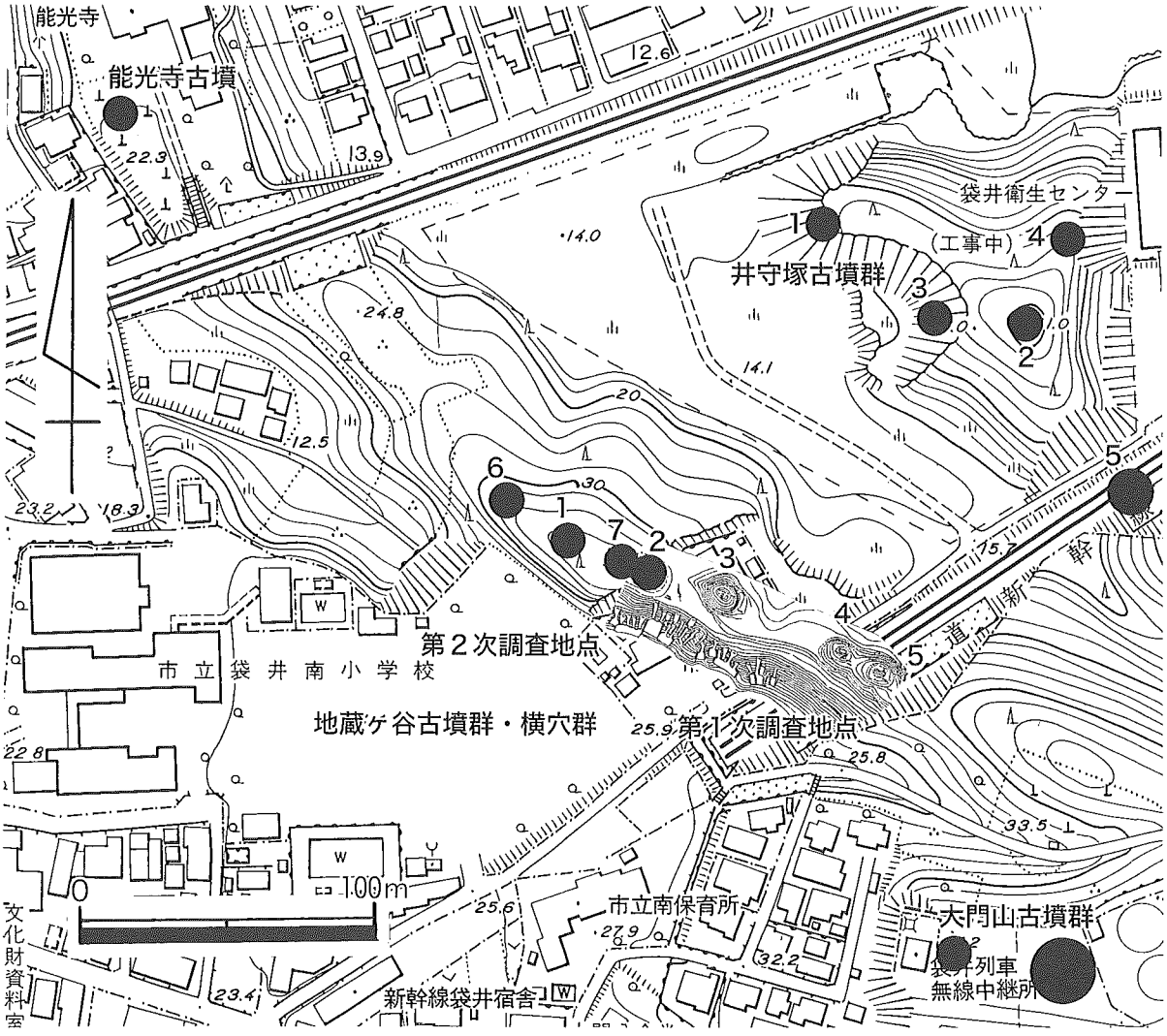
以上のように地蔵ヶ谷古墳・横穴群の周辺部には５世紀後半～７世紀にかけての一大群集墳地帯を形成している。初期群集墳の様相もかなり明らかとなりつつあり、後期群集墳や横穴群への移行過程を知るうえでも良好な発掘調査例が蓄積されてきている。さらに大門大塚古墳等の上位の首長墓やいくつかの中規模の首長墓も群集墳内に存在していることから、群集墳の成立と首長墓との関係を知る上でも重要な資料を提供している。



1王子　2山畑　3八坂　4北原　5団子塚　6高尾向山　7雲座　8長者平　9山本　10山本山　**11菩提山**　**12宝野金山**　**13金山A**　14渋垂神社上　15大門山　**16地蔵ヶ谷**　17能光寺境内　**18井守塚**　19金山B　20愛野向山B　21愛野向山A　22上石野　23若作　24七つ森　25宇佐八幡宮　26ズン坂　**27八幡山**　28道ヶ谷　29北の谷　30道ヶ谷　31川田　32宇刈　33宇刈　34三沢　35春岡　36小高池　37馬ヶ谷　38菅ヶ谷　39山下　40上山　41岡津A・B　42椀貸　43椀貸　44旗指　45高代山　46権田ヶ谷　47高田　48長沢　49甚佐ヶ谷　50堂前　51味噌ヶ谷　52五ヶ山B2号　53観音山　54貫名地B1号　55貫名地A3号　56高尾向山6号　57団子塚5・9号　58長者平A39号　59大門大塚　60御所森　61狐塚　62久努大塚　63東別所1号　**64東山**　65座王権現神社　66道ヶ谷9号　67石ノ形　68宇佐八幡宮1号　69権現山　70浅間山　71奥ノ原　72各和金塚　73瓢塚　74行人塚　75春林院　76吉岡大塚　77原川(古墳)　78古新田　79柳原　80大門I　81掛之上　82袋井宿　83玉越・土橋　84堀越　85下貫名　86久津部　87国本　88坂尻　89不入斗I　90石ノ形　91権現山　92鶴松　93特持I　94特持II　95川田藤蔵渕　96鼻欠淵　97三沢　98春岡　99稲荷領家　100原川　101三ツ池・善光寺　102沢田　103細田　104岡津原　105黒田　106女高　107味噌ヶ谷

第1図　袋井市域の古墳時代の主要遺跡・古墳群分布図





第２図　地蔵ヶ谷古墳群・横穴群位置図

第３章　遺　　構（古墳群・横穴群）

２回の発掘調査で地蔵ヶ谷地区に所在する古墳・横穴群のほとんどを発掘調査することができた。発掘調査で発見された古墳は、第１次調査では木棺直葬を埋葬主体とする古墳２基（４・５号墳）、横穴は同一の墓前域を共有する横穴群１小単位（７～11号横穴）のほか井守塚５号墳、第２次調査では木棺直葬を埋葬主体とする古墳１基（３号墳）・単独の墓前域をもつ横穴５基（１～６号横穴）、墓前域を共有する形態の横穴11小単位（７号横穴、８～11号横穴、12・13号横穴、14・15号横穴、Ｂ16号横穴、Ｂ17号横穴、18～20号横穴、21・22号横穴、23～25号横穴、26号横穴、27号横穴）である。

さらに、第２次発掘調査区の北側用地内において平成14年に試掘調査が実施され、横穴墓については27号横穴付近に１基（28号墓）のみが存在していたこと、古墳は２号墳については一部破壊されたが主体部が確認され、その北側にさらに１・６号墳以外にも古墳が１基確認された（７号墳）。従来前方後円墳と考えられていた１号墳については円墳であることも確認された。よって地蔵ヶ谷古墳群は木棺直葬を主体部とする円墳７基、横穴28基からなる古墳群・横穴群であることが判明した。

第１節　古墳群（方形周溝墓）

冒頭の例言で述べたように、調査時の古墳番号や名称に変更があるためまずそれを提示する。第１次発掘調査の１号墳は井守塚５号墳、２号墳は５号墳、３号墳は４号墳、第２次発掘調査の３号墳は３号墳に名称変更して記述を進めた。なお、方形周溝墓は３号墳墳丘下で発見されたので、あわせて本節で報告する。

ｉ）墳丘

墳丘規模は３号墳は径12m、４号墳は径11m、５号墳は径11m、井守塚５号墳は長軸14m、短軸９m、を測り、何れも径10～14m前後の小規模なものである。墳形は３～５号墳についてはほぼ円墳になると思われるが、井守塚５号墳は楕円形となる。

埴輪をもつものはないが、３号墳の墳丘裾に葺石が巡り、５号墳の北側墳丘裾にも葺石が崩壊したらしい礫群が検出されている。発掘調査された愛野向山古墳群や雲座古墳群、金山古墳群、高尾向山古墳群の木棺直葬墳のなかで葺石をもつものはなく、南地区の初期群集墳のなかでは明確な葺石をもつものは地蔵ヶ谷３号墳のみとなっている。

明確に全周する周溝をもつものはないが、４号墳と５号墳の間に周溝状の窪地状の遺構が検出されいるし、３号墳は葺石により明確な円墳の形態を示している。また、各古墳からは須恵器の破片が出土していると報告されているが、今回事実関係が報告できるものは３号墳墳丘から祭祀に使用したと思われる須恵器の大型甕や樽形甕の破片が出土している点のみである。井守塚５号墳からは土師器の破片も出土しているらしいが、実物の確認はできていない。

すべての古墳の墳丘は明確な盛土はもたない地山削出の古墳であるが、３号墳では弥生時代後期末の方形周溝墓の盛土、井守塚５号墳では30㎝程度の盛土が存在していた。すなわち、すべての古墳は丘陵の自然の高まりを巧みに利用して円墳状に整形しているため、ほとんどの古墳の場合は無理をして周溝を掘削したり、高い盛土をしないで墳丘を築造したと考えられる。

ⅱ）主体部

主体部は、埋葬土坑の形態から見ると小型の短い箱式木棺になると思われる２号墳第１主体部、４号墳第２主体部、井守塚５号墳第２主体部、小型の短い割竹形木棺になると思われる３号墳第２主体部、４号墳第１主体部、５号墳主体部、井守塚５号墳第１主体部の２種類が確認された。

３号墳第１主体部では両小口部に青白色粘土が見られ小口部が平らになる北東方向が頭方向を現すと思われる。切先を南西に向けた鉄剣３本が頭近くに置かれ、足元に鏃束が見られる副葬品の配置となっていることからも矛盾しない。第２主体部でも北東側小口部に少量ではあるが、青白色粘土が認められ、３号墳の２名の被葬者は北東方向が頭位であったと考えられる。

４号墳第２主体部にも被葬者の頭位方向を現すと思われる西側小口部に白色粘土が認められた。副葬品は鉄鏃や刀子の出土に留まる程度であるが、西側に鉄鏃が集中する点は西側頭位とするには不利な出土状況を示す。隣接して主軸方向が異なる第１主体部については、長軸2.5m以上を計る土坑であり、弥生時代の墳墓の主体部としては大型であるため、副葬品はないが古墳に伴う主体部と考えられる。平面形態はわからないものの第１主体部上層に玉類が副葬されていた主体部面が存在していたことが報告されているが、断面図から見ると第１主体部の木棺の腐食による陥没面の可能性があり、玉類は第１主体部上層の祭祀行為に係わる可能も指摘しうる。第１主体部と第２主体部は接近していることから、新旧関係が判明しており、第２主体部のほうが新しいとされている。主体部の位置も第１主体部のほうが墳丘中央にあることからも、この新旧関係で矛盾しない。

５号墳の主体部については両小口と両側縁部分が白色粘土で覆られているため頭方向は明らかではないが、直刀の切先は西側方向を示すために東を頭位方向と考えたい。なお、棺の底面には粗く礫を敷き並べており、その下には排水溝と思われる小溝が見られたという。またこの主体部は明確な長方形の広い墓坑が認められ、当地域ではこのような広い墓坑が認められる古墳の類例は少ない。底部には薄い赤色顔料（丹）が認められ、東側に多い分布傾向のあったことが確認されている。なお、この主体部に直交するように主体部らしき落ち込みが認められたが、副葬品は出土していない。前報告書ではこれを第１主体部よりも古い主体部と見ているが、青白粘土の木棺の被覆や副葬品は認められないため、はたして主体部としうるものか検討を要するだろう。

井守塚５号墳では東西方向に主軸をもち、平行する位置に主体部２基が確認された。第１主体部は西側の小口が平らでこちらが頭位方向である可能性もあるが、直刀の切先は西側を向いており東頭位の可能性が高い主体部である。小口や側面に青白色粘土が認められるが、底面ではほとんど青白色粘土は見られない。第２主体部についても、西側に馬具や鉄鏃、直刀の切先は西側を向いていることから見て、東頭位の被葬者であった可能性が高い。青白色粘土は小口や側面ばかりでなく、底面にも確認されている。なお、第１主体部南側に礫群と玉類が出土している。礫群は２箇所見られ、仮にこれが主体部ならば、両小口を礫群で固定し頭付近に玉類が副葬されていたならば、東頭位の主体部を復元することができるが確証はない。礫群近くから細片化した土師器の甕、第１主体部と第２主体部の間から刀子１点が出土したと報告されている。第１主体部と第２主体部の前後関係は、第１主体部が盛土下から検出されたのに対して、第２主体部はこの盛土を掘り込んで造られていることから、第１主体部のほうが古いと見られている。位置関係から見ても第１主体部のほうが中央にあるため、この新旧関係とは矛盾しない。礫群が主体部の一部ならば、同一方向で第１主体部をはさんで両隣に１基ずづ、合計３基の主体部が存在していたのであろうか。

iii）副葬品

各主体部の副葬品の内容を見ると、３号墳第１主体部からは鉄剣３、鉄鏃15（尖根15）、第２主体部は無副葬、４号墳第１主体部上層より管玉９、ガラス玉７、第２主体部より小刀１、刀子３、鉄鏃８（尖根５・平根３）、５号墳第１主体部より直刀１、大型の刀子（小刀？）１、鉄鏃１、井守塚５号墳第１主体部直刀１、刀子２、第２主体部直刀１、刀子１、鉄鏃６（尖根６）、鉄製楕円鏡板付轡１、辻金具３が出土している。

刀剣類から見ると、３号墳第１主体部で鉄剣３本が最も出土量が多いものの、５号墳第１主体部、井守塚５号墳第１・２主体部でも直刀各１本、小刀ではあるが４号墳第２主体部に副葬されていることが確認され、すべての古墳に刀剣類が見られるという結果になっている。ちなみに、刀剣類が副葬されていない主体部は、３号墳第２主体部と４号墳第１主体部になり、どちらも箱形木棺の主体部である。結果として割竹形木棺についてはほとんど直刀が副葬されていたことになり、木棺形式と刀剣類の副葬が関係していたと想定される。すなわち、箱形木棺より割竹形木棺のほうが階層性が高いか被葬者の性格が異なるということになろうか。なかでも井守塚５号墳第２主体部では鉄製ではあるが馬具を保有し、さらに鉄鏃や刀子も含むことから見ると、銅鏡以外の首長墓に見られる一通りの鉄製武器の組み合わせが確認されたことになる。また、３号墳のように複数の刀剣類が見られるものもあり、たとえ少ない副葬品から見ても、複数の刀剣類や馬具をもつものが古墳群中でも階層性が高いか武人的性格が強いことを示すものと推測され注目される。

ⅳ）方形周溝墓

３号墳下層から弥生時代後期末と思われる、方形周溝墓１基が確認された。明確な周溝は東部分にしか確認できなかったが、墳丘は方形に整形されており、南東コーナーに１箇所陸橋をもつタイプの方形周溝墓となっている。

主体部は４基確認できたが、第４主体部以外は切り合っている。位置関係から見ると第１か第２主体部が当初の埋葬遺構かと思われる。いずれも、長さ1.5m程度の小型の主体部で、成人用木棺としても屈葬となるものであろう。ほかに、東側の溝中の陸橋に接する部分から、直立した壺棺１基が検出された。土器棺の周りには礫が配置されて埋められていたと思われる。復元の結果、身のほうは頸部以上を取り去り、頸部を取り去った壺を合口の蓋として利用していた。

第２節　横穴群

今回の報告書の中で最もまとまっている遺構であることから、まず時期の設定を冒頭で行っておきたい。すでに、遠江の横穴墓全体の編年を行ってきており（静岡県考古学会　2001・松井一明　2001）、そのおり使用した時期区分をを採用する。すなわちⅠ期（ＭＴ15）＝６世紀前葉、Ⅱ期（ＴＫ10）＝６世紀中葉、Ⅲ期（ＴＫ43）＝６世紀後葉、Ⅳ期（ＴＫ209古）＝６世紀末葉、Ⅴ期（ＴＫ209新～ＴＫ217）＝７世紀前葉、Ⅵ期（ＴＫ46～48）＝７世紀後葉、Ⅶ期（ＭＴ21）＝８世紀初頭である。供伴する土師器は坂尻編年（松井1995）を採用することとし、Ⅰ期＝坂尻Ⅰ－１期、Ⅱ期＝坂尻Ⅰ－２期、Ⅲ期＝坂尻Ⅰ－３期、Ⅳ期＝坂尻Ⅰ－４期、Ⅴ期＝坂尻Ⅱ－１・２期、Ⅵ期＝坂尻Ⅱ－３・４期、Ⅶ期＝８世紀初頭として記述を進めたい。

ⅰ）墓前域・小単位群・築造時期・形態

墓前域と小単位群・墳丘　本報告書では以前の報告書と同じように横穴の墓前に造られた方形墓前域を共有する横穴群やⅠ～４基程度の横穴墓のまとまりを最小単位群として認識すると、いくつかの小単位群に分別することが可能となる。さらにその小単位群を一つの谷ごとにまとまりを認める横穴群を小支群とし、各小単位群の位置関係からそこからまとまりのある横穴群から単位群を認定して整理を行いたい。地蔵ヶ谷横穴群は、今回報告する谷部以外の周辺部の谷内には横穴群としてのまとまりのある単位は確認されないことから、複数の支群で構成されない横穴群と考えられる。すなわち、単独の支群の横穴群であり地蔵ヶ谷横穴群＝支群と捉えられる。

また横穴群内の群構成は、１～６号横穴のように単独で長い墓道を有するものと、７～27号横穴のように墓前に平面形態が長方形を呈する墓前域をもつものの２種類が認められ、これらを大きな単位

群として分別し認定した。さらに、前者のグループと28号墓（未調査）は確認レベルから見ると丘陵頂部に近い位置、後者のグループはそれよりも一段低い位置で確認されており明らかに異なる単位群として認識されるものである。一見すると同一場所に密集してあるような様相を呈するが、両者は別グループに属する単位群として認定される。これを仮に前者をＡ群、後者をＢ群としておきたい。

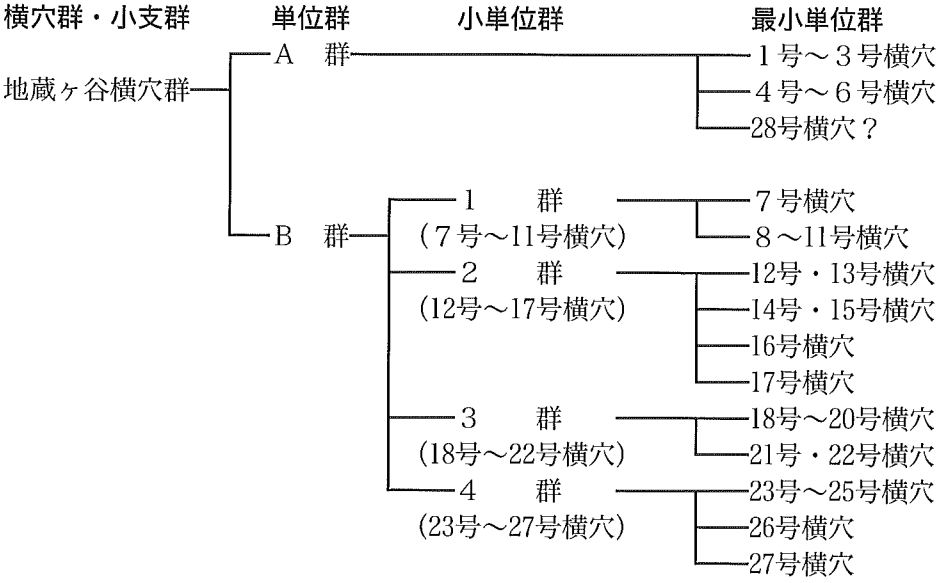
なお、最近掛川市前山横穴群で確認された山頂部に近い横穴墓に墳丘を伴う例（掛川市教育委員会2003）が確認されてきている。本横穴群では丘陵頂部の墳丘は５世紀代の木棺直葬墳（３号墳）であることが確認され、また３号墳からは６世紀代の須恵器の出土もないことから再利用の横穴墓の墳丘とも考えられないので、地蔵ヶ谷横穴群については墳丘をもつ横穴墓は確認できなかった。しかしながら、古手のＡ群横穴墓が丘陵頂部に近い場所を占地していることは、前山横穴群で見られたような墳丘をもつ横穴墓の立地に関係していた可能性は高いと思われる。

Ａ群の最小単位群については、墓道が個々にしか造られていないため、なかなかグループ分けが難しい面があるものの、出土遺物から時期を検討すると１号横穴にⅡ期の須恵器、４号横穴にⅡ期＝坂尻Ⅰ－２期の土師器が見られることから、何れも地蔵ヶ谷横穴群最古の横穴墓と考えられる。するとそれぞれの隣にある横穴墓がより新しくなること（２号横穴＝不明、３号横穴＝Ⅳ期、５号横穴＝Ⅲ期、６号横穴＝Ⅳ期）が判明し、時期的にうまく変遷することが分かったため、１～３号横穴と４～６号横穴の２つの小単位群を抽出してみた。

Ｂ群については方形の墓前域の共有仕方や横穴墓の小さなまとまりを考えると、７～11号横穴、12～17号横穴、18～22号横穴、23～27号横穴の４つの小単位群に分けられ、さらにこの小単位群のなかで墓前域の共有の仕方で最小単位群の識別が可能になり、以下のようにまとめてみた。

（用語については一部浜松市遺跡調査会　1984を参考とした。）

築造時期と形態　つぎに各単位群ごとに、個々の横穴墓の形態と時期を検討してみたい。



形態については最近の形態分類（松井一明　2001）に準拠することにしたい。地蔵ヶ谷横穴群に関してはＡ地域（原野谷川水系）の楕円形と長方形が混在する地域で、楕円形は横長と縦長、長（正）方形は横長長方形、縦長長方形１（羨道が細い形態）、正方形２（羨道の幅が広い）、無袖ばち形、無袖長方形を確認することができた。

Ａ群は横穴墓の時期の変遷から２小単位群に分けられた。１号横穴の小単位群は玄室の平面形態と横断面の天井形態でみると１号横穴の縦長楕円形のドーム天井から２号横穴の横長長方形のドーム形

天井、３号横穴の縦長長方形の尖頭アーチ形天井へ、４号横穴も横長楕円形のドーム形天井から５号横穴の縦長長方形のアーチ形天井、６号横穴の縦長長方形のドーム形天井へと変遷するため、どちらのグループも平面形態は楕円形から縦長長方形へと、天井形態についてはドーム形天井からアーチ・尖頭アーチ形へ同一時期（Ⅲ～Ⅳ期）に変化したと考えられる。しかしながら、このような著しい玄室平面形態と天井形態の変化が、同一の単位群の中で起こったと想定することが妥当な見解なのか検討を要する。この問題については、遠江の横穴墓を考えるうえで重要な問題点を含んでいると考えられるため考察で更に検討を進めたい。なお、３号横穴の墓道からは土師器の破片と13の広口壺や土師器の破片、５号横穴の墓道からは24・25・36の坏蓋・身、65の高坏等の完形品を含む須恵器が出土しており墓前祭祀に関係した遺物と考えられる。３・５・６号横穴墓の墓道については、１・２・４号横穴の墓道とやや異なり、幅の狭い墓道というより幅の狭い墓前域に近い形態で、墓道から墓前域に変化する過渡的な形態の墓前域とでもいえる施設と考えられる。81の壺の口縁部の破片は５世紀代（ＴＫ208）の須恵器で３号墳から流れ込んだものと考えられる。

７～11号横穴は、墓前域の共有の仕方から７号横穴と８～11号横穴に分けられた。７号横穴はⅤ・Ⅵ期の須恵器を出土しており、形態は無袖縦長長方形でアーチ形天井、８号横穴は時期不明で、形態は無袖縦長長方形でアーチ形天井、９号横穴はⅤ期の須恵器を出土しており、形態は無袖縦長長方形でアーチ形天井、10号横穴はⅤ期の須恵器を出土しており、形態は無袖ばち形でアーチ形天井、11号横穴はⅤ・Ⅶ期の須恵器を出土しており、形態は無袖ばち形でアーチ形天井をなしている。形態は７～９号横穴、10・11号横穴が共通するが、いずれも無袖タイプに分類されるもので、おそらくⅤ期に10号横穴が当初造られ、順次９号と11号横穴、さらにⅦ期に８号横穴まで築造が進み、７・10・11号横穴で追葬が確認されている。７号横穴については、形態が似ている９号横穴と近い時期に築造されたと推測される。縦断面の天井形態が分かるものはなかった。11号横穴の墓前域からは取り外された閉塞石の一部と共に、115～119の平瓶４点が羨門部前にまとまつて出土している。７号横穴でも墓前域や閉塞石外面に完形品の87・88の無頸壺２点や86の平瓶１点が添えられるように出土している。いずれも墓前祭祀に伴うものと考えられる。

12～17号横穴については墓前域の共有の仕方から12・13号横穴、14・15号横穴、16号横穴、17号横穴に分けられた。12～15号横穴は一見同一の墓前域を共有するかに見えるが、13号と14号横穴の墓前域間には80㎝以上の大きな段差があるため別の小単位群に認定した。12号横穴はⅤ・Ⅵ期の須恵器を出土しており、形態は横長楕円形でドーム形天井、13号横穴はⅤ期の須恵器を出土しており、形態は横長楕円形でドーム形天井、14号横穴はⅤ・Ⅵ期の須恵器を出土しており、形態は無袖縦長ばち形で尖頭アーチ形天井、15号横穴はⅤ・Ⅶ期の須恵器を出土しており、形態は無袖ばち形でアーチ形天井、16号横穴の遺物は一切無く、形態も縦長楕円形でアーチ形天井？、17号横穴はⅤ～Ⅶ期の須恵器を出土しており、形態は横長楕円形でアーチ形天井となる。形態と時期から見ると、12・13号横穴小単位群墓は横長楕円形が主体で13号から12号横穴への築造、14・15号横穴小単位群墓は無袖ばち形が主体で14号から15号横穴への築造と考えられようか。縦断面の天井形態見るうえでは14号・17号横穴が保存状況が良く、何れも奥壁部分が高く羨道に向かうに連れて低くなる傾斜天井と呼べる特徴的な形態をなしている。16号横穴については横長楕円形を目的として掘削を開始したが内部は埋葬の痕跡である敷石や副葬品はなく、落盤等で当初の目的を諦めた未使用横穴と考えられる。17号横穴については横長楕円形であることから12・13号横穴と関係したもので、13号墓の築造と同時に造られた可能性がある。各墓前域からは、閉塞石の流れ込んだ礫や坏や瓶類の須恵器の破片が出土したが、とくに完形率の高いものは見られなかった。

18～22号横穴については、墓前域の共有からの仕方から見ると、18号～20号横穴と21号・22号横穴の小単位として分けられた。18号横穴は無遺物で、形態は無袖縦長形でアーチ形天井、19号横穴はⅤ期の須恵器を出土しており、形態は無袖縦長長方形でアーチ形天井、20号横穴はⅤ・Ⅵ期の須恵器を出土しており、形態は無袖ばち形でアーチ形天井、21号横穴はⅤ～Ⅶ期の須恵器を出土しており、形態は正方形（台形？）で尖頭アーチ形天井？、22号横穴はⅤ～Ⅶ期の須恵器を出土しており、形態は無袖縦長ばち形で尖頭アーチ形天井？となっている。形態と出土須恵器から築造順位を考えると、18～20号横穴小単位群は無袖ばち形から無袖縦長長方形が主体で20号から18号横穴への大型から小型横穴への築造、21・22号横穴小単位群は正方形と無袖ばち形の組み合わせで、21号から22号横穴への有袖から無袖タイプへの変化による築造順位と考えられようか。縦断面の天井形態見るうえでは21号・22号横穴が保存状況が良く、何れも奥壁部分が高く羨道に向かうに連れて低くなる傾斜天井で、玄門部に段が見られる特徴的な形態をなしている。18～20号横穴の墓前域からは、16号横穴の201のような４～６号横穴からの流れ込みと思われる高坏の破片、274のような５世紀代（ＴＫ208）の須恵器であるコップ型坏の破片は３号墳からの流入品と思われるもの以外にも、205のような長頸壺の完形品や、277のような大型甕も出土しているため、これらは破片でなく完形品が多く横穴玄室内から整理され持ち出されたものというより墓前祭祀に使用されたものと考えられる。21･22号横穴の墓前域からも228のような４～６号横穴からの流れ込みと考えられる高坏の破片以外に、Ⅵ・Ⅶ期の追葬に関係したと思われる須恵器が墓前域から数多く出土している。なお、Ⅵ・Ⅶ期の須恵器は、21・22号横穴の玄室内からはほとんど出土していないことから見ると、追葬時では墓前域における祭祀が主体となったと考えられる。19号横穴の玄室内上層から199・200の13世紀前葉の知多産（５期）の山茶碗が出土していることから見て、中世墓として再利用されている可能性がある。

23～27号横穴については、墓前域の共有の状況から一見すると23～26号横穴と27号横穴に分けられるのであるが、26号横穴については23～25号横穴と比較すると著しく形態が違う上に26号横穴の羨道が共有の墓前域に切られているようにも見えるため、23～25号横穴と26号横穴とは別の小単位群と考えた。23号横穴からは坂尻Ⅰ－４期の土師器とⅤ・Ⅶ期の須恵器を出土しており、形態は無袖ばち形でアーチ形天井、24号横穴は坂尻Ⅰ－４期の土師器とⅥ期の須恵器を出土しており、形態は無袖縦長ばち形でアーチ形天井、25号横穴はⅤ～Ⅶ期の須恵器を出土しており、形態は無袖ばち形でアーチ形天井である。26号横穴はⅣ・Ⅴ・Ⅶ期の須恵器を出土しており、形態は羨道の短い正方形で尖頭アーチ形天井？である。27号横穴はⅣ・Ⅴ期の須恵器を出土しており、形態は無袖ばち形でドーム形天井をなしている。形態と出土須恵器から築造順位を考えると、23～24号横穴小単位群は無袖ばち形が主体で23号から25号横穴への大型から小型横穴への築造順位となる。27号横穴からはⅣ期の須恵器が、23・24号横穴からもⅣ期平行の土師器が出土していることから見ると、23号横穴と26号・27号横穴はほぼ同時に造られ、その後23号から24号、25号横穴の順番に造られたと考えられる。本横穴群のなかで方形墓前域をもつ単位群としては最古のもので、単独墓道をもつ１～６号横穴の古手の小単位群からスムーズに後続する小単位群として位置づけられる。23～25号横穴の墓前域からは、313のような大型の脚付盤、320～322・324・326・330の坏蓋・身、384のフラスコ瓶、26号横穴の墓前域からは368・369・370のような蓋や盌、375のような大型甕、27号横穴の墓前域からは、376～381の壺蓋・坏蓋・身、382・383の盌、385の提瓶、387の大型の平瓶等は完形品も含むため、これらは横穴内から持ち出されたというより墓前域での墓前祭祀に使用されたものと考えられる。

各小単位群内の築造順位を見てみると築造時期の不明瞭なものもあるが、基本的には各小単位のなかに最初に１基築造され、その後順次横穴が造墓されていったことがわかる。とくに、12～15号横穴

の単位群ついて検討すると、一見すると同一の墓前域を共有するように見えるが、異なる形態の横穴からなる２小単位群からなる単位群であることが分かる。すなわち、横穴の形態は地蔵ヶ谷横穴のＢ群の単位のなかでは、同一形態か退化形態で変遷するのが基本で、Ａ群の小単位群の在り方とは明らかに異なる事が分かる。また、小単位の中でも７号・17号・26号・27号のように１基単独で最小単位を形成するものから、８～11号のように４基の共通墓前域を形成するものまでバラエティを見て取ることができる（第28図参照）。

追葬時期　追葬時期は、土器を検討したかぎりでは１号横穴でⅢ期の１回、５号横穴でⅢ・Ⅴ期の２回、７号横穴でⅥ期の１回、10号横穴でⅥ期の１回、11号横穴でⅦ期の１回、12号横穴でⅥ期の１回、14号横穴でⅥ期の１回、15号横穴でⅦ期の１回、17号横穴でⅥ・Ⅶ期の２回、20号横穴でⅥ期の１回、21号横穴でⅥ・Ⅶ期の２回、22号横穴でⅥ・Ⅶ期の２回、23号横穴でⅤ・Ⅶ期の２回、24号横穴でⅤ・Ⅵ・Ⅶ期の３回、25号横穴でⅥ・Ⅶ期の２回、26号横穴でⅤ・Ⅶ期の２回、27号横穴でⅤ期の１回を確認することができ、27基中17基の半数以上の横穴墓から１～４回の時期差のある須恵器・土師器が出土していることになる（第28図参照）。しかしながら、金山横穴Ａ４号横穴出土の人骨で見られたようにⅤ期の土器しか出土していないにもかかわらず頭骨が４体確認された例（袋井市教育委員会1996）もあることから、土器にあらわれた追葬回数と埋葬者の数が必ずしも一致するとは限らないことが証明されており、地蔵ヶ谷横穴群でも同様の実態が存在しているものと想定される。

以上の点から地蔵ヶ谷横穴群の築造・追葬時期を検討するならば、Ａ群は６世紀中葉に築造が始まり６世紀末葉には築造が終了し、追葬時期も６世紀末葉に終了する。これに対してＢ群は６世紀末葉に築造が始まり７世紀後葉～８世紀初頭に築造が終了し、追葬時期も８世紀初頭には終了している。横穴墓の築造パターンとしては掛川市茶屋辻横穴群や土橋横穴群のような古手の横穴群を含む築造パターンとなる横穴群に分類できる（１ａ類に分類したものに該当。松井一明　1994）。

中世の再利用　24号と25号横穴の玄室内から、335～337と、348～351・353・354の12世紀末葉～13世紀前葉の知多産４・５期の山茶碗の碗や小皿が出土しており、中世墓として再利用されている可能性がある。19号横穴でも知多産山茶碗が出土している。ただし、15号横穴出土の176のような地元の東遠江系山茶碗や渥美・湖西系山茶碗は例外である。この状況からは遠距離地から運ばれてきた山茶碗をとくに選別し、中世墓専用の器として利用した状況の可能性を読み取れようか。

ⅱ）内部施設と副葬品の配置

敷石・棺座石　内部施設としては、玄室の敷石について検討してみたい。また、敷石の分類については、金山横穴群の分類（袋井市教育委員会　1996）にあてはめて分析を進めたい。また、閉塞石や出土遺物のうち鉄製品の出土状況についても若干の分析を行いたい。なお、土器類の出土位置や組成の分析については棺の位置の分析とも係わる事柄なので、少し整理して分析する（第29図参照）。

さて、明確な敷石が存在する横穴は、１号・３号・５号・８号・12号・17号～19号・22号・23号・27号横穴で、６号・14号・20号・24号～26号横穴については土器等の副葬品が比較的原位置を保っていると理解されるため当初から敷石がなかった例、７号・９号・21号横穴については追葬段階で敷石が動かされ、まばらな敷石になってしまった例、11号横穴については追葬段階で敷石を動かして棺座石を配置している様子が伺える例、16号横穴については未完成横穴と考えられるので当然敷石はない例になると考えられる。その他、２号・４号・10号・13号・15号横穴については棺座石らしい礫の配置が見られる。このように本横穴群は中世墓の再利用等も考えられるが、基本的には盗掘等を受けて敷石の存在の有無についてはわからないものはなかった。以上の状況から敷石の形態について金山横穴群の基準に添って次の通り分類してみた。

A類＝拳大前後の比較的小さな礫を使い敷石としたもの。３号・７号・８号・11号（古）・12号・18号・19号・21号・23号・27号横穴が該当する。

B類＝拳大以上の大形の礫を使い敷石としたもの。１号・５号・９号・17号・22号・26号横穴が該当する。

C類＝砂利のような細かな礫を使い敷石としたもの。該当なし。

D類＝拳大以上の大形の礫を並べ棺座石のように配置したもの。２号・４号・10号・11号(新)・13号・15号横穴が該当する。

E類＝明確な敷石をもたないもの。６号・14号・20号・24号～25号横穴が該当する。

不明＝未完成横穴のため敷石の有無が不明なもの。16号横穴が該当する。

以上の中でさらに、玄室を一段高く棺座状に造り出しているものをあげると、17号（B類敷石）・21号横穴（A類敷石）・22号横穴（B類敷石）・23号横穴（A類敷石）があげられる。いずれも、A類ないしB類敷石に該当し、敷石施設を強く意識していると思われる横穴に採用されている。また、25号横穴では敷石はないものの、棺座の位置を区画するような石列が見られる例もある。

さて、以上の分類から各類の敷石の採用傾向を小単位群ごとに検討する。

地蔵ヶ谷横穴群の最古のグループとなる１号と４号横穴の小単位群について、まず検討をしてみたい。１号横穴はB類の敷石であるが、２号横穴はD類の棺座石をもち、３号横穴ではA類の敷石をもつものに変遷していく。４号横穴ではD類の棺座石をもつものから、５号横穴のようにB類、さらに６号横穴のE類の無敷石への変遷過程を読み取ることができた。すなわち、最古の横穴である１号と４号横穴は敷石をもつものと棺座石をもつものの２種類から開始され、その後小単位群の中では引き継がれることなく変遷していく過程が読み取れる。この変遷過程は小単位群の中で平面形態が大きく変化していく過程と同一の現象と思われる。

次に７号横穴～27号横穴の新しい方形墓前域をもつグループのなかで、敷石の意識の高いA・B類の敷石をもつ横穴について検討する。まず、23号横穴墓の小単位群に注目すると、最初に築造された23号横穴の敷石がA類で、24・25号横穴ではE類の無敷石に変化している。反対に、20号横穴のようにE類の無敷石から19・18号横穴のA類の敷石に変化した単位群が見られる。一方では、９号横穴のようにB類の敷石から８号横穴のA類の敷石へ、21号横穴ではA類の敷石から22号横穴のB類の敷石となる例、単基で小単位を構成する７号や27号横穴ではA類、17号横穴ではB類の敷石となり、これらはA・B類の敷石を一貫としてもつ小単位群の例となろう。さらに、14号横穴のようにE類の無敷石から15号横穴のD類の棺座石をものもの、10号横穴のようにD類の棺座石をもつものから12号のA類の敷石をもつもの、同様に13号横穴のようにD類の棺座石をもつものから12号のA類の敷石をもつものへの変遷過程をもつものなども存在し、小単位群ごとにかなりのバラエティをもつことも明らかになった。ただし、このうちA類ないしB類の敷石が小単位群の最初の横穴にならない小単位群は、４～６号横穴、12号・13号横穴、14号・15号横穴、20号～18号横穴、26号横穴の５つの小単位となり、必ずしもA類ないしB類の敷石が基本となっている状況とも言い難い。

このように、地蔵ヶ谷横穴群の敷石の状況を見てみると、統一的な変遷過程を辿るものは21号・22号横穴の小単位群のみということになる。しかしながら、大きく見ると敷石の意識が強いと思われるA類ないしB類の敷石をもつ横穴が半数以上の基数になる小単位群は１～３号横穴、７号横穴、８～11号横穴、17号横穴、20号～18号横穴、27号横穴の６つの小単位群と、敷石の意識が弱いと思われるE類の無敷石ないしD類の棺座石が主体となる小単位群は４～６号横穴、12号・13号横穴、14号・15号横穴、23号～25号横穴、26号横穴の５つの小単位群の２群にわけられそうである。

玄室の平面形態と敷石・棺座石から見た木棺の推定位置　以上の事柄から、敷石と木棺の位置関係と横穴墓の平面形態に係わる問題について考察してみたい。敷石、棺座石や棺台は木棺の位置を推定するのにたいへん有効であると考えられる。各横穴墓の平面形態ごとに木棺の位置を第30・31図に想定してみた。楕円形・横長長方形形態については１号・４号についての木棺は横穴墓の主軸に対して平行に木棺を埋葬する（以下縦置と称する。）の短い木棺？、２号・12号・13号・17号横穴は横穴墓の主軸に対して直交するように木棺を埋葬する（以下横置と称する。）の短い木棺？になると考えられた。この形態については木棺の位置で平面形態が規制されていると考えられる。しかしながら、13号横穴以外は何れも長さ1.4m以内の短い木棺が復元されるため、この規格では成人の埋葬は不可能と考えられる。よって、直接遺体を屈葬状態で埋葬したか改葬人骨を埋葬した木棺の可能性が考えられる。

縦長長方形・正方形態については、３号・５号・６号横穴は敷石の範囲と土器の出土状況から縦置の木棺で、いずれも長さ２m前後になる長い木棺となる。21号・26号横穴については敷石の範囲や土器の出土状況から、何れも横置の木棺の位置と考えられ、いずれも長さ1.4m前後の短い木棺？が想定される。すなわち、この形態については縦長長方形が縦置きであるのに対して、正方形に近い21・26号横穴については横置の短い木棺しか想定できないために、直接屈葬状態で遺体を埋葬したか改葬人骨の木棺と考えられる。ただし、21・26号横穴については、玄室のスペースから見ると同規模の木棺を縦置で埋葬することも可能である。

無袖バチ形形態については、玄室幅の狭い10号・11号・14号・15号・24号横穴については縦置の木棺、敷石の範囲、棺座石の位置、玄室幅の広い20号・22号・25号・27号横穴については横置の木棺？が想定される。この形態については横置と縦置の木棺位置が混在しており、とくに横置の木棺については長さ1.4m程度の短い木棺しか想定できないため、直接屈葬状態の遺体を埋葬したか改葬人骨の木棺と考えられる。

無袖長方形形態については、小型のものが多く玄室幅が狭いことから何れも縦置の木棺が想定できるが、比較的大きい７号横穴以外は小型の横穴であり、８号・９号・19号横穴については長さ1.4m以内の短い木棺しか想定できないため、直接屈葬状態の遺体を埋葬したか改葬人骨の木棺と考えられる。18号横穴については、所謂ミニ横穴で改葬人骨の木棺（木櫃）のみしか埋葬できない。

以上のように無袖バチ形と正方形の形態を除いて、縦長系は縦置の長い木棺、横長系は横置の屈葬状態の遺体の直接埋葬か改葬人骨の木棺が想定され、横穴墓の平面形態は木棺の埋葬位置や内容に規制されていたことが分かる。無袖バチ形形態のなかで両者が混在する理由は、その祖形となった正方形や台形形態の中に横置の木棺を採用するものがあったためと考えたい。

以上の結果から木棺の位置をまとめてみると、大きく２類系に大別された。

Ａ類＝横穴の主軸方向に対して交差する位置になり、横置型ともいえるもの。２号・12号・13号・17号・20号～23号・25号～27号横穴の11基が該当した。

Ｂ類＝横穴の主軸方向に対して並行する位置になり、縦置型ともいえるもの。１号・３号～11号・14号・15号・18号・19号・24号横穴の15基が該当した。

ただし21号・26号横穴についてはどちらにも該当することが可能である。

この結果から各小単位群ごとでの傾向を検討する。古手のＡ群では２号横穴以外はＢ類の縦置型になる傾向が読み取れ、最古の１号・４号横穴墓も縦置型から始まることが確認できたが、２号横穴墓では横置型に変化する時期もあり、横長楕円形や横長長方形が横置型の木棺位置に関係したものであることを強く示唆している

Ｂ群ではまず７号～11号横穴の小単位群を見てみると、一貫としての縦置型の木棺の位置になるよ

うである。これは玄室の平面形態が無袖バチ型か長方形に統一されていることと関係があろう。

12～17号横穴の小単位群を見てみると、12号・13号横穴と17号横穴が横置型、14・15号横穴が縦置型となっており、やはり各小単位ごとの玄室形態の統一性から見られる現象であろう。

18～22号横穴の小単位群を見てみると、20号・21号・27号横穴が横置型、18・19号横穴が縦置型となっている。21号・22号横穴の小単位は横置で継続性があるが、20号横穴についてはその後築造される19号から18号横穴では縦置型に変化している。この変化は、19号横穴以降の横穴墓の小型化に関係しているものと考えられる。すなわち、７世紀中頃に起こった横穴墓の小型化現象にともない、本来の系譜からの横置が不可能になり縦位置に変化したものと考えられる。

23～27号横穴の単位群を見てみると、古手で単独の小単位を形成する26・27号横穴を含めてもすべてが横置型となっており継続性がある。

以上のように、地蔵ヶ谷横穴群の木棺の推定位置からは、縦置型と横置型の両者が見られ、縦置型がやや優勢のようである。最古の横穴墓である１号・４号横穴が縦置型であった点からも、縦置型の木棺位置が重視されていた事が判明したが、横置型も一定基数確認できるため必ずしも縦置型主体ともいえない状況を示している。しかしながら、各木棺の位置は小単位群の中で継続性があることから見ると、小単位ごとの被葬者集団の枠組みを考えるうえでは有効な手段であると考えられる。

この点について解明するに、横置型・縦置型横穴の地域的な分布については、かつて横穴墓の玄室平面形態や天井形態の地域色を検討し、Ａ地域の原野谷川水系はアーチ・尖頭アーチ型天井で縦長長方形とドーム型天井で横長楕円や長方形の混在する地域、Ｂ地域の菊川水系～相良地域はドーム型天井で横長楕円形が卓越する地域、Ｃ地域は太田川上流地域で尖頭アーチ型天井で縦長長方形が主体となる地域色が存在する点を指摘した（松井一明　1997）ことと関連性があると思われる。

この地域色から見ても地蔵ヶ谷横穴群の存在する場所には掛川市南部から小笠郡下に分布しているドーム形天井の横長楕円形の横穴（横置型）が入り込んでくる地域であることは間違いないが、至近距離にある金山横穴Ａ・Ｂ群では横長楕円形態のものはまったく見られない。このことから見ると、ドーム天井の横長楕円形の横穴はどの横穴群にも存在するのではないことが理解される。すなわち、Ａ地域の中でも、Ｂ地域に関係した人の動きを受け入れた横穴群の中にドーム天井の横長楕円形の横穴が見られると思われるのである。また、無袖バチ型、正方形、台形の中にも明らかに横置型のものが見られ、単位群や小単位群のなかで継続性が見られたことから、近しい血縁の被葬者集団を復元することが可能であると考えられる。

以上の想定が正しいならば、Ａ群の横穴は楕円形ではあるが縦置型の木棺位置を基本とし、２号横穴のように掛川市南部域の遠江最古の向山横穴群の横長長方形の影響も受けている。遠江地域に横穴墓が導入されるにあたって、原野谷川水系では縦長長方形と縦長楕円形の縦置型、横長長方形と横長楕円形の横置型の木棺位置のものがほぼ同時に導入されていること（松井一明　2001）が明らかにされている。Ａ群の２つの小単位群はどちらも楕円形態から縦長長方形への玄室形態の変化は見られるものの、木棺の位置は２号横穴を除けばＢ群の横穴と同様に小単位群の中では継続性が認められるのである。すなわち、木棺の位置関係から検討すると、それぞれ導入を図った小集団が木棺の位置関係を継承していることから、各横穴群の中では各形態が混在するものの小単位群のなかでは継続性をもって木棺の位置を決定していると読み取れるため、大谷氏の指摘どおりその小単位を最小の血縁集団と外部からの小血縁集団を抽出するのに有効な分析方法と考えられるのである（大谷宏治　2003）。

閉塞石　つぎに閉塞施設について検討してみたい。閉塞石は未完成横穴である16号横穴と、22号横穴以外のすべての横穴から検出されていることから、基本的には礫を使う閉塞石を採用していたと思わ

れる。ただし、１号横穴については羨門部の両側に小さな張り出し況があることと、閉塞石基底部に須恵器の副葬が見られることから、掛川市向山１～３号横穴、前山３・４号横穴に見られたように築造当初は木板による閉塞施設（掛川市教育委員会　2003）であった可能性もある。また、22号横穴については盗掘もなく閉塞石の存在していた痕跡も全く確認できないことから、羨門部に痕跡は確認できなかったものの木板による閉塞施設の可能性の存在を指摘しておきたい。

５号横穴の墓前域の閉塞石は、羨門部で両側壁側を大型の円礫小口状に積上げその内部に小型の礫を充填するような形態をなしており、横穴式石室のような石積み施設が羨門部両側壁部分に存在していた。遠江での横穴墓で同様な施設の類例は知らないが、浅羽町北山３号墳のように横穴式木室にも見られる施設（浅羽町教育委員会　1987）なので横穴式石室の影響によるものとも考えられる。

７号横穴では、玄室の小礫からなる敷石がかなり乱れており、同様な大きさの小礫が閉塞石にも見られることから、追葬時に敷石の一部を閉塞石に転用したと考えられる。

11号横穴の閉塞石は追葬時に根石まではずされた状態で、はずされた閉塞石の一部は墓前域脇に積み上げられており、さらに当初Ａ類の敷石を取り外し閉塞石の一部を利用して棺座石に転用していると考えられる。

12号と13号横穴の閉塞石については、基底部の閉塞石のほうが大型礫を使用していることから見ると、当初大型の礫を使用していたが追葬時には小礫を積み上げて閉塞した状況と考えられる。

副葬品の組合　最後に土器を始めとした副葬品の出土状態について検討してみたい。土器以外の副葬品を傾向を検討すると次の通りの傾向を読み取ることができた。

Ａ類＝鉄製品のうち直刀の副葬が認められたもの。５号（直刀１？・刀子２・鉄鏃３以上・耳環・玉類）・10号（冠帽１・直刀１）・22号（刀鍔１・刀金具１・鉄鏃11以上）・23号（鞘金具１・鉄鏃２本）・27号（直刀１・小刀１・鉄鏃12以上・刀子２・耳環・玉類）横穴が該当する。

Ｂ類＝鉄製品の副葬があるが直刀がないもの。１号（刀子３）・４号（鉄鏃１）・13号（耳環１）・17号（刀子２）・18号（刀子１）・19号（鉄鏃１以上）・21号（刀子２・鉄鏃４本以上）横穴が該当する。

Ｃ類＝土器類のみの副葬しかないもの。３号・６号・７号・９号・11号・12号・14号・15号・20号・24号～26号横穴が該当する。

不明＝副葬品の内容が不明なもの。２号・８号・16号横穴が該当する。

ここで、直刀が副葬される横穴墓を有力な被葬者が葬られたと考える視点から各小単位群について分析をしてみたい。直刀本体が副葬されている横穴墓は５号？（記録で存在するが現物確認できず）・10号・27号横穴のみで他は鍔や鞘金具であった。なかでも10号横穴からは冠帽が出土しており、地蔵ヶ谷横穴墓群中では最有力な副葬品を保有している横穴墓である。横穴墓の大きさも全長６ｍを計り横穴群中では大きな部類に属する。次に22号横穴からは直刀の鍔や鉄製ではあるが飾大刀の金具が、27号横穴からは直刀１と小刀１の複数の刀類と鉄鏃の数10以上見られることから、10号横穴の次に有力な横穴墓であると考えられる。６世紀代に築造された１～６号横穴における鉄製品の副葬は意外にも貧弱であるが、６世紀末葉築造の５号横穴では直刀のほか27号横穴に匹敵する玉類の副葬が見られた。

以上のように地蔵ヶ谷横穴群における鉄製武器の副葬は、小単位群のなかで継続するものはなく単発に終わること、その数は以外にも少なく27基中５基に留まり、武人的性格の集団の在り方を示すものではない。しかしながら、10号横穴から出土した冠帽は首長墓からの出土品としても遜色がないものなので、飾大刀は保有しないが10号横穴を７世紀代の横穴群中最有力横穴墓になると考えられる。

さてここで横穴墓の築造時期と鉄製武器の副葬の関係について触れておきたい。付近の金山横穴群

では６世紀末葉には鉄刀の副葬の見られる横穴の基数は８基中５基で多数を占め、７世紀代には８基中２基となり鉄刀の副葬が減少するという。地蔵ヶ谷横穴群においては金山横穴群で最も鉄刀の副葬が多かったⅣ期（６世紀末葉）の時期に築造された横穴は少なく、僅かに３号・６号・23号・24号・27号横穴の５基（内鉄刀が副葬される横穴２基）で、他の大多数の横穴は方形墓前域をもつ横穴からなる小単位群であり、その主体時期はⅤ期（７世紀前葉）のなかでの極めて短時間であったことが判明している。すなわち、武人的性格の強い副葬品をもつ人々は地蔵ヶ谷横穴群には含まれておらず、金山横穴群のような別の横穴群に葬られている可能性が高いと考えられるのである。

最後に須恵器を始めとした土器の出土状態について検討する。玄室内で出土する須恵器のうち特徴的なのは瓶類である。瓶類の出土状況を見ると、Ⅳ期の６世紀後葉に大きな変化を読み取ることができる。すなわちⅡ～Ⅳ期に築造されたと思われる１～６号横穴について見てみると、一番古い１号と４号横穴からは高坏や坏類に限られた出土のみで、瓶類は認められない。つぎに築造されたと思われる２号横穴は土器類の副葬はなく、Ⅳ期築造の３・５・６号横穴では提瓶や広口壺がようやく見られるようになるのである。瓶類を使用した祭祀形態はⅣ期に確立したものといえようか。

Ⅴ期以降では瓶類の出土状況が格段に多くなる。15号横穴のフラスコ瓶、26号横穴の平瓶、９・27号横穴の長頸瓶のように単器種で出土する横穴墓も一定基数見られるほか、12号・14号・22号～24号横穴のように長頸瓶・フラスコ瓶・広口壺と平瓶の組み合わせをもつもの、21号・10号・11号・22号・25号横穴については瓶類のほか、𤭯の出土も目立つものがある。

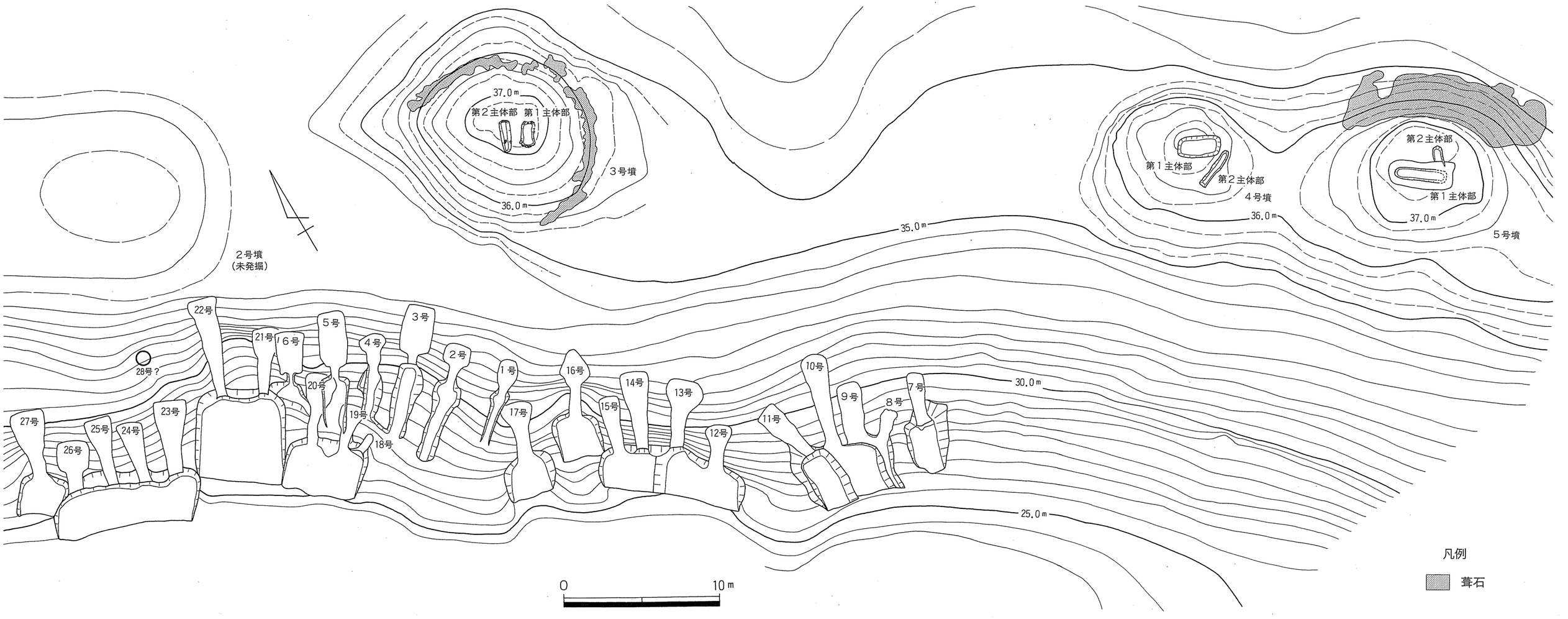
以上の状況から、瓶類の時期的器種変化を見てみると、６世紀中葉では瓶類の使用は少なく、６世紀後半では提瓶や広口壺が主体、７世紀前半代になると長頸瓶・フラスコ瓶・平瓶のほか𤭯が含まれるバラエティが多くなり、８世紀初頭では長頸瓶主体となる変化が見られるようである。

出土状況から見ると、14号・21号・25号横穴のように木棺の想定位置より少し離れた玄室袖部や羨道部付近に他の器種とともに瓶類があたかもかたずけられたようにまとめられ置かれているような出土状況を示すものもあるが、多くは３号・５号・６号・９号・10号・15号・24号・26号・27号横穴のように木棺付近と想定されるすぐ近くからの出土例となる。すなわち玄室内における、葬送儀礼のなかでこれら瓶類の役割は木棺の近くで執り行われた儀式に関係したと推察されるのであり、これら瓶類は追葬時あるいは儀式終了時に玄室袖部にかたずけられたと考えられる。

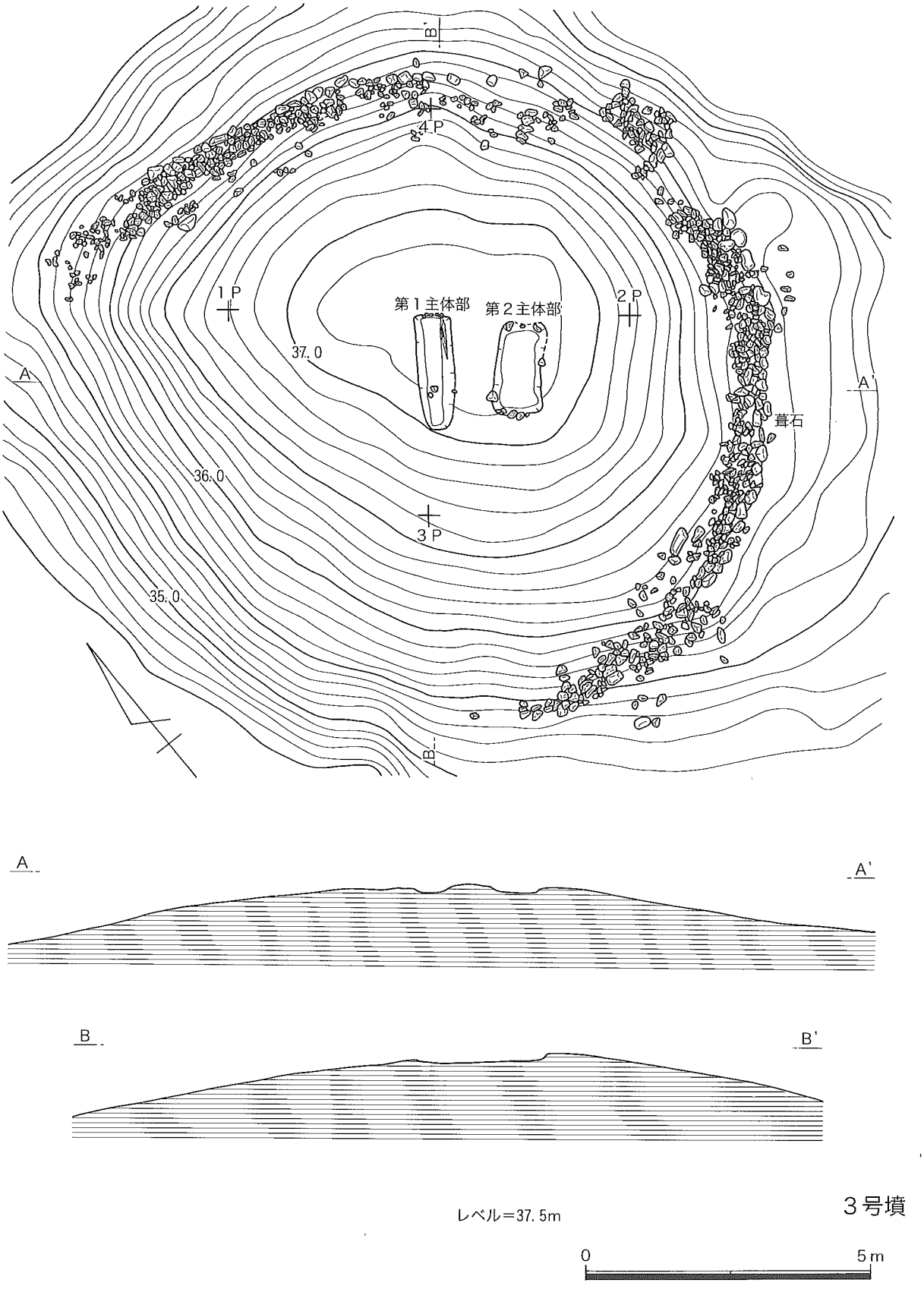
また、３号横穴の広口壺、11号横穴の４点の長頸壺、22号横穴の３点の長頸壺、27号横穴の大型𤭯と提瓶、20号横穴の長頸瓶、23号横穴の𤭯と平瓶、18～20号・26号横穴の大型甕などが墓前域や羨門付近、閉塞石の外側から出土しており、これらの中には完形品に近いものも含まれており、すべてが玄室内より持ち出されたとは考えられない。玄室外の墓前域でもこれらの土器を使用した何らかの墓前祭祀が想定される。

つぎに、横穴墓の玄室形態と土器の出土傾向については、古い玄室形態となる楕円形態は、Ⅴ期築造の12号横穴を除いて瓶類の出土数は少なく土器の全体量も多くない。同様に無袖長方形形態についても小型の横穴墓が多く、瓶類も７号・９号横穴のみから出土している。土器の副葬品としての量が増えてくるのは５号・６号横穴で見られたようにⅣ期に築造される縦長長方形形態からである。Ⅴ期以降は無袖バチ形形態が多くなり、小型の15号横穴を除いて一定量の土器の出土量が認められる。

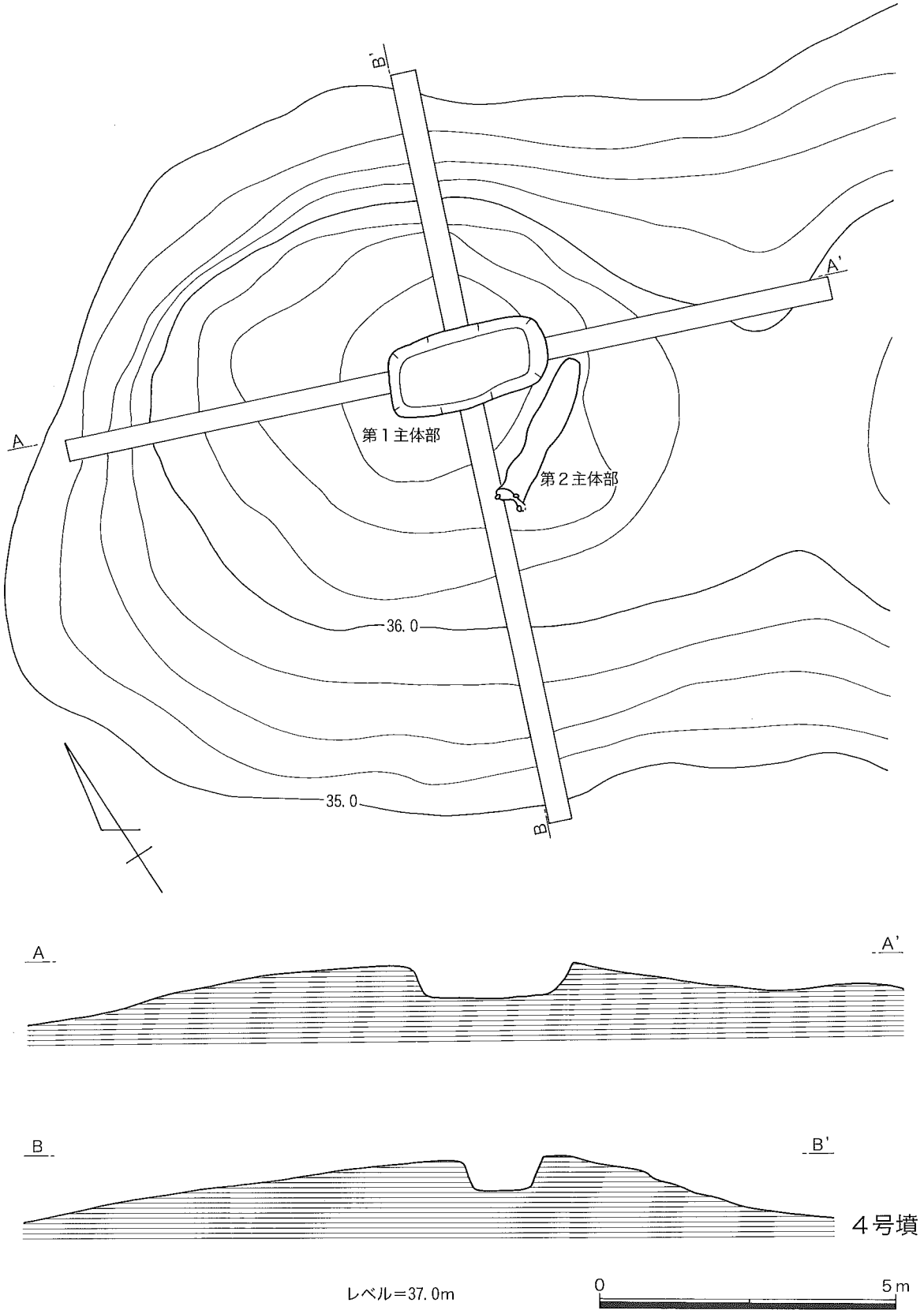
以上のほか、４号横穴のように土師器の坏類、24号横穴のように土師器の高坏や、５号横穴のように土師器の坏や壺など土師器が多数副葬される例、５号・12号・21号・24号横穴のように多数の坏類が副葬される例、また22号横穴のように装飾須恵器を含む長頸瓶が多数副葬される例など注目すべき土器の組み合わせが多くある。これらの器種組成の問題点ついては今後の検討課題としておきたい。



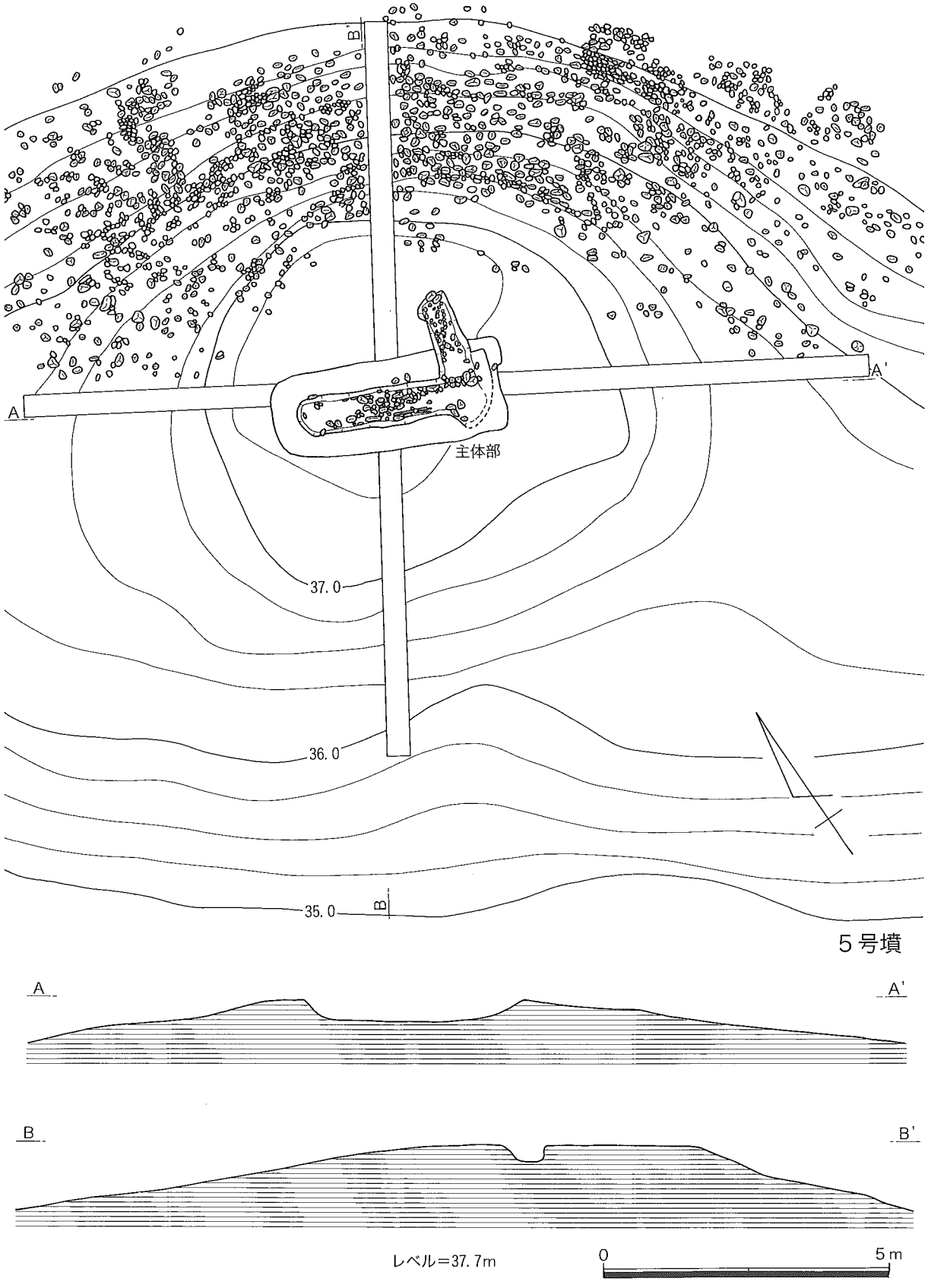
第３図　地蔵ヶ谷古墳群・横穴群全体図


B
4P
1P
第１主体部
第２主体部
2P
37.0
A
A'
葺石
36.0
3P
35.0
B'
A
A'
B
B'
レベル＝37.5m
３号墳
0
5m

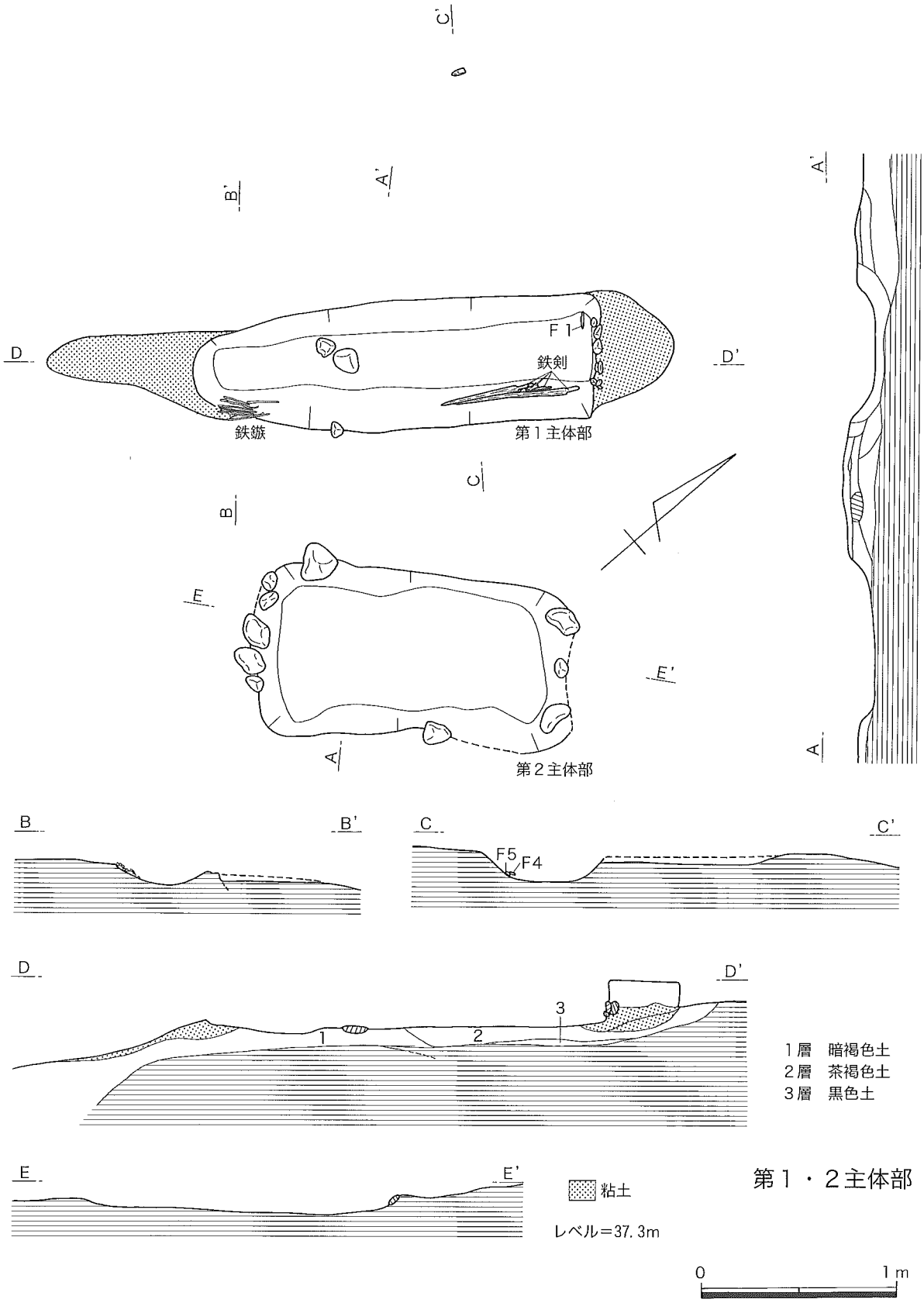
第４図　３号墳実測図



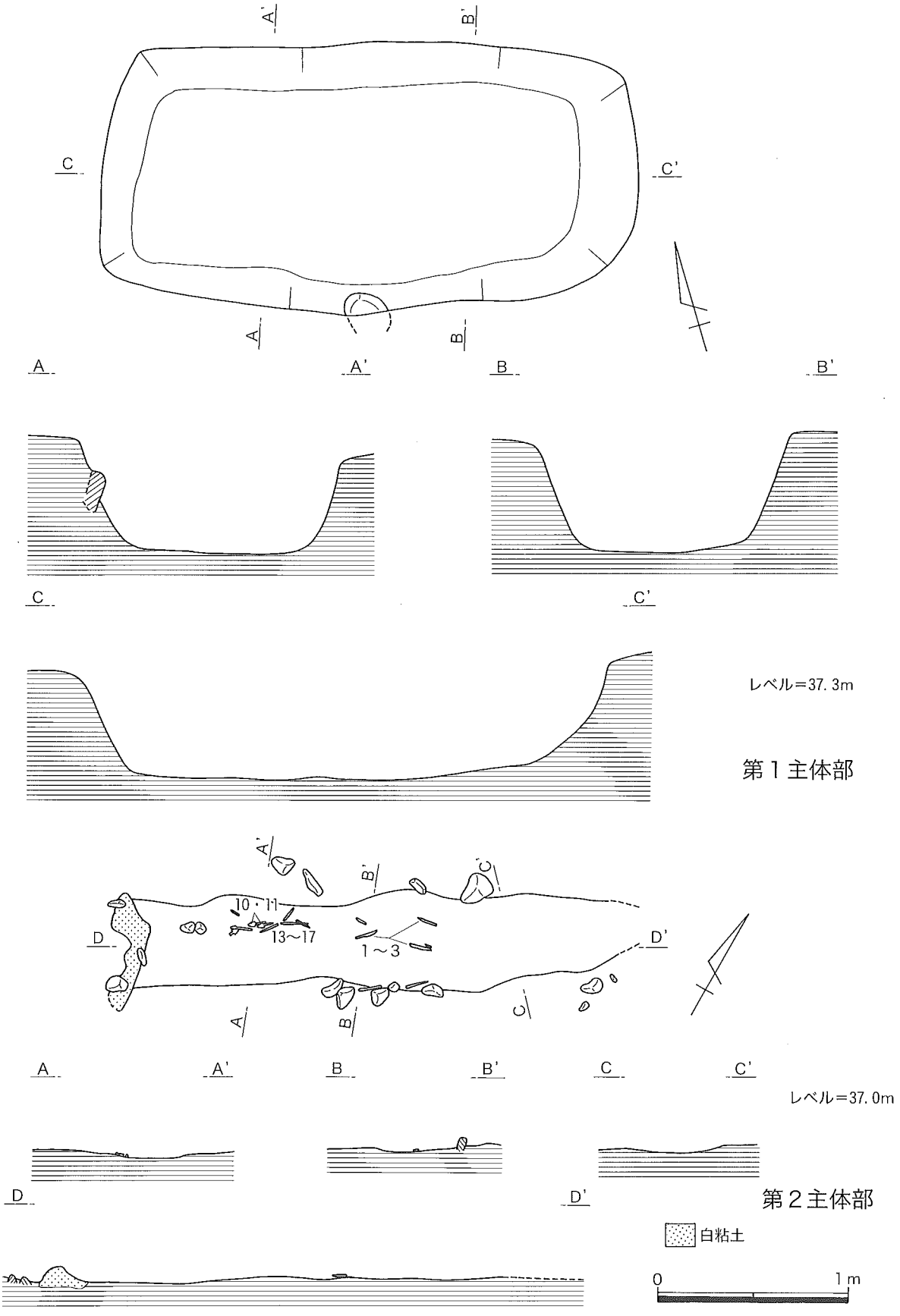
第５図　４号墳実測図



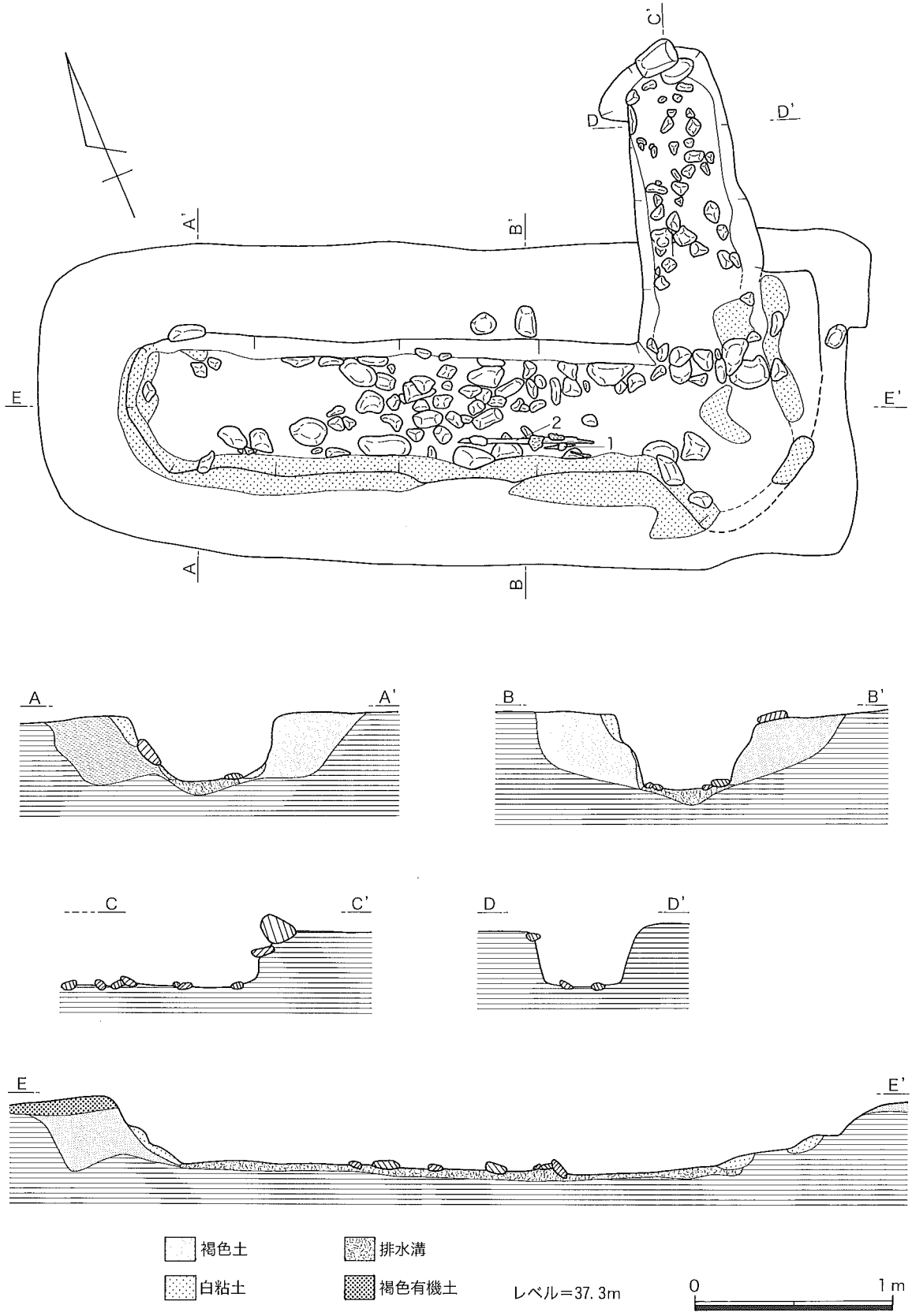
第６図　５号墳実測図



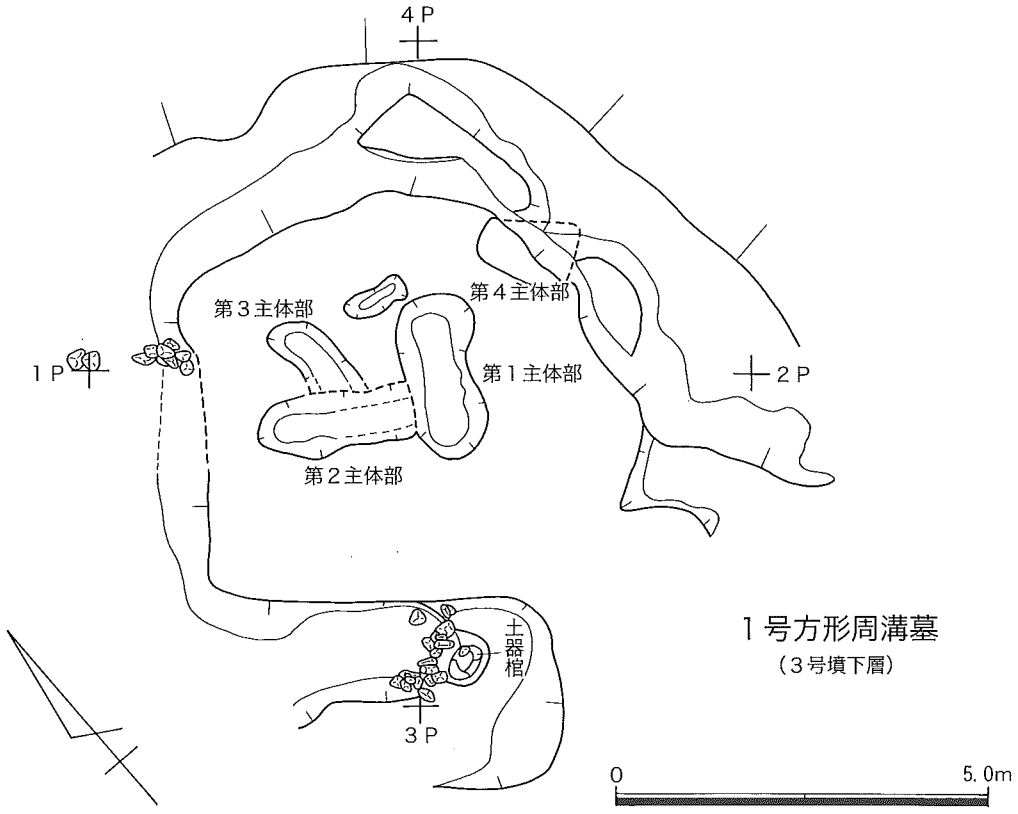
第７図　３号墳主体部実測図

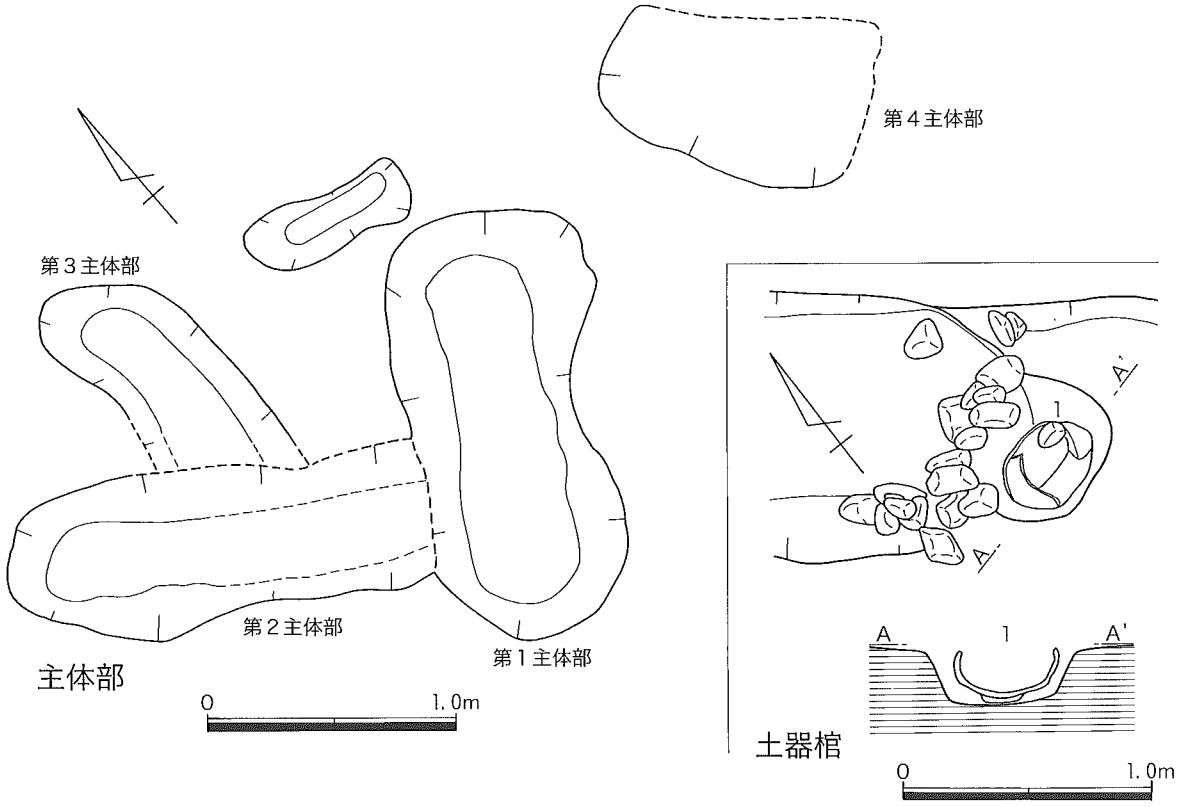


第８図　４号墳主体部実測図

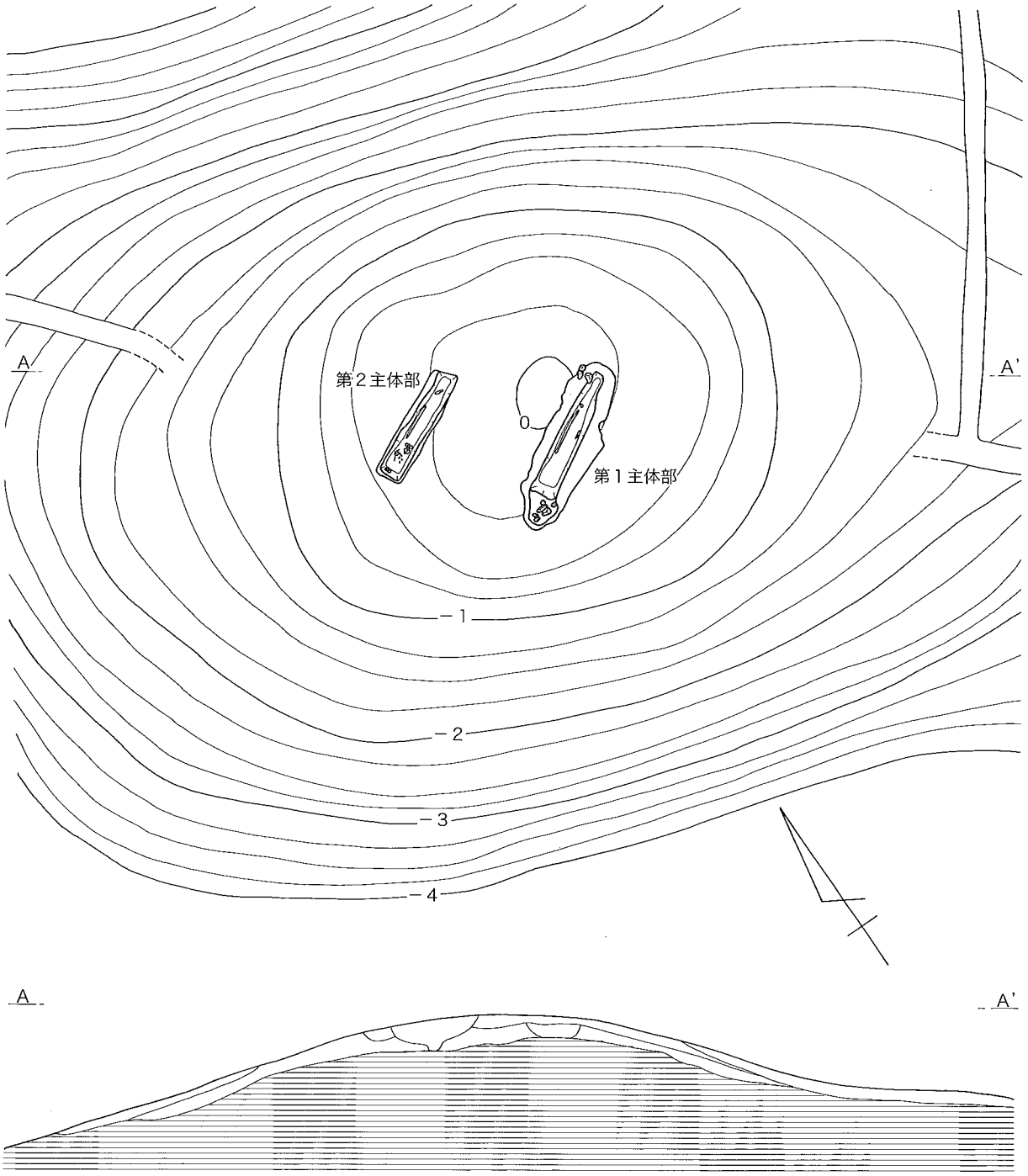


第９図　５号墳主体部実測図

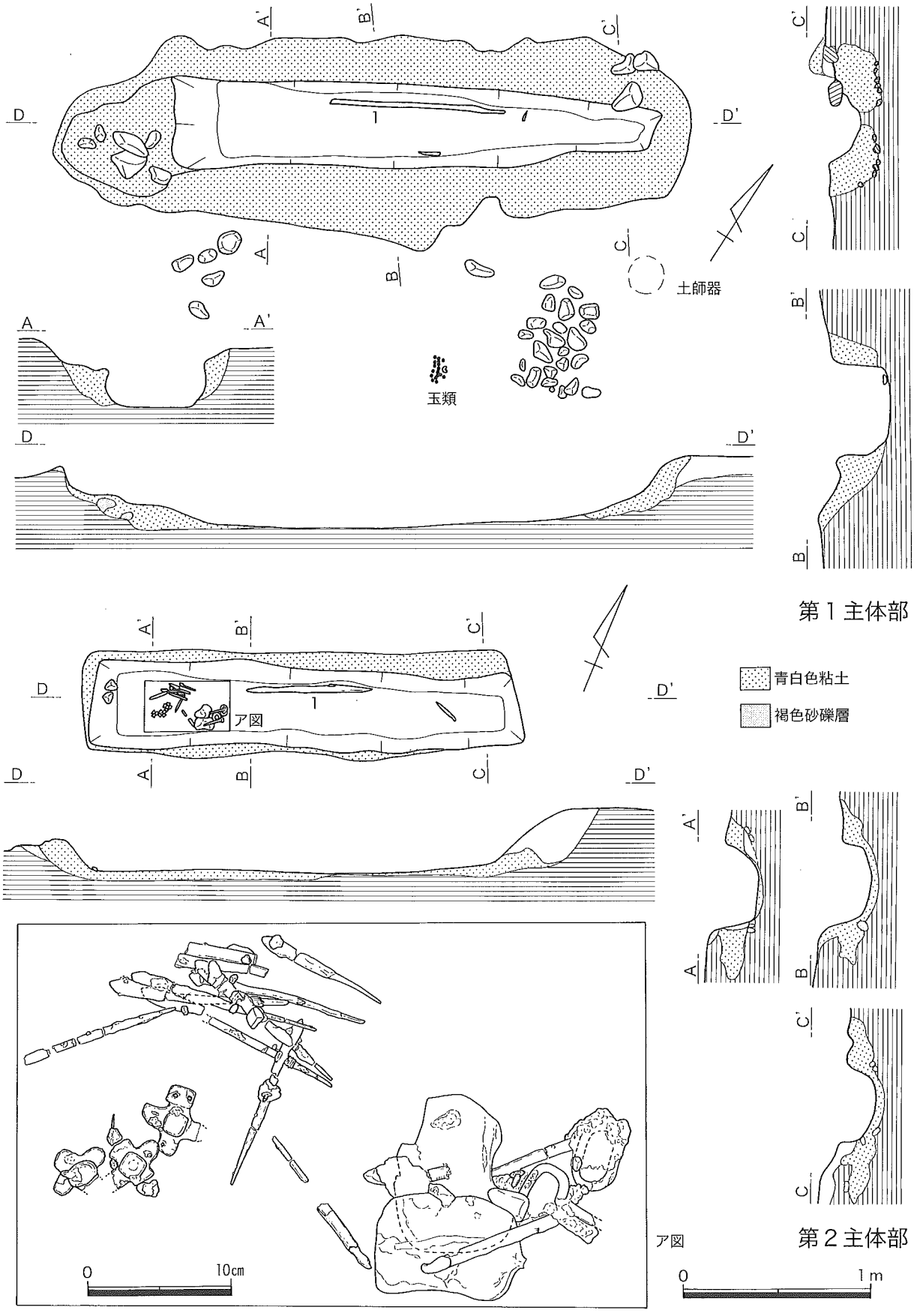




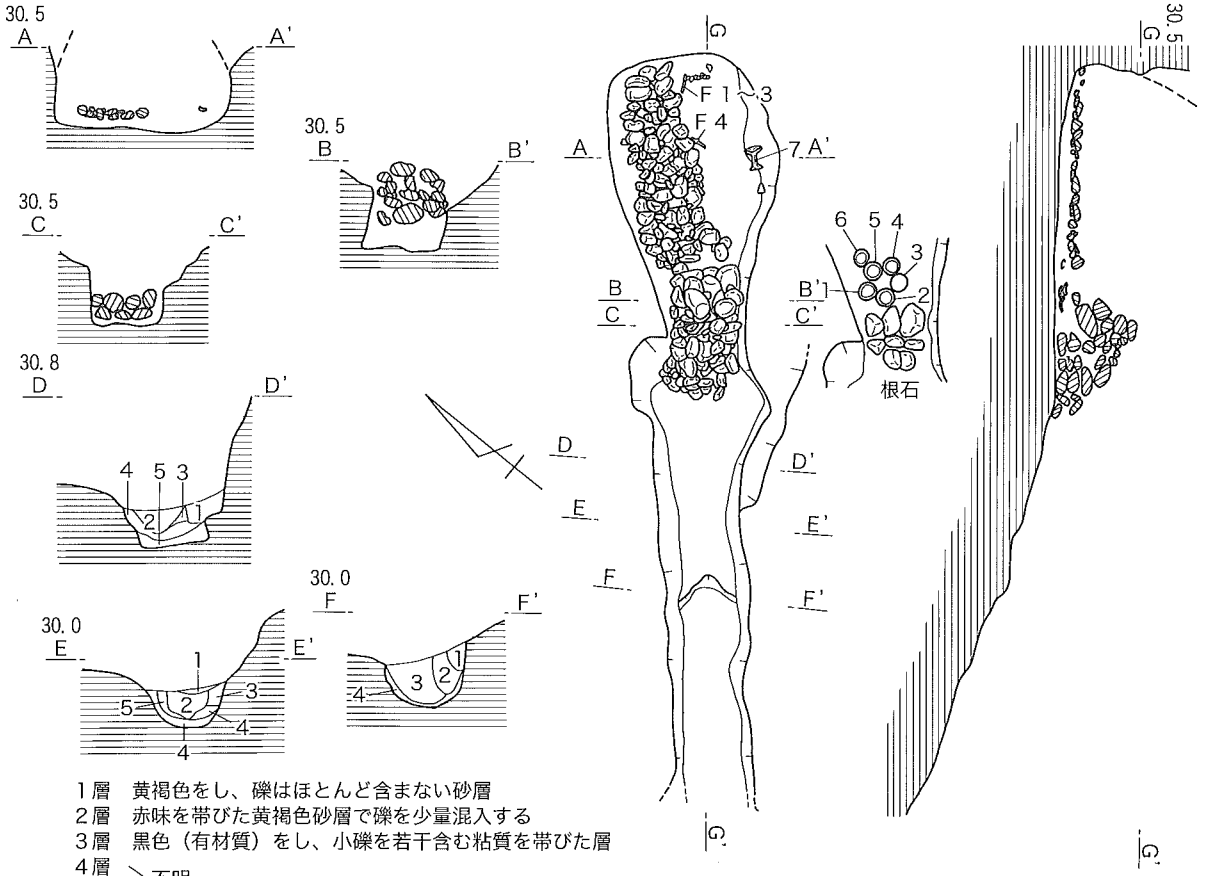
第10図　１号方形周溝墓実測図

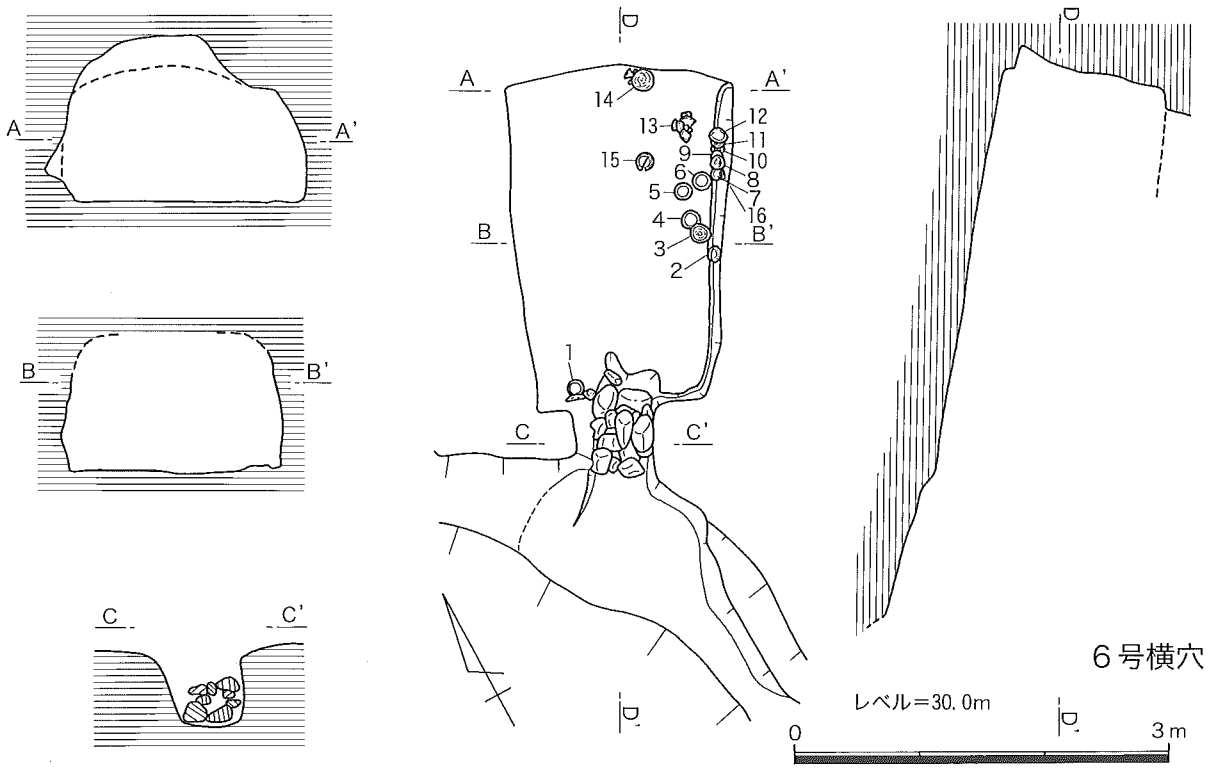


第11図　井守塚５号墳実測図

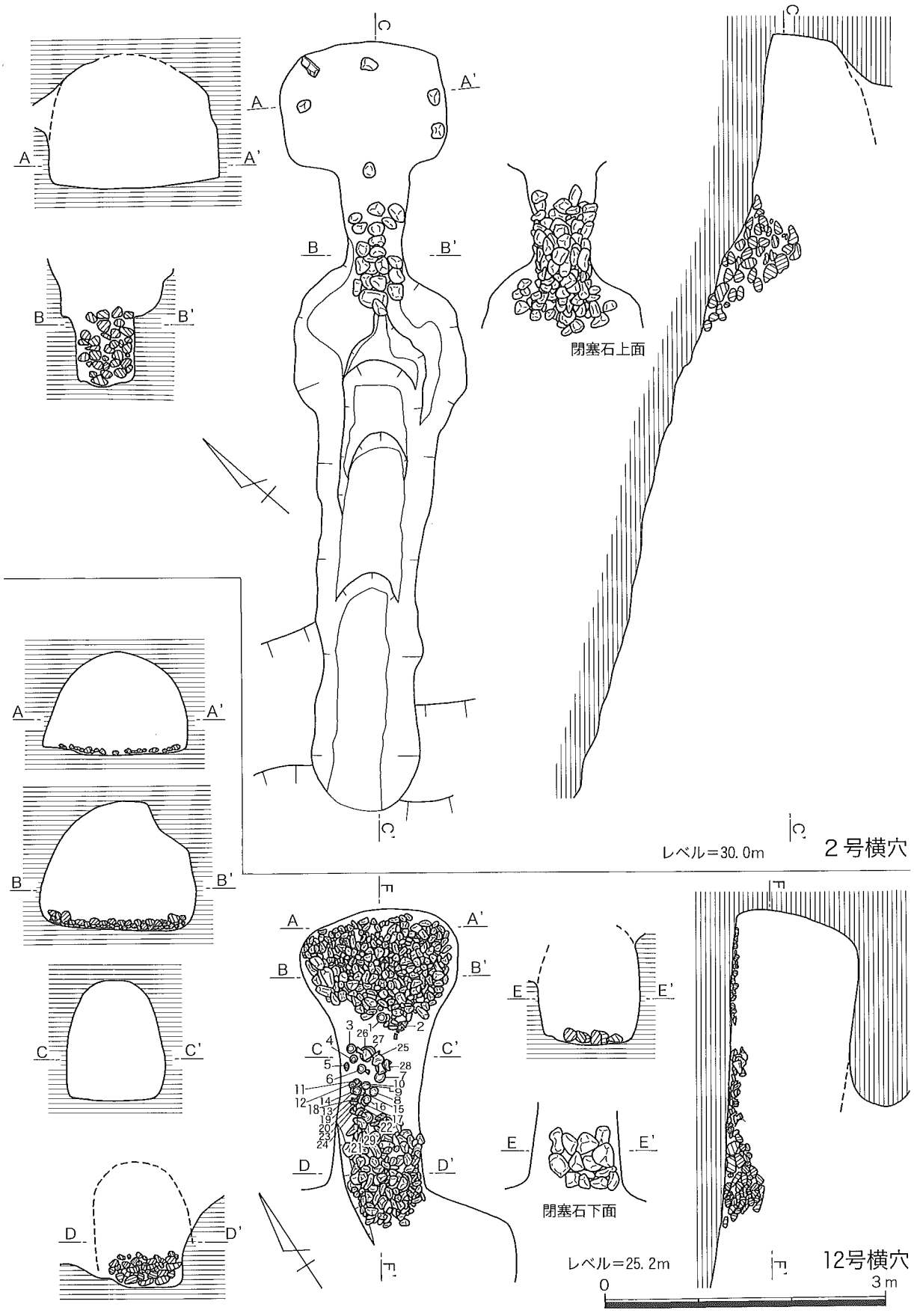


第12図　井守塚５号墳主体部実測図

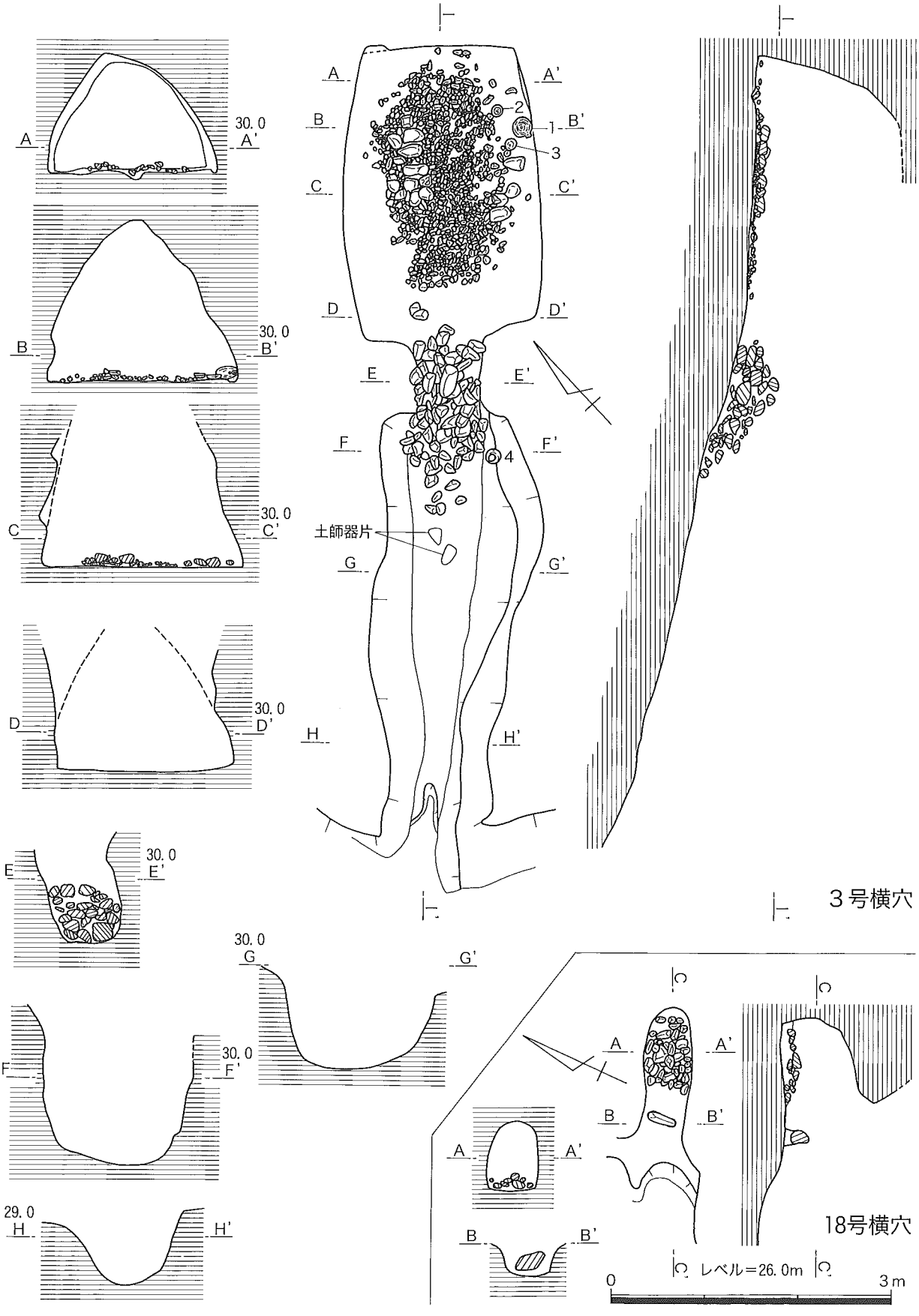




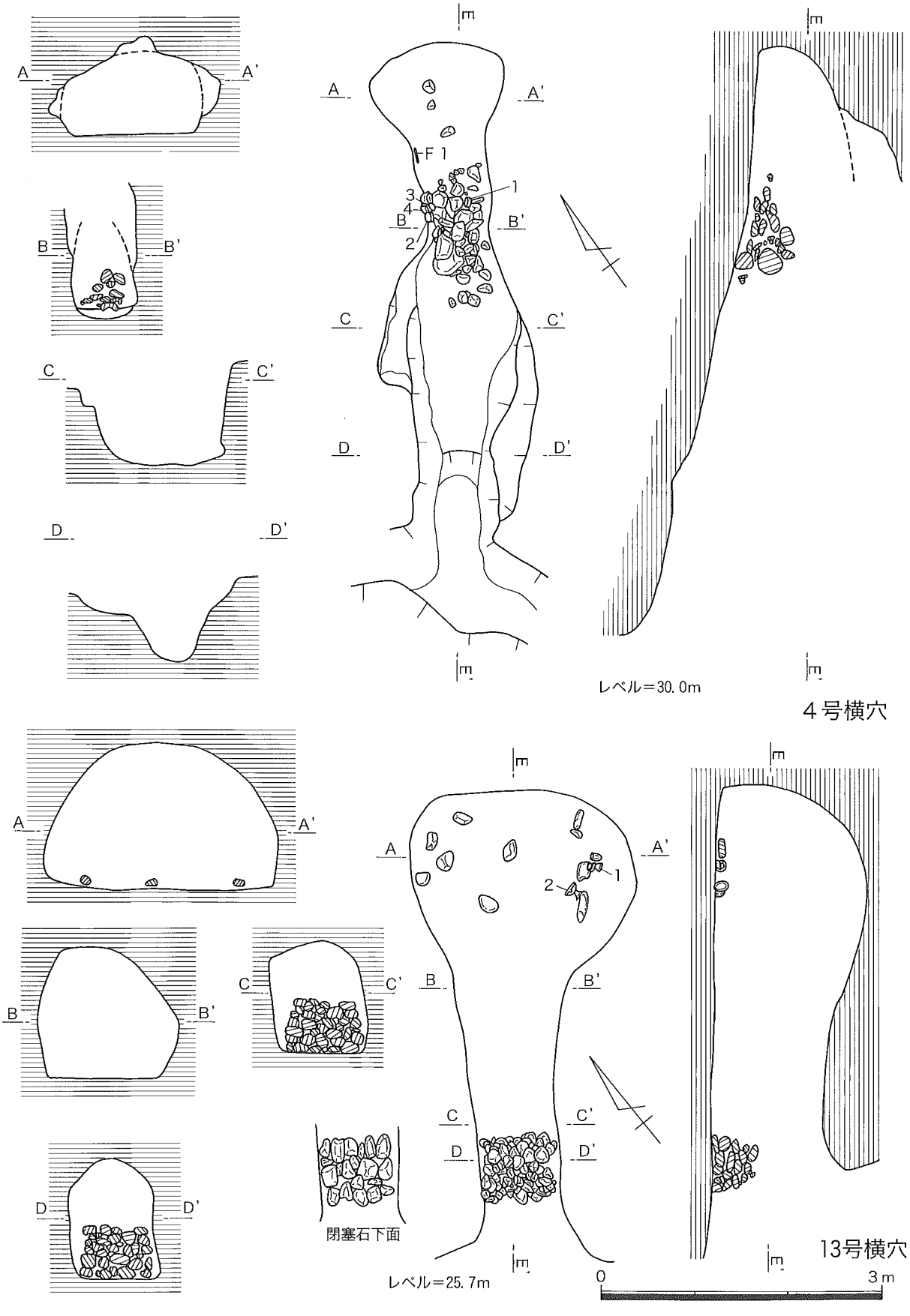
第13図　1号・6号横穴実測図



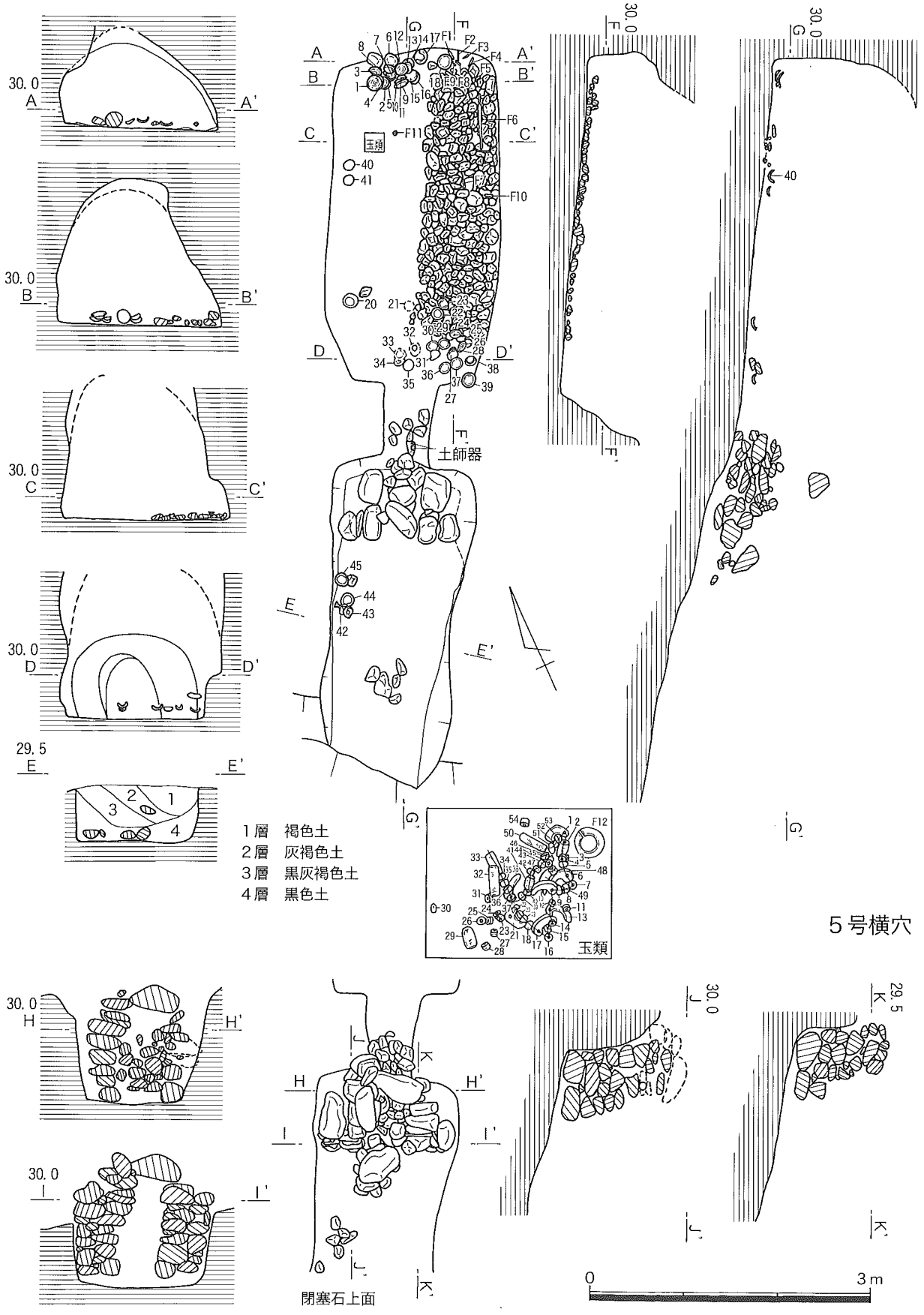
第14図　2号・12号横穴実測図



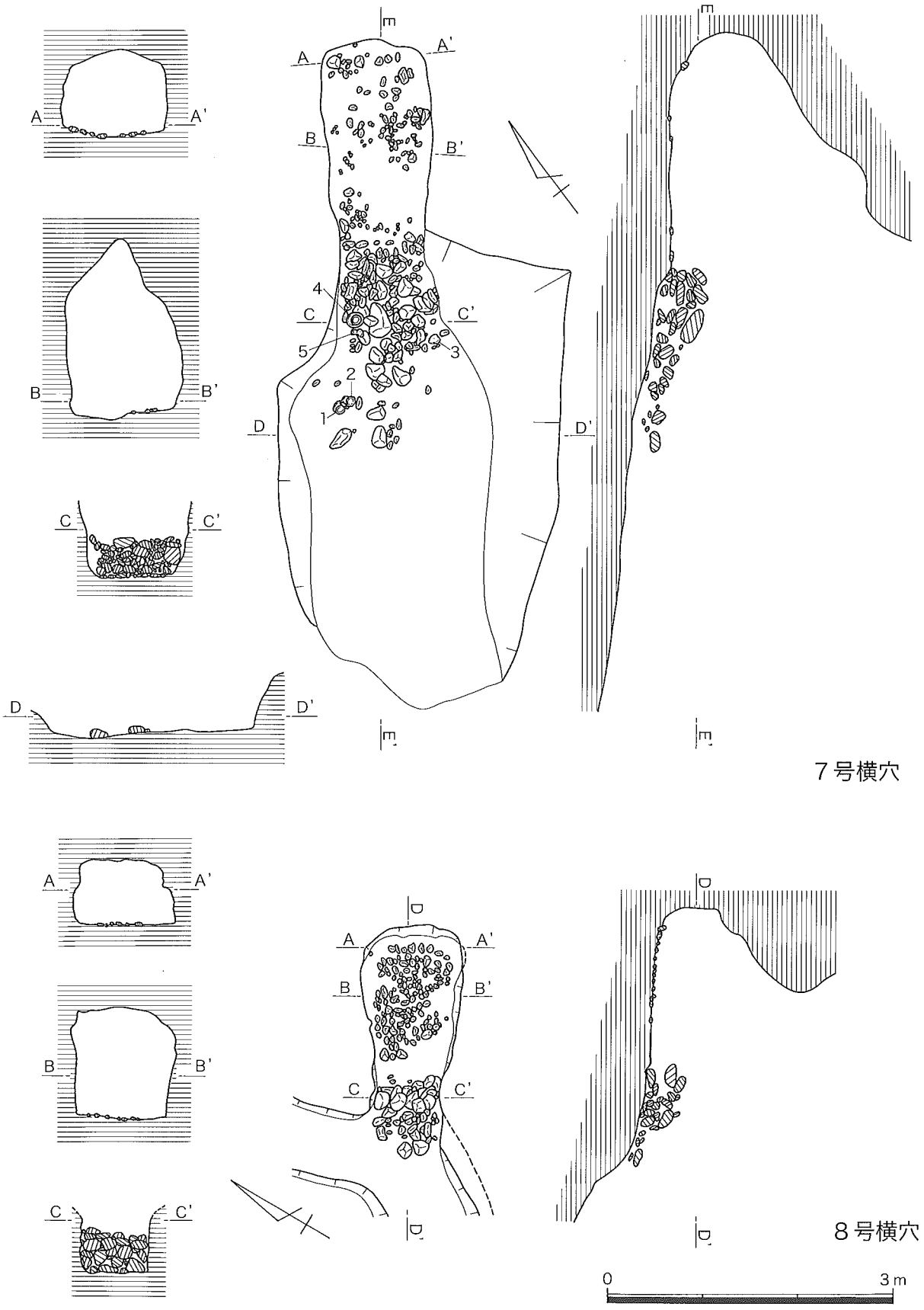
第15図　3号・18号横穴実測図



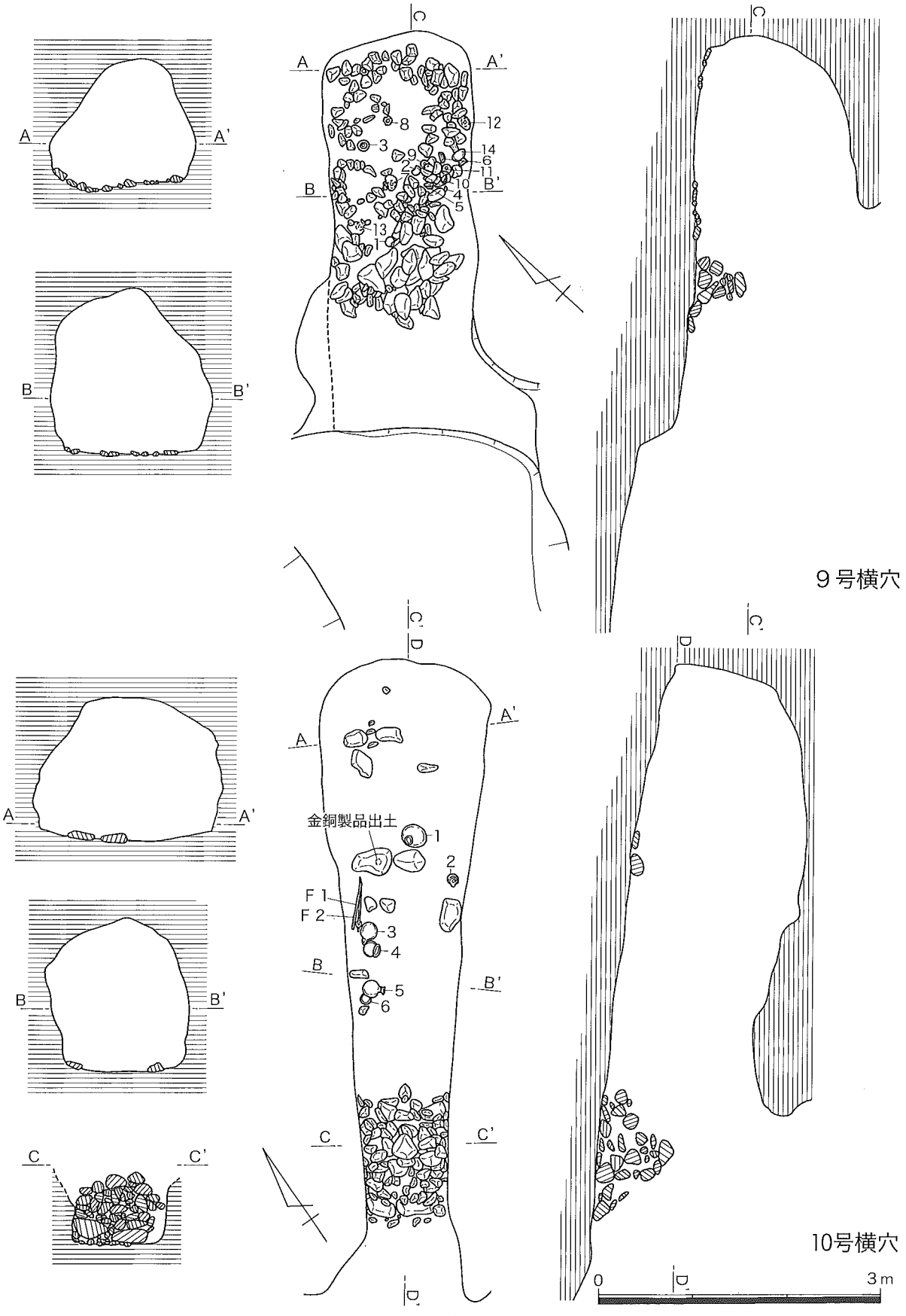
第16図　4号・13号横穴実測図



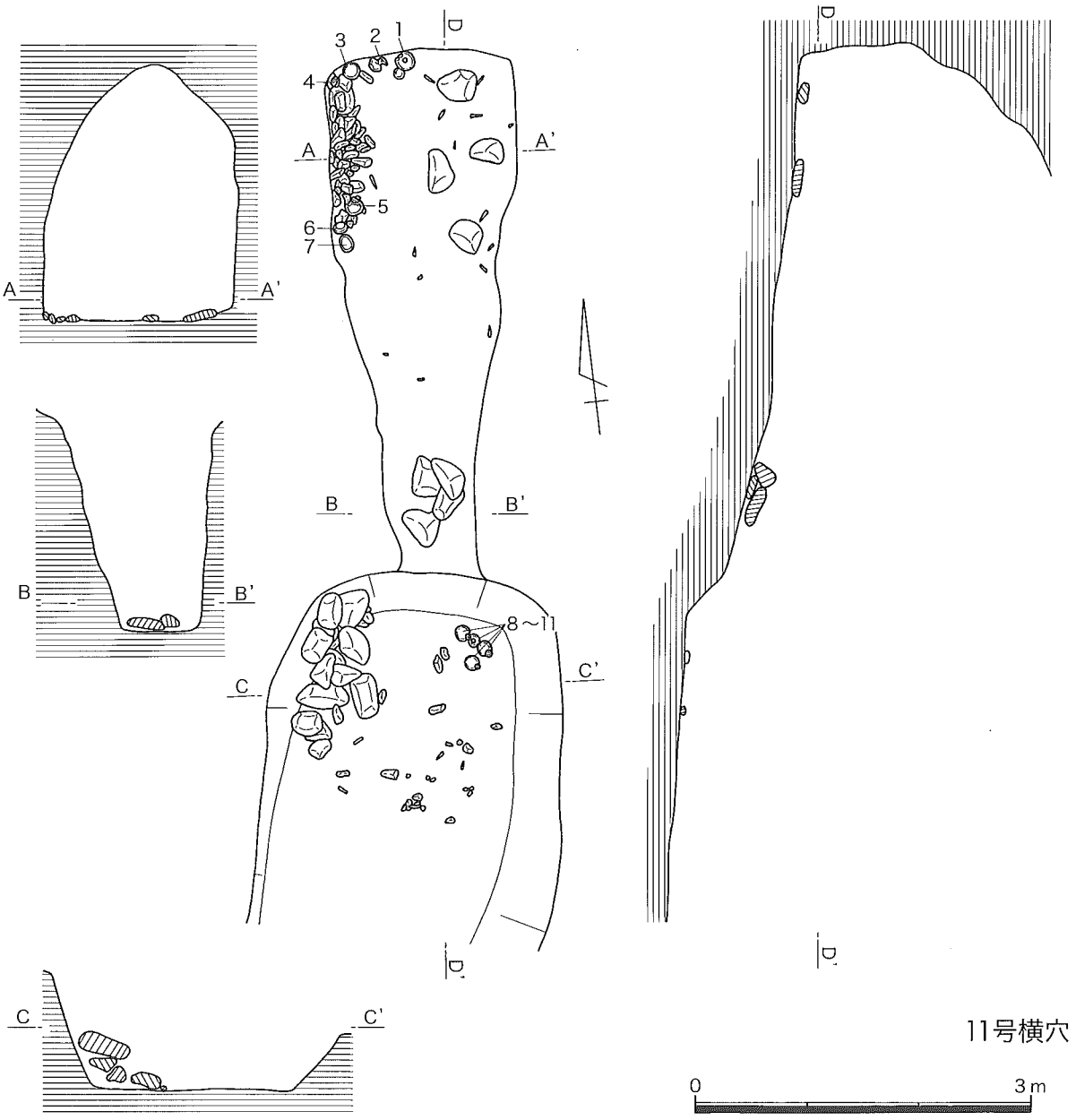
第17図　5号横穴実測図



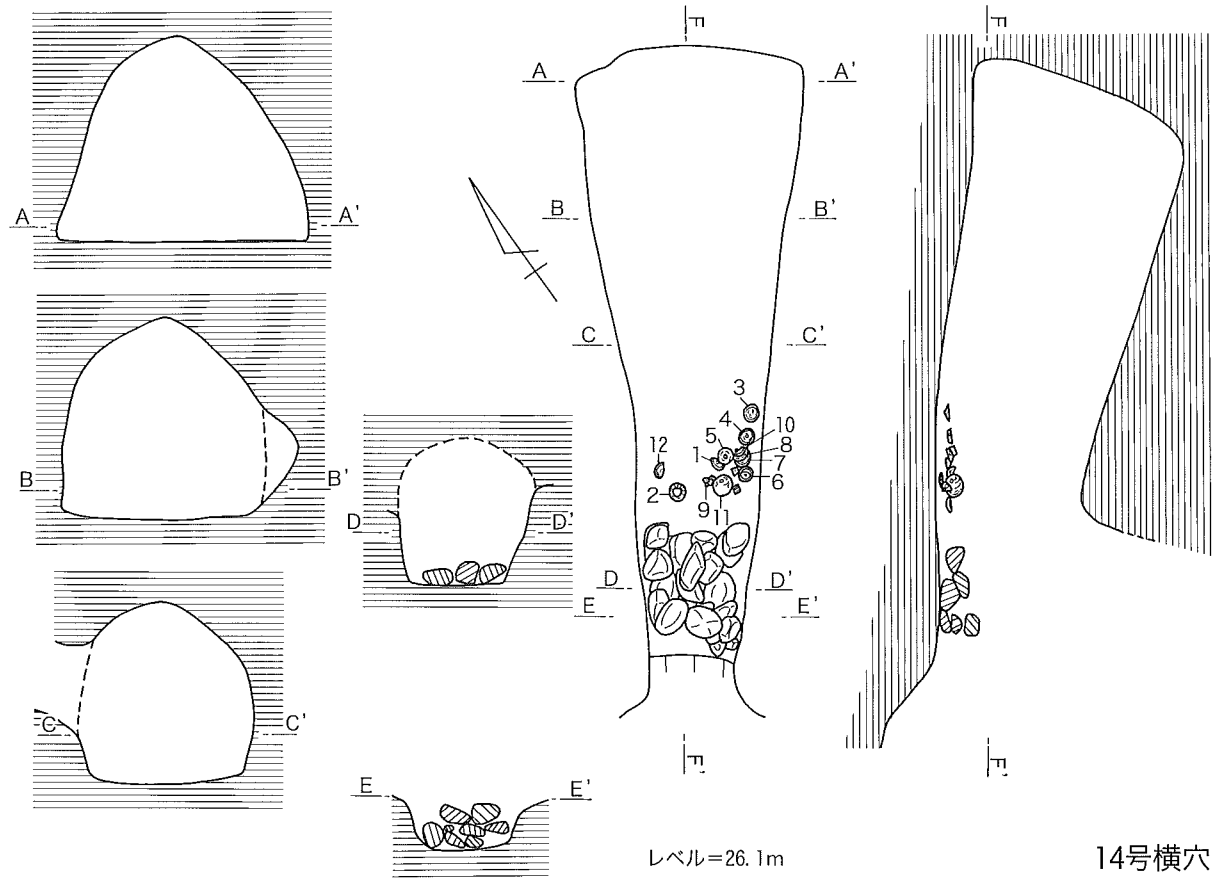
第18図　7号・8号横穴実測図

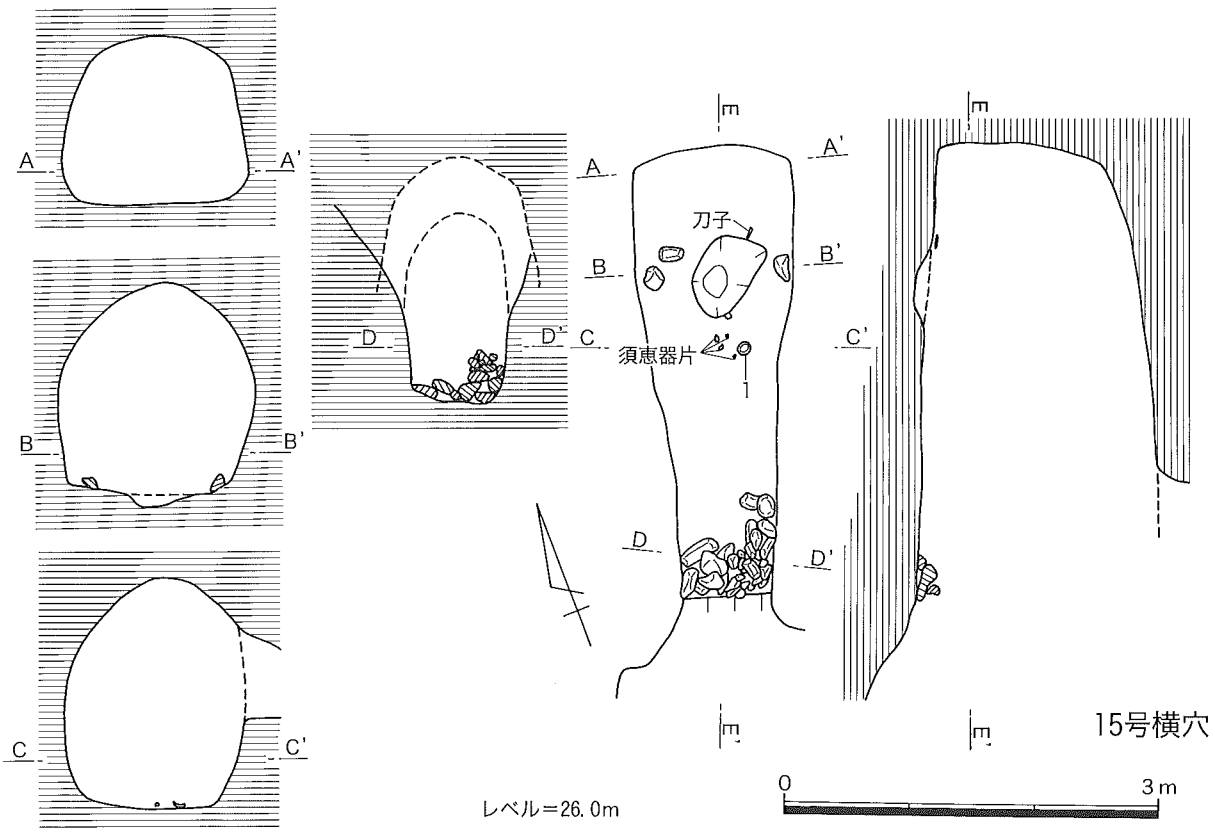


第19図　9号・10号横穴実測図

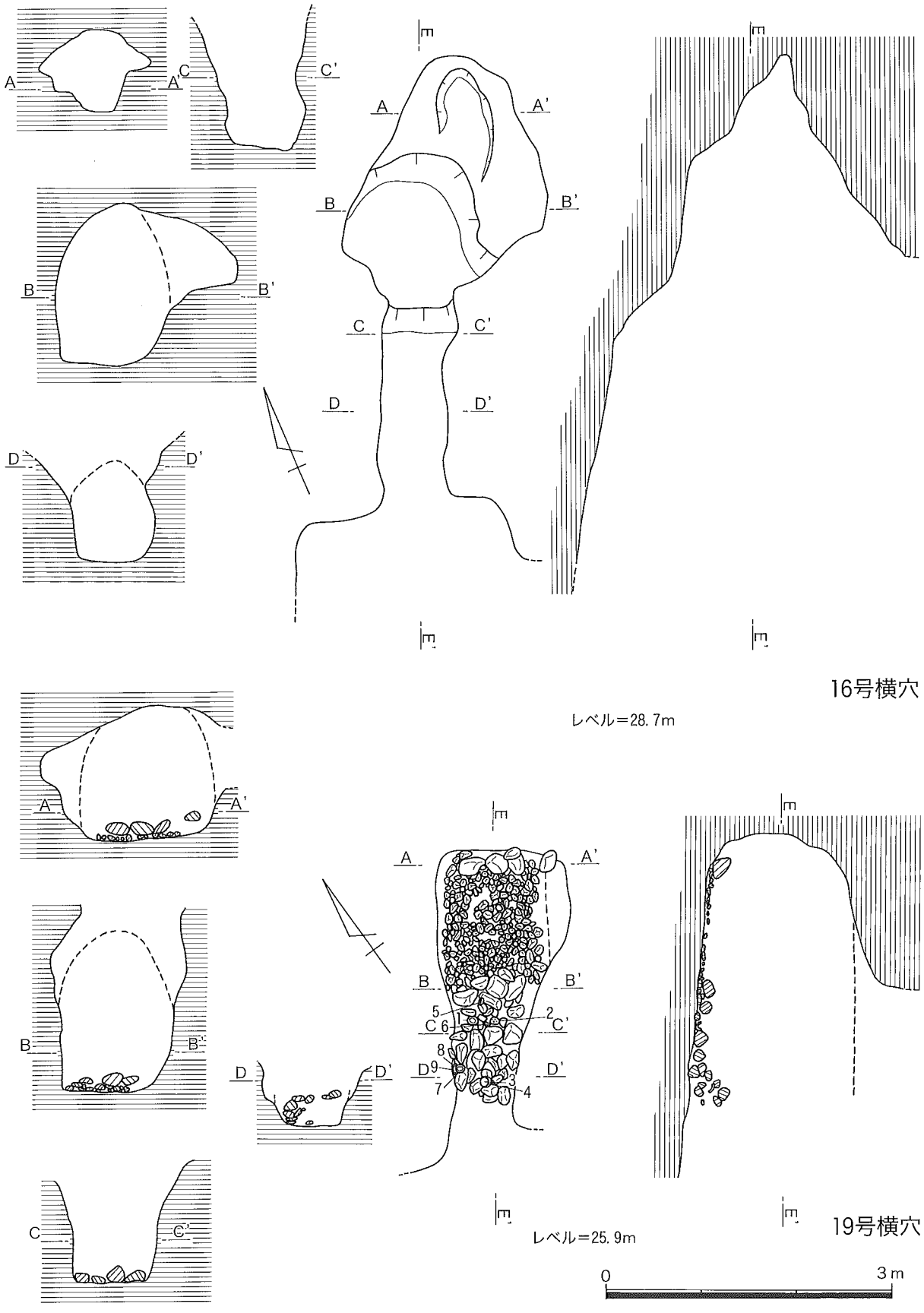


第20図　11号横穴実測図

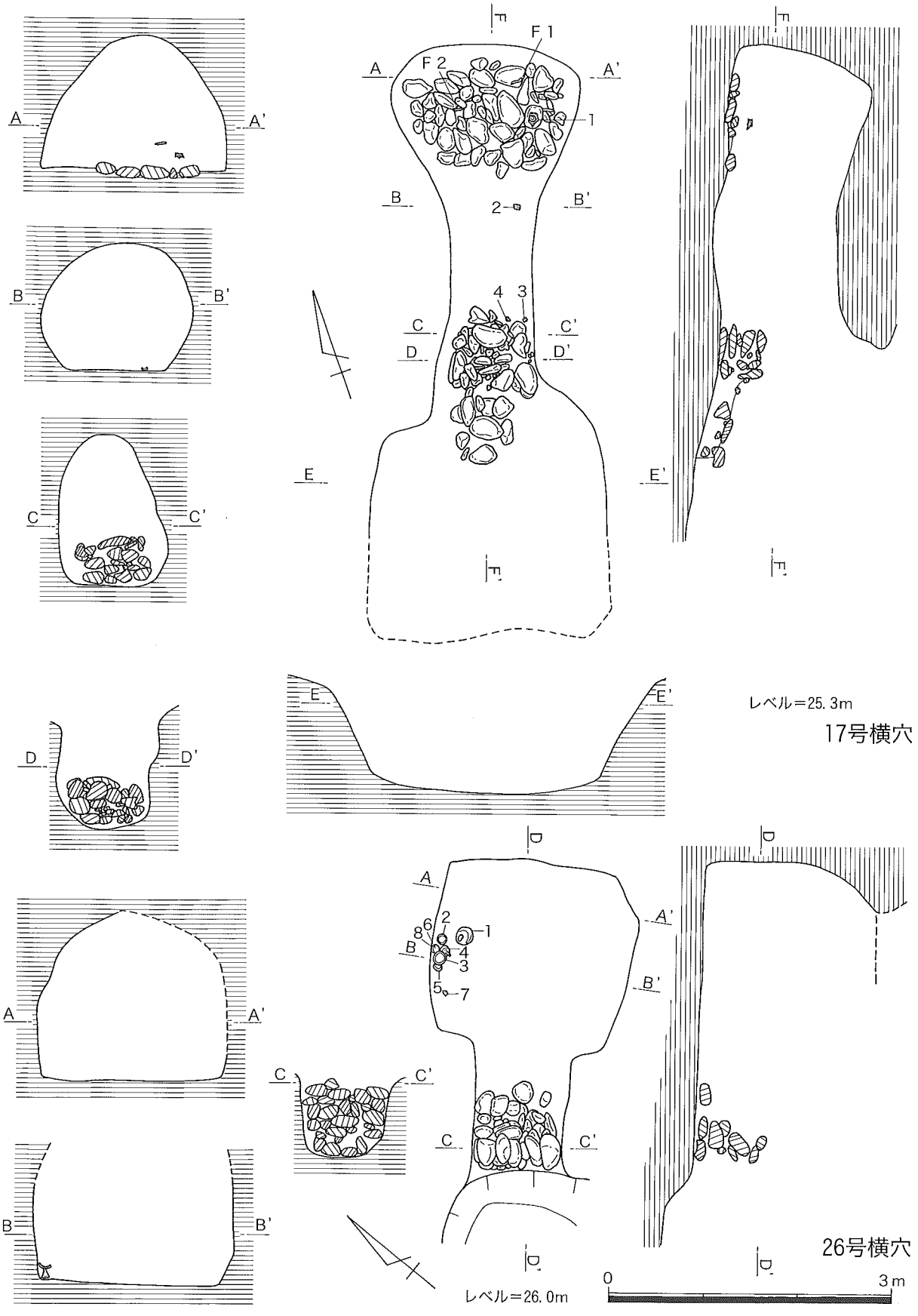




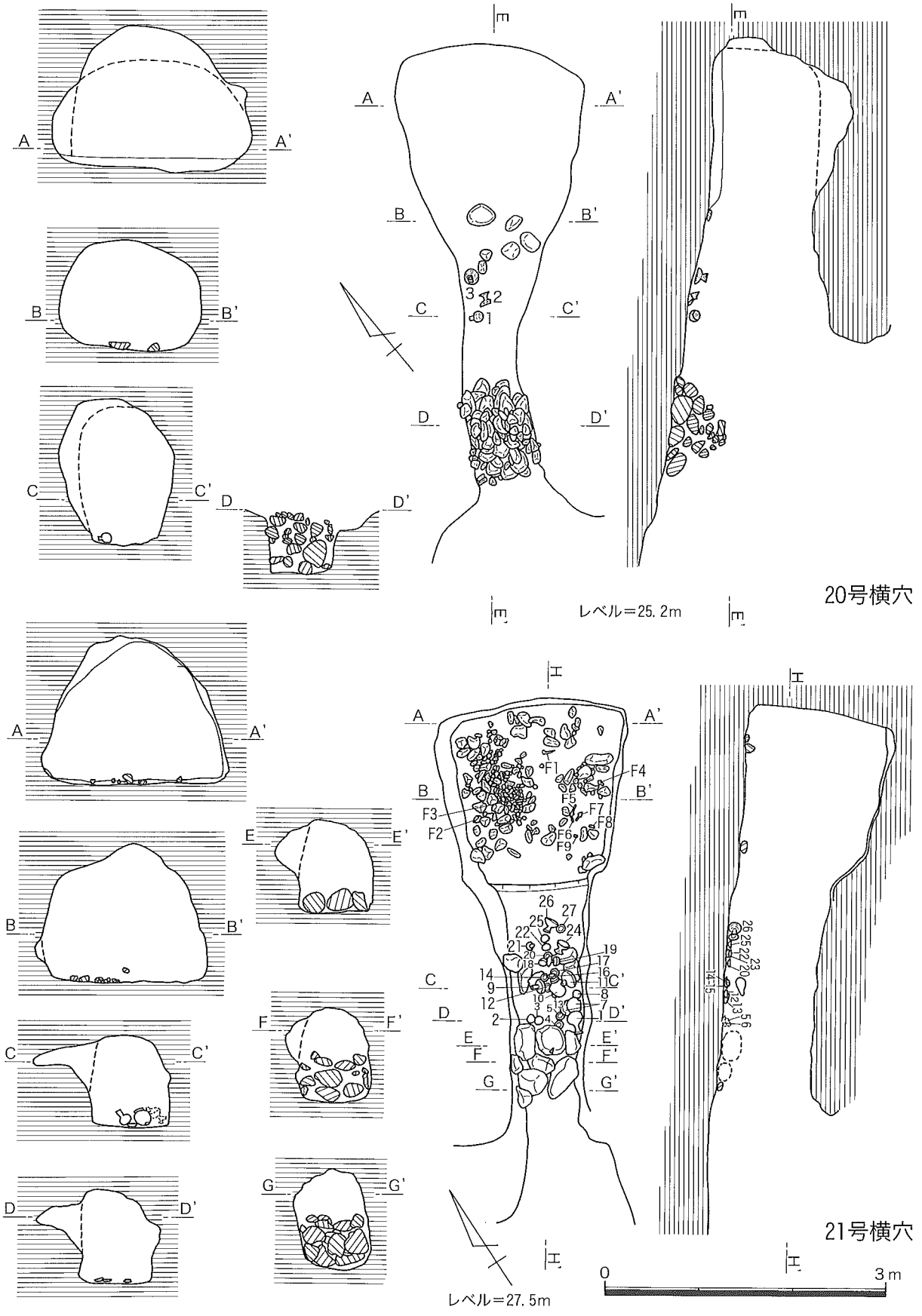
第21図　14号・15号横穴実測図



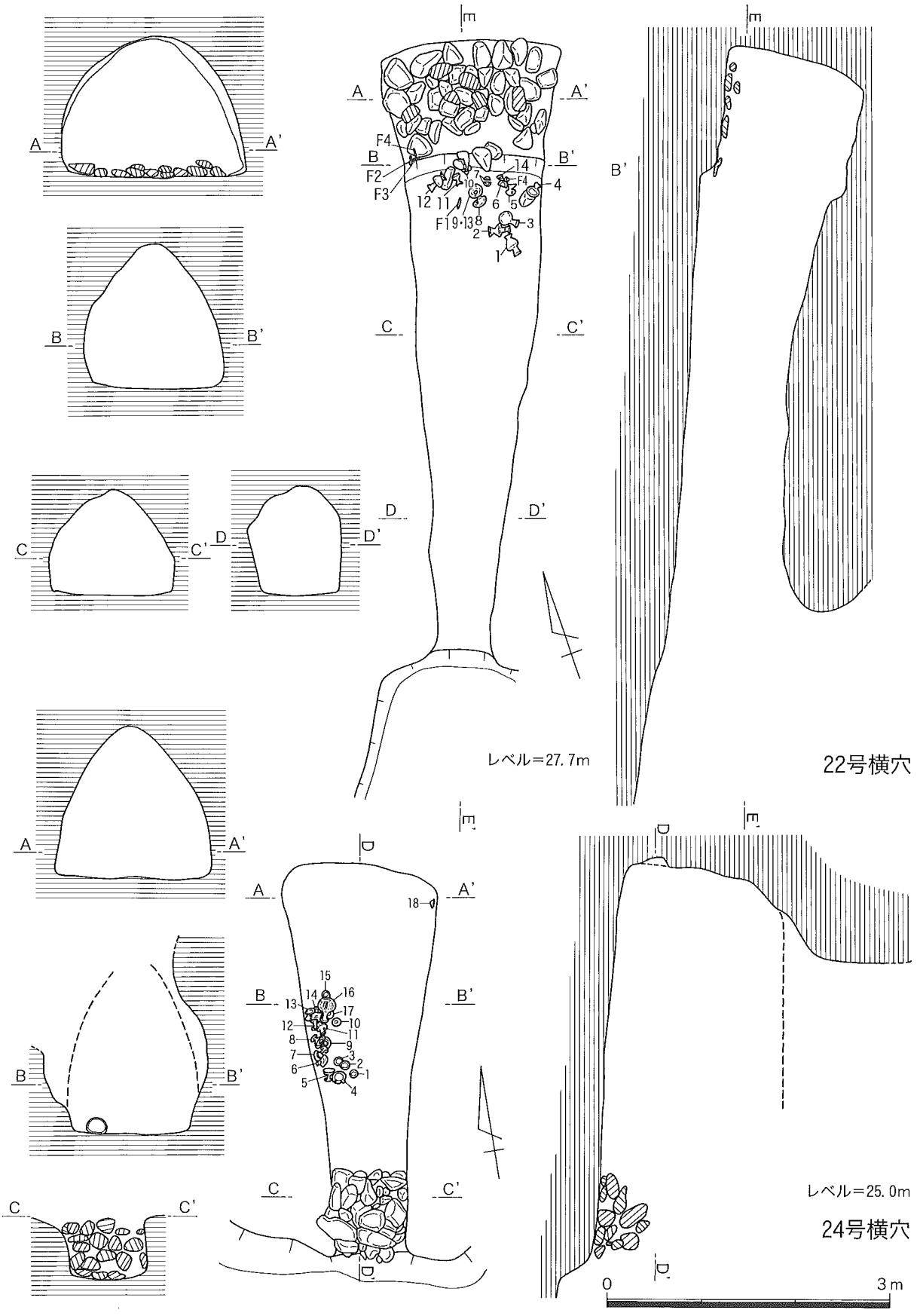
第22図　16号・19号横穴実測図



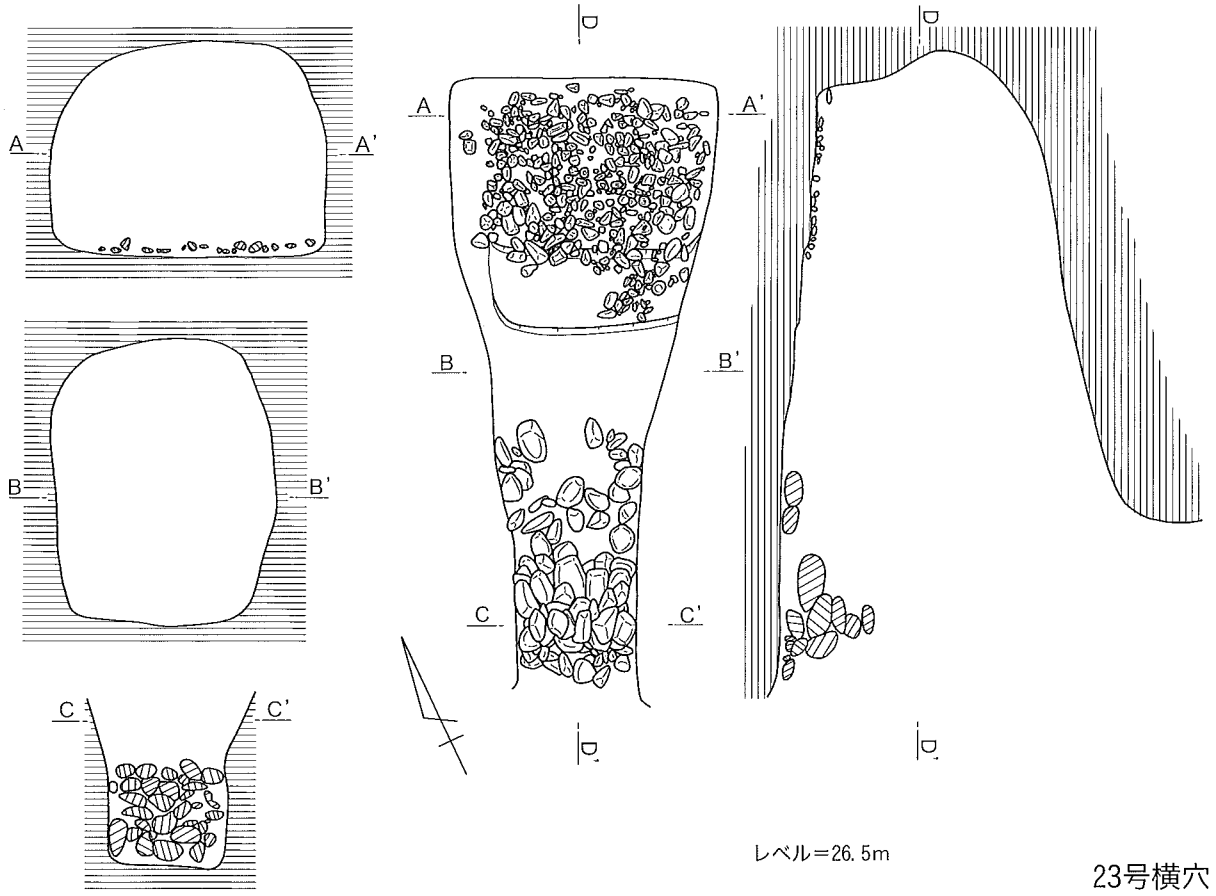
第23図　17号・26号横穴実測図

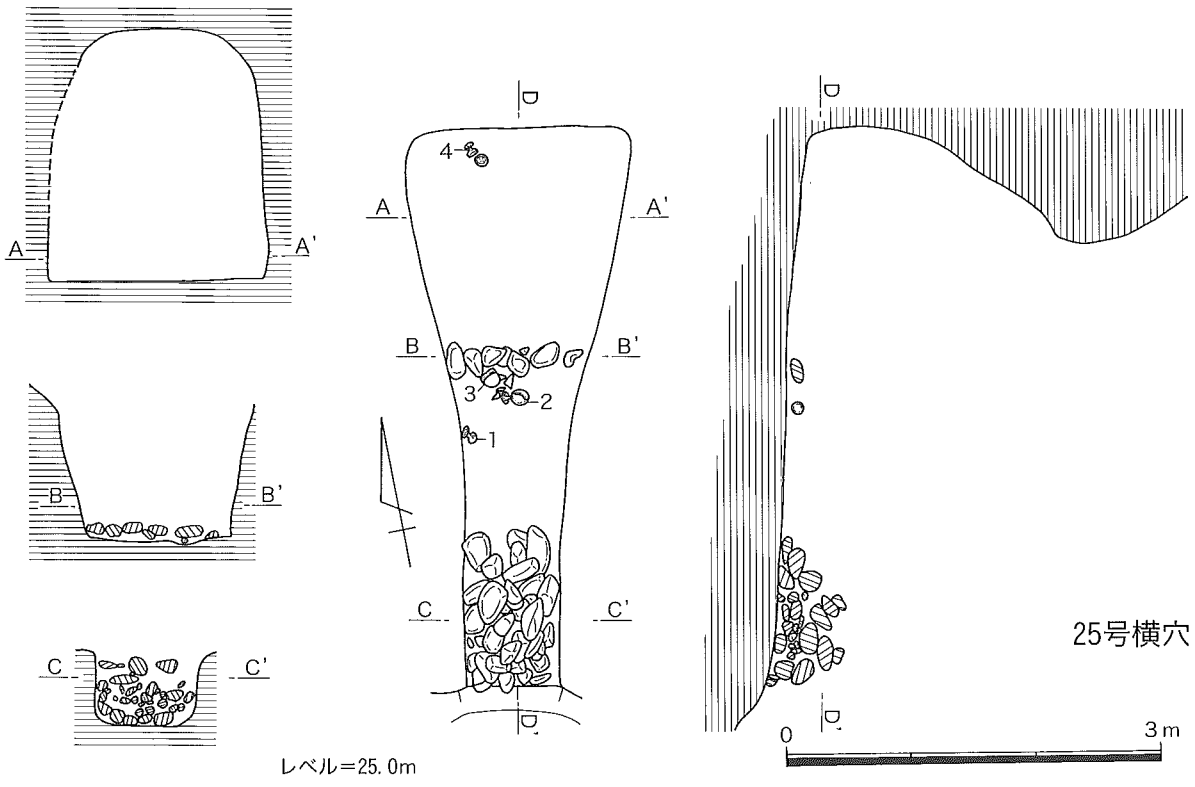


第24図　20号・21号横穴実測図

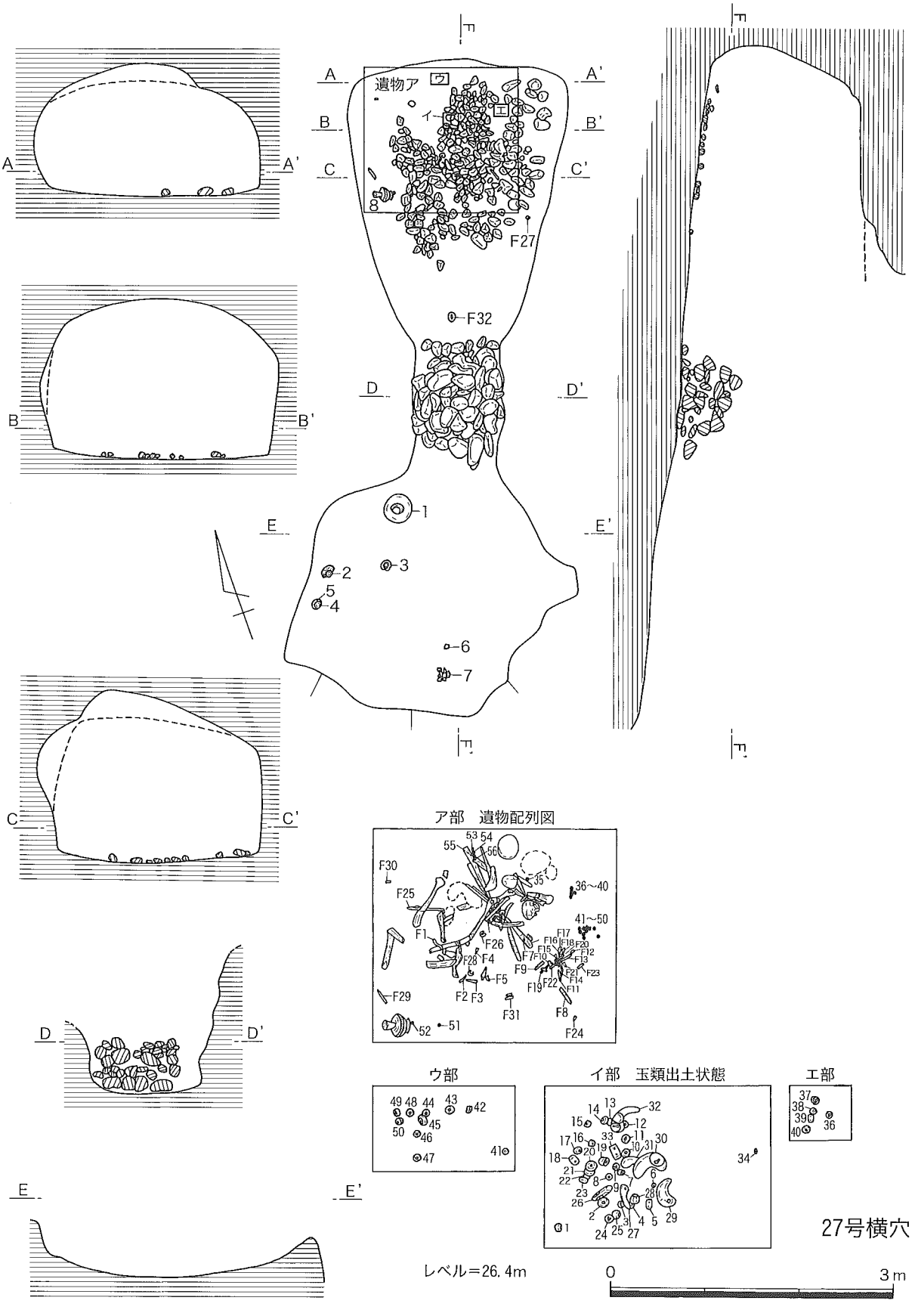


第25図　22号・24号横穴実測図

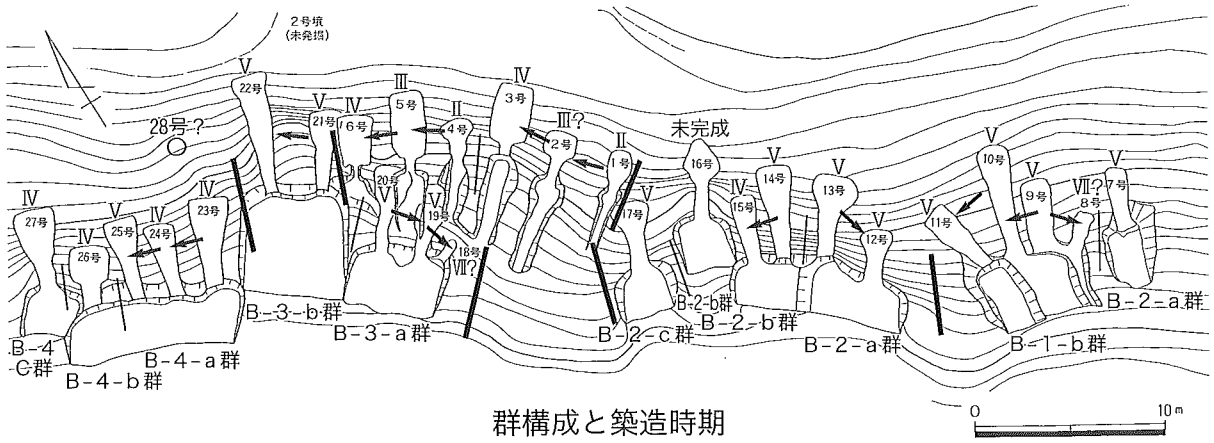




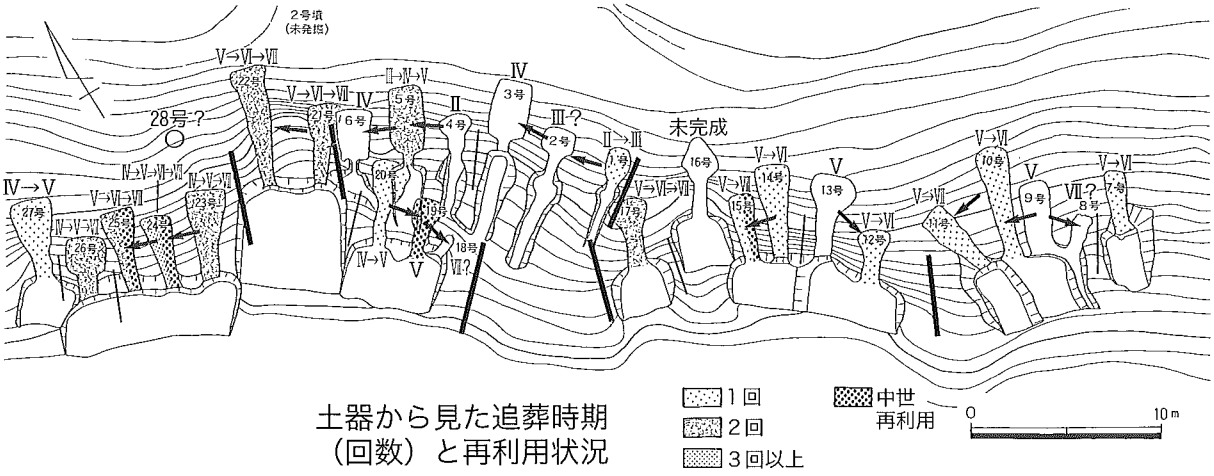
第26図　23号・25号横穴実測図



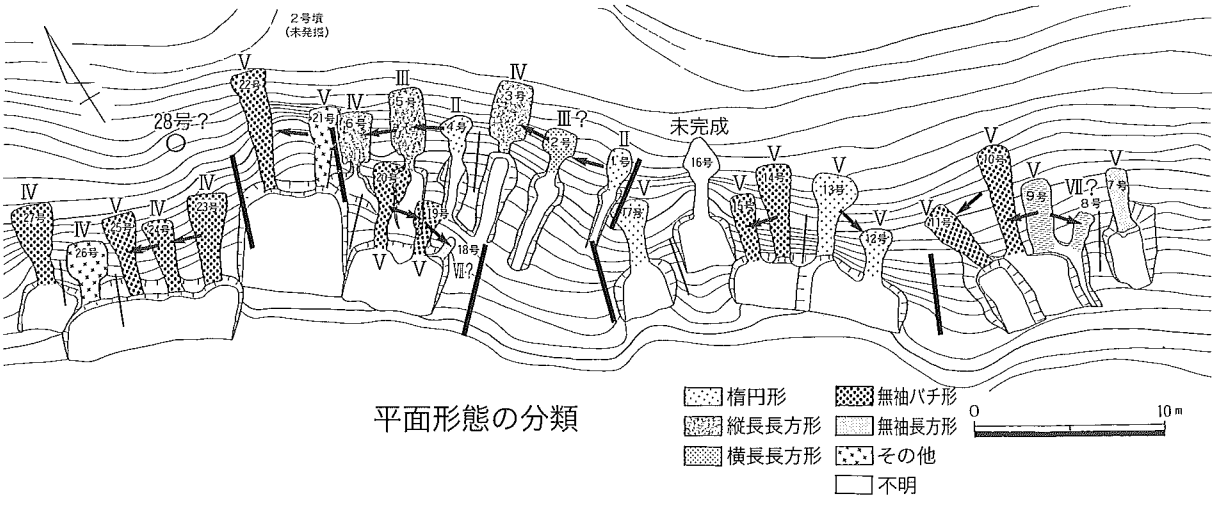
第27図　27号横穴実測図



群構成と築造時期

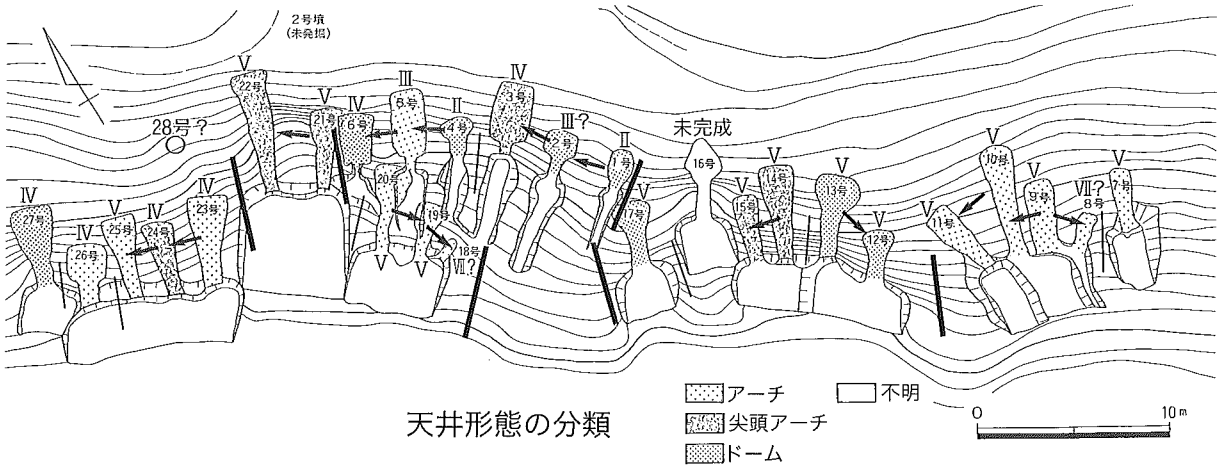


土器から見た追葬時期
（回数）と再利用状況

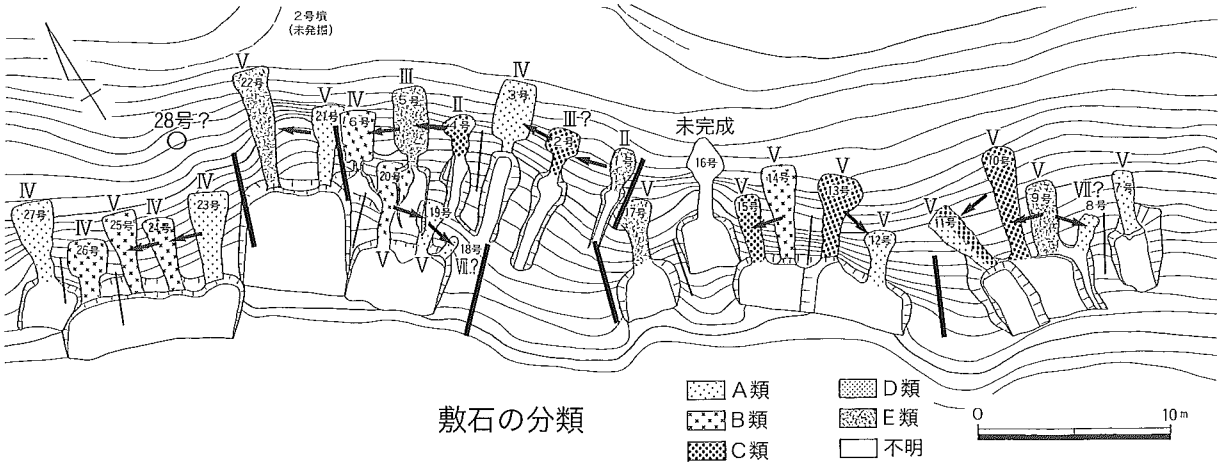


平面形態の分類

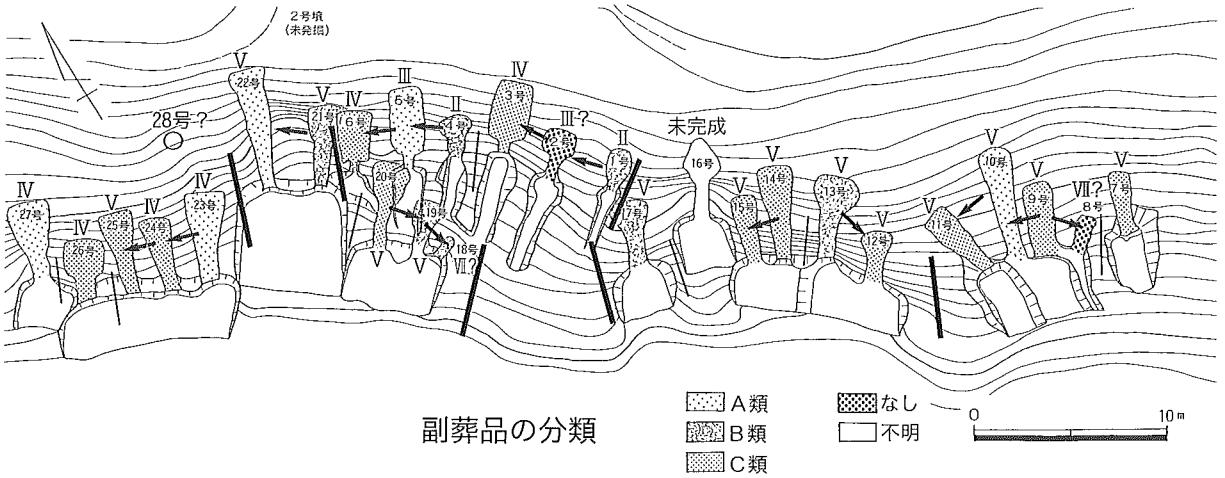
第28図　属性分析図1



天井形態の分類

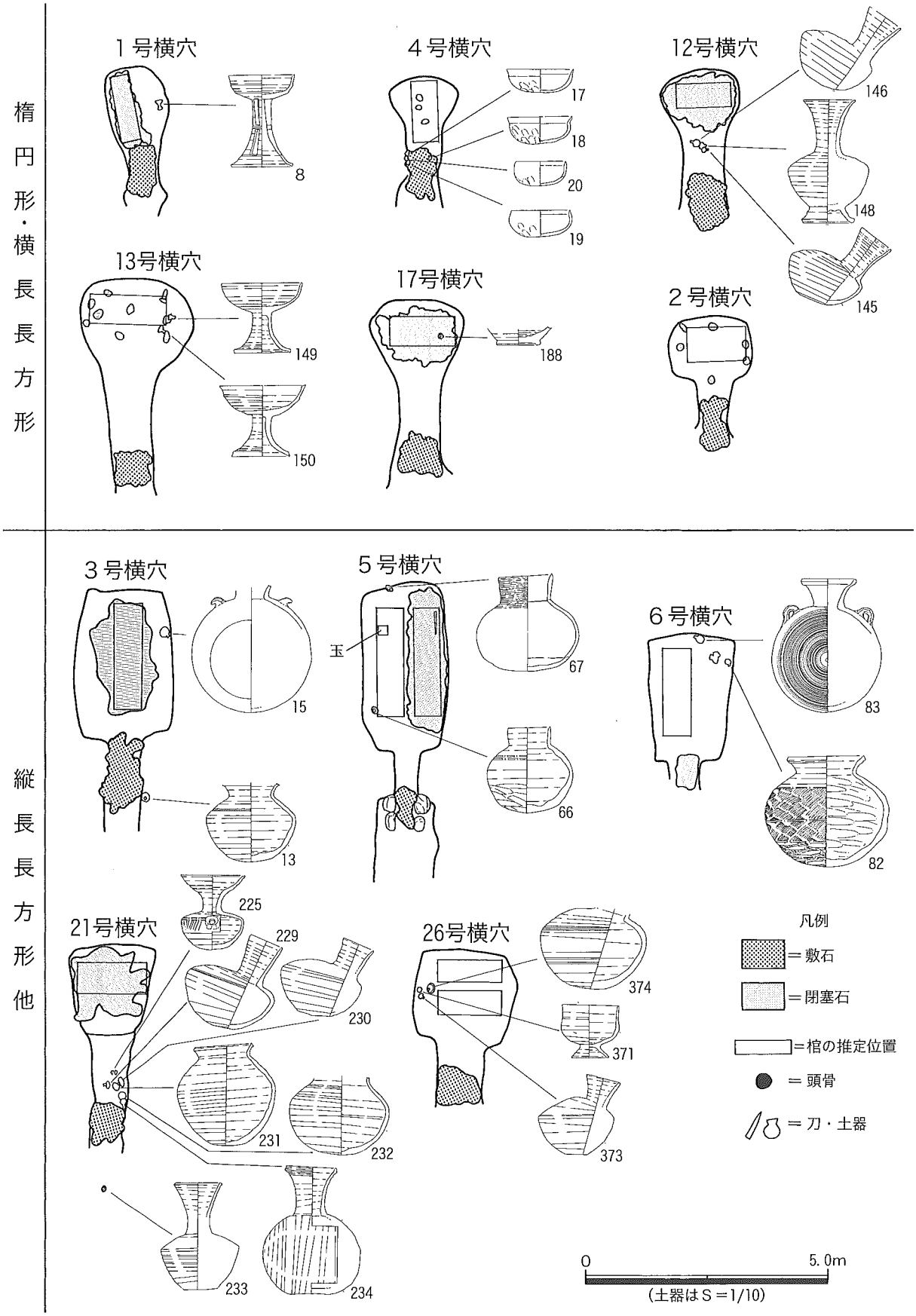


敷石の分類

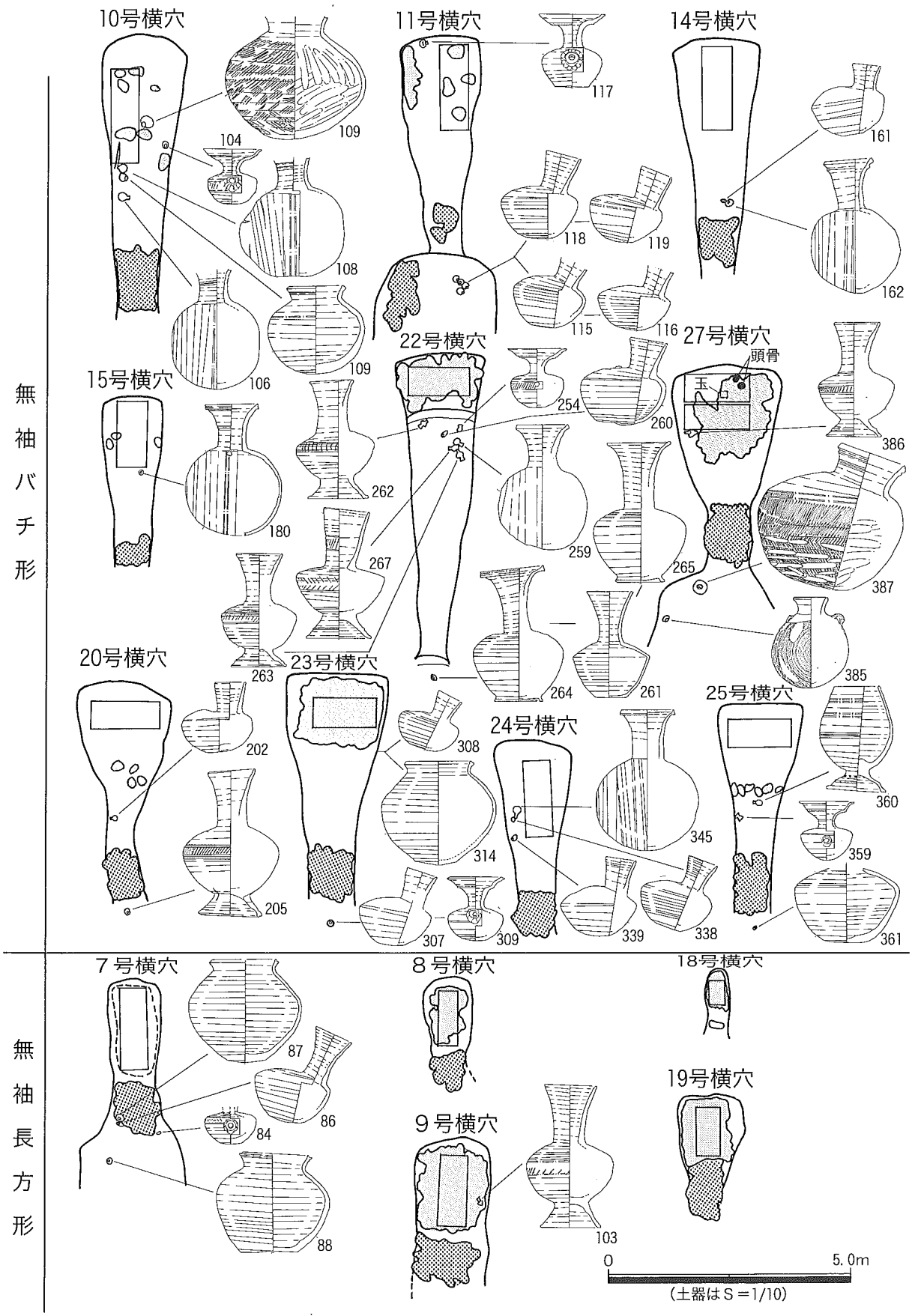


副葬品の分類

第29図　属性分析図２



第30図　横穴内部の敷石・閉塞石・瓶類土器出土位置模式図1



第31図　横穴内部の敷石・閉塞石・瓶類土器出土位置模式図２

坏は坂尻Ⅱ－１期（須恵器Ⅴ期古平行）である。

６号横穴　須恵器は68～72・73～78の坏蓋・身はⅣ期（ＴＫ209）段階、82の広口壺、83の提瓶もⅣ期（ＴＫ209）段階に該当するものと考えられる。

土師器は79・80の坏は坂尻Ⅰ－４期（須恵器Ⅳ期平行）である。

７号横穴　須恵器は84の𤭯、85の高坏、86の平瓶、87の広口壺はⅤ期（ＴＫ217）段階に該当するもので、88の広口壺は平底化しⅥ期（ＴＫ46・48）段階に降る可能性がある。

８号横穴　土器の出土は報告されていない。

９号横穴　須恵器は89～95・97～102の坏蓋・身、96の壺蓋、103の長頸瓶はⅤ期新（ＴＫ217）段階に該当するもである。

10号横穴　106・108のフラスコ瓶、107・109の広口壺はⅤ期（ＴＫ217）段階に該当するものであるが、104の𤭯は頸部が短くⅥ期古（ＴＫ46）段階に降る可能性がある。

土師器の105の坏は坂尻Ⅱ－２段階（須恵器Ⅴ期平行）に該当するものである。

11号横穴　115・116・118・119の平瓶はⅤ期（ＴＫ217）段階に、110・111・113・114の坏蓋・身、112の壺蓋、117の𤭯はⅦ期（ＭＴ21）段階に該当するものである。

12号横穴　須恵器は121～132・133～144の坏蓋・身、145・146の平瓶はⅤ期（ＴＫ217）段階に該当するが、120の坏蓋、147の坏部の浅い高坏、148の脚が短くなった長頸瓶はⅥ期（ＴＫ46･48）段階に降る可能性がある。

13号横穴　須恵器は149・150の高坏はⅤ期新（ＴＫ217）段階に該当するものである。

14号横穴　須恵器は160の坏身、162のフラスコ瓶、161の平瓶はⅤ期新（ＴＫ217）段階に該当するが、151～155・156～159の坏蓋・身はⅥ期新（ＴＫ48）段階に降るものである。

15号横穴　須恵器は163～165の坏蓋、166の壺蓋、180のフラスコ瓶、179の長頸瓶はⅤ期新（ＴＫ217）段階に該当するが、172・173・177の坏蓋・身はⅥ期新（ＴＫ48）段階、167～169・175の坏身、178高坏はⅦ期（ＭＴ21）段階に降るものである。

170は灰釉陶器の碗で、清ヶ谷産Ⅲ期（松井一明　1989）で、10世紀段階に該当する。

176の山茶碗は、東遠江（金谷）産のⅢ－１期（松井一明　1993）で、13世紀前葉に該当する。

12～15号横穴墓前域　須恵器は181・182の坏蓋・身、185の長頸瓶の脚はⅤ期新（ＴＫ217）段階に該当するが、183の坏蓋はⅥ期新（ＴＫ48）段階に降るものである。

土師器の184の鉢については坂尻Ⅱ－１期（須恵器Ⅴ期平行）に該当するものである。

16号横穴　土器の出土は報告されていない。

17号横穴　須恵器は189の高坏はⅤ期新（ＴＫ217）段階に該当するが、186・187の坏身はⅥ期新（ＴＫ48）段階、188の長頸瓶底部はⅦ期（ＭＴ21）段階に降るものである。

18号横穴　土器の出土は報告されていない。

19号横穴　須恵器は190～194・195～198の坏蓋・身はⅤ期新（ＴＫ217）段階に該当するが、201の長脚２段透の高坏はⅢ期（ＴＫ43）段階に該当するもので、時期から見て１号横穴から流れ込んできたものと考えられる。

199・200の山茶碗は、知多半島（常滑）産５期（中野1994）のもので、13世紀前葉に該当する。

20号横穴　須恵器は205の長頸瓶、202の平瓶はⅤ期新（ＴＫ217）段階に該当するが、203・204の浅い坏部の高坏はⅥ期（ＴＫ46・48）段階に降る可能性がある。

18号～20号横穴墓前域　須恵器は270の坏蓋はⅣ期（ＴＫ209）段階のもので、６号横穴からの混入品であろうか。271・272の坏蓋・身、277の大型の甕はⅤ期新（ＴＫ217）段階に該当する。274のコップ

第４章　遺　　物

昭和30～40年代の発掘調査で調査終了後30年近い歳月が経過したなか再整理を進めたためか、図面の一部が確認できない状況や、調査日誌の存在も確認できなかった。遺物に関しても現存する遺物台帳には記載があっても遺物のラベルや注記がないもの、図面に遺物番号がないものなどがあり、現物との照合ができない資料や、元資料が紛失しているのかよく確認できないものが一部存在する。これらの点に関しては、できるだけ本章や考察の記述で補うことにするが、明かにならなかった資料については不明のままとした。土器の時期については、横穴墓については第３章第２節の冒頭で述べた編年を使用した。これらの行方不明の資料については、今後のさらなる整理の過程で確認でき次第追って報告することとしたい。

第１節　土器・陶器

ｉ）須恵器・土師器・山茶碗（第32図～第51図）

古墳と横穴墓より出土している。古墳のうち土器の現物が存在するものは第２次発掘調査の３号墳関係だけで、第１次発掘調査の４・５号墳、井守塚５号墳出土の須恵器の破片資料については確認できず全くの不明資料である。報告書からは５号墳から須恵器の細片、井守塚５号墳の墳丘から土師器の甕の破片が出土しているとあるが、細かな形態や時期については記載がない。４号墳からは389の遠江須恵器編年Ⅱ期（ＴＫ10）の須恵器の坏身が出土したと報告されている。

３号墳　須恵器のみが出土している。390・391は大型甕の破片で、391は口縁を除いて形態が判明した。391は肩の張る形態で、肩部に細かな櫛状工具による波状文、下半部には外面たたき痕、内面無文の円形の当具の痕跡が見られる。392は樽型甕の破片で胴部の張りが少ない新しい形態のものであろう。何れも遠江須恵器編年Ⅰ期（ＴＫ208）段階の須恵器と考えられる。３号横穴出土の11の薄手の壺の底？、４号横穴出土の21の内面なで調整の甕、６号横穴出土の81の壺の細かな櫛状工具による波状文の施された口縁、18～20号横穴墓前域から出土している274のコップ型坏と275の内面なで調整の甕の破片は、何れもⅠ期（ＴＫ208）段階の須恵器と考えられることから、３号墳からの流れ込みとも考えられる。

１号横穴　須恵器は１～３の坏蓋、４～７の坏身、８の高坏の８点が出土した。３の小型の坏蓋は口径が10cmと小さいが口縁の形態から見るとⅡ期（ＴＫ10）段階、１・２・４～６についてはⅢ期（ＴＫ43）に該当するものであろう。

２号横穴　図化できないが、墓道より土師器の甕の完形品１点が出土していると記録されている。

３号横穴　須恵器は９・10の坏蓋・身はⅣ期（ＴＫ209）段階、13の広口壺や15の提瓶もⅣ期に該当するものと考えられる。

土師器は12の台付甕、14の高坏の破片が出土しているが、いずれも５世紀末葉の坂尻０期段階に該当するので頂部の３号墳からの流れ込みの可能性がある。

４号横穴　須恵器の21は５世紀代のもので３号墳からの流れ込みであり、須恵器の副葬はない。

土師器は16の坏、17～20の鉢は坂尻Ⅰ－２期（須恵器Ⅱ期平行）に該当するものである。

５号横穴　須恵器は22・23・33～37の坏蓋・身はⅢ期（ＴＫ43）段階、24・25・38・39の坏蓋・身はⅣ期（ＴＫ209）段階、26～32・42～48の坏蓋・身はⅤ期古（ＴＫ217）段階、65の高坏と66の直口壺もⅣ期（ＴＫ209）段階に該当するものと考えられる。

土師器は49の模倣坏の坏蓋、50～61の坏、67の直口壺は坂尻Ⅰ－４期（須恵器Ⅳ期平行）、62・63の

型坏と275の内面なで調整の甕の破片は、いずれもⅠ期（ＴＫ208）段階の５世紀代のもので、３号墳からの混入品と考えられる。

21号横穴　須恵器は206～213・214～222の坏蓋・身、225の碗、223・224の小型高坏、227の高坏、229・230の平瓶、234のフラスコ瓶、231・232の広口壺についてはＶ期新（ＴＫ217）段階に該当するが、226の浅い坏部の高坏はⅥ期（ＴＫ46・48）段階、233の平底の長頸瓶はⅦ期（ＭＴ21）段階に降るものである。228の長脚２段透の高坏はⅢ期（ＴＫ43）段階に該当するもので、５ないし６号横穴から流れ込んできたものと考えられる。

22号横穴　須恵器は235・244の坏蓋・身、254の碗、255の小型高坏、256の高坏、260の平瓶、259のフラスコ瓶、266の壺蓋、262・263・267の長頸瓶についてはＶ期（ＴＫ217）段階に該当するが、238～242・245～248の坏蓋・身、257・258の浅い坏部の高坏はⅥ期（ＴＫ46・48）段階、236・237・243・250の坏蓋・身、261の平底と264・265の高台化した底部の長頸瓶はⅦ期（ＭＴ21）段階、252は更に８世紀中頃に降るⅢ？である。

土師器は253の鉢が出土しており坂尻Ⅱ－１期（須恵器Ｖ期平行）のものである。

21号・22号横穴墓前域　須恵器は278の坏身はⅢ期（ＴＫ43）段階のもので、28号横穴からの混入品であろうか。268の坏蓋、279の高坏、280の長頸瓶？はＶ期古（ＴＫ217）段階に該当する。

土師器の269の鉢に関しては平底化しているので、坂尻Ⅱ－１～２期（須恵器Ｖ期～Ⅵ期平行）に該当するものと推定される。

23号横穴　須恵器は281～286・288～294の坏蓋・身、309の碗、305・306の小型高坏、307・308の平瓶、313の高盤、314の広口壺についてはＶ期新（ＴＫ217）段階に該当するが、287・302・303の坏蓋・身はⅦ期（ＭＴ21）段階に降るものである。310の内面なで調整の甕は７世紀代のものと考えられる。

土師器の296～301の坏は坂尻Ⅰ－４期（須恵器Ⅳ期平行）に該当し、須恵器よりも先行するものである。312の平底化した把手坏鉢は、坂尻Ⅱ－１～２期（須恵器Ｖ期平行）に該当するものであろうか。311の把手は盌の把手と考えられるが、時期は不明である。

24号横穴　須恵器は315～322・323～330の坏蓋・身、338・339の平瓶、345のフラスコ瓶はＶ期新（ＴＫ217）段階に該当するが、331の坏身はⅥ期古（ＴＫ46）段階、332～334の坏身はⅦ期（ＭＴ21）段階に降るものである。

土師器の340～343の長脚高坏は坂尻Ⅰ－４期（須恵器Ⅳ期平行）のもので、須恵器よりも先行するものである。344の薄手の甕の破片については時期不明である。

335～337の山茶碗は、知多半島（常滑）産４・５期（中野1994）のもので、12世紀後葉～13世紀前葉に該当する。

25号横穴　須恵器は358の小型高坏、362の２段透の高坏、359の碗、360の脚付盌はＶ期新（ＴＫ217）段階に該当するが、346の坏身はⅥ期古（ＴＫ46）段階、361の広口壺はⅦ期（ＭＴ21）段階に降るものである。355～357の内面なで調整の甕は７世紀代のものと考えられる。

土師器の347・352の坏は坂尻Ⅱ－１期（須恵器Ｖ期平行）のものである。

353・354の山茶碗と348～351の小皿は、知多半島（常滑）産５期（中野1994）のもので、13世紀前葉に該当する。

26号横穴　須恵器は368の高坏の蓋、369・370の盌、371の脚付盌はⅣ期（ＴＫ209）段階に該当するが、372の高坏、373・374の平瓶ついてはＶ期（ＴＫ217）段階、375の大甕についてはⅦ期（ＭＴ21）段階に降るものである。

土師器の363～367の坏は坂尻Ⅱ－１期（須恵器Ｖ期古平行）に該当するものである。

23号～26号横穴墓前域　須恵器は384のフラスコ瓶はⅤ期（ＴＫ217）段階に該当する。
27号横穴　須恵器は377～379・380の坏蓋・身、382・383の盌、385の提瓶はⅣ期（ＴＫ209）段階、376の壺蓋、387の大型甕、386の長頸瓶はⅤ期（ＴＫ217）段階に該当する。
不明横穴　須恵器は399の盌はⅤ期古（ＴＫ217）段階、398の坏蓋はⅤ期新（ＴＫ217）段階に該当する。

ⅱ）弥生土器（第51図）

１号方形周溝墓周溝内から、土器棺が１点出土している。396・397の土器棺は、396が蓋で397が身となる。何れも肩の張る下膨れ形態で、胴部上半に刷毛目調整をよく残し、胴部下半はみがき調整が施されており、後期後半の菊川式の特徴を良く示す。肩部が欠損するため文様は不明であるが、残存部分から見ると文様帯はさほど広いものではないと考えられる。形態から見ると菊川式の後半中葉段階に該当するものと考えられる。

第２節　鉄製品・装身具

鉄製品は５世紀後葉～６世紀中葉の木棺直葬の古墳群と、６世紀中葉～７世紀に築造された横穴群から出土している。本報告書では一括して報告し検討することとしたい。

ⅰ）馬具（第12図・第54図）

井守塚５号墳から鉄製楕円鏡板付轡と金銅装の辻金具が出土している。この馬具については、現地の保存状況が悪く取り上げの際に細片化したと報告されてる。この轡と辻金具ともに現物が確認できないため確定的なことはいえないが、現地の遺物実測図や写真、報告書からの要点を参考にして記述をすることとしたい。

轡は、下縁に抉りが入る隅丸長方形に近い楕円形の鉄製鏡板が付けられ、立ち聞きに付けられる金具についてはおそらく長方形板が付けられていたと考えられる。銜と引手の接合は円環で繋がれ、引手端には別造りの引手壺が取り付けられている。この型式の鉄製楕円鏡板付轡は、袋井市内ではＴＫ208段階の石ノ形古墳（袋井市教育委員会1999）やＴＫ23・47段階の愛野向山Ｂ12号墳（松井1994）出土のものに近い形態であるため、本資料もＴＫ208～47段階に該当する可能性が指摘できるが、詳細な時期については現物が確認できないので、予想の範囲を出ない。

辻金具は３個出土しており、いずれも金銅装で径1.5㎝の中空の半球に４脚を付けるタイプの辻金具である。この型式の辻金具はＭＴ15段階の雲座Ｄ１号墳から鉄製のものが３個出土している（袋井市教育委員会1972）。この例だと該当時期は６世紀中葉となり、先に述べた轡の年代とは明らかに合わない。半球タイプの辻金具が５世紀後葉まで遡らせることができるのであろうか。

以上の井守塚５号墳出土の馬具に関しては、轡の型式と辻金具の型式が今一つ合わないことから、辻金具の型式を考慮にいれて、５世紀末葉～６世紀前葉の時期幅のなかで考えておくのが無難なところであろう。

横穴墓からは確実な馬具の出土例を提示できなかったが、233～237・239・240に馬具の鉄製金具らしいものを抽出できた。233・234は帯を留める鋲、235～237は辻金具の責金具、239は銜か引手の断片であると考えられるため、馬具の副葬されていた横穴墓が存在するとも考えられる。冠帽や直刀の副葬されていた10号墳あたりが候補になるが、今回の資料整理からでは残念ながら明らかにできなかった。これについては、今後の再整理に向けた参考資料としておきたい。

ⅱ）直刀・鉄剣（第54図～第57図）

古墳・横穴群ともに出土しているが３号墳の剣３本以外、ラベルが取り外されておりどの古墳・横

穴から出土しているかまったく照合できていないため、他の横穴群や古墳群の資料が混じっているか、地蔵ヶ谷横穴群のなかでの同じものを重複して報告している可能性は高いと思われる。しかしながら、とりあえず地蔵ヶ谷古墳群出土と伝えられ現物の残っているものをすべて図化するとともに、第１次発掘調査で報告された際に作図されたものを再トレースしすべてを掲載することとし、今後の再整理に向けた基礎資料としておきたい。

直刀は関の造りで２つに分類できた。すなわちＡ類＝片関造りの291・292・352と、Ｂ類＝両関造りの152・289・353・355のほか、不明なもの354がある。このうち全長40cmに満たない小形の直刀としては152・289がある。

刀装具のあるものは鍔が伴う117・118・150・286・355と、柄の責金具の伴う152・289・354・355、鞘金具が伴う121などがある。355は鍔と責金具が伴う例である。118の鍔は、幅が狭いもので、鉄製の飾大刀の一部になるものであろう。鍔はいずれも卵倒形で、透かしのある117・286と透かしのない150・356に分けられる。とくに、117については縁部を厚くした装飾の見られる丁寧な造りのものである。

古墳と横穴から出土した直刀の形態差はほとんど見られないが、刀身の幅が横穴のものは３cm前後を計り細身のものが多いのに対して、古墳出土のものは幅４cm前後を計り太身となる印象をうける。また、横穴では鍔や柄の責金具など多様な刀装具が見られるが、古墳出土のものは金属製の刀装具が見られない。

鉄剣は３号墳から３本出土しているが、全体の形態の分かるものは281のみである。282については先端（243か？）を欠損するためなんともいえないが、柄部分が長いため鎗の可能性も指摘しうるが、出土状態からは剣と認定される。いずれも木製の鞘に納められていた木質の痕跡が確認できる。281・283については鞘と柄の境に有機質の装飾痕跡が見られる。

iii）鉄鏃（第52図～第57図）

平根式のものと尖根式のものの２種類に大別される。

平根式のものは、篦被部が四角に収まる88・89・125・304と、無篦被となる87・216や、無茎になる306がある。関部の造りは逆刺となる88・125・305、逆刺とはならない86・87・216・304がある。304～306は４号墳出土のもので６世紀中葉となるもの以外、いずれも横穴出土のもので、125が６世紀後葉、86～89は７世紀前半に属するものと思われる。

尖根式のものは、篦被部が台形となる242・249～279・299～303・343～348と、刺篦被となる５・８～14・90～92・95～110・126～149がある。関部や刃部の形態は、逆刺になる90・95～100・242・261・262、逆刺とはならない299～303、逆刺のない８・９・101～104・136・217～219・249～260・343～348、片刃になる126～134・137がある。頸部は長いもので10cmになるものもあるが、８～６cm程度のものが多い。また、95～116は非常に細身の形態をなした一群で、はたして実用品であるかどうか検討を要するであろう。

古墳出土の尖根式鉄鏃は篦被部が台形となるもので、３号墳については供伴須恵器から５世紀後葉（ＴＫ208）段階で今回報告の中では最古のもの、次いで井守塚５号墳の５世紀末葉～６世紀前葉、４号墳出土の６世紀中葉となる。頸部長さが３号墳出土のものが一番長く10cm以上はあるが、井守塚５号墳と４号墳出土のものは７cm前後の短く変化するようである。鉄鏃の変化から見ると、井守塚５号墳は６世紀前葉に築造された古墳とも見られる。

横穴出土の尖根式鉄鏃の形態は、篦被部がすべて刺篦被をもつものである。先端の形状では126～134の片刃や136の逆刺のないものなどは６世紀中葉以前の古墳からの出土はない形態である。27号横穴出

土の鉄鏃が６世紀末葉になる可能性のものを含むが、それ以外はほぼ７世紀初頭～前葉の時期に該当すると思われる。

ⅳ）刀子（第52図～第57図）

刀子も関のつきかたで、Ａ類＝両関造りになる２・82・84・153・154・246・296・297と、Ｂ類＝片関造りの４・15・16・83・94・245・247・248・298・349～351にわけられた。柄金具として鉄製の責金具が、153・296で確認された。297・298・351の柄には鹿角が使用されていたが、その外については木装であると思われる。４については著しい小型品で実用品か疑わしい。

ⅴ）鉄釘（第54図）

238は鍛造の鉄釘で、出土横穴が不明であるため時期についてはなんともいえない。しかし、中世の山茶碗が出土している横穴墓は中世墓として再利用されている可能性が高いため、おそらく中世の山茶碗が出土した横穴墓のいずれかから出土したものと推測される。

ⅵ）耳環・玉類・冠帽（第52図～第54図・第57図）

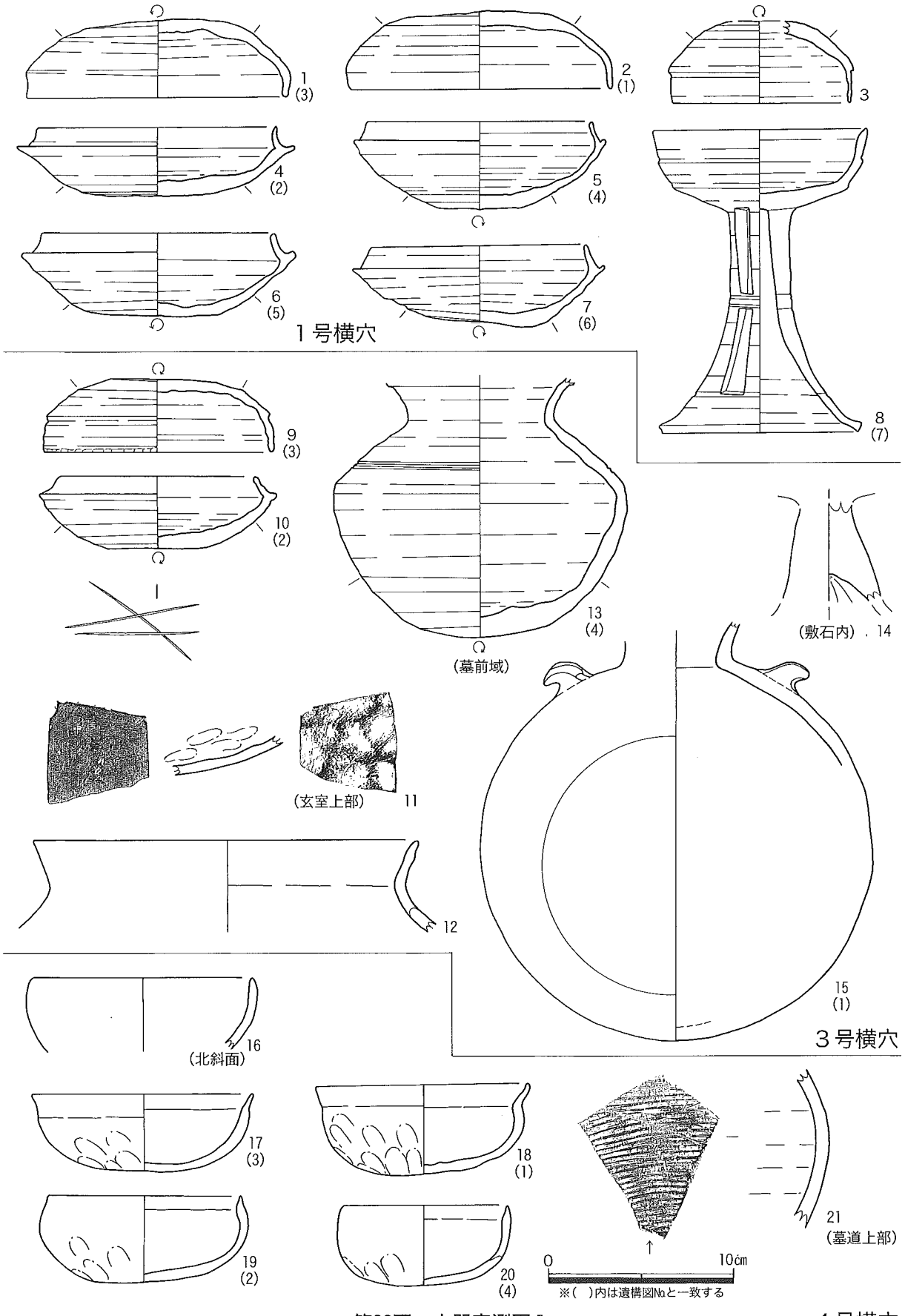
耳環は５号横穴から銀装の耳環２点、13号横穴から銀装の耳環１点、27号横穴から銀装の耳環３点が出土している。大きさは、６・７が直径2.0～1.8cm、122～124が直径1.8cmに対して、81は直径１cmと小型品である。81は８世紀初頭まで降る可能性があるが、他のものは６世紀後葉～７世紀前半の時期になると思われる。

玉類としては、古墳からは、４号墳第１主体部で301～309の緑色凝灰岩製で片側穿孔の菅玉９点と316～322のガラス小玉で緑色２点、紺色５点の合計７点、井守塚５号墳第１主体部上層で323の碧玉製の片側穿孔の勾玉１点と324～341のガラス小玉で紺色のものが18点が出土してる。

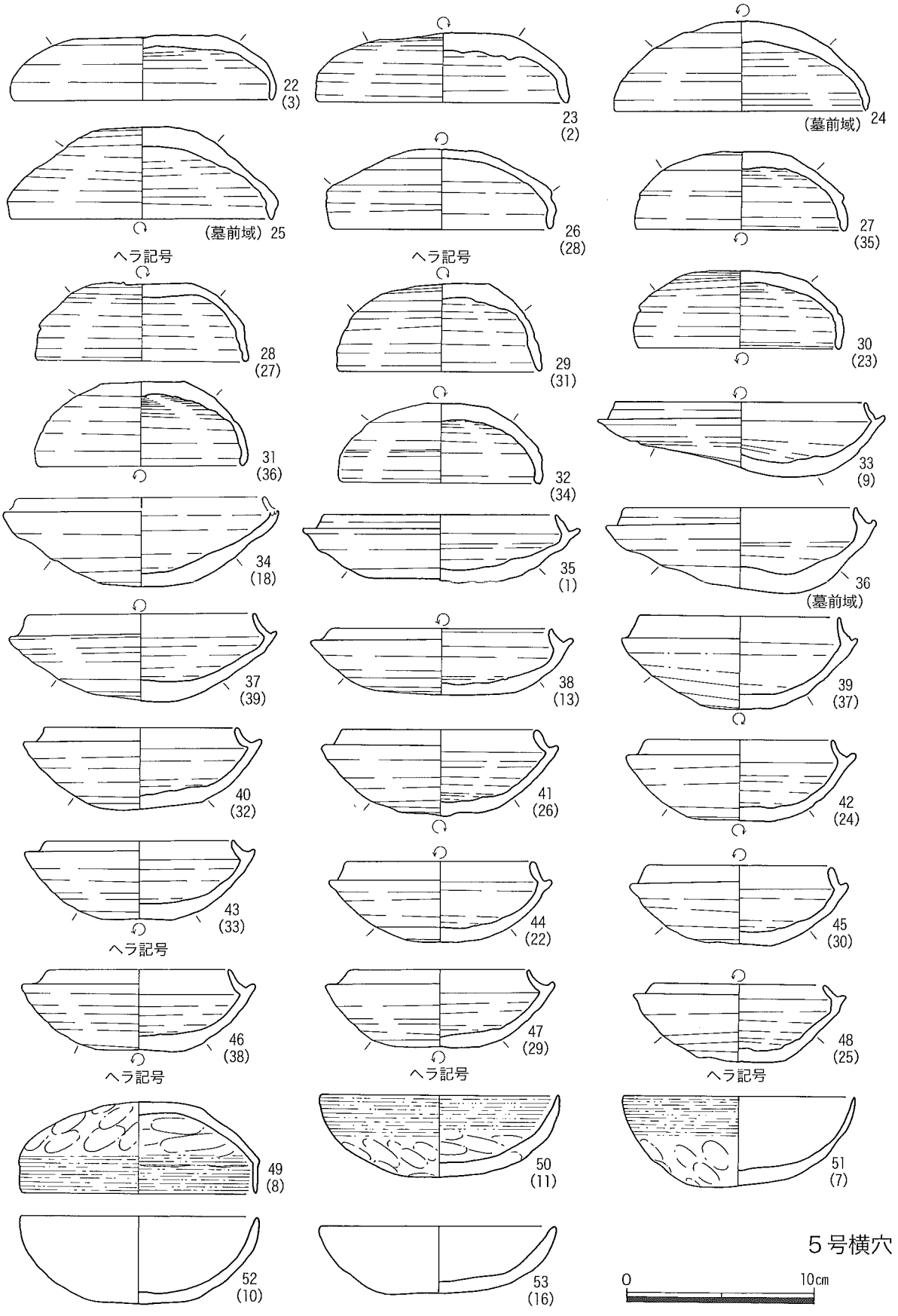
横穴墓からは５号横穴で17～23・25の瑪瑙製、24の水晶製の勾玉９点、碧玉製の管玉２点、琥珀製の棗玉２点、30の水晶製の切子玉１点、31～69のガラス丸玉で紺色のもの39点、27号横穴で155・158・160の碧玉製、156・157の瑪瑙製、159の蛇紋岩製？の勾玉６点、211～215の碧玉製の菅玉５点、161の琥珀製の棗玉１点、162・163の水晶製の切子玉２点、164・210の軟玉？の丸玉47点が出土している。

勾玉は基本的には片側穿孔であるが、25・155・156・160の勾玉ではまず浅く大きく穿孔し、つぎに小さな穴を穿つ特徴的な穿孔方法でつくられている。菅玉は26・27・211については片側穿孔であるが、212～215は両面穿孔となっている。５号横穴の玉類については、第17図に示した出土状況から、首飾りの状態が復元でき、巻頭カラー図版２（３）に示すことができた。玉の配置が分かる例としては貴重な資料である。玉の組み合わせから見ると、いずれも丸玉と勾玉を基本とするが、なかに大型の琥珀製の棗玉と水晶製切子玉を１～２個を配置してアクセントをもたせている点は目立つ感じを与えている。

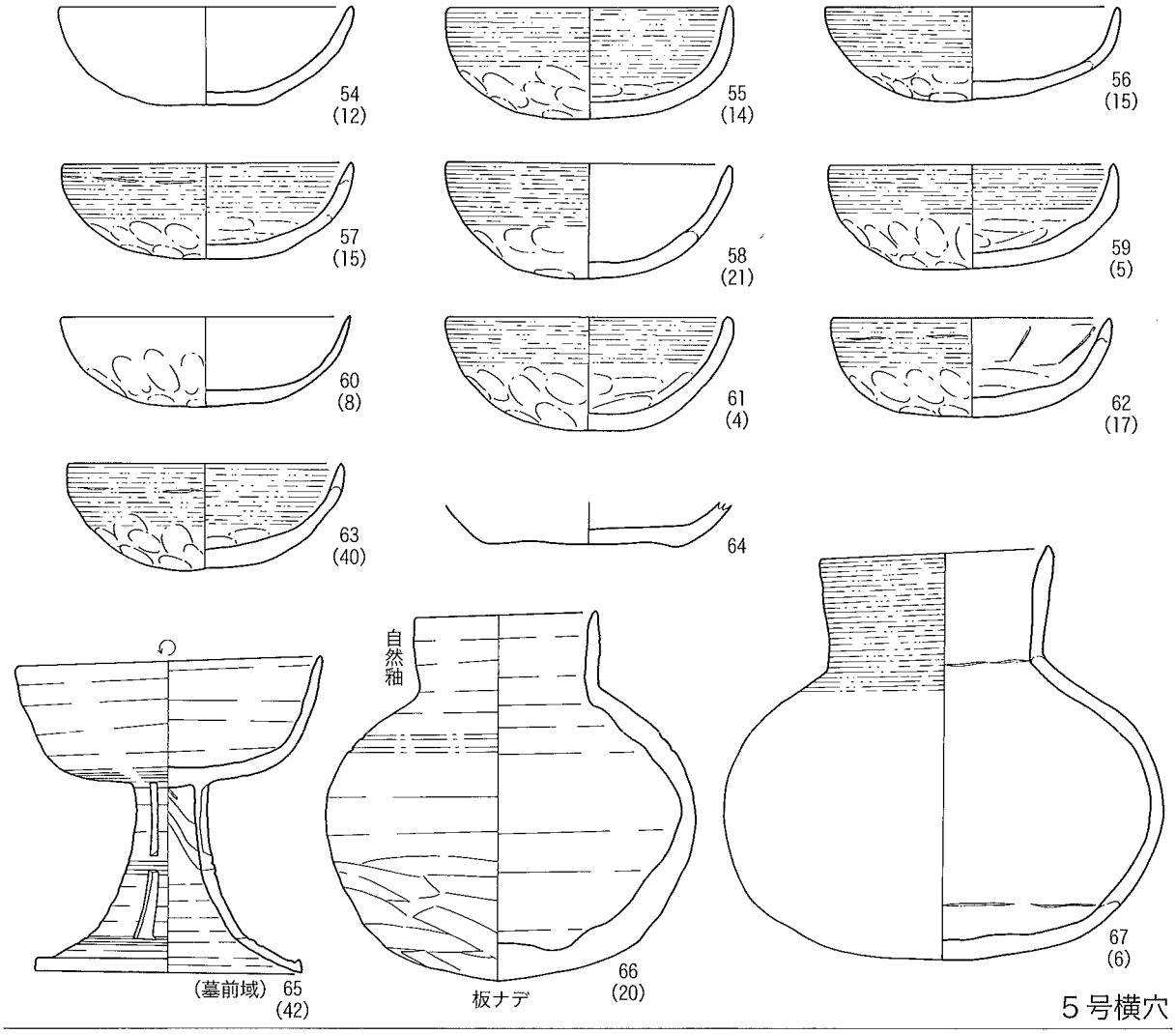
10号横穴出土の毛彫の確認できた金銅装の冠帽については、別に出土状況から見た復元案を検討し考察をしたので詳細は第５章にて検討したい。


1
(3)
2
(1)
3
4
(2)
5
(4)
6
(5)
7
(6)
1号横穴
8
(7)
9
(3)
10
(2)
13
(4)
(墓前域)
(敷石内)、14
(玄室上部)
11
12
15
(1)
3号横穴
16
(北斜面)
17
(3)
18
(1)
19
(2)
20
(4)
21
(墓道上部)
0
10cm
※( )内は遺構図Noと一致する
4号横穴

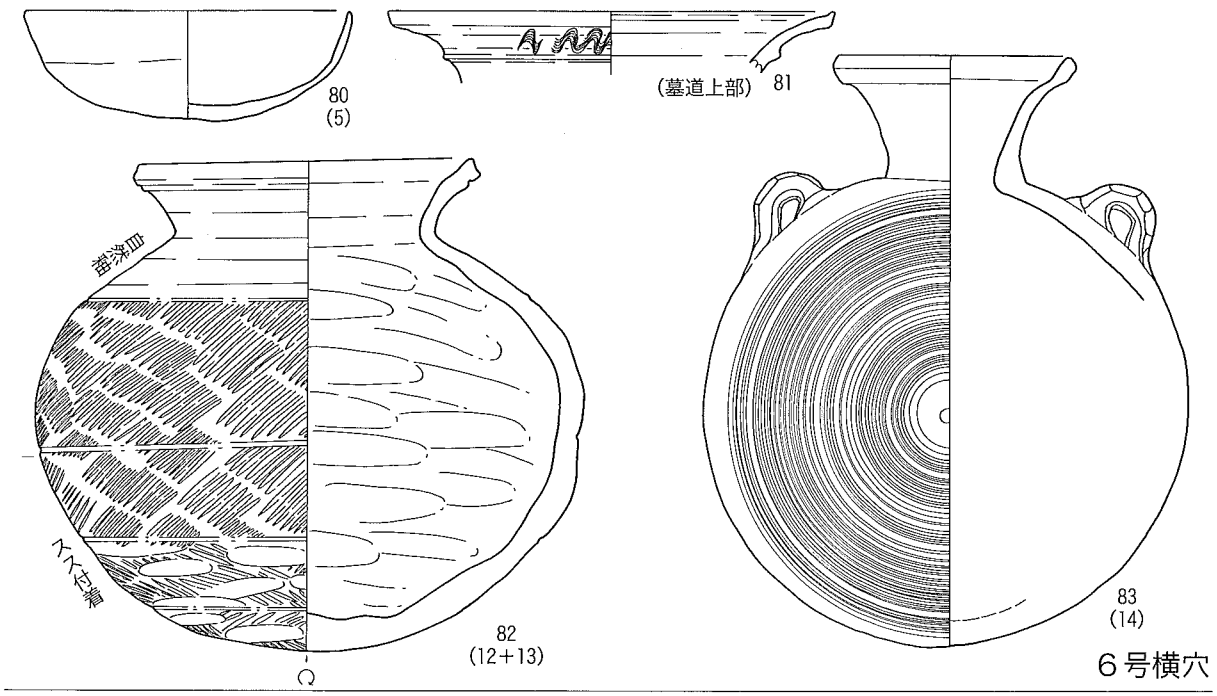
第32図　土器実測図1

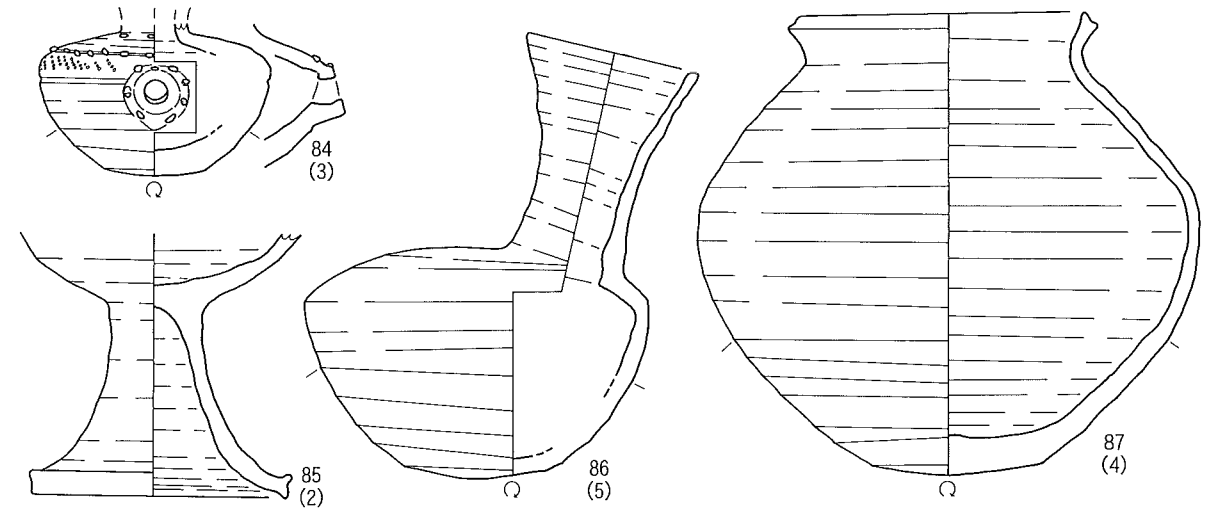

22 (3)
23 (2)
(墓前域) 24
(墓前域) 25
ヘラ記号
26 (28)
ヘラ記号
27 (35)
28 (27)
29 (31)
30 (23)
31 (36)
32 (34)
33 (9)
34 (18)
35 (1)
36 (墓前域)
37 (39)
38 (13)
39 (37)
40 (32)
41 (26)
42 (24)
43 (33)
ヘラ記号
44 (22)
45 (30)
46 (38)
ヘラ記号
47 (29)
ヘラ記号
48 (25)
ヘラ記号
49 (8)
50 (11)
51 (7)
52 (10)
53 (16)
5号横穴
0
10cm

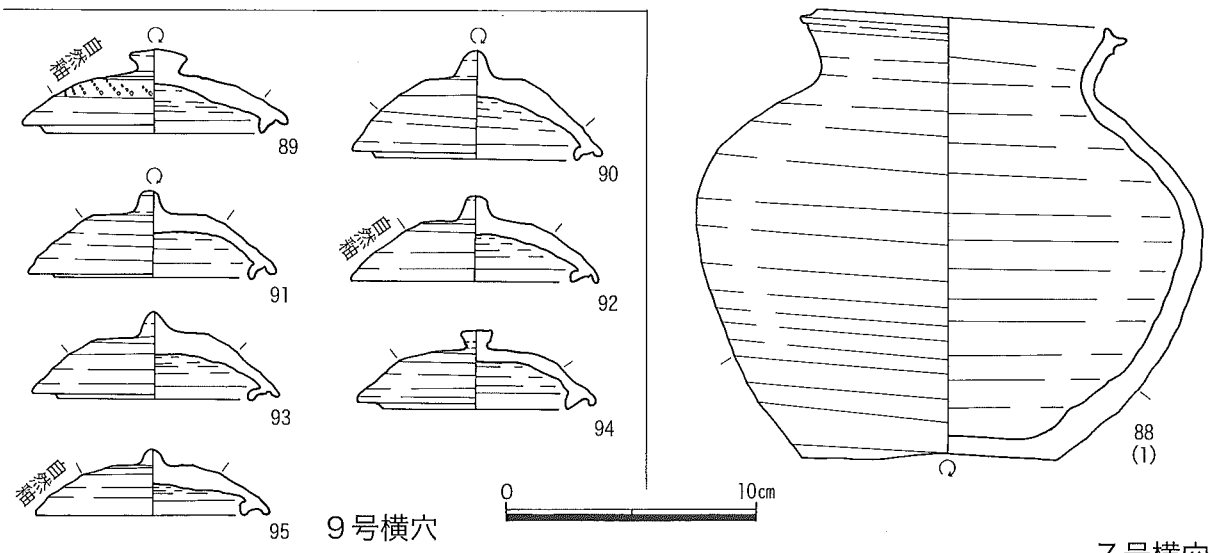
第33図　土器実測図２


54
(12)
55
(14)
56
(15)
57
(15)
58
(21)
59
(5)
60
(8)
61
(4)
62
(17)
63
(40)
64
自然釉
(墓前域) 65
(42)
板ナデ
66
(20)
67
(6)
5号横穴
ヘラ記号
68
(3)
69
(4)
70
(11)
71
(16)
72
(7)
73
(1)
74
(8)
75
(2)
76
(15)
77
(10)
78
(9)
79
(6)
0
10cm
6号横穴

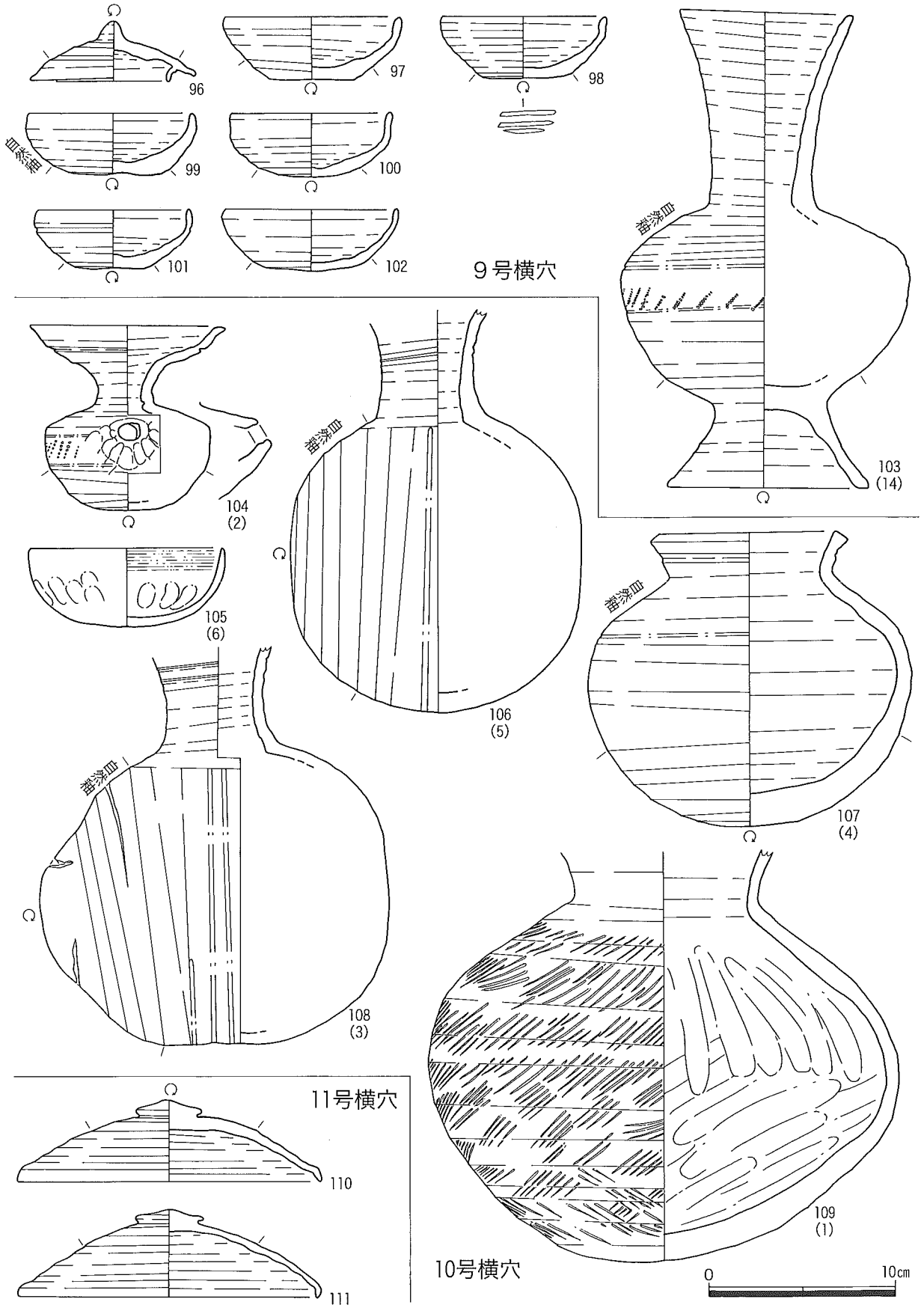
第34図　土器実測図３


80
(5)
(墓道上部)
81
83
(14)
82
(12+13)
6号横穴

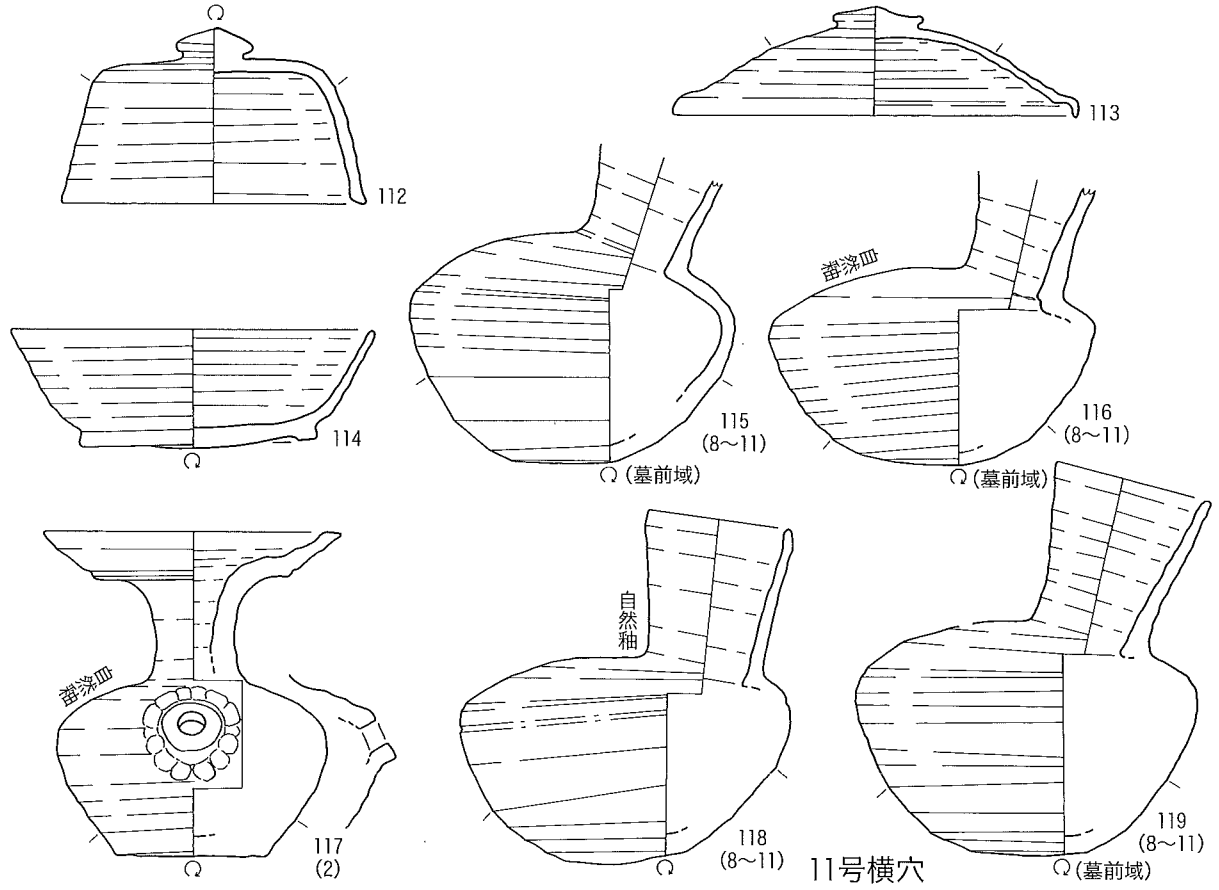

84
(3)
85
(2)
86
(5)
87
(4)
7号横穴

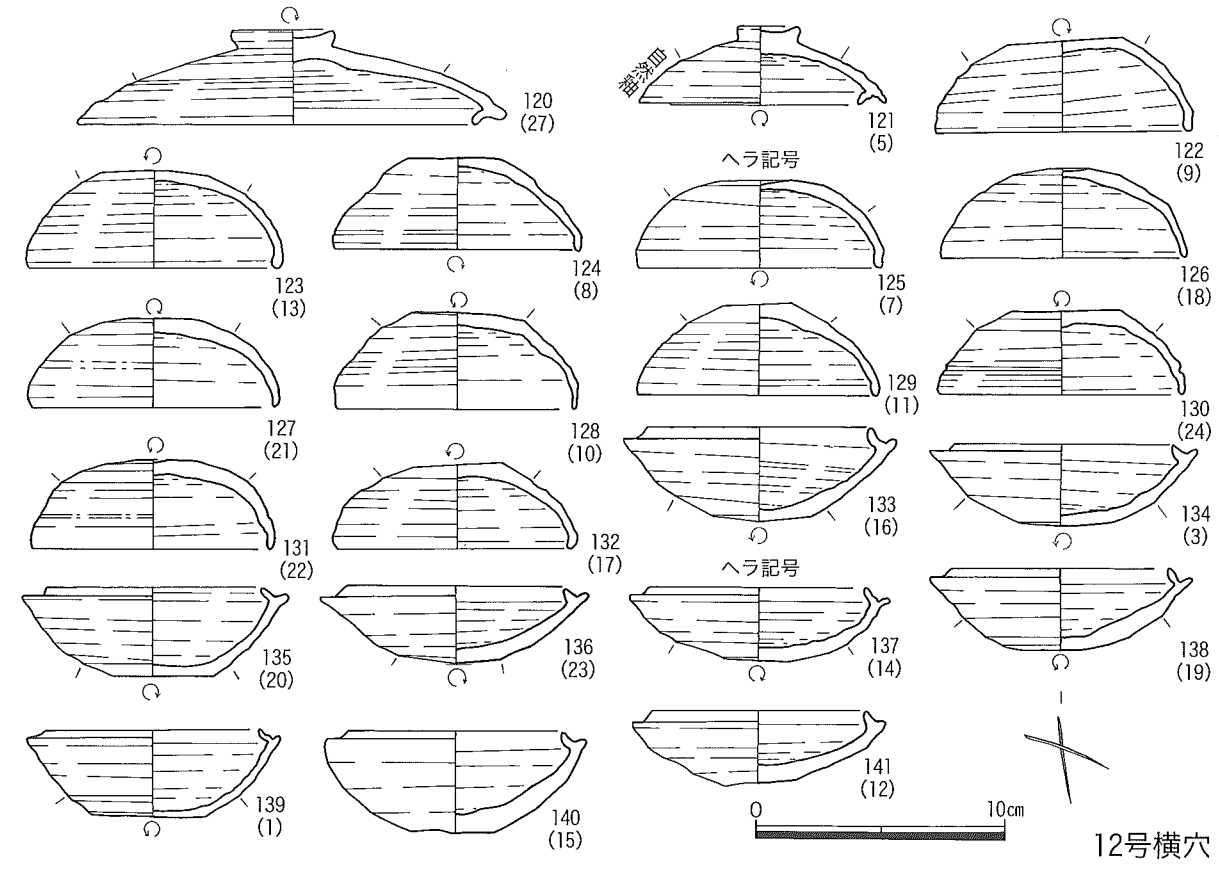

89
90
91
92
93
94
95
9号横穴
88
(1)
0
10cm

第35図　土器実測図4

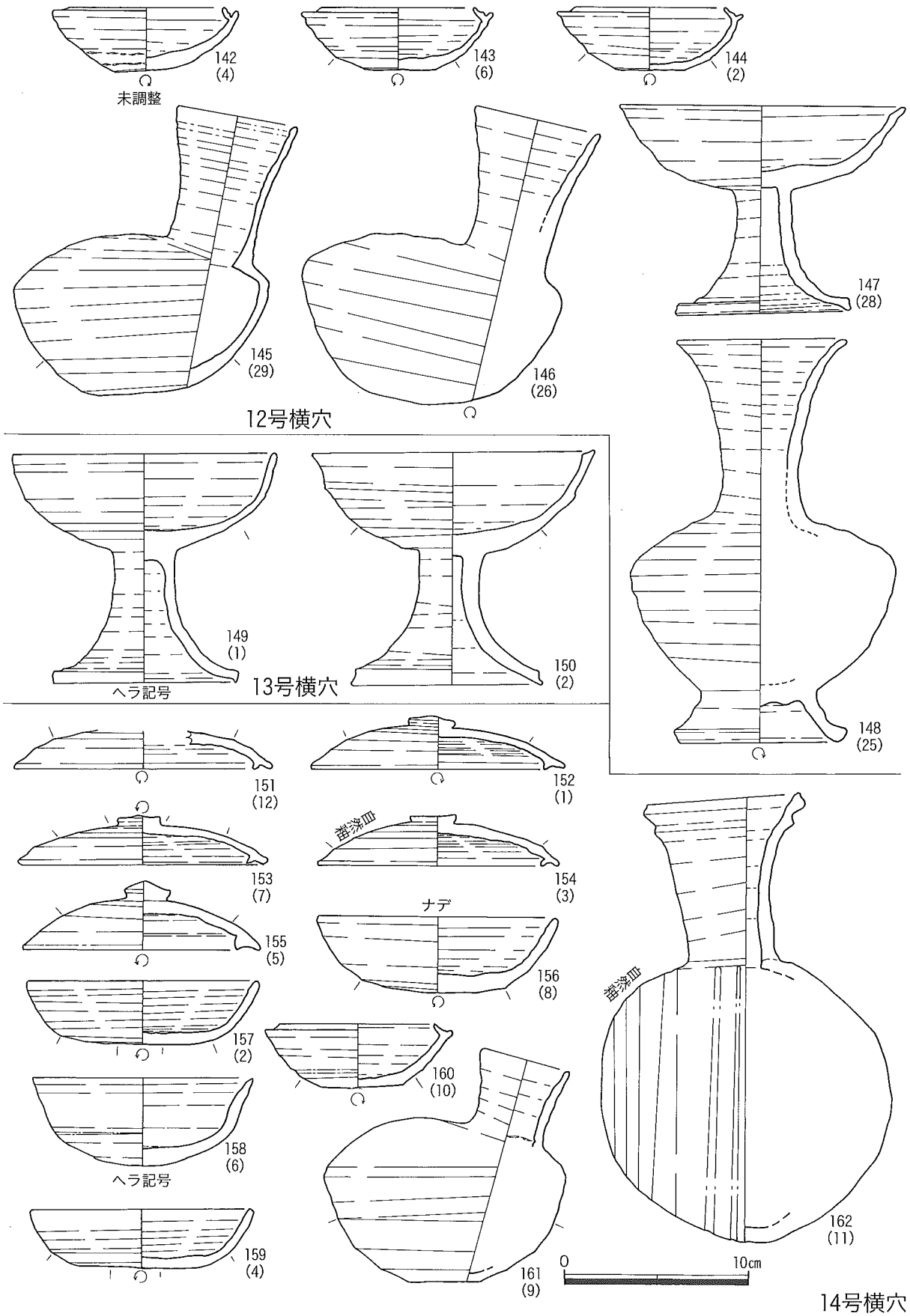

96
97
98
99
100
101
102
9号横穴
103
(14)
104
(2)
105
(6)
106
(5)
107
(4)
108
(3)
109
(1)
10号横穴
11号横穴
110
111
0
10cm

第36図　土器実測図５

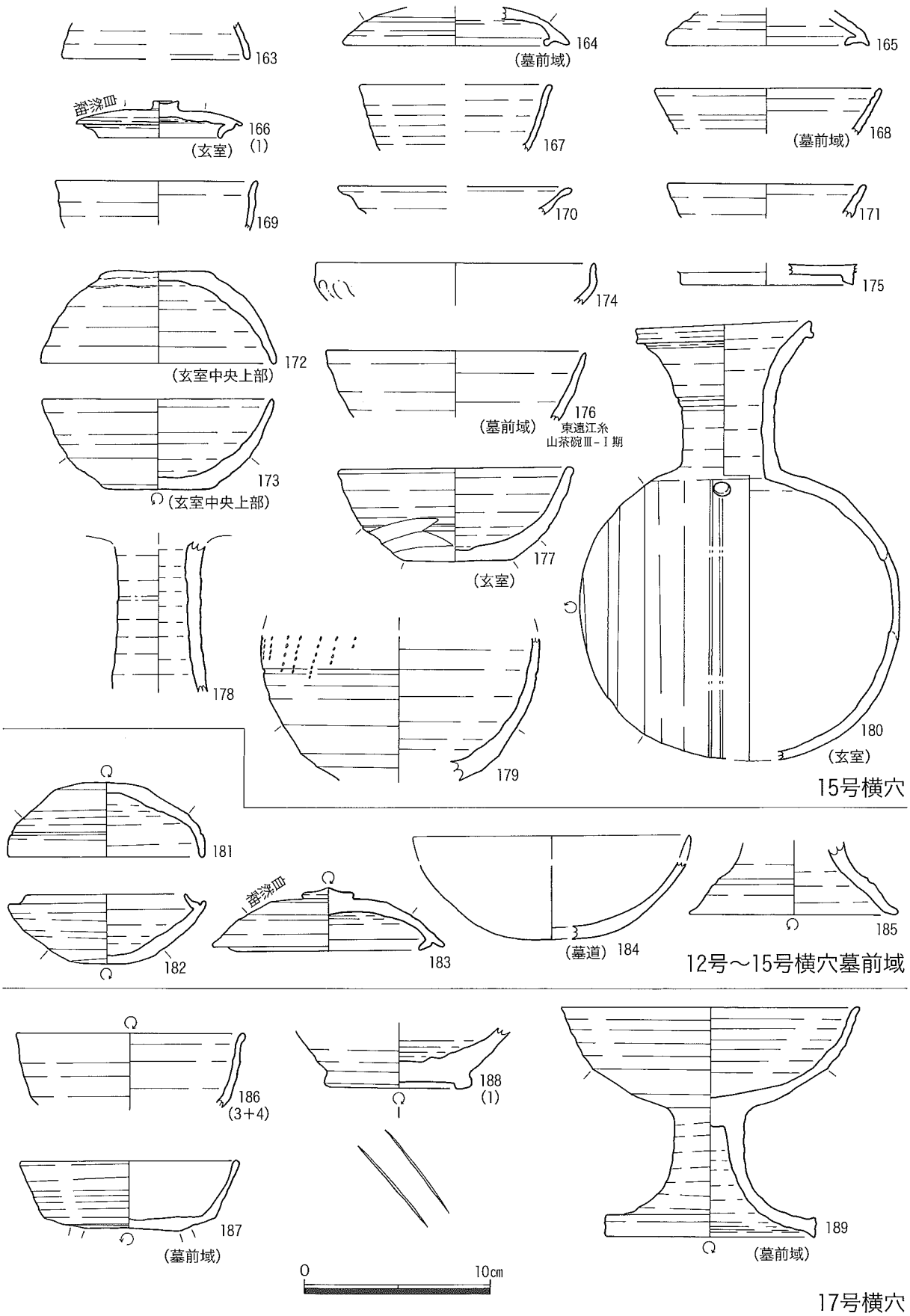

112
113
114
115
(8～11)
(墓前域)
須恵器
116
(8～11)
(墓前域)
須恵器
117
(2)
自然釉
118
(8～11)
119
(8～11)
(墓前域)
11号横穴


120
(27)
須恵器
121
(5)
122
(9)
ヘラ記号
123
(13)
124
(8)
125
(7)
126
(18)
127
(21)
128
(10)
129
(11)
130
(24)
131
(22)
132
(17)
133
(16)
134
(3)
ヘラ記号
135
(20)
136
(23)
137
(14)
138
(19)
139
(1)
140
(15)
141
(12)
0
10cm
12号横穴

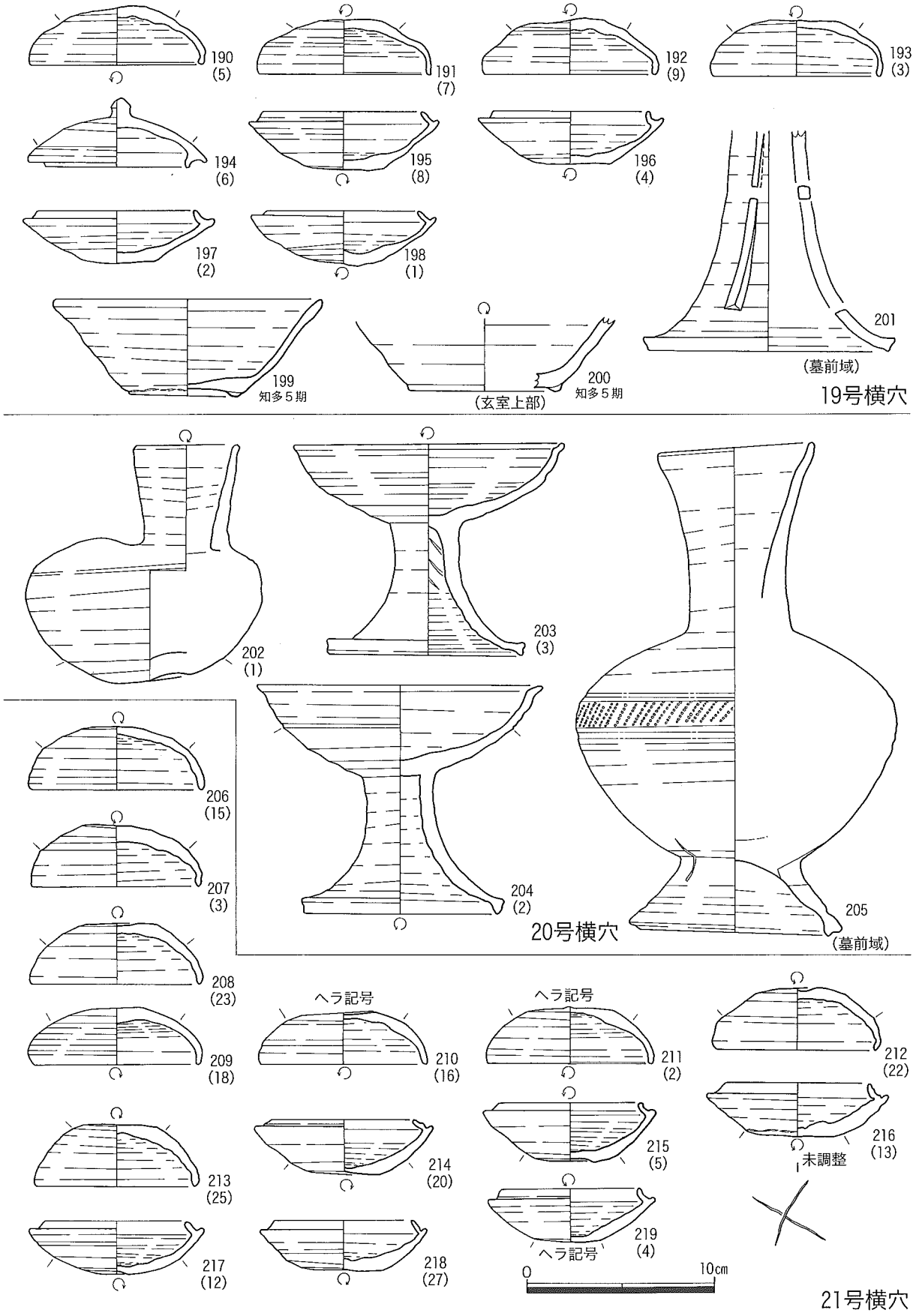
第37図　土器実測図６


142
(4)
未調整
143
(6)
144
(2)
145
(29)
146
(26)
147
(28)
12号横穴
149
(1)
ヘラ記号
13号横穴
150
(2)
148
(25)
151
(12)
152
(1)
153
(7)
154
(3)
ナデ
155
(5)
156
(8)
157
(2)
160
(10)
158
(6)
ヘラ記号
159
(4)
161
(9)
162
(11)
0
10cm
14号横穴

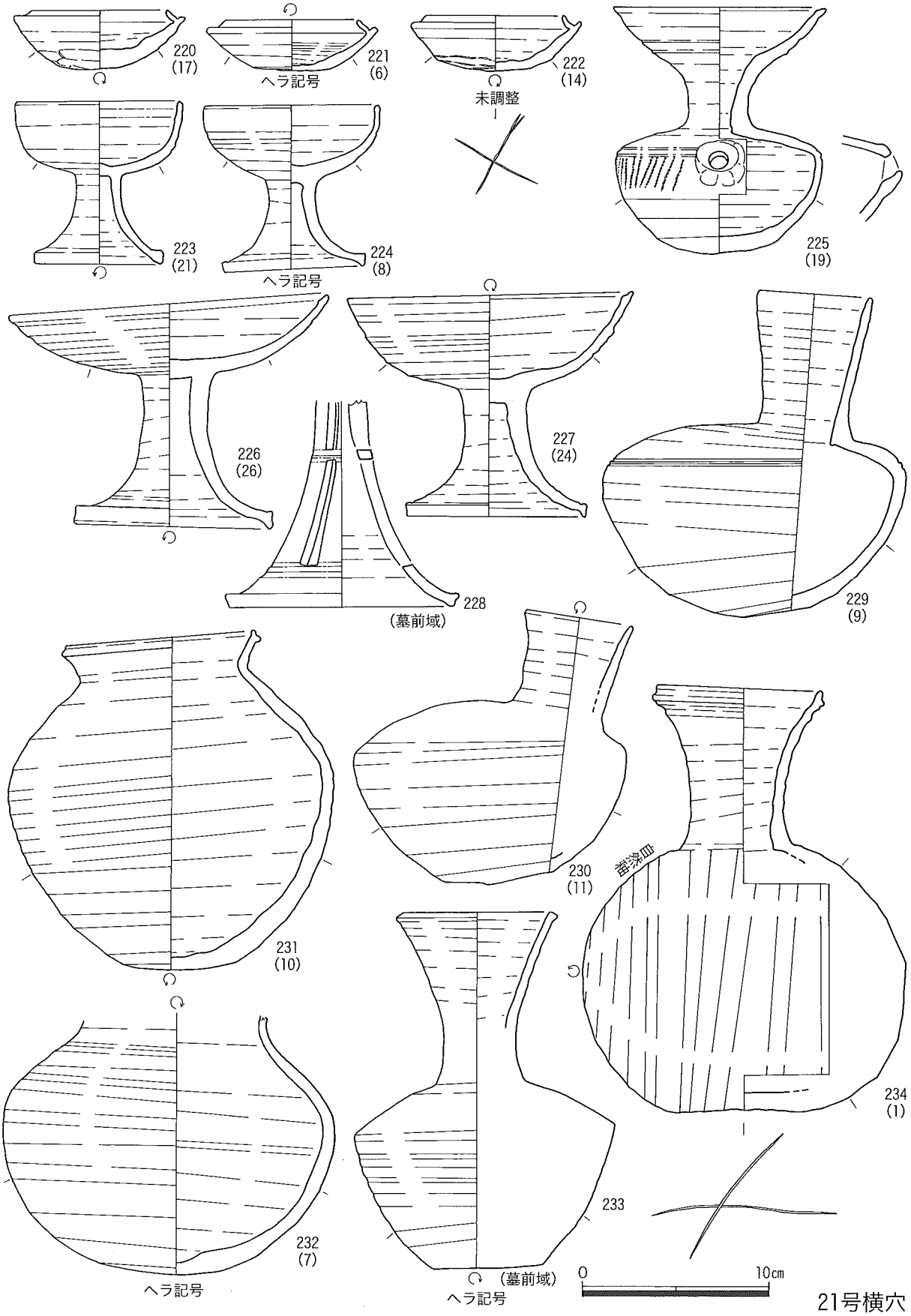
第38図　土器実測図７


163
164
(墓前域)
165
166
(1)
(玄室)
167
168
(墓前域)
169
170
171
172
(玄室中央上部)
174
175
176
(墓前域)
東遠江糸
山茶碗Ⅲ-Ⅰ期
173
(玄室中央上部)
177
(玄室)
178
179
180
(玄室)
15号横穴
181
182
183
184
(墓道)
185
12号～15号横穴墓前域
186
(3+4)
187
(墓前域)
188
(1)
189
(墓前域)
0
10cm
17号横穴

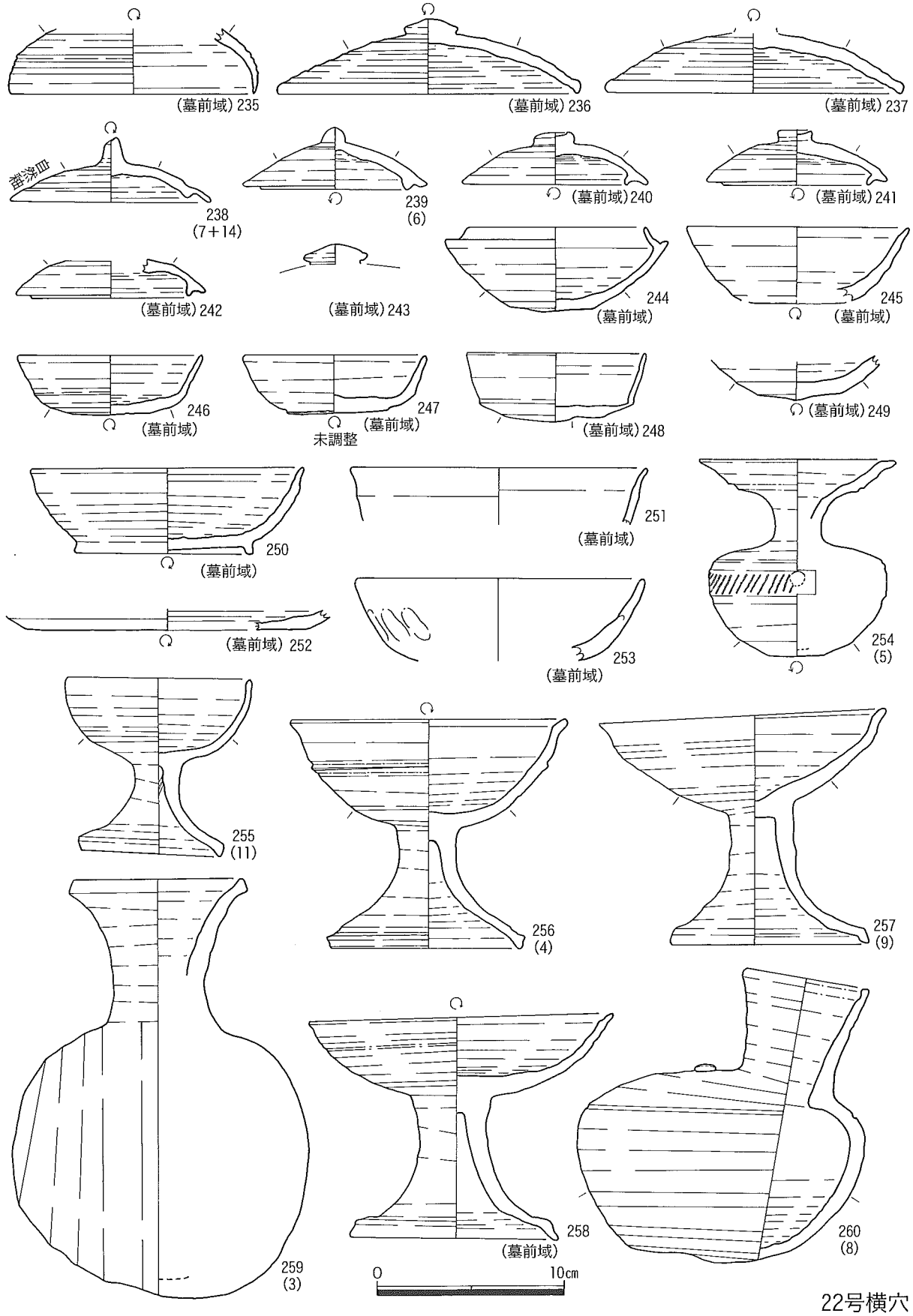
第39図　土器実測図８


190 (5)
191 (7)
192 (9)
193 (3)
194 (6)
195 (8)
196 (4)
197 (2)
198 (1)
199 知多5期
200 知多5期
(玄室上部)
201
(墓前域)
19号横穴
202 (1)
203 (3)
204 (2)
205
(墓前域)
20号横穴
206 (15)
207 (3)
208 (23)
209 (18)
ヘラ記号
210 (16)
ヘラ記号
211 (2)
212 (22)
213 (25)
214 (20)
215 (5)
216 (13)
未調整
217 (12)
218 (27)
219 (4)
ヘラ記号
0
10cm
21号横穴

第40図　土器実測図９

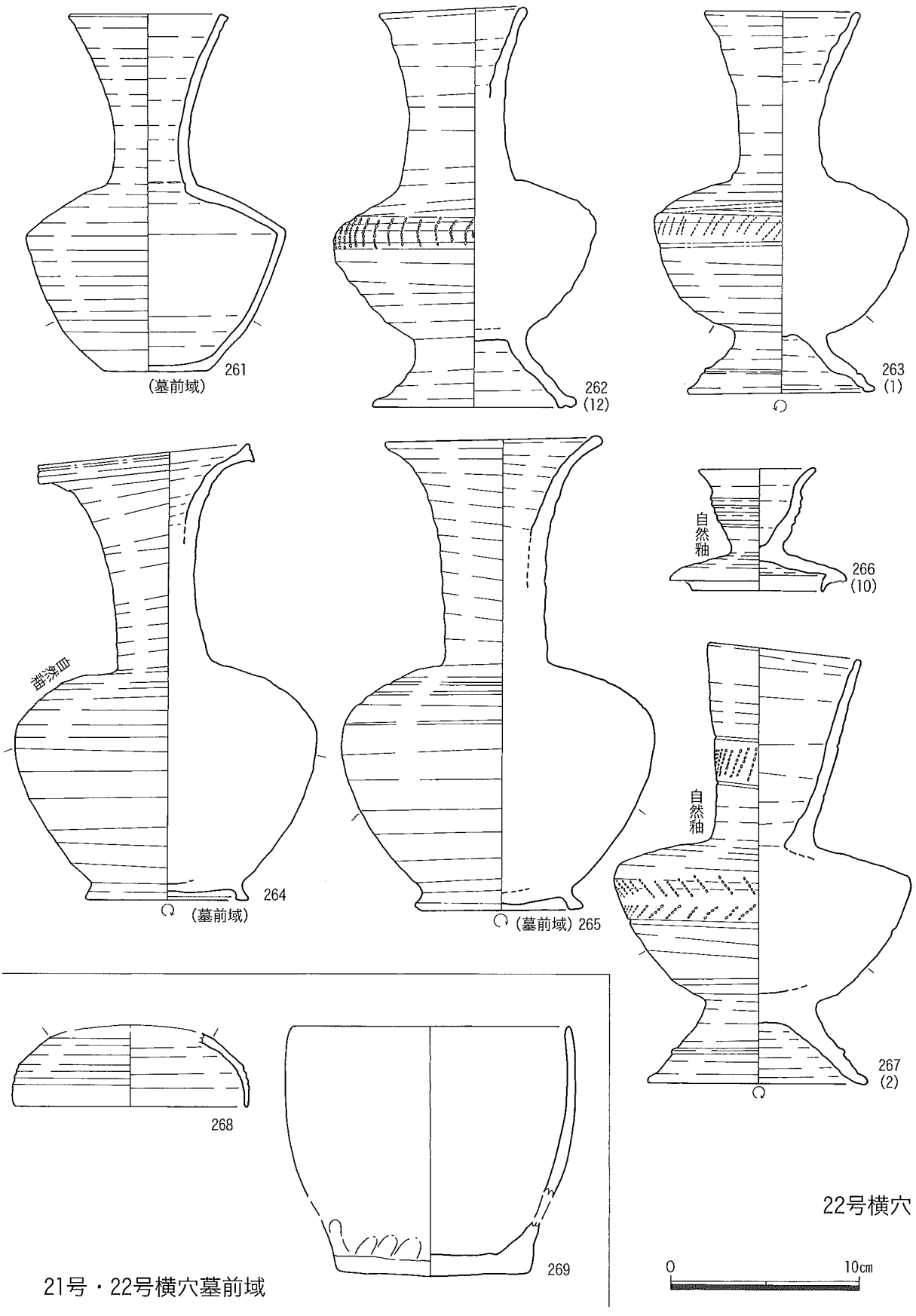


第41図　土器実測図10

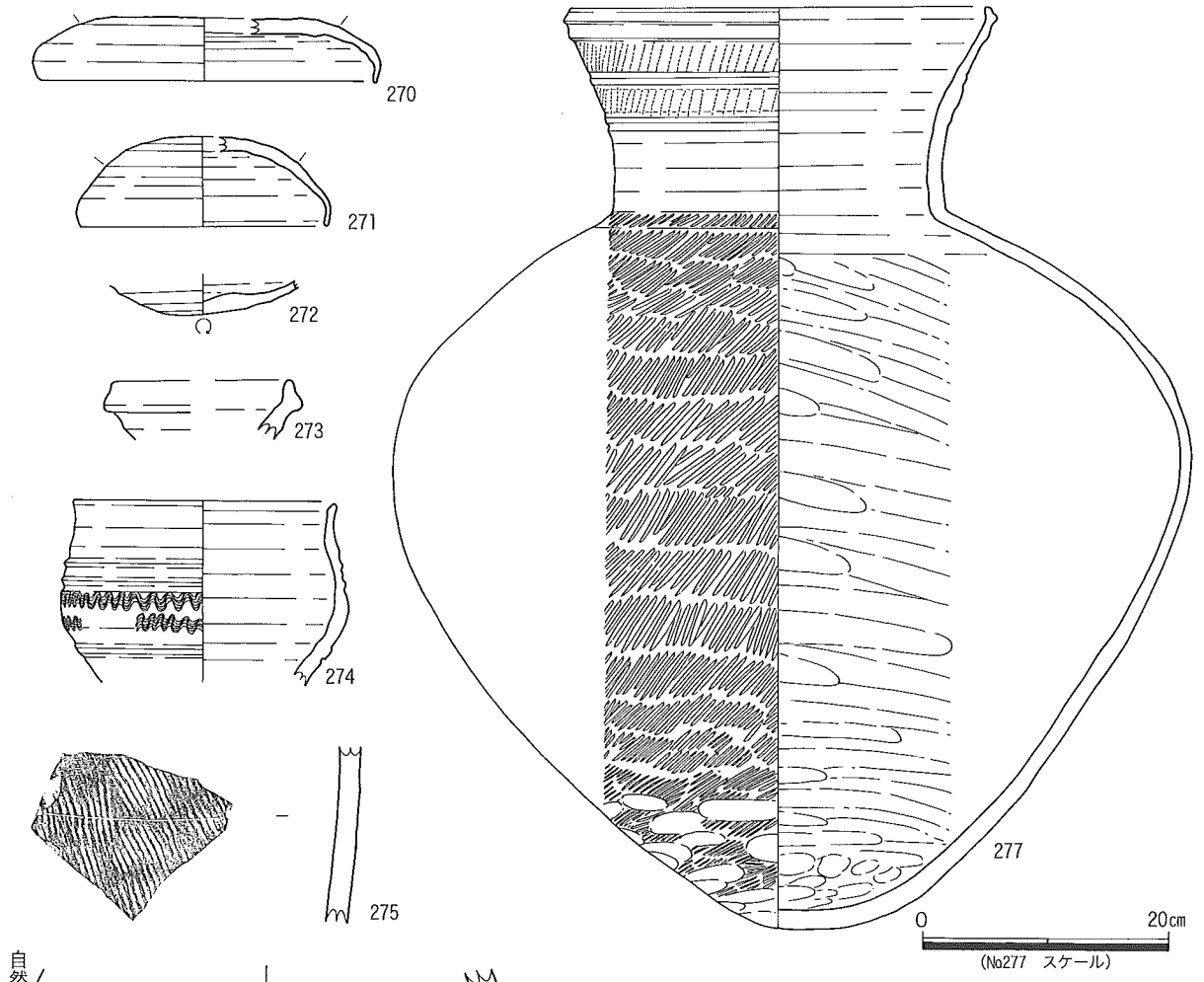


22号横穴

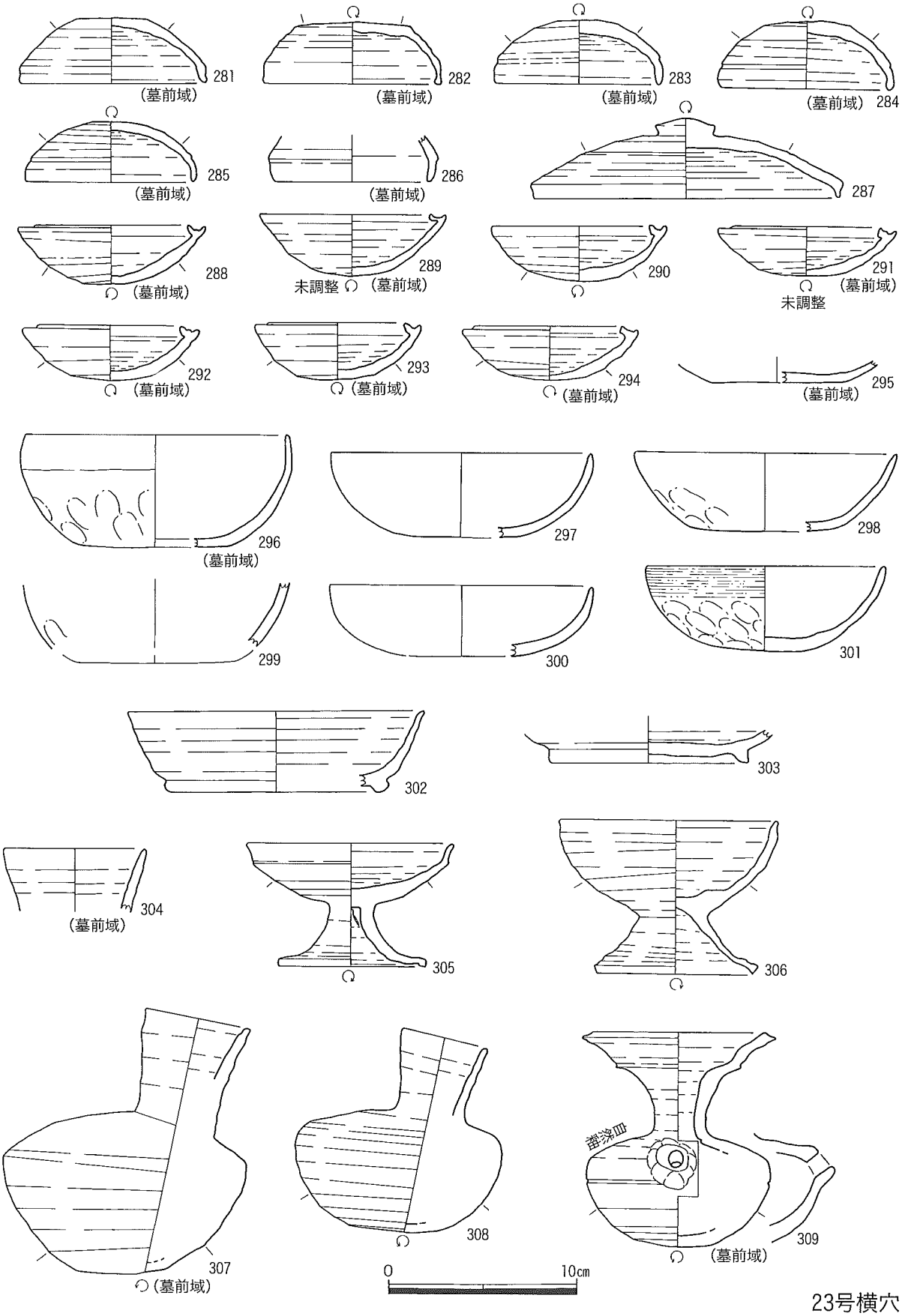
第42図　土器実測図11



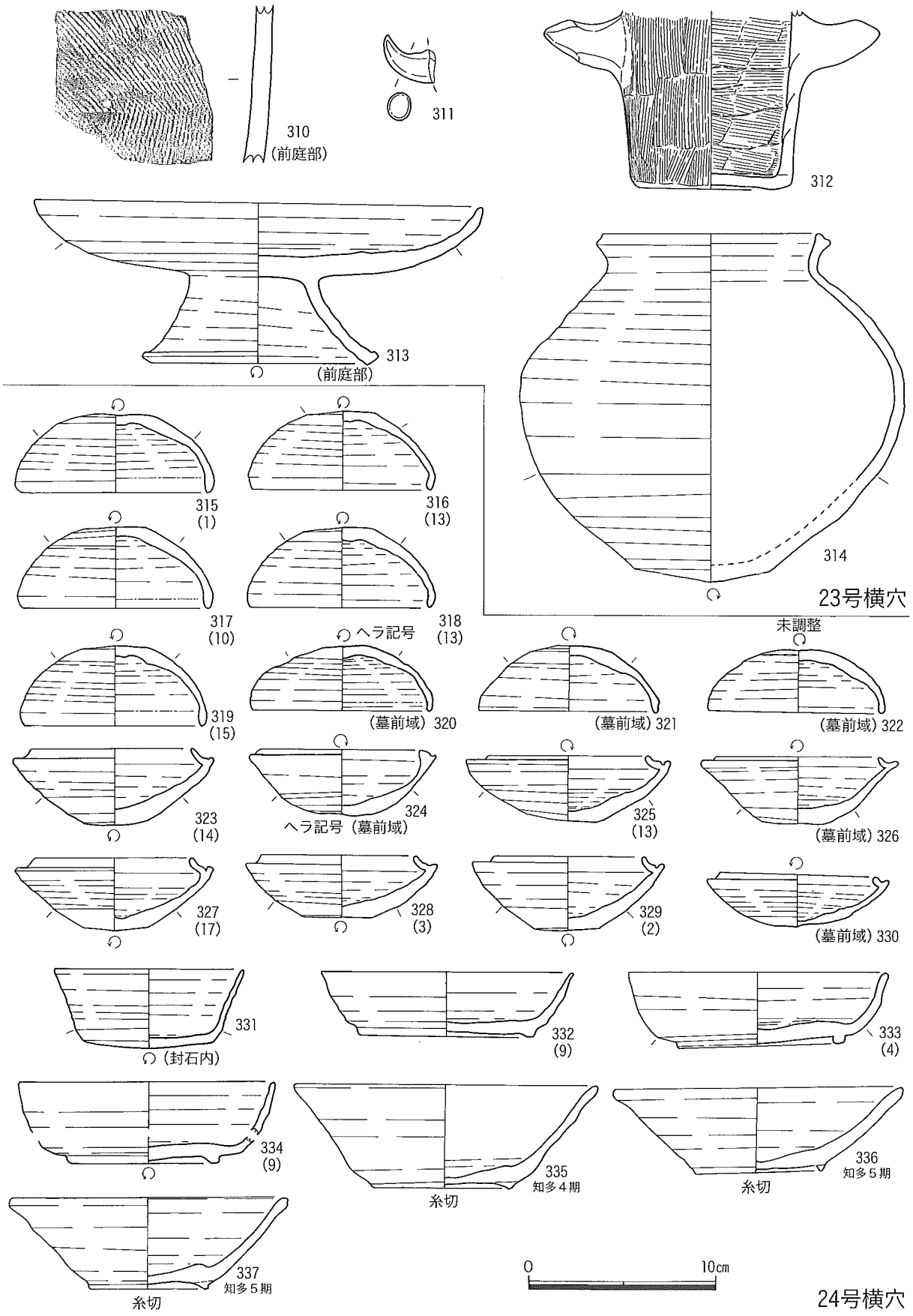
第43図　土器実測図12



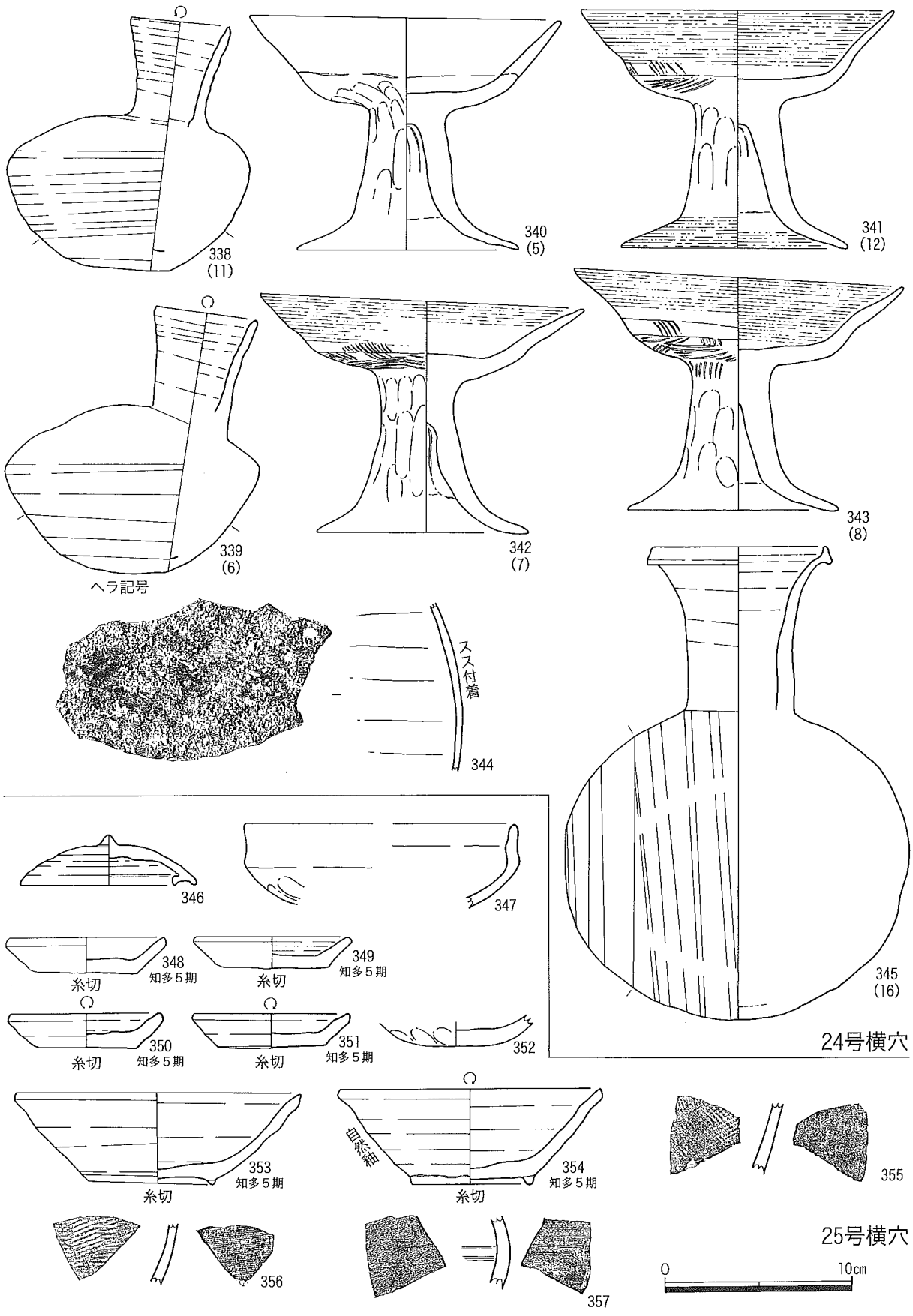
第44図　土器実測図13



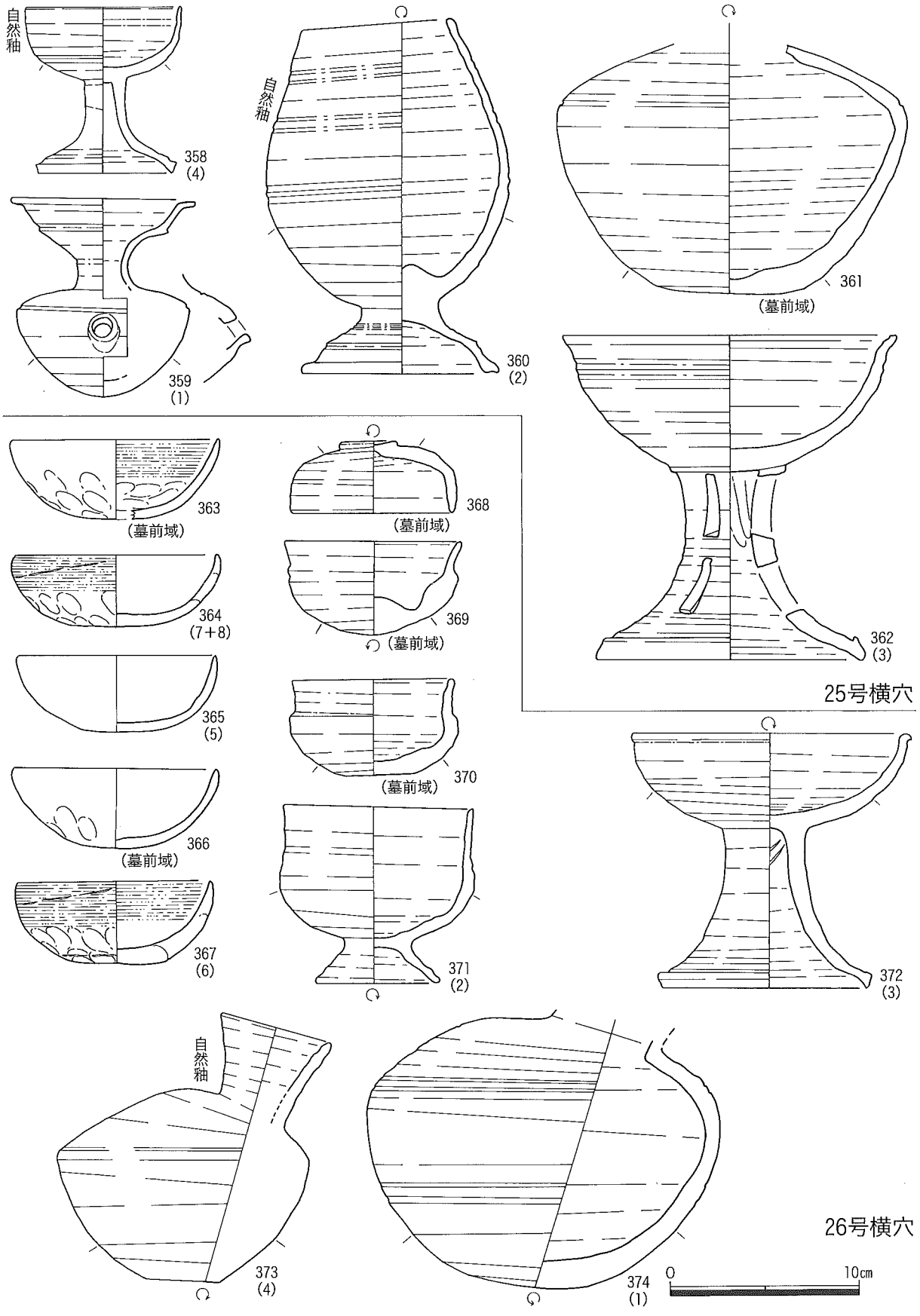
第45図　土器実測図14



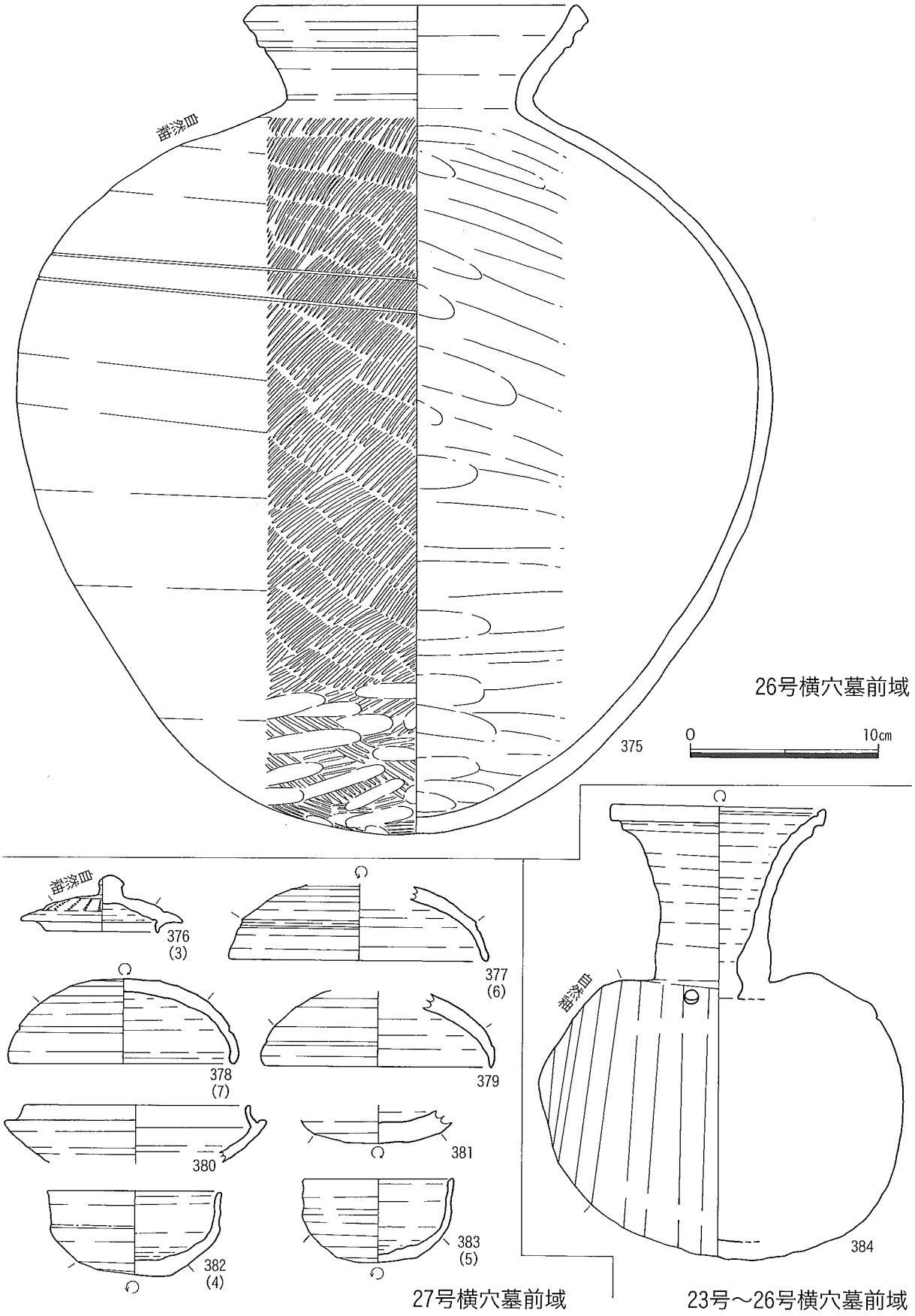
第46図　土器実測図15



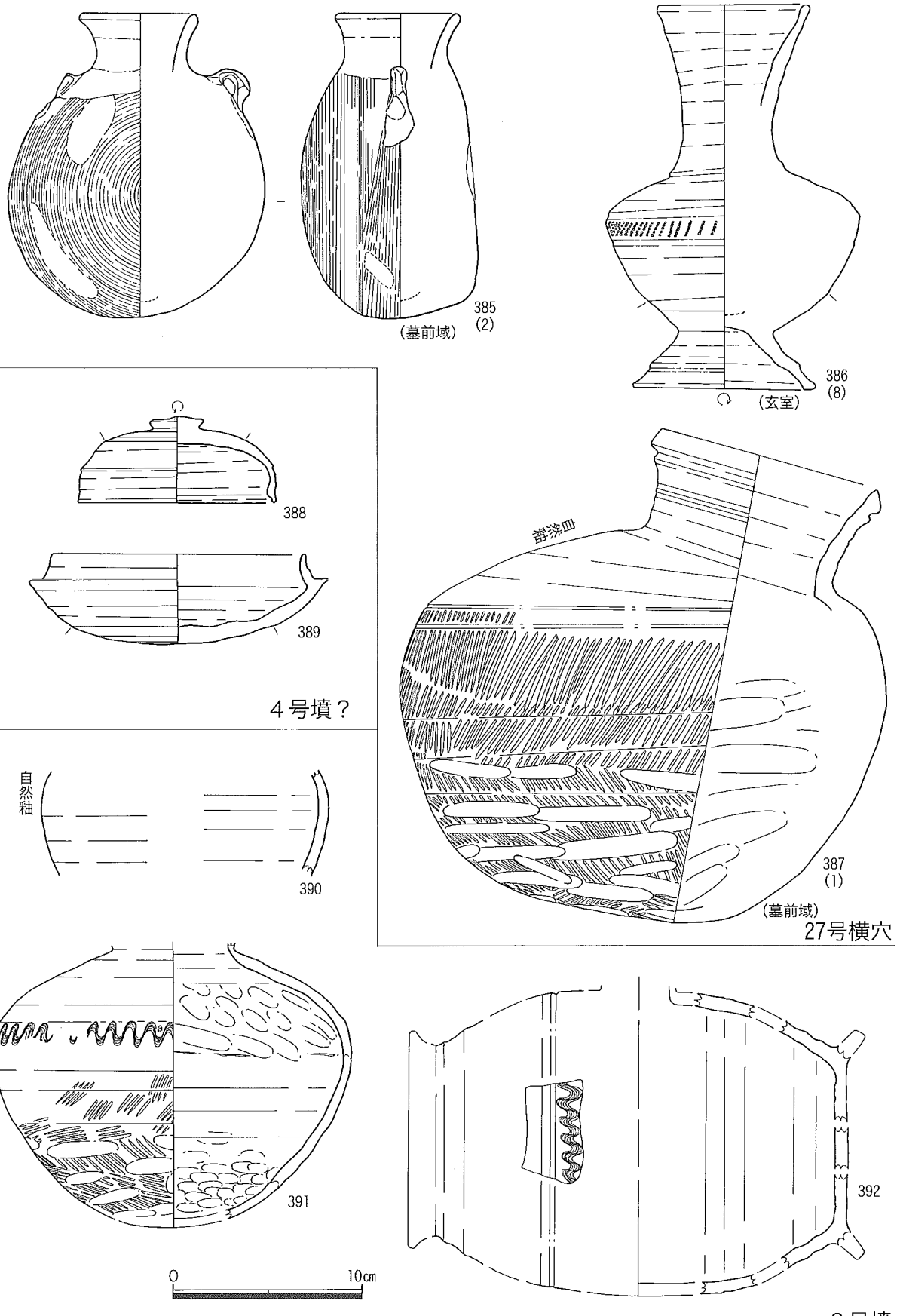
第47図　土器実測図16



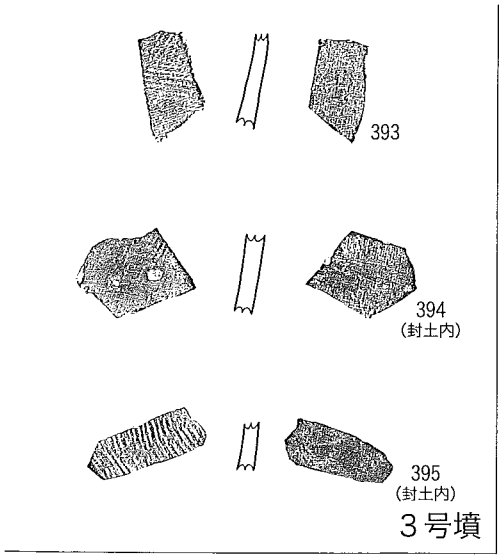
第48図　土器実測図17

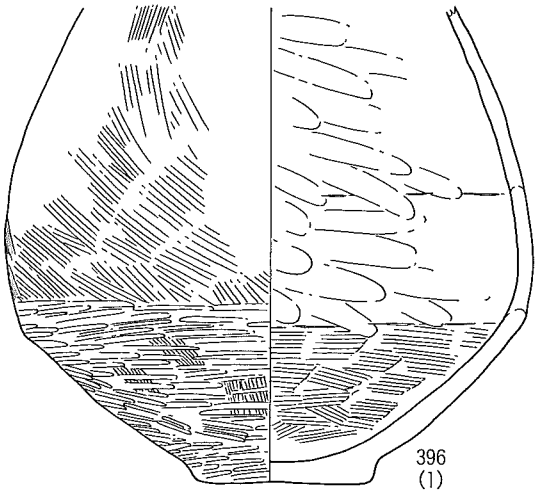


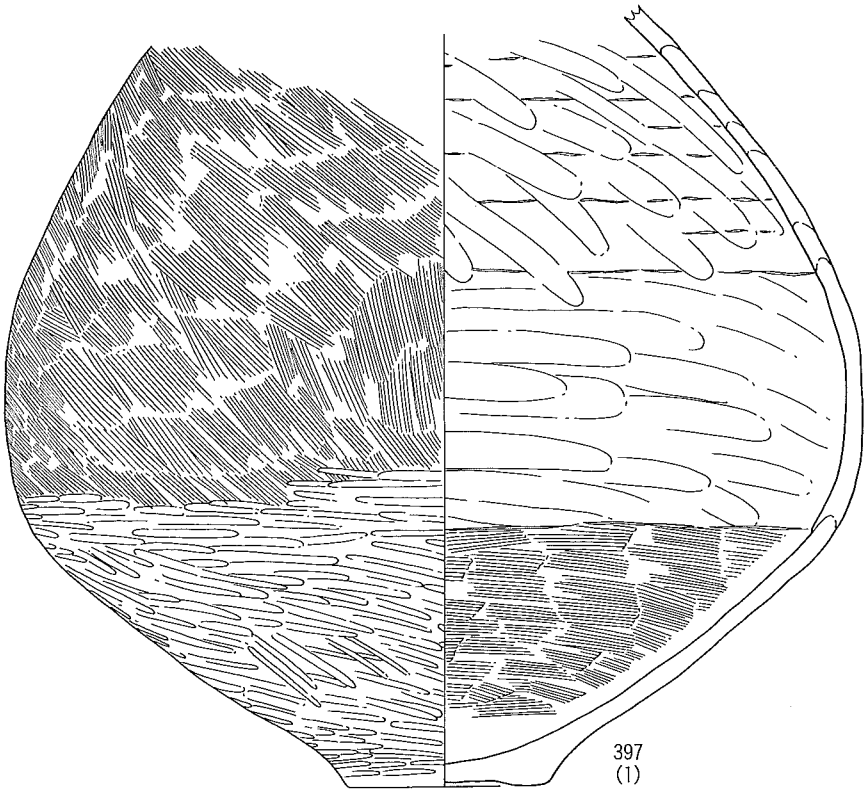
第49図　土器実測図18

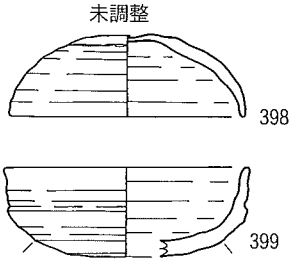


第50図　土器実測図19

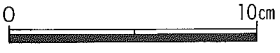




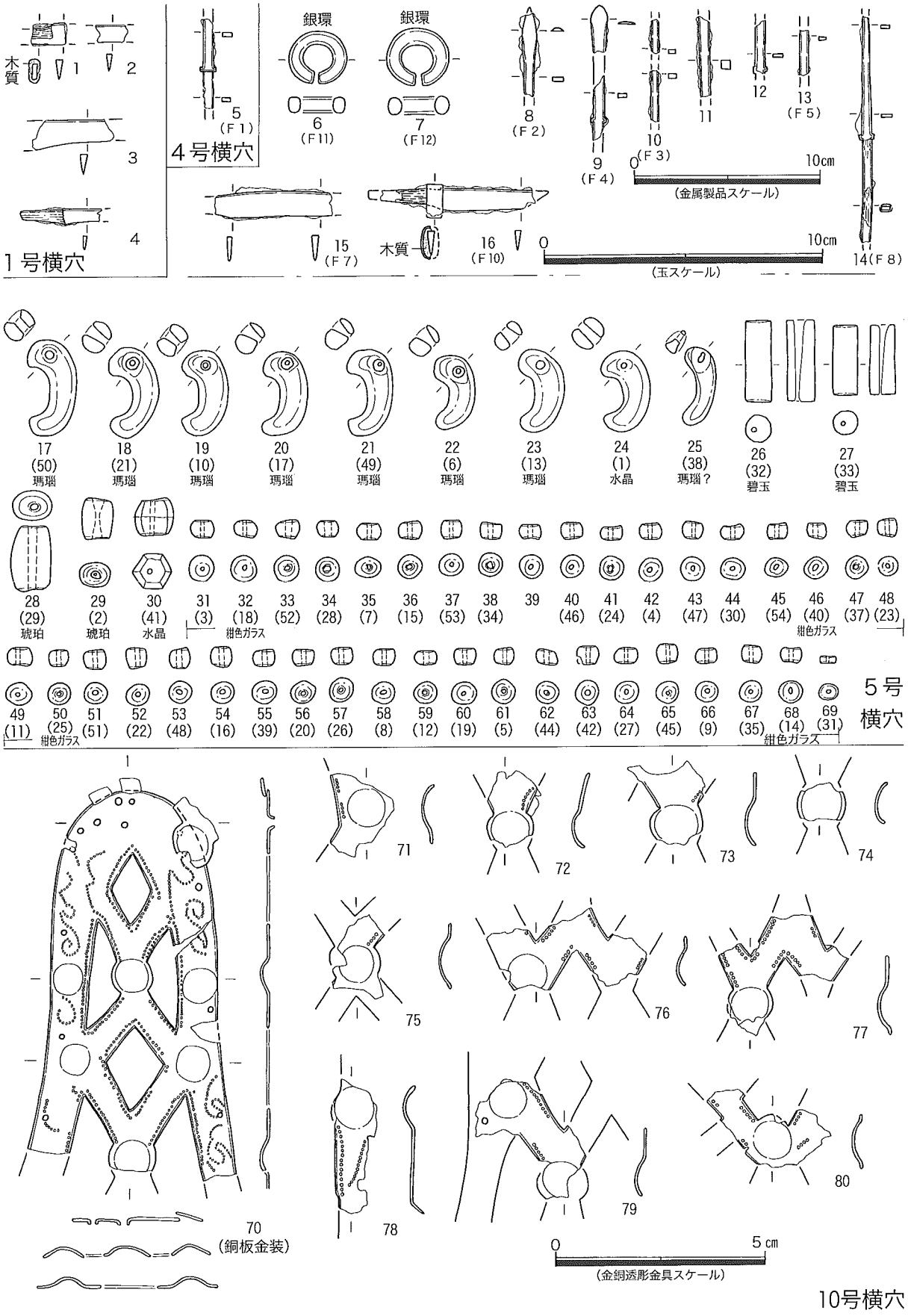




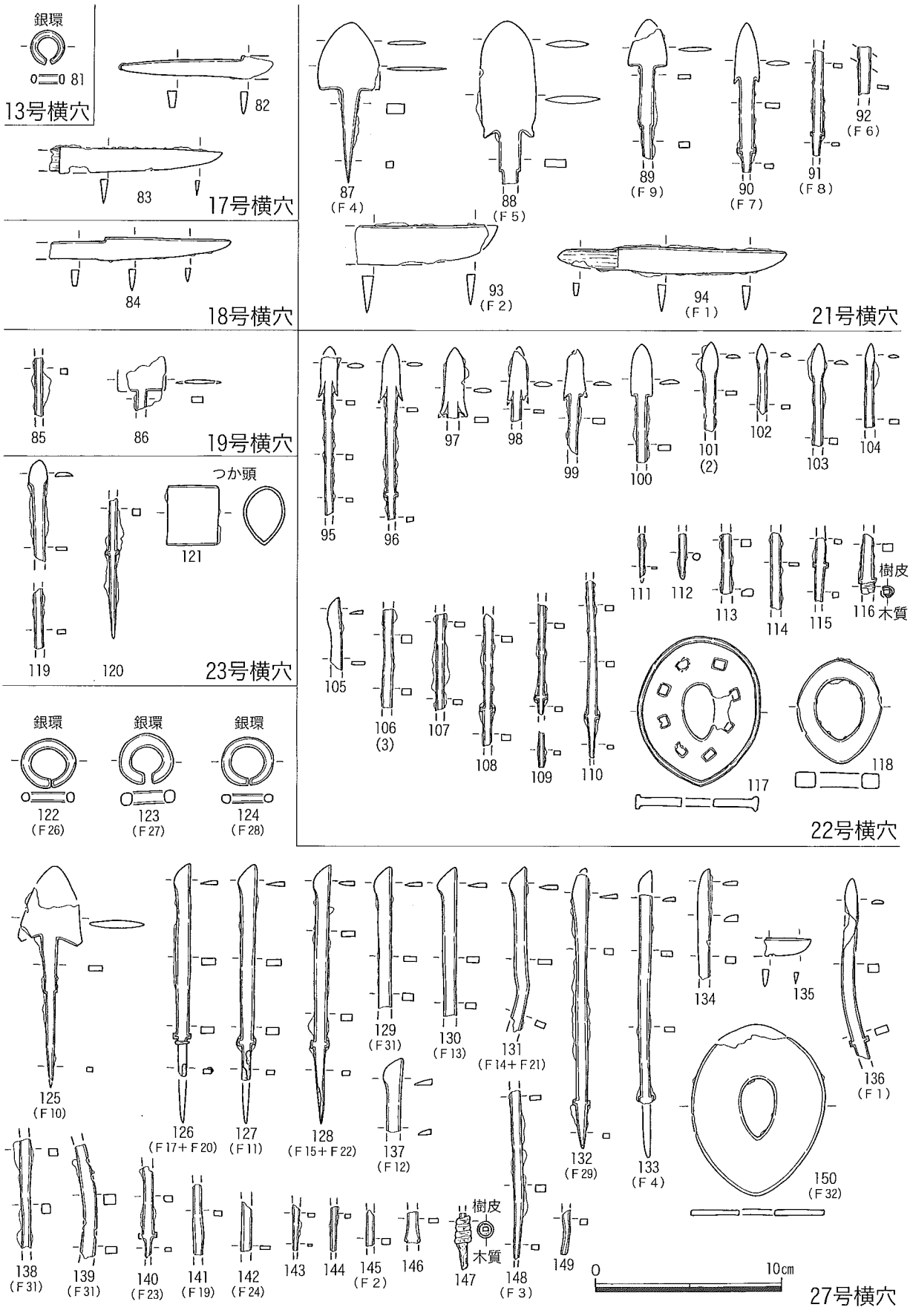
表採・不明横穴



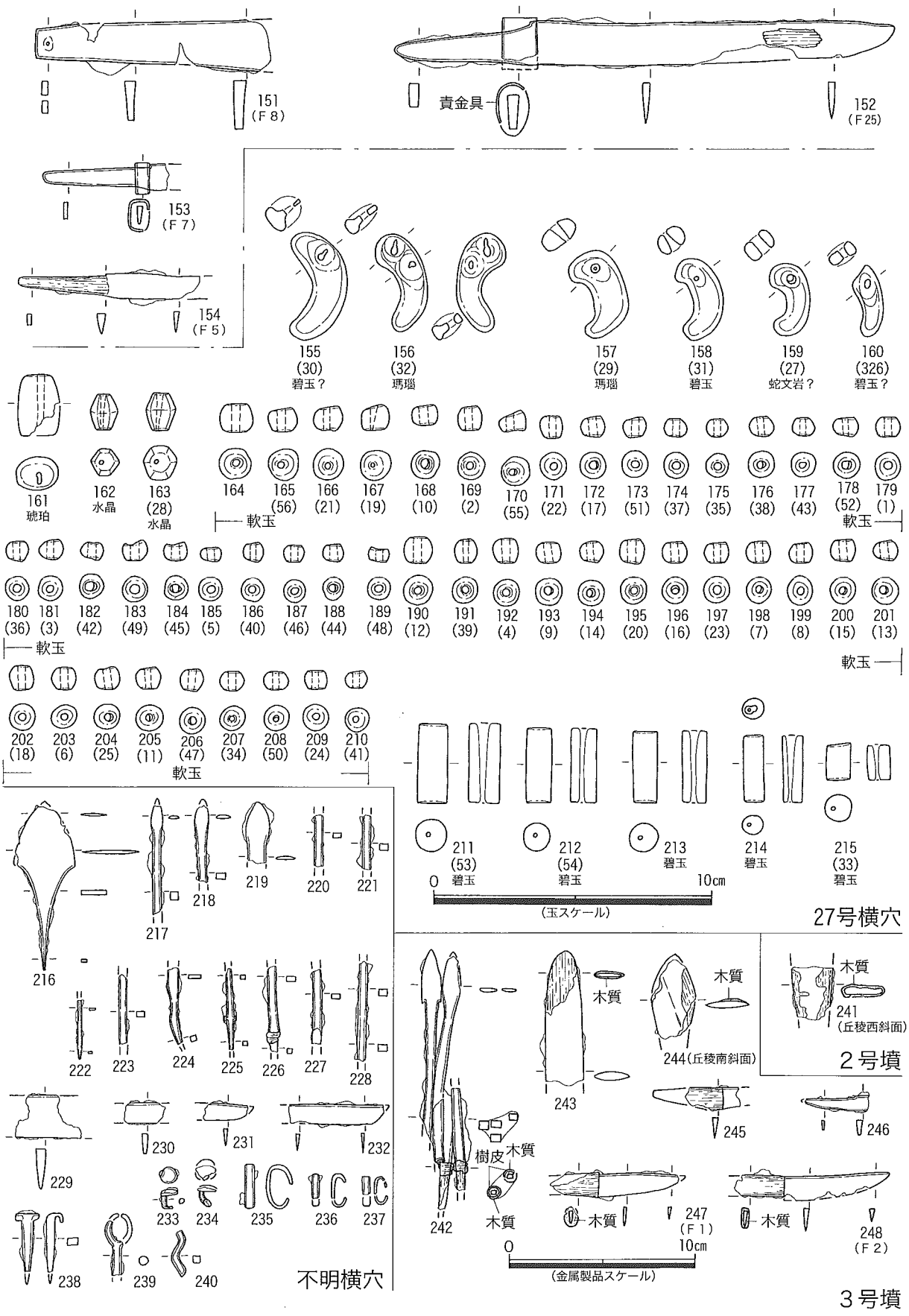
第51図　土器実測図20



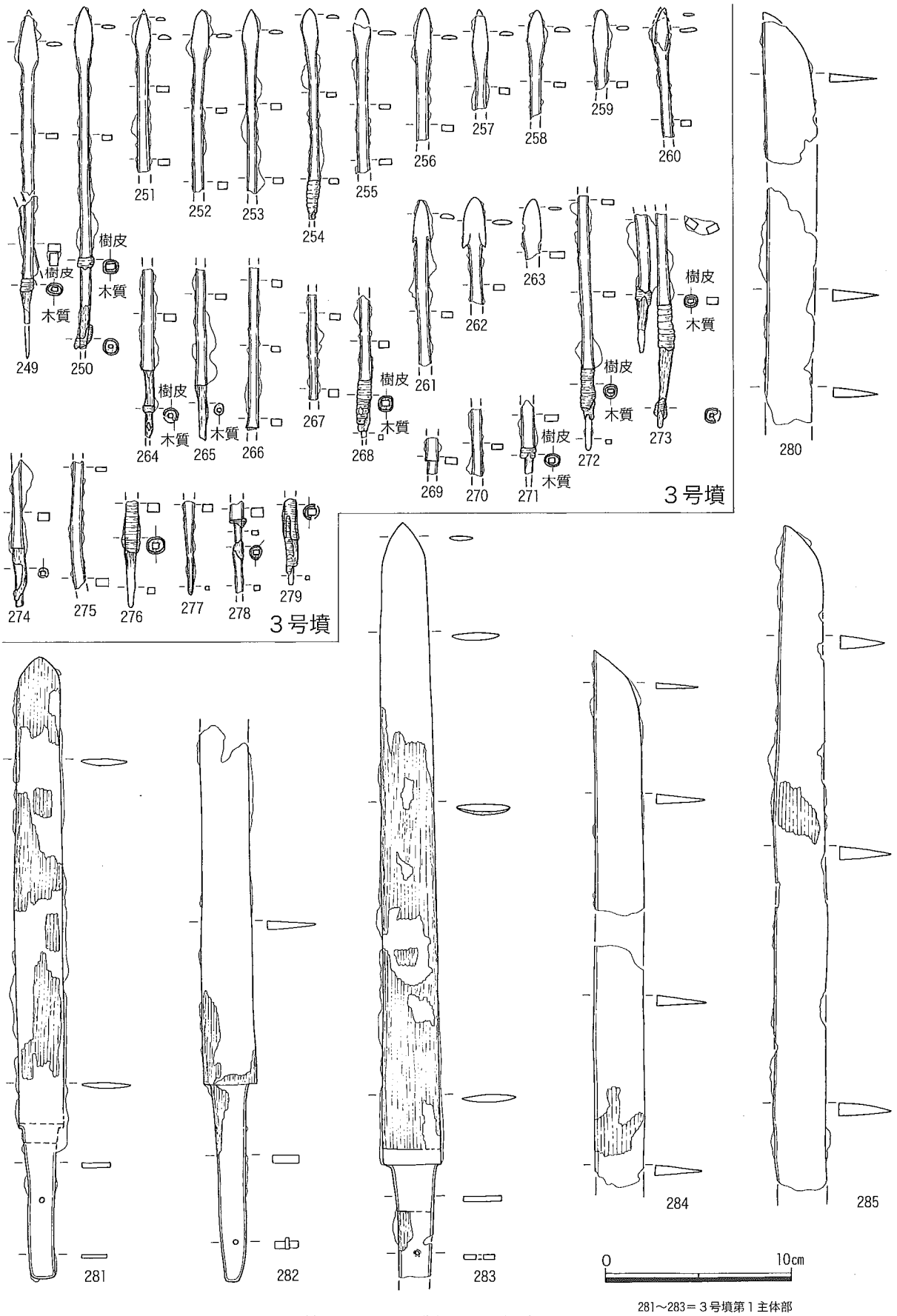
第52図　金属製品・玉類実測図1



第53図　金属製品・玉類実測図２

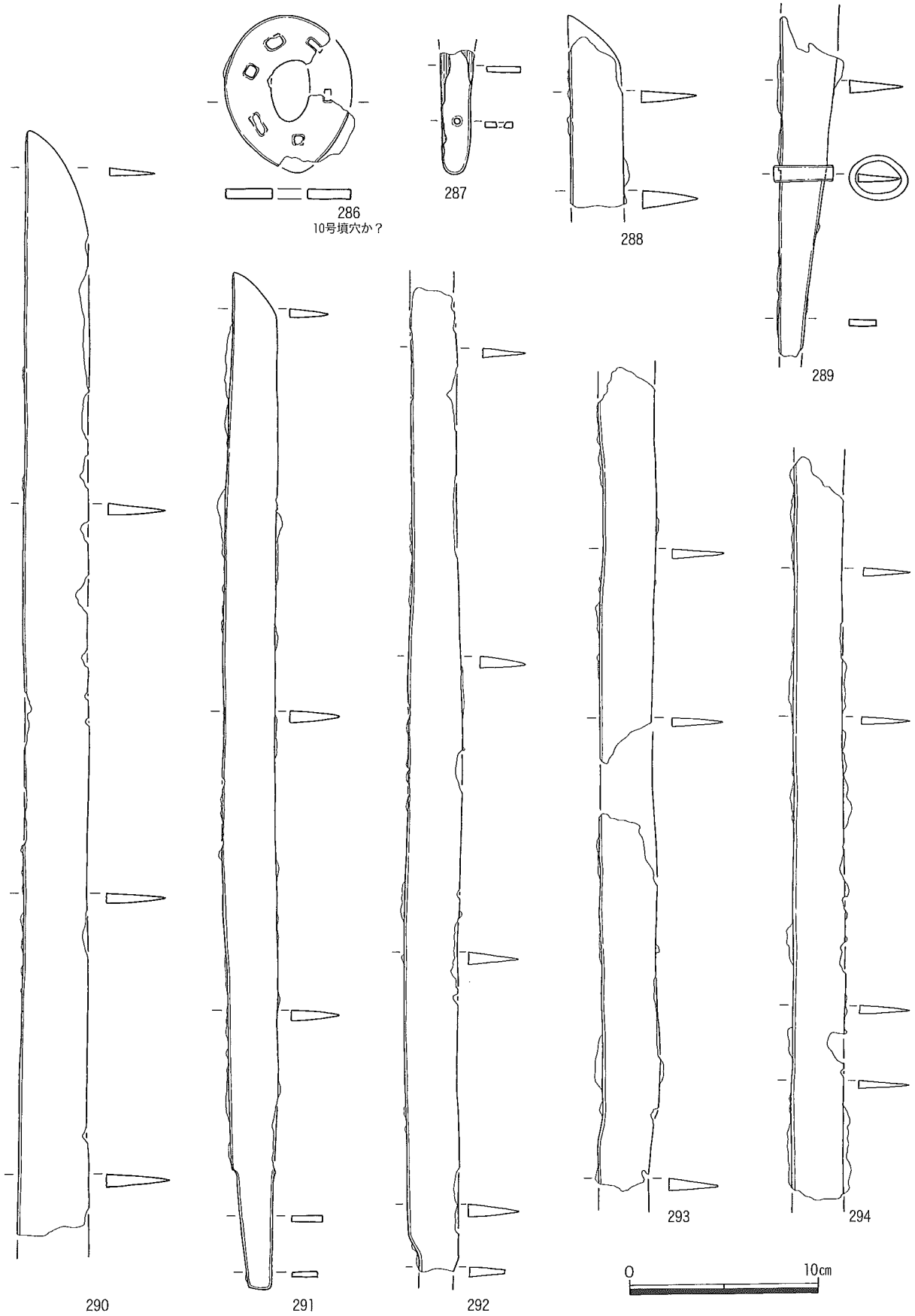


第54図　金属製品・玉類実測図３

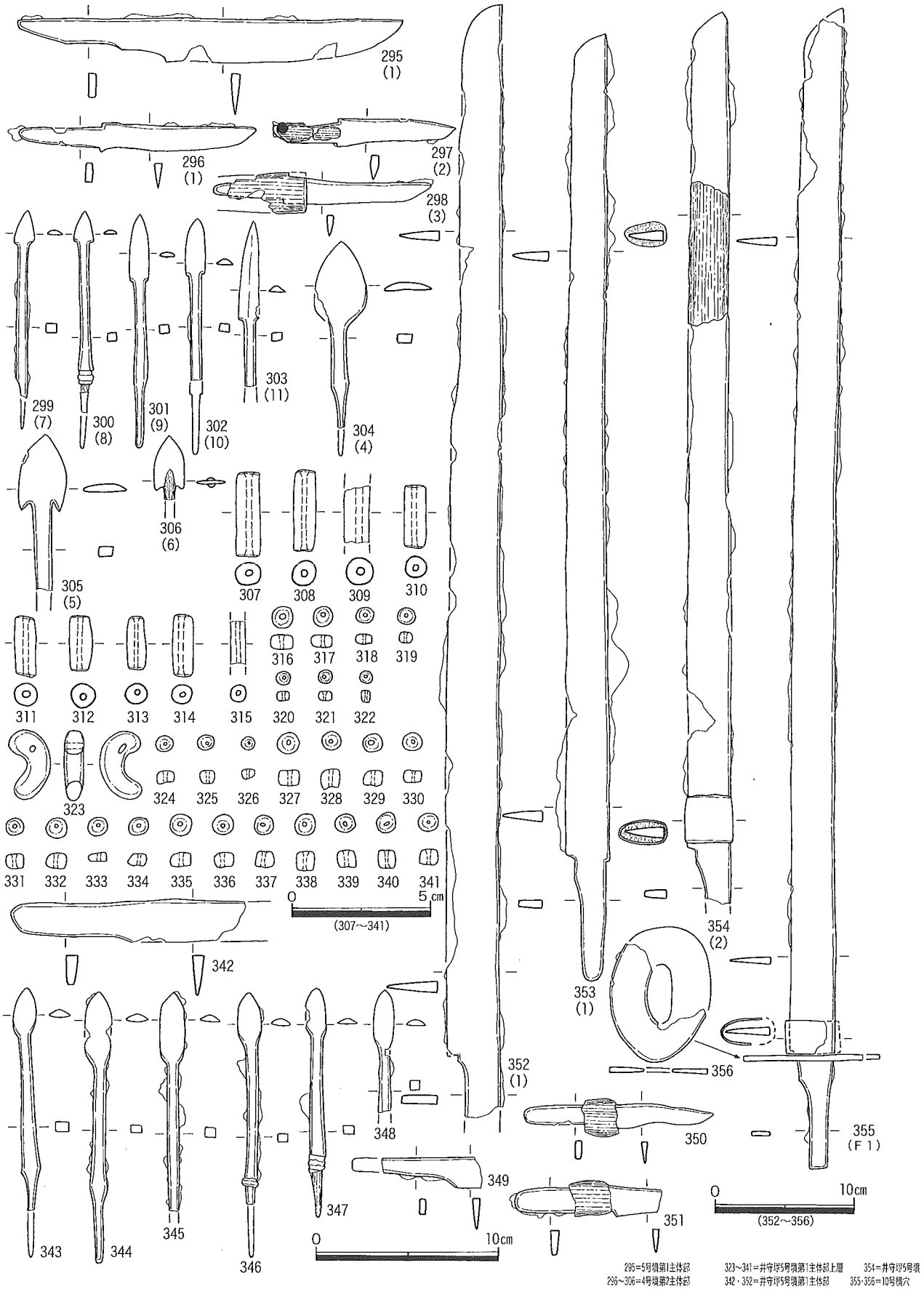


281～283＝３号墳第１主体部

第55図　金属製品・玉類実測図４



第56図　金属製品・玉類実測図５



295＝5号墳第1主体部　323～341＝井守塚5号墳第1主体部上層　354＝井守塚5号墳
296～306＝4号墳第2主体部　342・352＝井守塚5号墳第1主体部　355・356＝10号横穴
307～322＝4号墳第1主体部上層　343～351・353＝井守塚5号墳第2主体部

第57図　金属製品・玉類実測図６

第５章　袋井の群集墳と横穴墓を考える(3)

第１節　地蔵ヶ谷横穴群から見た遠江の横穴墓の特徴

ｉ）はじめに

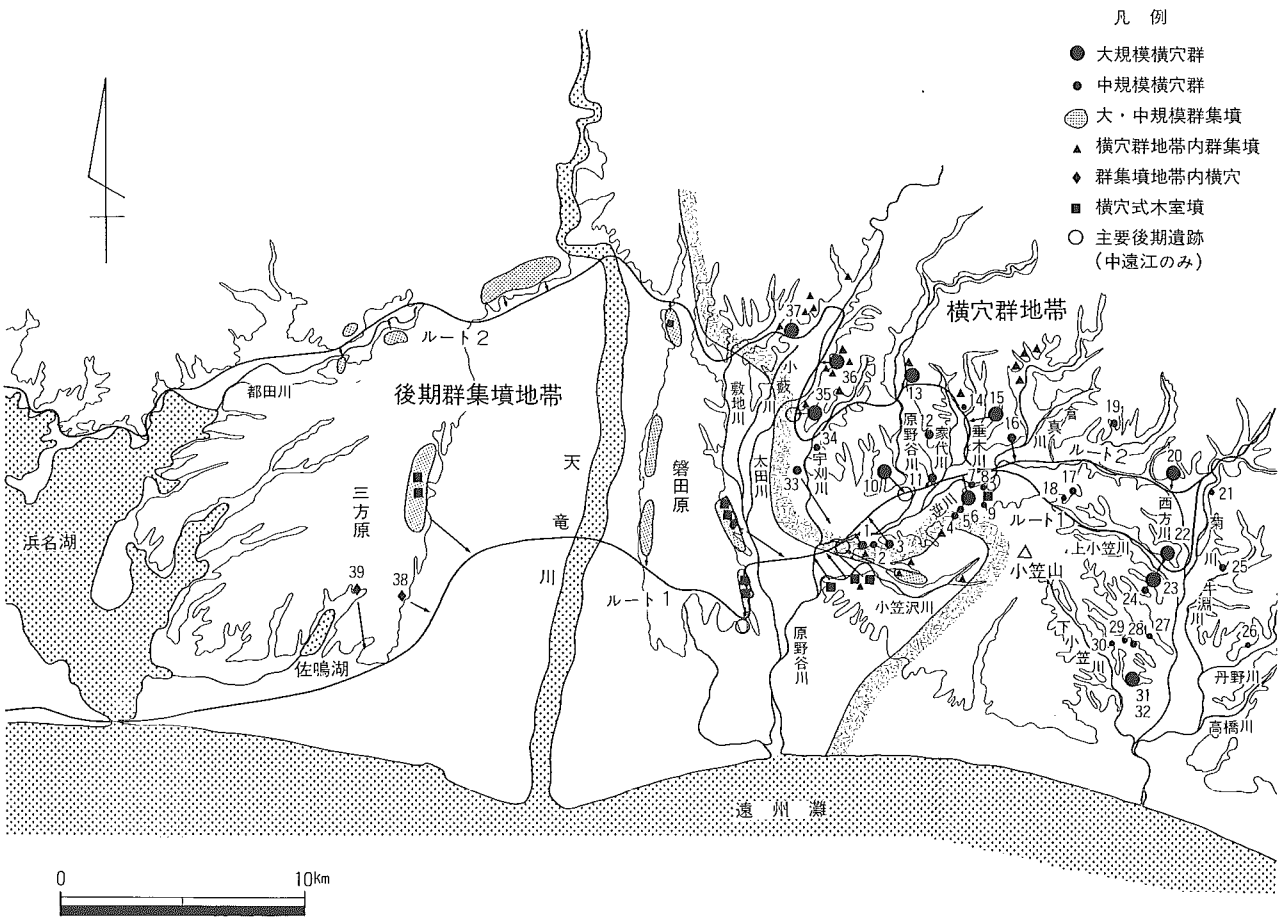
地蔵ヶ谷横穴群は、遠江地域において６世紀中葉から築造が始まる初期横穴墓を含む横穴群であること、単独の墓道をもつ横穴墓から６世紀後葉に方形の集合墓前域をもつ横穴墓の変遷過程を読み取ることができる横穴群として重要な資料を提供してくれた。遠江地域の初期横穴墓とⅣ期以降築造が始まる集合墓前域(以後方形墓前域と記述する。)の出現の問題についてはすでに検討しているため(松井一明　2001)、第３章において検討課題とした小単位群の内容の問題、Ⅳ期以前の小単位群が丘陵頂部に近い場所に占地されている理由を、墳丘をもつ横穴墓との立地条件の共通性について遠江地域での横穴墓との比較検討を行う。さらに、今回報告の地蔵ヶ谷横穴群や前々回報告の金山横穴群（袋井市教育委員会　1994）で提示した横穴墓の玄室平面形態・規模、木棺から見た遺体の埋葬位置と追葬、さらに改葬の存在といった問題点についても考察を行い、遠江地域における横穴墓の基本的構造についてのモデルを提示したい。

ⅱ）主要横穴群の小単位群分析

地蔵ヶ谷横穴群の小単位群に関しては、大きくはⅣ期以前の単独墓道をもつ１～６号横穴とⅣ期以後の方形墓前域をもつ７～27号墓に分けられた。Ⅳ期以前の単独墓道となる１～６号横穴に関しては２小単位群に分けられ、一部時期の分からない横穴墓もあるが、築造時期が異なる横穴墓が連続して築造された様子が見て取れることから、各横穴墓が同時造られたものではなくて、血縁集団による累代の２つの家族墓と考えたい。後続する方形墓前域をもつ７～27号墓についても、出土須恵器の時期がほぼ同時期のものも存在するが、微妙に時期差のあるものの存在を重視するならば、これらの小単位群についても累代の家族墓と認定される。よって大谷宏治氏により指摘された「Ⅳ期以前に形成された横穴群は同時期の横穴墓が群集し単位群を形成する傾向にある」との指摘（大谷宏治　2003）については、地蔵ヶ谷横穴群においては該当しないと考えたい。

では、同様にⅣ期以前の同時期築造からなる横穴群として大谷氏があげた逆川水系地域の茶屋辻横穴群、土橋横穴群はどうであろうか。さらに、菊川水系地域の宇藤横穴群や、Ⅳ期以降の原野谷川・逆川水系地域の原横穴群、金山横穴群、菊川水系の平尾野添横穴群についても分析してみたい。

まず、茶屋辻横穴群(掛川市教育委員会　2003)ではⅣ期以前の単独墓道をもつＡ－５・９～17号・Ｂ－１号横穴であり、Ａ－１～４・６～８号横穴はⅤ期以降の方形墓前域をもつ新しいタイプの小単位群と考えられる。Ⅳ期以前に築造された横穴墓の時期に関しては、Ａ－５号横穴（Ⅲ期)、Ａ－９号横穴（Ⅳ期)、Ａ－10号横穴（不明)、Ａ－11号横穴（Ⅳ期？)、Ａ－12号横穴（Ⅲ期)、Ａ－13号横穴（Ⅳ期)、Ａ－14号横穴（不明)、Ａ－15号横穴（不明)、Ａ－16号横穴（不明)、Ａ－17号横穴（Ⅲ期）となり築造時期不明の横穴墓が多く小単位群の認定に躊躇する。しかしながらあえて各横穴墓の時期や形態、位置関係から小単位群の抽出を試みると、Ａ－５号横穴はⅢ期の単独築造となり、Ａ－10号墓をⅢ期？築造と推測するとＡ－９号横穴がⅣ期築造で何れも平面形態縦長楕円形となる。Ａ－12号横穴がⅢ期築造でＡ－11号横穴がⅣ期築造で、Ａ－11号横穴が正方形、Ａ－12号横穴が横長楕円形となる。Ａ－14号墓がⅢ期？築造と推測するとＡ－13号横穴がⅣ期築造で何れも横長長方形となる。Ａ－15号横穴がⅢ期？の単独築造と推測され、平面形態縦長楕円形である。Ａ－17号横穴がⅢ期築造でＡ－16号横穴がⅣ期？築造と推測でき、Ａ－17号横穴が縦長長方形、Ａ－16号横穴は正方形となる。



1地蔵ヶ谷　2金山　3愛野向山　4キンベイヤダ　5城山　6大谷代・本村・新田・南坪　7向山・前山・山脇　8宇洞ヶ谷・山麓山　9堀ノ内　10菅ヶ谷　11岡津　12土橋　13楠ヶ谷　14別所・峯　15飛鳥　16原　17茶屋辻　18矢崎・鶴本　19大谷　20篠ヶ谷・大淵ヶ谷・西宮・山本　21下本所　22山田・杉森　23東平尾・政所　24平尾野添　25宇藤　26猿渡　27岩滑八ッ谷　28明僧　29玉体　30下土方青谷　31毛森山　32兼情　33ズン坂・八幡山　34道ヶ谷　35宇刈・春岡　36観音堂・観音寺本堂・谷口・藪内　37天王ヶ谷・宇藤　38作佐山　39東嶋

第58図　遠江の主要横穴群分布図

B－1号横穴がⅡ期で単独築造で横長長方形となる。よって茶屋辻横穴群の古いグループの横穴墓群については、1～2基の横穴墓からなる7小単位が抽出できそうである。推測した築造の横穴墓が確定できないと机上の空論となりかねない分析であるが、少なくとも近接する横穴墓同士で時期差が確実に存在する小単位群も含むため、地蔵ヶ谷横穴墓群と同様な時期差をもつ累代の家族墓からなる小単位群を有する横穴群と考えられる。天井形態はドーム天井が基本であり、平面形態は正方形・縦長長方形・横長長方形・縦長楕円形・横長楕円形などのバラエティが認められるものの、A－11・12号横穴以外は同一形態で変遷する小単位群となっている。平面形態のバラエティから見ると菊川水系地域と原野谷川・逆川水系地域の両方の地域の特徴を合わせもつこと、天井形態についてはドーム天井主体の菊川水系地域の影響が強く出ていると考えられる横穴群である。

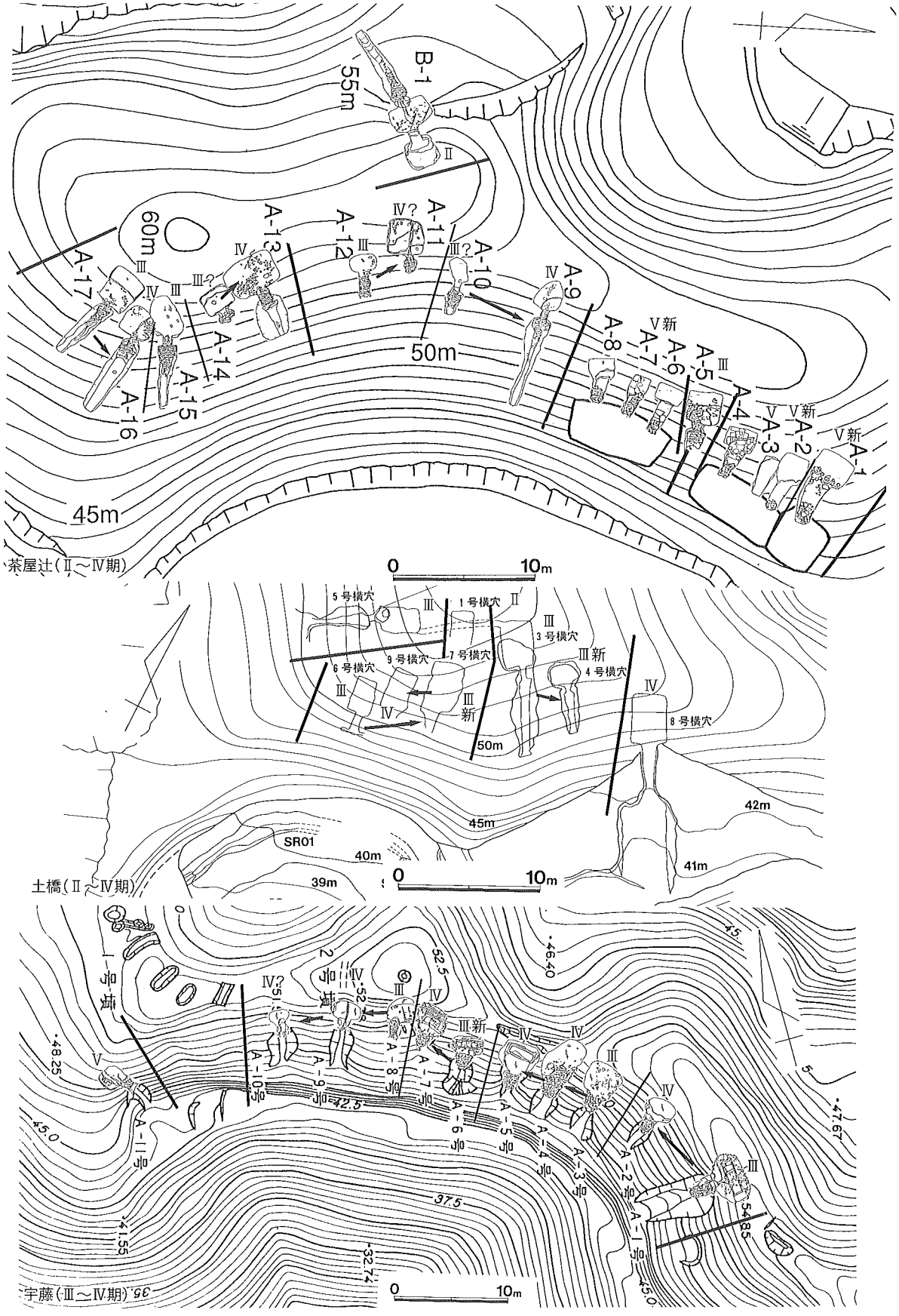
つぎに、土橋横穴群（掛川市教育委員会　1991）ではⅣ期以前の単独墓道をもつ横穴は、1～7・9号横穴であるが、8号横穴は単独ではあるが方形墓前域もつ新しいタイプの横穴墓である。各横穴墓の築造時期は、1号横穴（Ⅱ期）、3号横穴（Ⅲ期）、4号横穴（Ⅲ期新相）、5号横穴（Ⅲ期）、6号横穴（Ⅲ期）、7号横穴（Ⅲ期新相）、8号横穴（Ⅳ期）、9号横穴（Ⅳ期）となる。Ⅳ期以前の単独墓道をもつ各横穴墓の時期や形態、位置関係から小単位群の抽出の検討すると、1号横穴と5号横穴はⅡ期とⅢ期の単独築造で何れも平面形態縦長長方形となる。3号横穴がⅢ期築造とすると隣の4号

横穴がⅢ期でも新相の築造で、３号横穴が縦長長正方形、４号横穴が横長楕円形である。６号横穴がⅢ期築造で７号横穴がⅢ期新相の築造で、さらに９号横穴がⅣ期築造で何れも縦長長方形となることから、土橋横穴群からは１～３基の横穴墓からなる４小単位が抽出できそうである。Ⅲ期の微妙な時期差を認定したものの、少なくとも近接する横穴墓同士で時期差が確実に存在する小単位群も含むため、土橋横穴群についても地蔵ヶ谷横穴群と同様に、累代の家族墓と考えられる小単位群を構成する横穴群と考えられる。平面形態は各小単位群とも尖頭アーチ・アーチ天井の縦長長方形の形態で変遷する小単位群が基本であるが、３・４号横穴のようにアーチ天井の縦長長方形からドーム天井の横長楕円形に変化する小単位群も存在し、初期横穴墓である向山１号横穴のドーム天井で横長長方形の系譜の影響も見られ、原野谷川・逆川水系地域の特色を良く現している横穴群である。

最後に、宇藤横穴群（菊川町教育委員会　1996）ではⅣ期以前の単独墓道をもつ横穴墓はＡ－１～10号横穴があげられ、８号横穴は単独ではあるが方形の広い墓道（方形墓前域か？）をもつ新しいタイプの横穴墓と考えたい。Ⅳ期以前の横穴墓の築造時期に関しては、Ａ－１号横穴（Ⅲ期）、Ａ－２号横穴（Ⅳ期）、Ａ－３号横穴（Ⅲ期）、Ａ－４号横穴（Ⅳ期）、Ａ－５号横穴（Ⅳ期）、Ａ－６号横穴（Ⅲ期新相）、Ａ－７号横穴（Ⅳ期）、Ａ－８号横穴（Ⅲ期）、Ａ－９号横穴（Ⅳ期）、Ａ－10号横穴（Ⅳ期？）となる。各横穴墓の時期や形態、位置関係から小単位群の抽出を検討すると、Ａ－１号横穴はⅢ期築造で、Ａ－２号横穴がⅣ期築造で何れも平面形態横長楕円形となる。Ａ－３号墓がⅢ期築造でＡ－４号とＡ－５号横穴がⅣ期築造で、平面形態はＡ－３号が正方形、Ａ－４号が縦長楕円形、Ａ－５号が横長楕円形となる。Ａ－６号横穴がⅢ期新相築造、Ａ－７号横穴がⅣ期築造で、Ａ－６号が横長楕円形、Ａ－７号が正方形となる。Ａ－８号墓がⅢ期築造、Ａ－９号とＡ－10号横穴がⅣ期築造で、何れも横長楕円形となり、宇藤横穴群についても２～３基の横穴墓からなる４小単位が抽出できそうである。平面形態は、Ａ－３～５号横穴のように正方形～横長楕円形～正方形に目まぐるしく変化する小単位以外は、横長楕円形が基本形態で、天井形態についてもドーム天井が基本形態となっており、菊川水系地域の横穴墓の地域色をよく現している。

このように、遠江におけるⅣ期以前の単独墓道からなる横穴群に関しては、地蔵ヶ谷横穴墓群と同様の時期差をもつ累代の小単位群からなる横穴群と理解される。平面や天井形態については、各小単位群のなかで変化のないものと、めまぐるしく変わるものが存在する特徴がある。前者については茶屋辻横穴群、土橋横穴群、宇藤横穴群の小単位群なかで主体となるが、天井・平面形態が変化する小単位群が存在する理由としては、小地域間での人的交流の結果と考えたことがある（松井一明　1997）。すなわち、遠江においては尖頭アーチ・アーチ天井の長方形や正方形が基本形となる原野谷・逆川水系地域（Ａ地域）と、ドーム天井で楕円形が基本形となる菊川水系～相良地域（Ｂ地域）のなかでの血縁集団の人的交流の結果と考えられるのである（松井一明　2001）。しかしながら、同一の小単位群の中で形態変化が見られることは血縁集団の出自を現しているとは言い難い状況である。すでに述べたように遠江の初期横穴墓は、土橋１号横穴（Ⅱ期）のようにアーチ天井で縦長長方形（正方形）と、向山１号横穴（Ⅰ期）のようにドーム天井で横長長方形（楕円形）の２系統が見られ、Ⅳ期以前の横穴群ではこの系統差を血縁集団の出自を現すものとして確立されておらず、選択的に採用していた可能性が指摘されるのである。しかしながら、宇藤横穴群と土橋横穴群で見られたように、Ⅲ期段階では地域色が存在することは明らかであるため、横穴墓の形態を血縁集団の出自を現すものとしての指向は確立されつつあったと見られるのである。

次に、Ⅳ期以降の方形墓前域をもつ新しいタイプの横穴墓群についての小単位の検討を試みたい。この時期の横穴群としては代表的な大谷横穴群や観音堂横穴群についてはすでに大谷氏による詳細な



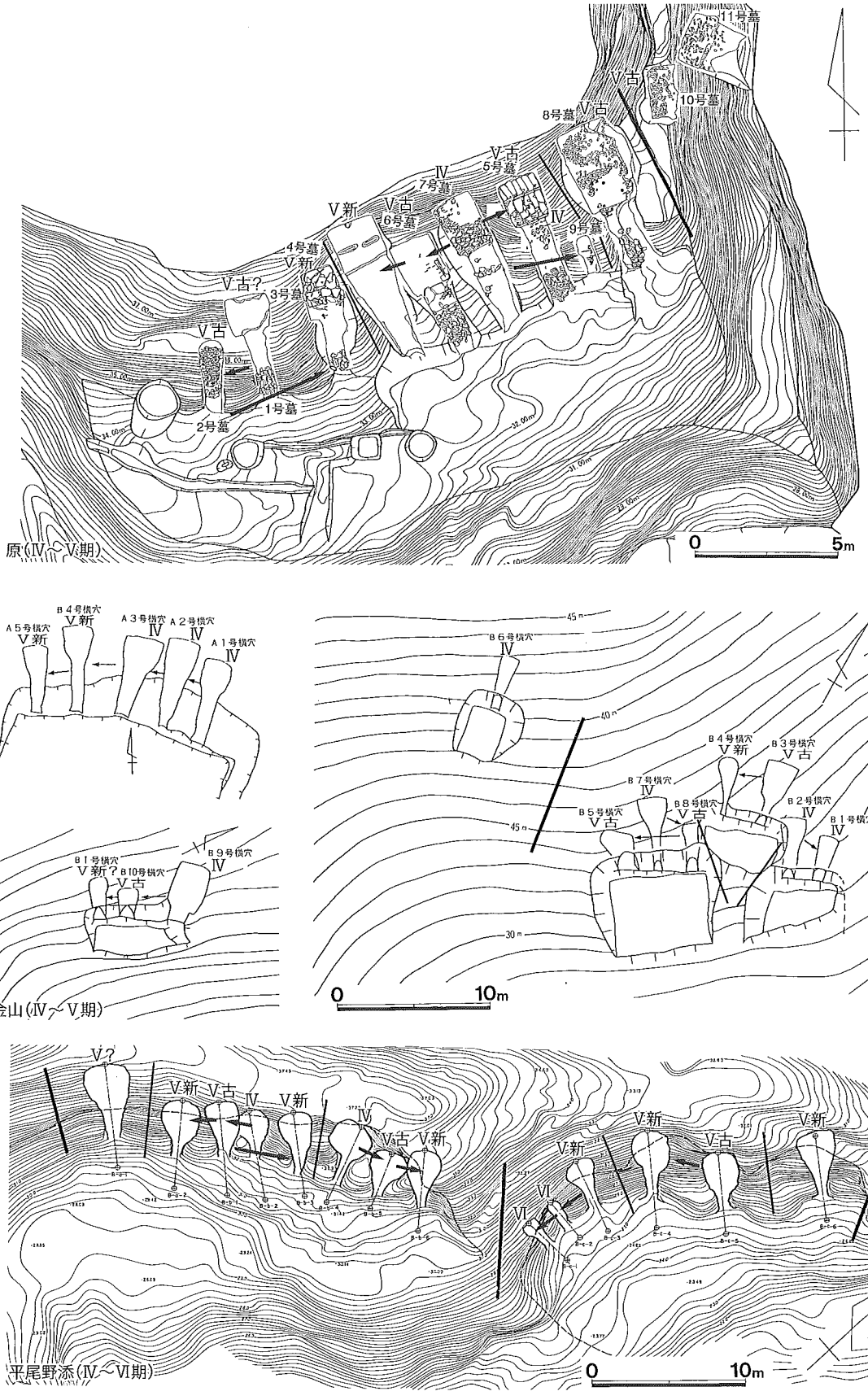
第59図　単位群分析横穴群1

分析（大谷　2001・2003）が行われているため、今回は茶屋辻横穴群、原横穴群、金山横穴群、平尾野添横穴群について検討を試みたい。

まず、茶屋辻横穴群（掛川市教育委員会　2002）のなかでⅣ期以降に築造されたと考えられる方形墓前域をもつA－1～4号・A－6～8号が新しい小単位群として認定される。方形墓前域から見るとA－1号横穴は単独、A－2～4号横穴、A－6～8号横穴の3小単位群が抽出することが可能である。各横穴墓の築造時期に関しては、A－1号横穴（Ⅴ期新相）、A－2号横穴（Ⅴ期新相）、A－3号横穴（Ⅴ期）、A－4号横穴（不明）、A－6号横穴（不明）、A－7号横穴（Ⅴ期新相）、A－8号横穴（不明）となる。時期不明のものが多く、各小単位群の中で時期差を認定するのには躊躇するがあえて検討すると、A－4号横穴はⅤ期古相以前の築造であるならばその後A－2号墓のⅤ期新相からA－3号横穴への築造順位を認めることができる。平面形態はA－4号横穴が横長長方形、A－2号横穴が正方形、A－3号横穴が無袖バチ形と変化する。同様にA－6号横穴がⅤ期古相以前の築造と仮定できるならば、隣接するA－7・8号横穴がⅤ期新相の築造となる築造順位が与えられる。平面形態はA－6号横穴が横長長方形であるのに対して、袖が崩れたA－8号横穴は正方形、A－7号横穴が縦長長方形に変化している。A－1号横穴についてⅤ期新相？に築造された横長長方形の単独の横穴墓からなる小単位と認定した。このように、茶屋辻横穴群のⅣ期以降に築造された方形墓前域をもつ小単位群については、1～3基の横穴墓からなる累代の3小単位が抽出できた。平面形態は横長長方形が基本であるが、2つの小単位群は縦長長方形や正方形に変化している。天井形態も尖頭アーチ・アーチ天井が基本であることから見ると原野谷川・逆川水系の特徴を良く示すことから、Ⅳ期以降の新しい小単位群の横穴墓は菊川水系地域と同様の地域色にはならない。

原横穴群（掛川市教育委員会　2002）では墓前域から見ると1～3号横穴、4～9号横穴、10・11号横穴の3小単位群が抽出することが可能である。各横穴墓の築造時期に関しては、1号横穴（Ⅴ期古相？）、2号横穴（Ⅴ期古相）、3号横穴（Ⅴ期新相）、4号横穴（Ⅴ期新相）、5号横穴（Ⅴ期古相）、6号横穴（Ⅴ期古相）、7号横穴（Ⅳ期）、8号横穴（Ⅴ期古相）、9号横穴（Ⅴ期古相）、10号横穴（Ⅴ期古相）、11号横穴（不明）となる。各横穴墓の時期や形態、方形墓前域の共有からさらに小単位群の抽出の検討すると、1号横穴はⅤ期古相の築造で2号墓のⅤ期古相から3号墓のⅤ期新相への築造順位が認められた。平面形態は2号横穴が無袖縦長形、3号横穴が正方形、4号横穴が縦長長方形と変化するが基本は方形であると考えられる。同様に7号墓がⅣ期築造と古く隣接する6号と5号横穴がⅤ期でも古相の築造で、さらに4号横穴がⅤ期新相の築造となる変遷が辿れる。平面形態は何れも縦長長正方形が基本となるようであるが、9号横穴のように無袖縦長形のものも含む小単位群がある。8号横穴は墓前域に段差が認められるため、単独の横穴墓からなる小単位と認定した。10号横穴はⅤ期古相で11号横穴とはレベル差があるため、それぞれ単独の横穴墓からなる小単位と認定した。このように、原横穴群については1～5基の横穴墓からなる累代の5小単位が抽出できそうである。玄室平面形態は無袖を2基含むが、基本は尖頭アーチ天井の縦長長方形であると考えられ、この平面・天井形態は太田川水系、原野谷川上流地域の特徴を良く示す形態である。

金山横穴群はすでに分析したとおり（袋井市教育委員会　1996）、異なる谷に築造されたA群とB群の2つの横穴群からなり、B群については同一の谷に築造されるが位置の異なるB1～6号横穴とB9～11号横穴の2単位群に分けられた。墓前域から見るとA群はA1～5号横穴群の1小単位群、B群についてはB1・B2号横穴、B3・B4号横穴、B5～B8号横穴、B6号横穴、B9～11号横穴の5小単位群が抽出することが可能である。各横穴墓の築造時期に関しては、A1号横穴（Ⅳ期）、A2号横穴（Ⅳ期）、A3号横穴（Ⅳ期）、A4号横穴（Ⅴ期新相）、A5号横穴（Ⅴ期新相）、B1号



第60図　単位群分析横穴群２

横穴（Ⅳ期）、Ｂ２号横穴（Ⅳ期）、Ｂ３号横穴（Ｖ期古相）、Ｂ４号横穴（Ｖ期新相）、Ｂ５号横穴（Ｖ期古相）、Ｂ６号横穴（Ⅳ期）、Ｂ７号横穴（Ⅳ期）、Ｂ８号横穴（Ｖ期古相）、Ｂ９号横穴（Ⅳ期）、Ｂ10号横穴（Ｖ期古相）、Ｂ11号横穴（不明）となる。各横穴墓の時期や形態、方形墓前域の共有からさらに小単位群の抽出の検討をすると、Ａ１号横穴はⅣ期の築造で隣接するＡ２号・３号墓のⅣ期からＡ４号・５号墓のＶ期新相への築造順位が認められた。平面形態はＡ１号横穴が縦長長方形、Ａ２号とＡ５号横穴が無袖バチ形、Ａ３号・Ａ４号横穴が台形となり小単位のなかでは形態変化が激しい。Ｂ群では２号横穴がⅣ期築造で隣接するⅣ期築造のＢ１号横穴、Ｂ３号横穴がＶ期でも古相の築造でさらに４号横穴がＶ期新相の築造、Ｂ７号横穴がⅣ期築造でＢ８号とＢ５号がＶ期古相の築造、Ｂ６号横穴はⅣ期単独の築造、Ｂ９号横穴はⅣ期の築造で、Ｂ10号横穴Ｖ期古相からＢ11号横穴への変遷が辿れる。平面形態はＢ１号とＢ２号横穴はいずれも無袖バチ形、Ｂ３号横穴は縦長長方形、Ｂ４号横穴は無袖バチ形、Ｂ６号・Ｂ７号・Ｂ８号横穴はいずれも無袖バチ形、Ｂ６号横穴は無袖バチ形、Ｂ９号横穴は縦長長方形であるのに対して、Ｂ10号とＢ11号横穴は無袖縦型となるため、無袖バチ形の基本となる小単位群と、縦長長方形から無袖バチ形か無袖長方形に変化する小単位群の２系統が認められ後者が主体となることが判明した。このように、Ａ群は５基の横穴墓からなる累代の１小単位が、Ｂ群については１～３基の横穴墓からなる累代の５小単位が抽出できそうである。小単位群のなかでの玄室平面形態の変化は縦長長方形や台形が古そうであるが、尖頭アーチ・アーチ天井の無袖バチ形が基本形態となっており、原野谷川・逆川水系の横穴墓の特徴を良く示している。

最後に、平尾野添横穴群（静岡県埋蔵文化財研究所　1992）を検討する。本横穴群では小単位群を識別可能とする明確な方形墓前域をもたないが、各横穴墓全面に広がる方形墓前域状の平坦地と各横穴墓の位置関係から見ると、Ｂ－ａ－１号～Ｂ－ｂ－６号横穴とＢ－ｃ－１号～Ｂ－ｃ－６号横穴の２群に分けられる。各横穴の築造時期を検討すると、Ｂ－ａ－１号横穴（Ｖ期？）、Ｂ－ａ－２号横穴（Ｖ期新相）、Ｂ－ｂ－１号横穴（Ｖ期古相）、Ｂ－ｂ－２号横穴（Ⅳ期）、Ｂ－ｂ－３号横穴（Ｖ期新相）、Ｂ－ｂ－４号横穴（Ⅳ期）、Ｂ－ｂ－５号横穴（Ｖ期古相）、Ｂ－ｂ－６号横穴（Ｖ期新相）、Ｂ－ｃ－１号横穴（Ⅵ期）、Ｂ－ｃ－２号横穴（Ⅵ期）、Ｂ－ｃ－３号横穴（Ｖ期新相）、Ｂ－ｃ－４号横穴（Ｖ期新相）、Ｂ－ｃ－５号横穴（Ｖ期古相）、Ｂ－ｃ－６号横穴（Ｖ期新相）となる。さらに、各横穴墓の時期や形態、位置関係から小単位群の抽出の検討すると、Ｂ－ａ－１号横穴はＶ期？の築造で単独、Ｂ－ｂ－２号横穴はⅣ期の築造で隣のＢ－ｂ－１号墓のＶ期古相からＢ－ａ－２号墓とＢ－ｂ－３横穴のＶ期新相への築造順位が認められた。平面形態はＢ－ａ－１号横穴が無袖バチ形、Ｂ－ｂ－２号横穴が縦長楕円形であるのに対して、Ｂ－ｂ－１号横穴が無袖バチ形へと変化し、Ｂ－ｂ－３号横穴が無袖バチ形、Ｂ－ａ－２号横穴が縦長楕円形となるため、無袖バチ形と縦長楕円形が基本形態になると考えられる。同様にＢ－ｂ－４号墓がⅣ期築造と古く隣接するＢ－ｂ－５号がＶ期古相、さらにＢ－ｂ－６号横穴がＶ期新相の築造となる変遷が辿れる。平面形態はＢ－ｂ－４・５号横穴までが横長楕円形であるのに対して、Ｂ－ｂ－６号横穴では縦長楕円形に変化している。Ｂ－ｃ－３号横穴墓はＶ期新相の築造で隣接するＢ－ｂ－２・１号横穴はⅥ期の築造となる変遷が読み取れた。平面形態はＢ－ｃ－３号横穴が横長楕円形であるのに対して、無袖縦長形と無袖バチ形のＢ－ｂ－２・１号横穴に形態変化と小型化が見られる。Ｂ－ｃ－５号横穴墓はＶ期古相の築造で隣接するＢ－ｂ－４号横穴はＶ期新相の築造となる変遷が読み取れた。平面形態はＢ－ｃ－４号横穴が縦長楕円形であるのに対して、Ｂ－ｂ－４号横穴は縦長楕円形に形態変化している。Ｂ－ｃ－５号横穴は無袖バチ形のＶ期新相の単独の築造である。このように、平尾野添横穴群については１～４基の横穴墓からなる累代の６小単位が抽出できそうである。小単位群のなかでの玄室平面形態の変化は著しく、いずれの

小単位群でも同一形態となるものはない。平面・天井形態の基本はドーム天井の楕円形と無袖バチ形であり、Ⅳ期以降も引き続き菊川水系地域の横穴墓の特徴を良く示している。

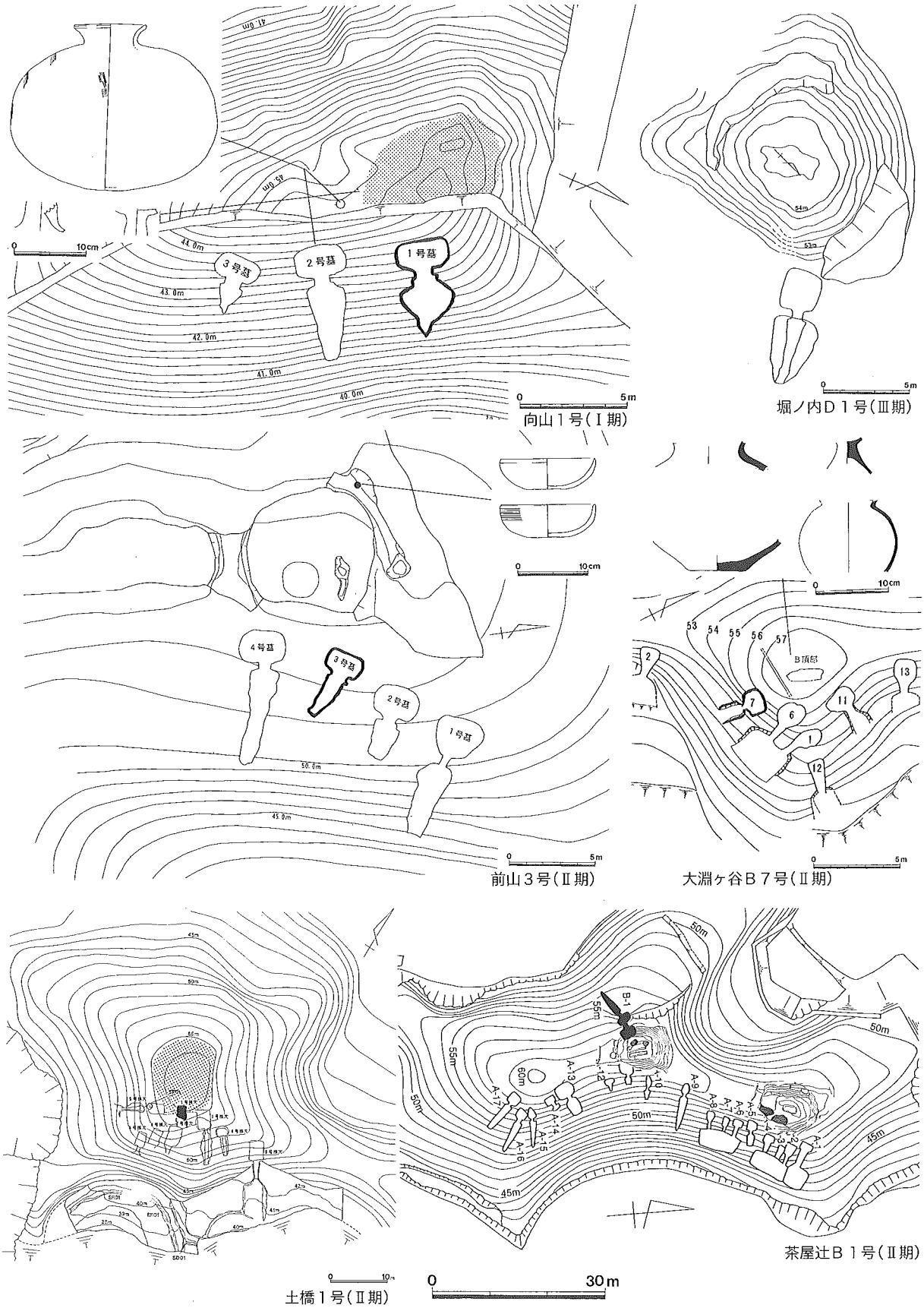
以上のように遠江のⅣ期以降の横穴群に関しても１～５基程度の横穴墓からなる小単位群の抽出が可能であり、各小単位群を累代の家族墓と認定することができる。よって、Ⅳ期以前の横穴群の小単位群との質的変化を見て取ることはできなかった。玄室平面形態に関しては地蔵ヶ谷横穴群のように同一形態の横穴墓からなる小単位群を多く含む横穴群は少なく、茶屋辻横穴群、金山横穴群、平尾野添横穴群のように平面形態の変化が見られる小単位群を多く含む横穴群が主体を占めている。ただし、Ⅳ期以前の横穴群のように小単位群なかで天井形態の異なる横穴への変化や、平面形態も長方形・正方形から楕円形に変化するものはない。つまり、菊川水系地域の特徴であるドーム天井で玄室平面形態楕円形の横穴墓と、原野谷川・逆川水系地域の特徴である尖頭アーチ・アーチ天井で平面形態正方形・長方形の横穴墓が同一の小単位群のなかに含まれることはないのである。よって、こうした小単位群の特徴から見ると、大谷氏が主張したように地域間における血縁集団の出自を横穴墓の天井・平面形態で現しているといえるのである（大谷宏治　2003)。となれば、Ⅳ期以前の小単位群のなかでの地域間形態の混在状況からは、血縁集団の出自を横穴墓の玄室天井・平面形態で具現化する墓制が確立されておらず、２系統の初期横穴墓の形態を被葬者が選択的に採用していた余地を残していたと想定されるのである。

ⅲ）墳丘をもつ横穴墓

東海地域における墳丘をもつ横穴墓の存在の可能性については、池上悟氏が近年指摘したものである（池上悟　2000)。池上氏によると菊川町大淵ヶ谷横穴Ｂ７号横穴、下本所横穴群で見られた丘陵上の高まりに着目して、北部九州や山陰地域に見られる墳丘をもつ横穴墓との関係に注目した。第61図に示した通り大淵ヶ谷横穴Ｂ７号横穴丘陵上の墳丘については、主体部と思われる土坑から横穴墓より古い段階の土器が出土したので、この墳丘に関しては当地域においては普遍的に見られる初期群集墳の小円墳であったと思われる。しかしながら、池上氏はこれを初期群集墳の再利用を行った墳丘をもつ横穴墓と考えた。下本所横穴群については正式報告がないうえに墳丘状の高まりが調査されているかどうかも定かでないため、この墳丘状の高まりが古墳であったのか、横穴墓の墳丘であったのか、現状の報告（内藤晃他　1968）の中ではまったく判断ができない状況である。

では、遠江地域では墳丘をもつ横穴墓はなかったのというと、近年の調査で墳丘をもつ横穴墓が確認されつつある。地蔵ヶ谷横穴群や茶屋辻横穴群でも、Ⅳ期以前の横穴墓が丘陵頂部に近い位置に築造されるのに対して、Ⅳ期以降の新しい横穴群についてはその下の位置に築造される傾向から考えると、Ⅳ期以前の横穴墓のなかに墳丘をもつ横穴墓の立地条件と合致する傾向が読み取れるのである。地蔵ヶ谷横穴群では３号墳が明らかに初期群集墳であるため、墳丘をもつ横穴墓が含まれていると確信はもてないが、池上氏が主張するような古墳の再利用であったことを否定することもできない。

今のところ古墳の再利用ではなくて、主体部がない墳丘状の高まりや周溝をもち、横穴墓と同時期の土器が墳丘から出土している例として、第61図に示したように前山３号横穴（Ⅱ期）の例（掛川市教育委員会　2003）をあげることができる。また、向山１号横穴（Ⅰ期）についても周溝は検出されなかったものの墳丘状の高まりの裾部から横瓶が出土しており（掛川市教育委員会　2003)、墳丘をもつ横穴墓の可能性が指摘される。さらに、堀ノ内Ｄ１号横穴のように主体部をもたない墳丘状の削り出しが見られる横穴墓についても、墳丘をもつ横穴墓の可能性が前田庄一氏により指摘されている（前田庄一　2001)。このような資料から見ると、土橋１号横穴（Ⅱ期）の墳丘状の高まりも、下本所横穴



第61図　墳丘横穴墓集成図

群と同様な立地条件を示し、墳丘をもつ横穴墓と認定しうるものかもしれない。また、茶屋辻Ｂ１号横穴（Ⅱ期）の丘陵上に位置する初期群集墳の古墳が、横穴墓の墳丘として再利用されていた可能性も否定できないであろう。

以上のように遠江における墳丘をもつ横穴墓の可能性については、菊川上流域と原野谷川・逆川流域地域のⅠ～Ⅲ期の横穴墓群中の最初に築造される横穴墓のみに伴うもので、北部九州や山陰地域のように墳丘をもつ横穴墓が群集して存在する状況にはない。また、横穴墓専用の墳丘ではなくて初期群集墳の古墳を再利用している可能性も考慮いれるべきで、今後の調査で初期群集墳の古墳から横穴墓と同時期の土器が確認されるかどうかが要検討課題となる。

ただし、Ⅳ期以降の新しいグループの横穴群については、遠江では明らかに丘陵頂部より低いレベル位置に占地する場合が多く見られることから、これらの横穴群中には墳丘をもつ横穴墓が存在する可能性は低いと考えられるので、池上氏が取り上げた三重県の四日市市広永城跡遺跡の横穴群や藤沢市代官山横穴群などの東海～東国地域でのⅣ期以降の新しいグループの横穴群に墳丘が伴う横穴墓（池上悟　1999）が存在するかどうか、遠江地域からは積極的に支持できる状況にはない。もし存在するのであれば、遠江とは別のルートを考えるべきであり、今後の検討課題となろう。

ⅳ）木棺の位置と改葬横穴墓

木棺の位置と横穴墓の玄室平面形態の関係については、原野谷川中流域・逆川流域地域において(1)木棺位置が縦置型、玄室平面形態は縦長の長方形（正方形）で、玄室横断面形態が横長の尖頭アーチ形とアーチ形となる横穴墓、(2)木棺位置が横置型、玄室形態は横長長方形（正方形･楕円形）、玄室横断面形態はドーム形になる主要形態となること。菊川流域地域では(2)の形態が主体となり、太田川流域地域では(1)木棺位置が縦置型、玄室形態は縦長長方形、玄室横断面形態は縦長の尖頭アーチ形が主体で、(2)木棺位置が横置型、玄室形態は横長長方形、玄室横断面形態は縦長の尖頭アーチ形のものと、(3)玄室形態と玄室横断面形態は同一であるが木棺位置が横置型のものが小数存在していることをかつて指摘した（松井　1997）。すなわち、遠江の横穴墓の木棺位置については原野谷川中流域･逆川流域地域と太田川流域地域では縦置型が主体で小数の横置型木棺位置の横穴墓が伴う地域、菊川流域地域では横置型が主体で小数の縦置型木棺位置の横穴墓が伴う地域となる地域色が存在するのである。しかしながら、提示した資料数は少なく大まかな傾向の指摘に留まったので、個々の木棺位置の分かる横穴墓の具体的な状況を説明するに至らなかった。今回は遠江地域で木棺の位置のわかる資料の集成を行い、木棺位置の背景にある地域色と改葬墓の検討課題について考察してみたい。

遠江においては原位置を保つ人骨や木棺本体が出土している横穴墓は少ないため、第62図～第68図に石棺（作り付けを含む）や、棺台や棺床（礫・板石等）で木棺の位置を推定できた横穴墓をできるだけ集成した。まず、遠江の横穴墓では木棺本体か検出されている例はないので、駿河の99～101の伊庄横穴群南谷６・７・17号横穴をあげてみた。とくに、６号・17号横穴の木棺については良好な資料で、いずれの木棺も全長2.5m以上、小口板間の内部長２m前後を測るため、成人を埋葬するための組合式箱形木棺の実物が確認できた。木棺の位置も、玄室平面形態が縦長長方形で、木棺は縦置型になる好例としてあげられる。

原野谷川中流域・逆川流域地域における木棺の位置が分かる横穴墓の例として、１～28をあげてみた。１～３は当地域では初期横穴墓である向山１号横穴（Ⅰ期）、茶屋辻１号横穴（Ⅱ期）、前山３号横穴（Ⅱ期）の例で、何れも玄室平面形態が横長長方形で、玄室内部の規模が約横２×縦１mとなるため成人埋葬ならば明らかに横置型の木棺位置になるものであろう。それを裏付ける資料として玄室

形態が隅丸方形になった４・５の堀ノ内１・２号横穴の棺床（屍床）を見るかぎり横置型を示している。17の矢崎Ｂ５号横穴については、玄室形態横長楕円形になるもので人骨が横置型で伸展葬されていることが分かる好例である。同様に玄室平面形態が正方形を示す８の城山横穴についても、横置型の棺床（屍床）に伸展葬の人骨が遺存していた。この２例からは木棺の痕跡は確認されていないため、木棺以外の埋葬用容器を考えさせる資料である。城山横穴のようなⅢ期の玄室平面形態が正方形のものについては、茶屋辻Ａ５号横穴のように横置型の棺床（屍床）が見られるものが存在することから、正方形は横長長方形・横長楕円形と同様に横置型の木棺位置が基本であったようである。ただし、玄室平面形態が正方形でも９・13・26のような片袖を意識した横穴墓は、縦置型の棺床（屍床）や礫床が確認されるので、これらは縦置型の木棺位置が基本になるようである。

初期横穴墓のうちでも玄室平面形態が縦長長方形の指標となる６の土橋１号横穴（Ⅱ期）の礫床からは、縦置型の木棺位置を示す基本資料になると思われる。また、14のように天井形態ドーム型であるものの宇洞ヶ谷横穴についても縦置型の造付石棺が確認された。長谷１号横穴でも縦置型を思わせる板石敷の棺床が見られ、玄室形態縦長長方形での木棺位置の基本は縦置型と考えられるのである。しかしながら、１段階降るⅢ期の土橋７号横穴や茶屋辻Ａ17号横穴では玄室平面形態が縦長長方形であるにもかかわらず、横置型を思わせる棺床（屍床）が見られる。この横置型木棺位置を示す棺床（屍床）については、11のキンペイヤダＤ１号横穴、16の原７号横穴でも確認されることから、玄室平面形態が縦長長方形のなかにも横置型の木棺位置の横穴墓が、Ⅳ期まで少ないながらも一定量存在していたと考えられる。

Ⅳ期以降の新しい段階になると、玄室平面形態が縦長長方形ではあるが15の岡津Ｂ６号横穴、25の金山Ｂ３号横穴のように玄室の玄門部の幅に対して奥壁幅のほうが僅かに広くなる縦長台形とでもいえる形態のもの、18の矢崎Ａ３号横穴、23・24の金山Ａ４号・Ｂ２号横穴のような台形や無袖バチ型のように玄門部より奥壁幅のほうが広くなる玄室形態のものについては板石敷や礫の棺床の範囲から検討すると横置型の木棺位置になるものが基本となるようである。しかしながら、小型の無袖長方形や小型の台形や無袖バチ形の横穴墓は、明らかに縦置型の位置にならざるをえないため、これら形態のすべてが横置型の木棺位置になる横穴墓とも思えない。ちなみに、地蔵ヶ谷横穴群の分析では台形２基のうち横置型木棺位置と復元できたのは１基、無袖バチ型では10基中横置型木棺位置と復元できたのは５基で、この形態での横置型の木棺位置はほぼ50％になる数値となった。また、19の茶屋辻Ａ４号横穴のように玄室平面形態が横長長方形や地蔵ヶ谷13号横穴のような横長楕円形についても、当然のことながら横置型の木棺位置になる横穴墓と考えられる。

このように原野谷川中流域・逆川流域地域でのⅣ期以降の横穴墓については、台形や無袖バチ形などの新たな玄室形態の伝播が考えられ、その中には50％前後の横置型の木棺位置のものが含まれていると推測される。すなわち、Ⅲ期以前の玄室平面形態が縦長系では縦置型、横長系では横置型の木棺位置となるため、基本的には玄室形態と木棺位置が一致する傾向になる。これに対してⅣ期以降の新しい横穴群のなかには縦長系のなかにも横置型の木棺位置が増加する傾向が読み取れる。この変化は棺床の範囲がかなり狭くなることを示し、伸展葬の木棺位置を想定する横穴墓が減少してくる現象と理解され、改葬墓の問題と関わると考えられるがこの点については後に考察をおこなう。

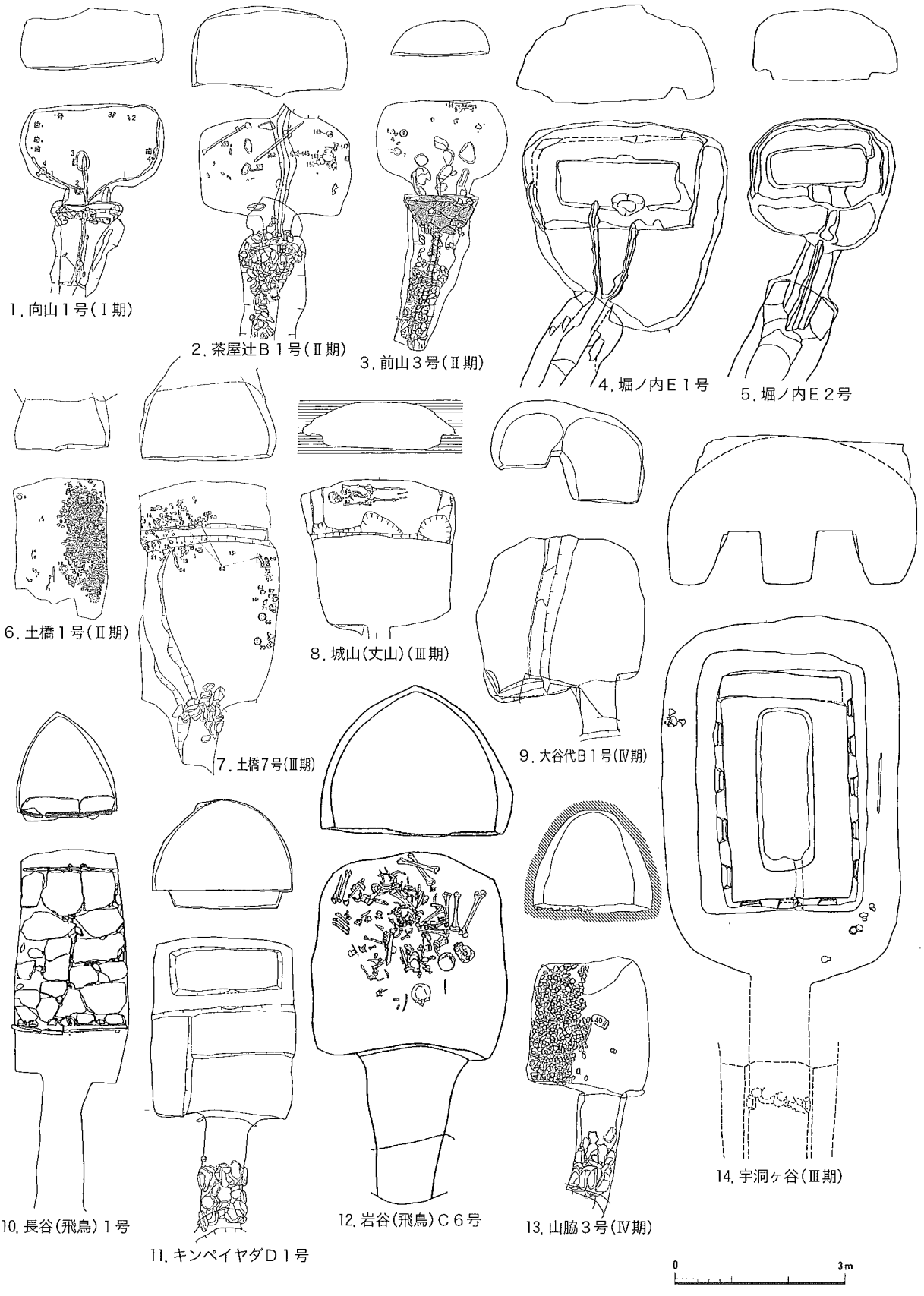
次に菊川流域地域の横穴墓の木棺位置について検討を進める。この地域の横穴墓は石棺が採用される横穴墓が多く、確実に棺の位置を掌握できそうな横穴墓を31～86に集成した。先述したとおりこの地域の基本形態である玄室平面形態は横長長方形と楕円形で、初期に近いⅢ期段階では33～35の宇藤Ａ１・Ａ５号・Ａ６号横穴では横置型の石棺、70のⅢ期の下土方青谷２号横穴では横置型の礫石囲

（礫床？）が認められた。同じくこの地域で初期横穴墓となる玄室平面形態が正方形になるものは、Ⅱ期の41の大淵ヶ谷Ｂ７号横穴と、Ⅲ期？の31下本所Ｂ８号横穴で横置型位置の石棺が認められた。ただし、下本所Ｂ８号横穴については、最終追葬に関しては縦置型位置の石棺が認められ、追葬時に石棺位置の変更がなされたことがわかる例である。同様な例としては玄室平面形態が正方形の54のⅣ期の西宮浦２号横穴は縦置型から横置型位置の石棺への変更、65のＶ期の杉森Ｄ10号横穴は縦置型から横置型位置の板石敷棺床への変更、71のⅣ期の玉体２号横穴は横置型から縦置型位置の石棺への変更、横長楕円形のものとして38のⅣ期の大淵ヶ谷Ａ11号横穴では横置型から縦置型位置の石棺で、最終追葬は横置型位置の板石敷棺床、無袖バチ型のものとして82の明僧Ｃ５号横穴の横置型から縦置型位置の石棺への変更が認められた。このような、石棺位置の変更を伴う追葬が認められるのは早くもⅢ期以降で認められるが、Ⅳ期以降増加することが確認できた。

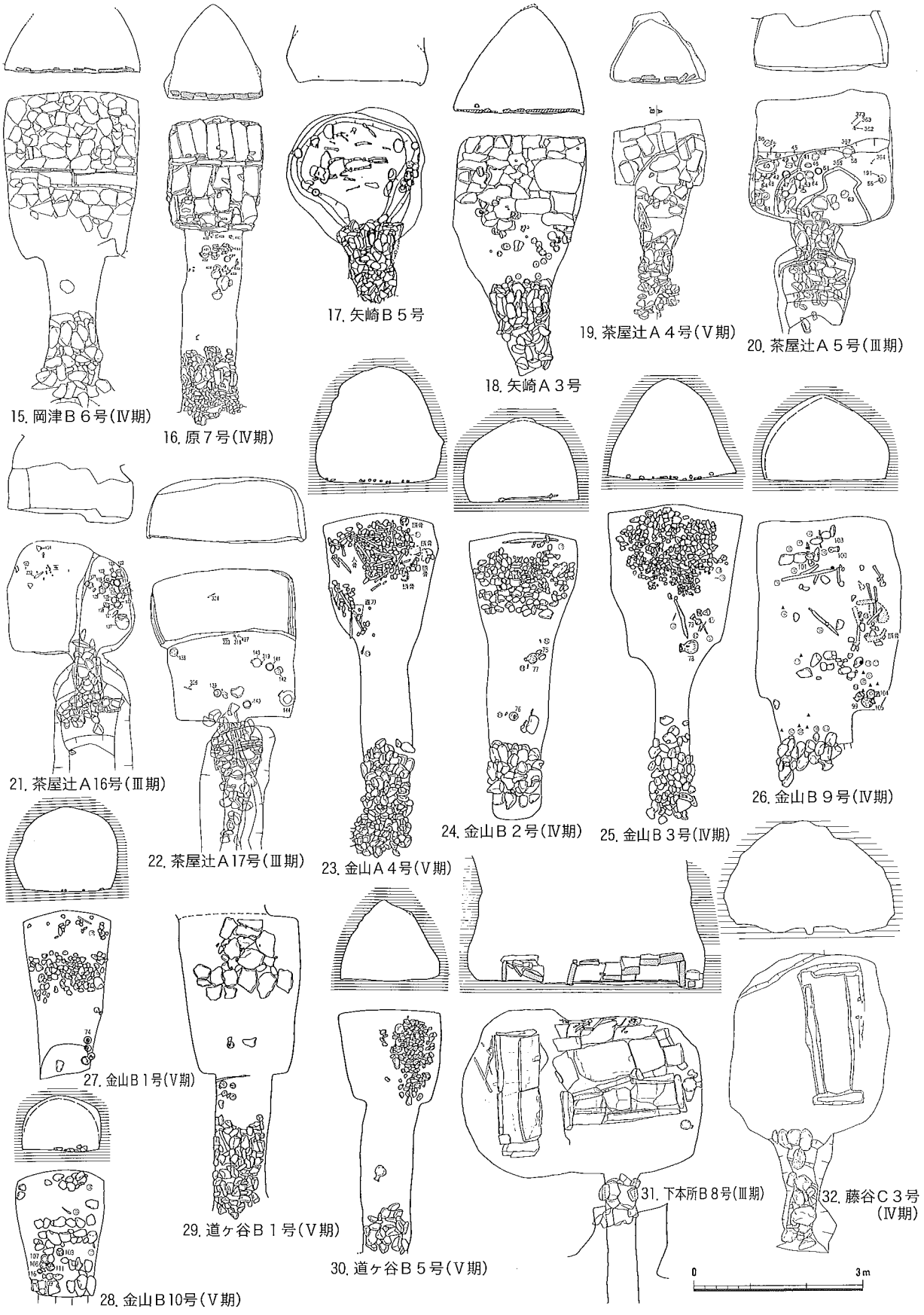
この地域でⅡ～Ⅲ期に属する縦置型の石棺位置を示すものは、42のⅢ期の大淵ヶ谷Ｃ１号横穴のように玄室平面形態は縦長楕円形で縦置型に近い斜行した位置の石棺が見られるものが確認される。同様の例としては43のＶ期の大淵ヶ谷Ｃ２号横穴でも見られるため、Ⅳ期以降にも存在する系譜と考えられる。ただし、39のⅣ期の大淵ヶ谷Ｂ１号横穴のように玄室平面形態は縦長楕円形で確実な縦置型の石棺として確認できるものも存在するため、Ⅲ期以前の縦長楕円形の横穴墓にも斜行のものだけでなく、縦置型位置の木棺が存在していた可能性が指摘しうる。

さらに、この地域でのⅣ期以降の新しい横穴墓について検討を進めたい。まずこの地域のⅢ期以前からの基本形である玄室平面形態が横長楕円形の横穴墓については、58のＶ期の東平尾しいでの谷Ａ３号横穴、60のＶ期の平尾野添Ｂｂ６号横穴、67のＶ期の政所Ｄ１号横穴、73のＶ期の玉体９号横穴、75・76のＶ期の毛森山Ａ４号・Ａ５号横穴、78・83の明僧Ａ１号・Ｃ６号、86の兼情３号横穴等のように横置型位置の石棺や板石敷棺床が認められるように、Ⅲ期以来変化のない横穴墓も多数存在する。ただし、46のＶ期の篠ヶ谷Ａ３号横穴のように横長楕円形にもかかわらず縦置型の石棺位置も小数認められ、何らかの変化も読み取ることができる。これに対してⅣ期以降の新しい形態で横置型位置の石棺や板石敷棺床、礫囲床が確認できる横穴墓としては、玄室平面形態が横長長方形である37の大淵ヶ谷Ａ１号、61・62のＶ期の杉森Ｄ２・Ｄ３号横穴、68の岩滑八ッ谷２号横穴、隅丸になるが台形ないし無袖バチ形になる57の東平尾しいでの谷Ａ１号横穴、63のＶ期の杉森Ｄ５号横穴、66の杉森Ｅ２号横穴、69の猿渡２号横穴、81・82・84の明僧Ｃ３号・Ｃ５号・Ｃ７号横穴等があげられる。玄室平面形態としてはいずれも原野谷川中流域・逆川流域地域で普遍的に見られる形態で、とくに後者の台形や無袖バチ形の横穴墓についてはⅣ期以降特徴的に出現するものである。よって、両地域でこれらの形態の横穴墓で横置型位置の木・石棺が採用されるという連動した状況を確認することができる。さらに、55のＶ期の東平尾橋本ヶ谷３号横穴の尖頭アーチ天井の縦長長方形の形態は原野谷川中流域・逆川流域地域で分布する横穴墓と同一形態で横置型の棺台を採用している状況と、無袖バチ形でも64の杉森Ｄ６号横穴のように玄室幅の狭いもののなかには縦置型の石棺を採用するものが小数存在することも、両地域での一連の連動する動きとして理解される。

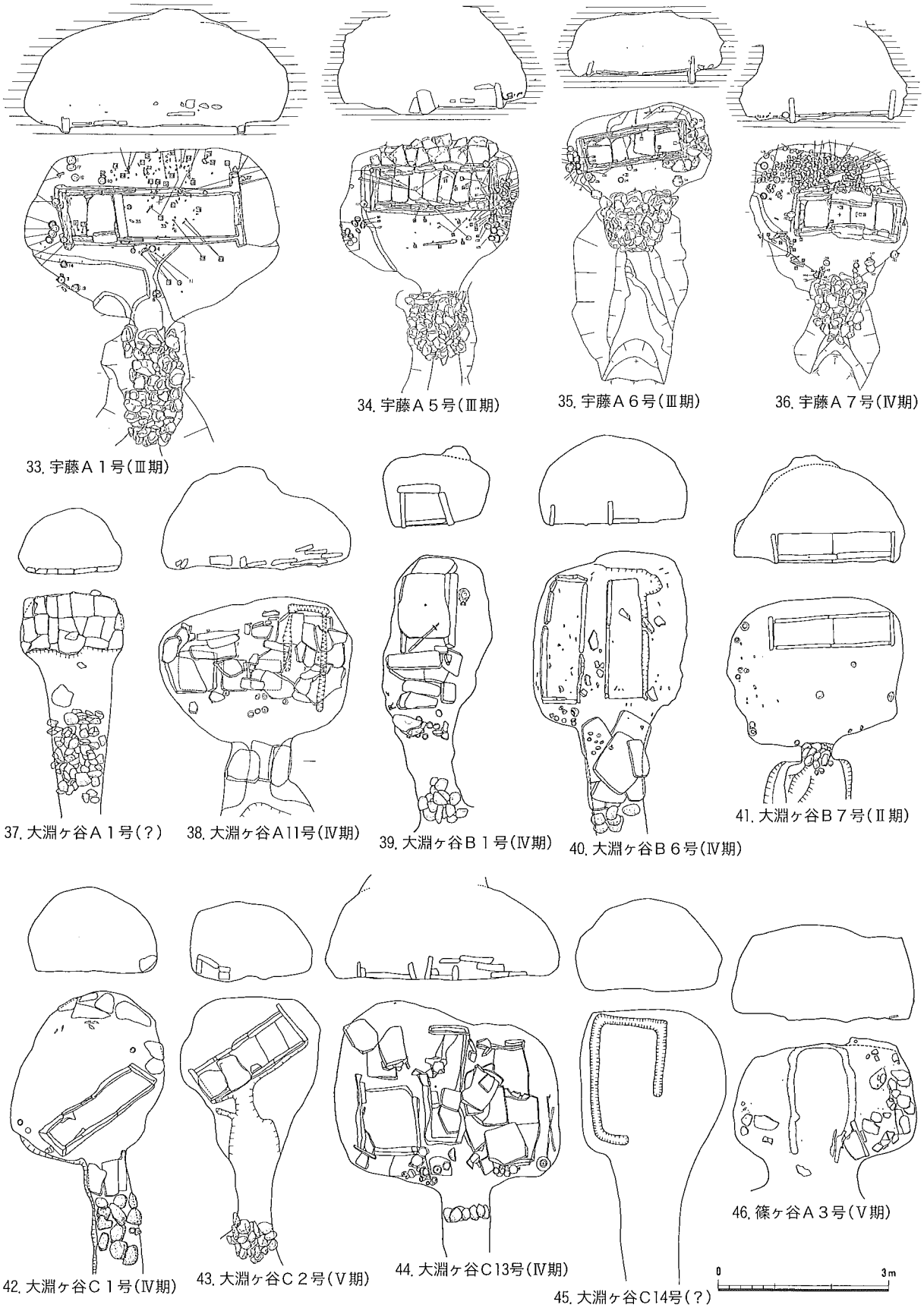
さて、この地域でのⅣ期以降における縦置型位置の石棺については、どのようになっているのであろうか。Ⅲ期以前から伝統的に見られる玄室平面形態が縦長楕円形の39・45の大淵ヶ谷Ｂ１号・Ｃ14号横穴、49・51のＶ・Ⅳ期の篠ヶ谷Ａ７号・Ａ８号横穴が縦置型位置の石棺を採用している。さらに、Ⅳ期以降新たに出現する玄室平面形態が隅丸になる縦長長方形の40の大淵ケ谷Ｂ６号横穴、47・48・52のＶ期の篠ヶ谷Ａ４号・Ａ６号・Ｂ４号横穴、53のⅣ期の西宮浦１号横穴、65のＶ期の杉森Ｄ10号横穴、74の毛森山大垣Ａ３号横穴、85のⅣ期の兼情１号横穴などが縦置型位置の石棺を採用した横穴



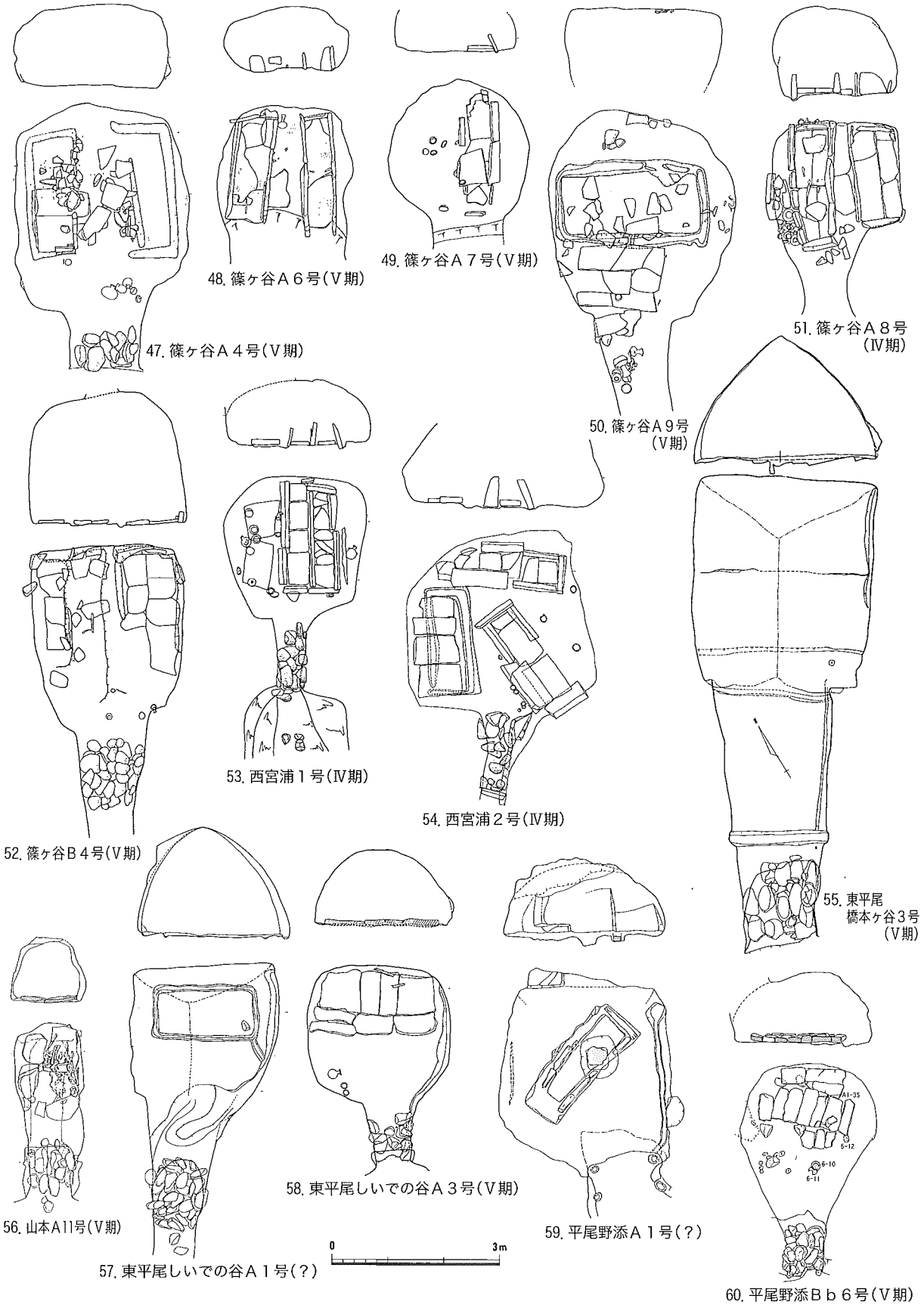
第62図　棺の位置の分かる横穴墓集成図1



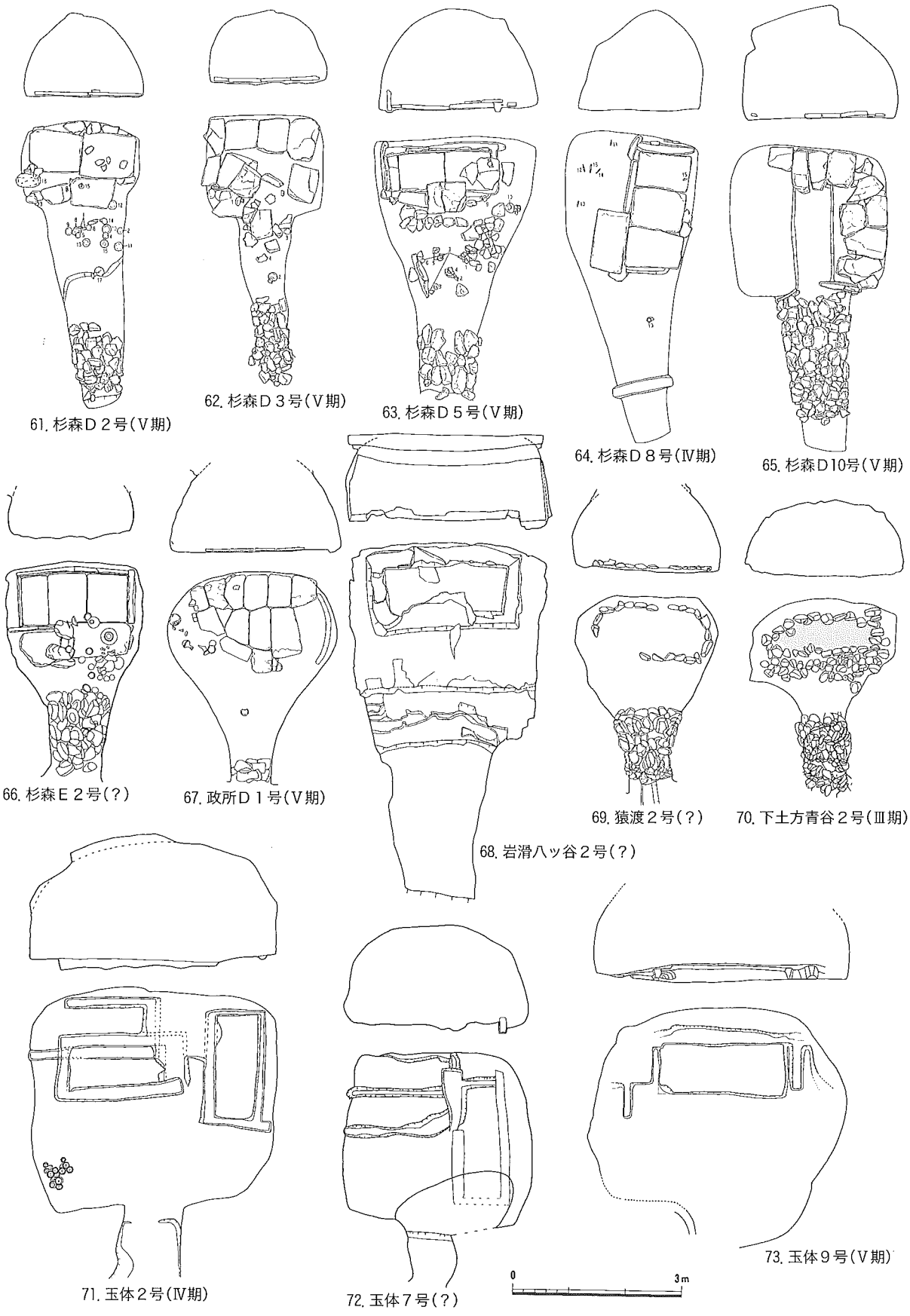
第63図　棺の位置のわかる横穴墓集成図２



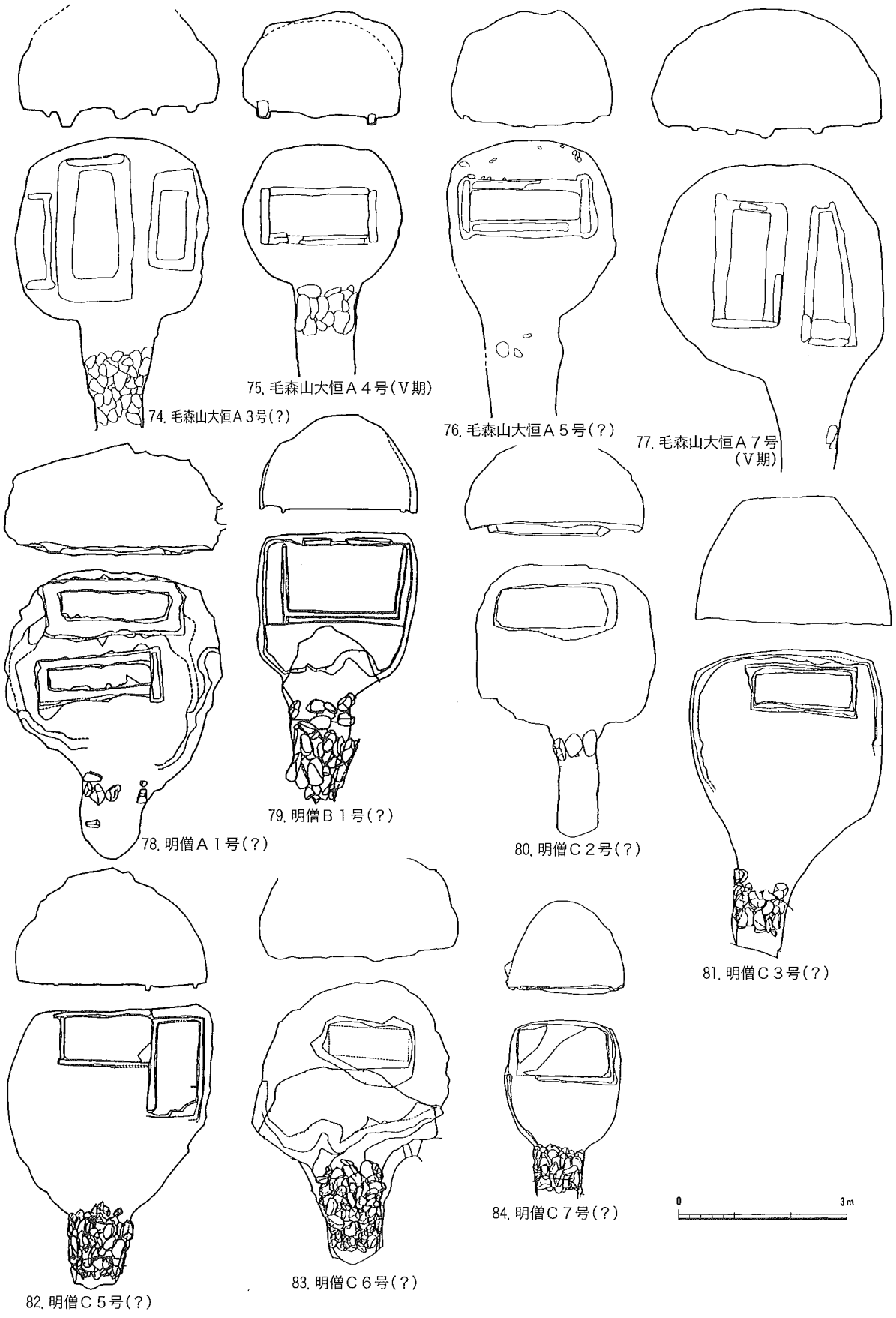
第64図　棺の位置のわかる横穴墓集成図３



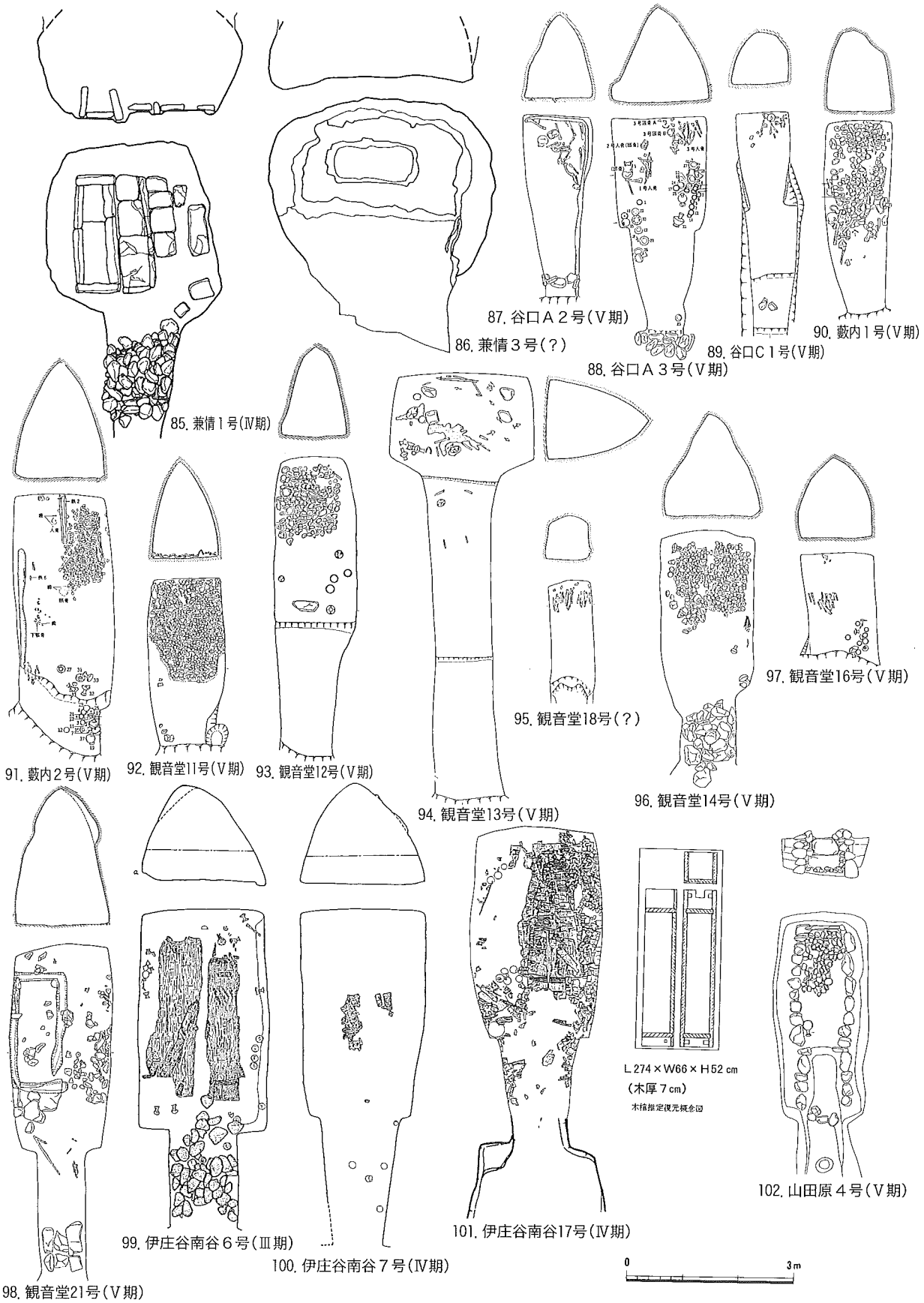
第65図　棺の位置のわかる横穴墓集成図４



第66図　棺の位置のわかる横穴墓集成図５



第67図　棺の位置のわかる横穴墓集成図６



第68図　棺の位置のわかる横穴墓集成図7

墓として一定量確認され、原野谷川中流域・逆川流域地域と連動する動きとして理解できる。

以上のように菊川流域地域のⅢ期以前の横穴墓では、玄室平面形態が横長楕円形・正方形で横置型位置の石棺を伴うものが主体で、小数の縦長楕円形のなかに斜行と縦置型位置石棺が認められる状況にある。Ⅳ期以降の横穴群のなかにはⅢ期以前からの伝統的な玄室平面形態が横長楕円形・正方形で横置型位置の石棺を採用する横穴墓もなお主体的に存在するが、台形や無袖バチ形で横置型位置の石棺、隅丸縦長長方形で縦置型位置の石棺を採用する横穴墓が新たに出現し一定量継続的に見られることは、原野谷川中流域・逆川流域地域と連動した動きと理解され、なかには改葬に関わる横穴墓も含まれていると想定される。

最後に太田川流域地域の横穴墓の木棺位置について検討をする。この地域の横穴墓は礫床が採用される横穴墓がほとんどで、確実な棺の位置を掌握できそうなものは少ないが、木棺位置の推測可能なものについて代表的なものを第68図87～98に図示した。先述したとおりこの地域はⅣ期以降の新しい横穴墓しか確認できない地域で、基本形態である玄室平面形態が縦長長方形になる横穴墓は、90のⅤ期の藪内１号横穴、92のⅤ期の観音堂11号横穴の縦置型木棺を推測させる礫床をもつものや、98のⅤ期の観音堂21号横穴では縦置型位置の石棺の痕跡が認められるものも一定量確認できるが、91のⅤ期の藪内２号横穴、93・96のⅤ期の観音堂12・14号横穴のように礫床の範囲が狭く木棺の位置をうまく特定できないものがかなり認められこちらが主体となるようである。なお、94のⅤ期の観音堂13号横穴のように玄室の平面形態から横置型の木棺位置になるものも存在しているがごく小数である。

以上のように太田川流域地域では、玄室の平面形態が縦長で玄室幅の狭い長方形が基本となることから見ると縦置型位置の木棺が基本であると考えられるが、礫床の範囲が狭く木棺の位置を特定できないものや小型化した横穴墓が多数確認できることから見ると、改葬に関わる横穴墓についての問題を解明するのには好都合な地域といえる。

以上３地域の玄室床施設・石棺から見えない木棺の位置について考えてみたのであるが、それぞれの地域で玄室の平面形態と木棺の位置が関係し地域色のあることを明らかにできたと思われる。木棺の位置関係についてまとめてみると、遠江の横穴群では方形の墓前域の出現、新たな形態の横穴墓の出現、太田川流域地域にも横穴墓が造られるようになるⅣ期前・後で大きな変化を読み取ることができた。すなわち、原野谷川中流域・逆川流域地域での縦置型と横置型位置の木棺を採用する横穴墓の混在の状況から、新形態の横穴墓の出現と共に横置型の木棺位置の増加、菊川流域地域での伝統的な楕円形の横穴墓以外にも台形・無袖バチ形で横置型の新形態の横穴墓の出現と増加、隅丸に変化しているものの縦長長方形で縦置型の木棺位置の横穴墓が一定量見られ、この現象は原野谷川中流域・逆川流域地域と連動した動きであること、太田川流域地域では小型の横穴墓や、木棺位置が特定できない範囲の狭い礫床をもつ横穴墓が多数見られることなどである。

これらの変化については、横穴墓が遺体の直接埋葬から改葬墓へ質的に変化してる視点で考えてみたい。たとえば、地蔵ヶ谷横穴群での木棺の推定位置から、木棺の大きさや遺体の置ける範囲が長さ1.5m以内になるものを成人の遺体を伸展葬で埋葬できない改葬横穴墓として仮定して抽出すると、Ⅳ期以前の古い横穴墓では、玄室平面形態が楕円形や横長長方形の１・２・４号横穴に限られるようである。Ⅳ期以降の新しい横穴墓になると、楕円形のなかでは12・17号横穴、台形や正方形の21・26号横穴、無袖バチ形では15・20・22・23・25・27号横穴、小型の無袖長方形では８・18・19号横穴が改葬横穴墓になると考えられる。よって、地蔵ヶ谷横穴群での改葬横穴墓は、Ⅳ期以前では６基中３基の50%、Ⅳ期以降の新しい横穴墓では21基中13基で60%の比率で存在していたことになる。ちなみに改葬横穴墓の木棺位置については、小型の無袖長方形は縦置型である以外は何れも横置型の木棺位

置になるようである。

この改葬横穴墓の存在は原野谷川中流域・逆川流域地域のⅣ期以前では、今回検討できた地蔵ヶ谷横穴群以外の横穴墓なかでの実態はどうであろうか。Ⅳ期以前の古い横穴墓のグループでは地蔵ヶ谷横穴群では50％の比率で改葬横穴墓が確認できたが、茶屋辻横穴群では11基中Ａ９号・Ａ10号横穴の２基、土橋横穴群では７基中存在しないという状況である。よって、この地域でのⅣ期以前の改葬横穴墓の存在比率は、50％以下であることは確実であり、茶屋辻横穴群を参考にすると20％以下の比率で存在しているのではないかと推測される。

この地域のⅣ期以降の新しい横穴墓グループのなかで改葬横穴墓と思われるものは、16の原７号横穴、19の茶屋辻Ａ４号横穴、23～25の金山Ａ２号・Ｂ４号・Ｂ３号横穴、小型の横穴墓である27・28の金山Ｂ１・Ｂ10号横穴などがあげられる。また、金山Ａ４号・Ｂ９号横穴の人骨の出土状況は、従来追葬時の片付けがなされ２次的に動かされている人骨と考えられてきたものであるが、全ての部位の人骨が揃う例は少ないため改葬横穴墓としての可能性が考えられる。おそらくこの地域のⅣ期以降の新しい横穴群中には、地蔵ヶ谷横穴群と同様に60％以上の比率で改葬横穴墓が存在しているものと想定される。

菊川流域地域でもⅣ期以前の横穴墓では改葬横穴墓は良く確認できない。ちなみに、古い横穴墓からなる宇藤横穴群では10基中改葬横穴墓と想定されるもの確認できない。

Ⅳ期以降の新しい横穴墓については、37の大淵ヶ谷Ａ１号横穴、56の山本Ａ11号横穴、60の平尾野添Ｂｂ６号横穴、61～63の杉森Ｄ２号・Ｄ３号・Ｄ５号横穴、74の毛森山大恒Ａ３号横穴、82～84の明僧Ｃ５～７号横穴、85・86の兼情１・３号横穴などがあげられる。玄室の平面形態から見ると原野谷川中流域・逆川流域地域と共通する横長長方形、台形、無袖バチ形、無袖長方形で多く確認できるが、Ⅳ期以降でも主体を占めるⅢ期以前からの伝統的な玄室の平面形態である楕円形や新しい横穴墓の形態なかでも縦長長方形では改葬横穴墓は少ない状況が確認できるため、この地域での改葬横穴墓は原野谷川中流域・逆川流域地域と比較するとかなり少ないと想定される。一例であるが新しい横穴墓からなる平尾野添横穴群では、改葬横穴墓と想定される横穴墓は、Ｂｂ２号・Ｂｂ６号・Ｂｃ１号～Ｂｃ３号横穴で、14基中５基の35％の比率で改葬横穴墓が存在していたことになる。

太田川流域地域ではⅣ期以降の新しい横穴墓のみからなり、改葬横穴墓と想定される狭い範囲の礫床をもつ横穴墓や小型の横穴墓は、29・30の道ヶ谷Ｂ１・５号横穴、87・89の谷口Ａ２号・Ｃ１号横穴、91の藪内２号横穴、92・93・95～97の観音堂11号・12号・14号・16号・18号横穴があげられ多数確認できる。人骨の確認できた谷口Ａ３号横穴についても、人骨は２次的に動かされておりこの横穴墓についても改葬横穴墓の可能性があり、すでに大谷氏が指摘した通りこの地域では人骨の出土状況から見ると多数の改葬横穴墓が確認できそうである（大谷　2001）。同様に人骨が確認された谷口Ａ２号・Ｃ１号横穴や、観音堂11号・16号・18号横穴でも明らかに２次的に動かされた状況が読み取れることができるので、これら人骨の出土状況からも改葬横穴墓の存在を確認できる。横穴群中の改葬横穴墓の存在比率は、谷口・藪内横穴群では谷口Ａ２号・Ａ３号・Ｃ１号・ＥⅠ３号・ＥⅡ１号・ＥⅡ３号・ＥⅡ４号横穴、藪内１号・２号が改葬横穴墓になると考えられ13基中９基で70％の比率となる。観音堂横穴群でも２号～６号・８号・11号・12号・14号・16号～18号・22号・23号横穴が改葬横穴墓になると考えられ、23基中14基で60％の比率で存在していたことになる。よって、この地域での改葬横穴墓の占有比率は、原野谷川中流域・逆川流域地域と同じかそれ以上ということになる。玄室の平面形態からは、新しい形態の無袖バチ形や無袖長方形に改葬横穴墓が多く採用されていることから見ても、多数の改葬横穴墓の存在を想定させる。

以上のように、遠江地域での改葬横穴墓の分析からは、Ⅳ期以降の新しい形態の横穴墓を積極的に取り入れる原野谷川中流域・逆川流域地域と太田川流域地域では60％以上の比率、やや少なく取り入れる菊川流域地域では30％程度の比率で存在していたことを指摘できた。

さて、東海地域の改葬横穴墓の問題は大谷氏以前、池上悟氏と松井が取り上げている（池上　2000・松井　2001）。池上氏は観音堂横穴群や宇刈横穴Ｎ群での追葬可能な大型横穴墓と追葬不可能な小型横穴墓の組み合わせから、大型横穴墓が１次埋葬、小型横穴墓が２次埋葬の改葬横穴墓の可能性を指摘したのである。すなわち、北部九州で想定された田村健二氏が分類した６世紀末～７世紀に出現する直角配列型、散開集合墓道型の小単位群を形成する横穴墓では、遺体を骨化する主墓室に対してその改葬墓となる小型の副墓室の組み合わせになるもの（田村健二　2001）が、遠江にも伝播している可能性を論じたと考えられる。松井はⅣ期以降の６世紀末～７世紀に成人や追葬不可能な小型の横穴墓の増加から、遠江においても改葬横穴墓がⅣ期以降存在していた可能性を指摘した。

さて、池上氏が想定した北部九州の主墓室と副墓室の組み合わせが、遠江でそのまま導入されていたかどうかの問題をまず検討する。今回のⅣ期以降の新しい横穴墓から構成される小単位群の分析から見ると、例えば地蔵ヶ谷横穴群では18号～20号横穴の小単位群は大型の20号横穴が古く19号横穴で小型化し最後にミニ横穴といえる18号横穴に順次隣接する場所に時期差をもって築造される状況が読み取れる。同様に第60図に示したように金山Ｂ９号～11号横穴の小単位群についても、大型横穴のＢ９号横穴から小型横穴のＢ10・11号横穴への時期差が確認できる。骨化にそれほど時間がかかるとは思えないため大型横穴墓と小型横穴墓の同時性が証明されないと池上氏の指摘した改葬横穴墓の組み合わせにはならないと考えられ、遠江の横穴墓ような時期差をもちつつ順次築造が進んだ小単位群が認識されるものは、北部九州のような組み合わせで改葬横穴墓を出現させたものとは思えない。

では、遺体を一次的に骨化する場所どこであろうか。畿内の古墳の改葬について論じた楠元哲夫氏によると、風葬で樹上葬や台上葬などの可能性を指摘している（楠元哲夫　1982）。同じく畿内の終末期古墳の改葬墓について論じた河上邦彦氏によると、奈良県の終末期古墳や横穴墓で確認された改葬墓は大和政権上層部のなかで確立されたもがりの風習と密接に関係するとし、龍王山古墳群の分析から横穴墓のなかに骨化する場所を想定し、横穴式石室に改葬した可能性を示唆した（河上邦彦　1995）。渡辺康弘氏は寿墓の考え方から改葬を前提とした仮葬と本葬の場が必要とされ、浜松市半田山Ⅳ中支群の分析から２基で小単位群を形成する横穴式石室を仮葬と本葬の行われる場として認識し、大型・小型の横穴式石室の組み合わせからなる２基の古墳間で大型の石室を骨化の場、小型の石室を改葬の場として捉えた（渡辺康弘　1994）。これは池上氏が想定した大型・小型横穴墓の組み合わせからなる改葬のシステムと同じ考え方である。池上、河上、渡辺氏は共通して付近の古墳や横穴墓を利用した１次埋葬の場を考えているようであるが、今回の横穴墓の小単位群の分析からは、必ずしも大型・小型横穴墓の組み合わせが存在しているとは言い難い。きしくも渡辺氏が指摘したように遠江で代表的な終末期の群集墳である半田山Ａ群では、順次築造された２～４基からなる古墳から構成される小単位群が認められ、同時に横穴式石室の小型化が進行していたことが確認できるのであり、これらは明らかに２基１単位の改葬墓とはならない例である。さらに一例として磐田原の終末期群集墳の一つである第68図102の山田原４号墳の横穴式石室について検討すると、この石室は追葬するには不向きの小型化した石室で、内部の礫床の範囲も成人骨を埋葬するには狭いものであることから見ると、追葬を意図しない単次葬化（水野正好　1970）された改葬墓であると理解される。すなわち遠江の後期群集墳も６世紀末で改葬墓が増加し、７世紀のなかで横穴式石室の小型化が進行している状況が読み取れ、７世紀代の中で単次葬墓化と改葬墓化が同時進行していたと想定されるのである。

遠江のIV期以降の新しい横穴群では原野谷川中流域・逆川流域地域と太田川流域地域では方形の墓前域をもつこと、菊川流域地域でも墓前に広い平端地をもつ横穴群が見られることをすでに指摘した（松井　2001）。北部九州でも６世紀末以降墓前にある程度の祭祀空間をもつ小単位群が出現もすることが知られている。この空間が単に横穴墓の埋葬儀礼に伴う墓前祭祀を行う空間か、もがりの工程を含む一連の葬送儀礼空間の執行場所になる空間か、後者であるならば改葬墓の増加と１次の骨化の場としての方形墓前域の出現をリンクさせることも可能となる。しかしながら、現状では人骨の残片が墓前域から確認されるなどの考古学資料による証明ができていないため推測の域に留めざるをえない。今後の検討課題として一つの考え方を提案したい。

さて、このIV期以降増加する改葬横穴墓については、新たな横穴墓の形態と共に北部九州から伝播してきた可能性は高いと思われる。しかしながら、畿内においても河上邦彦氏の龍王山古墳・横穴群の分析が参考になるように、31基の横穴式石室や横穴墓中に実に24基に改葬墓が存在する可能性を示唆した（河上　1995）。今回の考察では遠江の横穴墓と横穴式石室の小型化が進むのは７世紀代で顕著になることから見ると、遠江の横穴群と後期群集墳中にまず６世紀末で改葬墓が増加し、７世紀代で同時に改葬墓化と単次葬化が進むのである。となると、この動きが一方的に北部九州からというよりも、畿内政権が関与した葬送儀礼が全国的に伝播した結果である可能性と考えたほうがスムーズに理解できる。すなわち、遠江でみられたIV期以降の横穴群と後期群集墳の改葬墓と単次葬墓の出現過程の分析から、畿内政権の中枢部で醸成された薄葬化に向かった葬送儀礼が、各地の政治的組織である地方豪族とその構成員のグループによって採用されていることが明らかとなり、この分析視点から各地の終末期の横穴墓と群集墳が畿内政権からの影響力を強く受けているかどうかの指標となろう。ただし、畿内の横穴墓や終末期群集墳について分析をされている安村俊史氏（柏原市教育委員会）の御教示によると、畿内での改葬古墳については龍玉山古墳群等奈良県以外では一般的であるとは言い難い状況である点は留意すべきであろう。

v）まとめ

今後は遠江地域の横穴墓の小単位群と改葬墓の分析視点からは、おそらく横穴式石室を有する後期群集墳の分析視点にもあてはまるもので、両者の墓制構造の共通点と非共通点を明らかにするうえで重要なものとなるであろう。墳丘をもつ横穴墓に関しては、池上氏による視点を検討してみた。古い段階の横穴墓については池上氏が指摘した通り導入されている可能性が高まったが、東海～関東地域のIV期以降の新しい横穴墓は検討を要するであろう。このように、遠江の横穴墓については東海～関東地域の横穴墓を考えるうえで重要な検討課題を多数有しているばかりでなく、後・末期群集墳との比較検討の必要性も強く感じられる。

第２節　地蔵ヶ谷10号横穴出土の冠帽

i）はじめに

第１次調査の地蔵ヶ谷10号横穴出土の金属製品の再整理と実測作業を進めるなかで、金銅装の金属遺物が冠帽に係わるものである可能性がでてきた。現況の保管状況では第52図に示した通り１つの大形破片（70）と10片に細片化したもの（71～80）にわかれており、全体の形状は伺い知ることができなかった。ところが、今回出土状況の写真を検討すると全体の形状の復元ができそうなため、本節ではその復元案を提示すると共に、県内での冠・冠帽の出土例についても紹介することとしたい。

ちなみに1965年刊行の報告書（静岡県教育委員会　1965）では、ＡＧ３号横穴から飾金具が報告さ

れており、「革製品につけられた飾金具で、帯飾具の一種」であると述べられている。報告書には本金属製品の実測図は示されていないが、今回示すことのできた出土状況の写真は掲載されている。

ii）地蔵ヶ谷10号横穴出土の冠帽の復元

今回冠帽の全体形を復元するに当たって第69図中に示した出土状況の写真と、現在残されている遺物を比較検討すると、少なくとも70の大型破片の形状と一致する破片らしい部分は写っていない。とすると、写真に写っている大型破片の大部分は10片に細片化した部分の元の形状が撮影されていると考えた。もう一つの手掛は、この金属遺物の形状は半円形の打ち出し部分がX字状に交差する部分に配置されている特徴をもつことである。70の大型破片を見るとこの半円形の突起がうえから３＋２＋３？と配置されていることが分かる。写真に写っている金属片に見られる突起も上から３＋４＋５？になると考えられた。菱形の透かしの部分の形状を見ると70の再下段の部分と、写真に写っている再上段の部分の形状が一致すること、半円形の突起部分の数も一致することから見ると、半円形突起の配置と数は上から３＋２＋３＋４＋５？で総数17となると想定される。実際現在残されている破片から半円形突起の数を数えると17となり、数としては矛盾しない小破片が残されているが、復元図の中に確実な位置を示すための現存の小破片をはめ込む作業はできていない。よって、写真の形状から大胆に復元したものを第69図１に示した。写真から判断できなかった部分は、再下段の部分で半円突起が３つしか確認できていないが、X字状内の菱形透かしの形状から見ると、もう２つ半円形突起を復元し５つの半円突起とすることが可能であると考えた。なお、その下の狭帯状部分は有機質の帽に取り付けるため必要である部分と考えたので、この狭帯状部分の形状に関しては全くの推測である。

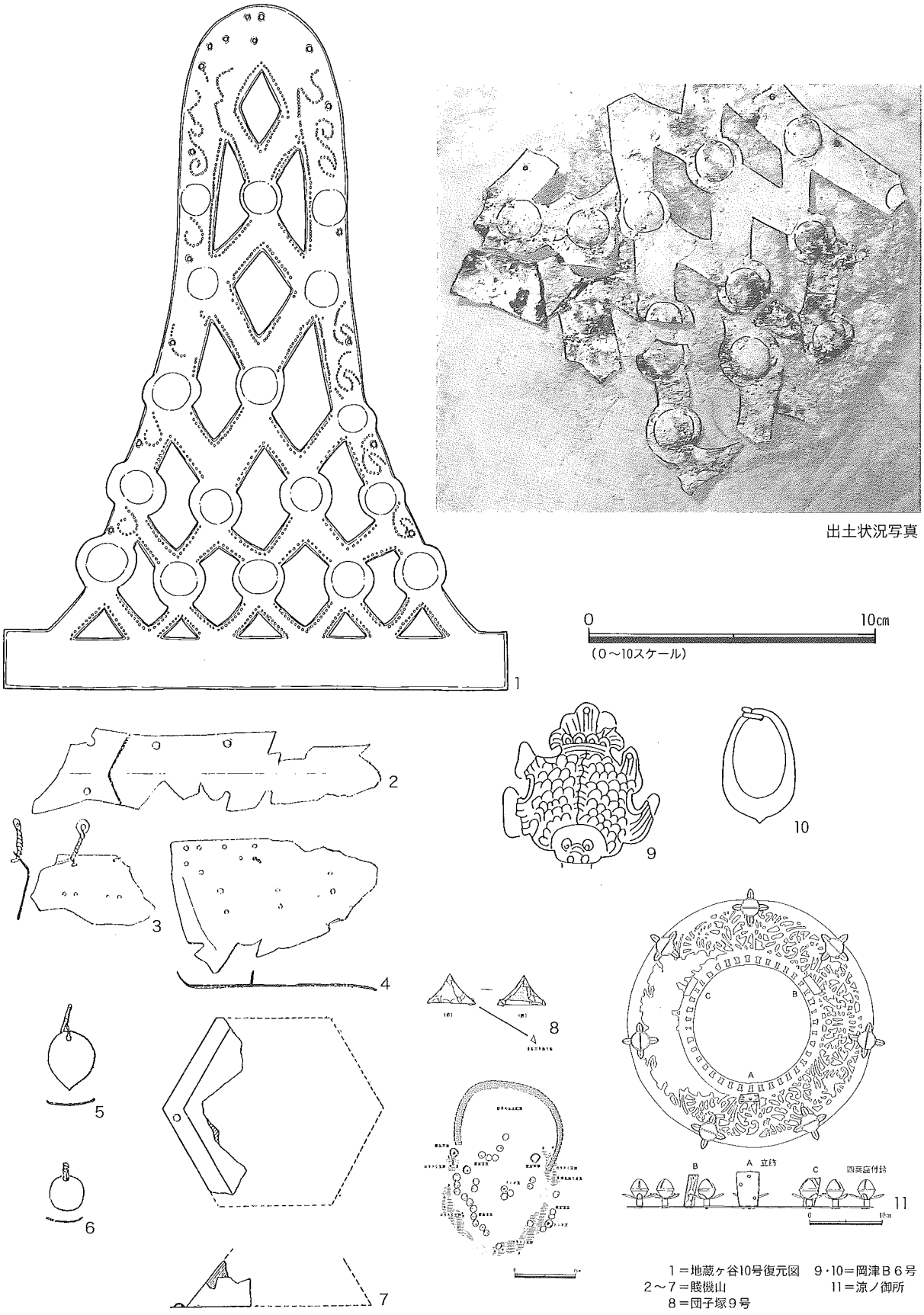
70の大型破片や、細破片をレントゲン撮影（今津節生氏撮影）をしたところ、列点からなる毛彫が確認できた。X字状部分の端部分に施され、その内側にも不規則な渦巻状の文様が配置されていることが分かった。外縁の所々には有機質の帽に取り付けるためと見られる小穴が穿たれているが、最上縁部分では取り付けるための小穴以外のものも複数見られる。補修のための小穴かガラス小玉や歩揺等の装飾部品を付けるための小穴であろうか。

科学分析を行っていないため金装の方法は分からないが、厚さ１ミリにも満たない薄い銅板の表面にしか金装はされていない。よって、今回報告できた金属遺物は有機質の帽に付けられた冠帽の金属部分であると想定されるが、裏面には帽部分の有機質の痕跡は確認できていない。

この冠帽の時期は、伴った須恵器から判断するとV期（ＴＫ217）かVI期古段階（ＴＫ46）となるが、どちらの時期にしても７世紀代ということになり、全国的に見て７世紀代の冠帽の出土は少ないようである。横穴墓の形態から見ると玄室平面形態が無袖バチ形となるため、IV期（ＴＫ209）の６世紀末～７世紀初頭まで遡らせることも可能ではあるが、出土須恵器・土師器の年代から見ると現状では７世紀代と報告せざるを得ない。

iii）静岡県内出土の冠・冠帽

全国の冠・冠帽の集成を行っている毛利光俊彦氏や岡林孝作氏の論文（毛利光俊彦　1995・岡林孝作　1991）から見ると５世紀中葉～６世紀代のものが多く、７世紀代の冠・冠帽の出土例は少なく、今回の資料の類例にあたる資料には恵まれなかった。現在最も資料集成をしている毛利光氏の論文から検索すると、全国の冠・冠帽の出土例は50基の古墳から64個体にのぼるとされるが、このうち冠帽の出土例は17例で、本例に含まれる円縁式冠帽は９例である。すなわち、円縁式冠帽の形状は数が少ないうえに各個体差が多く見られること、帽の部分が有機質であり全体の形状が容易に復元できない



1＝地蔵ヶ谷10号復元図　9・10＝岡津Ｂ６号
2～7＝賤機山　11＝涼ノ御所
8＝団子塚９号

第69図　地蔵ヶ谷10号横穴出土の冠帽復元図（案）と県内出土の冠・冠帽集成図

ことなどの理由から、現段階では本資料について同一形態の資料がないと考えられるのである。よって地蔵ヶ谷10号横穴出土の冠帽のもつ意味について、筆者の力量から安易に考察を進めることは不安であるため、本報告書では県内出土の冠・冠帽を紹介しそれとの比較をして考察に替えたい。なお、冠・冠帽の分類の用語に関しては先にあげた毛利光俊彦氏や岡林孝作氏の論文を参考とした。ちなみに、地蔵ヶ谷10号横穴出土の冠帽を円縁式冠帽に含めた理由をあげると、有機質の帽の部分の前面に飾り付けられた金具と想定したため、毛利光氏分類の円縁式冠帽のうちⅠ類の板状飾付の五角形の変形でE種に分類されるものと考えたい。

さて、県内出土の冠・冠帽を集成すると、第69図に示したとおり今回のものを含めても５例しか確認できていない。このうち金属部分のみからなる冠は賤機山古墳出土の１例のみで、その他は冠帽か冠の装飾金具を出土したものである。

２～７は静岡市賤機山古墳出土の冠の残欠で、報告書によると２～４の破片は石棺内の頭部分付近から出土しているため冠金具の一部と報告されている（静岡県教育委員会　1958)。７の六角帽状金具についても石棺内の頭部分付近から出土しているため帽金具の一種と見るべきかと報告されている。５・６については心葉形歩揺で石棺内やその周辺から出土したとされている。しかしながら、賤機山古墳からは歩揺付辻金具の馬具が出土しているのでこれとの区別をするために、３に見られるような細い針金が付いた歩揺のみを図示した。賤機山古墳出土の冠については岡林氏は広帯二山式と帽、毛利光氏は広帯二山式と尖縁式冠帽に分類されている。おそらく３・４の板状の部分に歩揺が付き、板の幅から見ると広帯二山式になるものと考えられる。２については尖縁式冠帽の尖縁部になるものと考えられる。両氏共に２個体の冠・冠帽を考えているかどうかは定かではないが、福井県十善ノ森古墳出土の冠を復元想定した西村要一氏のように広帯二山式冠のなかに尖縁式冠帽を組み合わせた案（西山要一　1981）もあるため、はたして賤機山古墳出土の冠についても一つの石棺の中に２個体の冠・冠帽が副葬されていたかどうか検討を要する。ましてや７の六角帽状金具については、冠・冠帽の部品であるかどうかもわからない。冠の時期は出土した須恵器から見るとⅢ～Ⅳ期（ＴＫ43～209）であるため６世紀後～末葉の時期となり、５世紀後葉から６世紀前葉の古墳からの出土例が多い広帯二山式冠としては新しい時期の資料として位置づけられる。

８は袋井市団子塚９号墳出土の有機質の痕跡から、有機質の冠帽につけられたと想定された金製の三角板である（袋井市教育委員会　1995)。他に捩じり環頭大刀や挂甲が出土しており、初期群集墳レベルとしてはかなり上位にランクされる古墳である。第69図に示したような副葬品の出土状態から、冠帽の金具と分かった例で、出土状態が移動していると何の金具か分からないものである。帽に付けられる小穴は穿たれていないが、裏側には金板が折り曲げられており帽に付着させていた造作と思われる。毛利光氏によると円縁式冠帽Ⅰ類の三角状のD種に分類されている。この冠帽の時期は出土した須恵器から見ると、Ⅱ期（ＴＫ10）であるため６世紀中葉に位置づけられる。

９・10は掛川市岡津Ｂ６号横穴出土の飾金具で、冠・冠帽につけられていたと思われる動物形金具と心葉形歩揺である（掛川市　2000)。他に銅製の鈴２個や圭頭の飾大刀が出土していると報告されている横穴群内最有力の横穴墓である。冠本体の金属部分は出土していないため、いかなる冠・冠帽につけられていたものか明らかではない。このような飾金具はおそらく広帯二山式冠につけられる例が多いとは思われるが、はたして岡津Ｂ６号横穴のような群集墳レベルの横穴墓に広帯二山式冠が副葬されていたかどうかは疑問である。すなわち、中村潤子氏が指摘したように広帯二山式冠は海浜部の交通の要衝地に選地された首長古墳から出土する例が多く（中村潤子　1983)、現に広帯二山式冠を出土した賤機山古墳もこの条件を満たすものである。とすると、この飾金具をどのように理解すれば良

いのであろうか。おそらく、広帯二山式冠をもつ首長から飾金具を譲り受け、有機質の帽にこの飾金具をつけて冠帽としたのではないかと推測しておきたい。この推測が正しければ毛利光氏の分類では団子塚９号墳出土の冠帽と同じく円縁式冠帽に分類できようか。この飾金具の時期は出土した須恵器から見ると、Ｖ期（ＴＫ217）であるので７世紀前葉に位置づけられる。

11は浜北市涼ノ御所古墳から出土したと伝えられる鍔付冠帽である。帽の部分は有機質で鍔の部分のみが金属であるため、従来鍔部分のみ遺存した例と評価されている。この冠帽を最近再評価した大谷宏治氏によると、唐草文がやや稚拙であることから馬具や仏教美術工集団が関わって７世紀前半～後半の国内のどこかで製作されたものと考えた（大谷宏治　2004）。ちなみに毛利光氏によると鍔付円縁式冠帽に分類し、西域からの波及としながらも中国の漢や唐代に類品があり、韓半島の高句麗や新羅、伽耶地域にも４世紀後半～６世紀中に鍔付冠帽が描かれた壁画や製品が広く分布しているため、韓半島との関係を指摘し、時期を６世紀～７世紀と大雑把に位置づけている。岡林氏は新羅の金鈴塚等で出土している白樺皮製鍔付帽との関係を指摘し、鍔付冠帽が多くの人物埴輪に表現されているにもかかわらず、国内では涼ノ御所古墳出土例しかないため多くは有機質の帽であったと主張した。なお、この冠帽の時期は唐草文の系譜を丹念に検証した大谷氏の説を尊重し７世紀代と考えたい。

ⅳ）まとめ

静岡県内の冠・冠帽の出土例を検討すると、全国的に冠・冠帽が多く出土する時期は５世紀中～６世紀前葉であるのに対して、団子塚９号墳出土の円縁式冠帽が６世紀中葉とはなるが、賤機山古墳出土の広帯二山式冠＋尖縁式冠帽は６世紀後～末葉、地蔵ヶ谷10号横穴出土の円縁式冠帽、岡津Ｂ６号横穴出土の円縁式冠帽？、涼ノ御所古墳鍔付円縁式冠帽は７世紀代で新しい時期の冠・冠帽が主体となる。すなわち、６世紀後葉の時期としては県内屈指の首長墓である賤機山古墳以外は、後期群集墳や横穴群内の上位レベルの古墳・横穴墓から出土しているにすぎない。

毛利光氏や岡林氏が集成した全国の冠・冠帽の出土古墳や横穴墓を検討すると、金属部分が多く高度な金工技術から造られる広帯二山式冠はその地域での首長墓、地蔵ヶ谷10号横穴で出土したような有機質の部分が多い簡易な円縁式冠帽については群集墳や横穴墓からの出土が多いようである。ちなみに、毛利光氏が取り上げた円縁式冠帽のうち金具部分の少ない簡易な冠帽を抽出しその古墳や横穴墓を検討すると、奈良県新沢千塚126号墳、島根県鷺ノ湯病院横穴、東京都亀塚古墳、茨城県赤羽Ｂ１号横穴があげられる。よって、このような簡易な飾金具からなる円縁式冠帽を出土した古墳や横穴墓は、全長40mの帆立貝式前方後円墳である東京都亀塚古墳以外は、群集墳や横穴群レベルの上位階層に属する古墳と横穴墓であると考えられる。

とするならば、このような簡易な円縁式冠帽や岡林氏が指摘した有機質のみからなる鍔付冠帽などは古墳や横穴墓の副葬品としては認識されていないものが以外と多く存在しており、その冠帽を被ることが許された人々は、群集墳や横穴群に葬られた古墳時代後期の拠点集落の人々を束ねる領主、後の郡衙の大・小領クラスを構成する人々に許された冠帽であったと推測しておきたい。よって、このような７世紀代における冠帽を被ることが許された村長（小首長？）の存在を証明する遺物として、今後飾大刀とともに注目されるべきものであろう。

【参考文献】

伊藤美鈴　2001　「太田川水系地域の横穴墓」『東海の横穴墓』　静岡県考古学会

池上　悟　1999　「日本の墳丘横穴墓」『立正大学文学部論叢』109　立正大学文学部

池上　悟　2000　「東海横穴墓の受容と展開」『立正考古』第23号　立正大学考古学研究会

池上　悟　2000　『日本の横穴墓』　雄山閣

池上　悟　2004　「群集墳としての横穴墓」『日本横穴墓の形成と展開』　雄山閣

井村広巳　2002　「遠江における横穴墓の埋葬施設の再検討」『静岡県考古学研究』No34　静岡県考古学会

大谷宏治　2001　「古墳時代後期の階層構造からみた遠江・駿河の横穴墓」『東海の横穴墓』　静岡県考古学会

大谷宏治　2001　「遠江における横穴墓研究ノート②」『静岡県考古学研究』No33　静岡県考古学会

大谷宏治　2004　「遠江における横穴墓研究ノート①」『関西大学考古学研究室開設50周年記念考古学論叢』関西大学考古学研究室

大谷宏治　2004　「浜北貴人の装い－涼ノ御所古墳出土鍔付冠帽について－」『浜北市史』資料編　原始・古代・中世　浜北市長（第69図11出典文献）

岡林孝作　1991　「５装身具　A冠・帽」『古墳時代の研究』第８巻　雄山閣

大谷純仁他　1965　「地蔵ヶ谷古墳及び横穴」『埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県教育委員会

大谷純仁他　1968　「岡津横穴Ｂ群」『埋蔵文化財調査報告』静岡県文化財保存協会　（第63図15出典文献）

川井正一　1976　「袋井市地蔵ヶ谷横穴群の問題点」『森町考古』10　森町考古学研究会

河上邦彦　1995　「終末期古墳における改葬墓に関する問題」『後・終末期古墳の研究』雄山閣

鬼澤勝人　2001　「東遠地域の横穴墓について」『東海の横穴墓』　静岡県考古学会

楠元哲夫　1982　「改葬のこと」『考古学と古代史』　同志社大学考古学シリーズ刊行会

後藤健一　1989　「湖西古窯跡の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』　静岡県教育委員会

後藤守一　1942　「上古時代の天冠」『日本古代文化研究』　河出書房

小林行雄　1966　「倭の五王の時代」『日本書記研究』第２冊　『古墳文化論考』平凡社　所収

白澤　崇　1993　「川会坊主山古墳と大門大塚古墳出現の背景」『袋井の前方後円墳』　袋井市教育委員会

白澤　崇　2001　「土器組成から見た横穴墓」『東海の横穴墓』　静岡県考古学会

戸塚和美　2001　「原野谷川・逆川水系の横穴墓」『東海の横穴墓』　静岡県考古学会

内藤　晃他　1968　「下本所横穴群の調査」『埋蔵文化財調査報告』　静岡県文化財保存協会　（第63図31出典文献）

中野晴久　1994　「生産地における編年について」『常滑焼をおって資料集』　日本福祉大学知多半島総合研究所

中村潤子　1983　「広帯二山式冠について」『古代学研究』101　古代学研究会

西山要一　1981　「福井県上中町十善ノ森古墳出土の金銅製冠帽冠について」『古代研究』22　元興寺文化財研究所

田村健二　2001　「豊前地方の横穴墓について」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』　九州前方後円墳研研究会

前田庄一　2001　「掛川市堀ノ内・前山・向山横穴群」『東海の横穴墓』静岡県考古学会
松井一明　1989　「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器陶器生産の一考察」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会
松井一明　1993　「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』No25　静岡県考古学会
松井一明　1994　「原野谷川中流域における初期群集墳の終末と後期群集墳(横穴群)の成立について」『金山古墳群・金山横穴群Ⅰ・Ⅱ』袋井市教育委員会
松井一明　1995　「古墳時代後半期土器編年」『坂尻遺跡－遺物・総括編－』袋井市教育委員会
松井一明　1997　「遠江における横穴群の地域色と古墳時代後期の交通路について」『八幡山横穴群』袋井市教育委員会
松井一明　2001　「横穴墓の開始と終末」『東海の横穴墓』　静岡県考古学会
松井一明　2001　「遠江における横穴墓の伝播と展開」『静岡県考古学研究』No33　静岡県考古学会
水野正好　1970　「横穴式石室と群集墳の発生」『古代の日本』第５巻　角川書店
毛利光俊彦　1995　「日本古代の冠－古墳出土冠の系譜－」『文化財論叢』Ⅱ　同朋舎出版
渡辺康弘　1994　「群集墳の「単位群」構成について」『向坂鋼二先生還暦記念論集　地域と考古学』
袋井市教育委員会　1992　『団子塚遺跡－遺構編－』(第69図８出典文献)
袋井市教育委員会　1994　『山田原遺跡群Ⅰ』(第68図102出典文献)
袋井市教育委員会　1995　『坂尻遺跡－遺物・総括編－』
袋井市教育委員会　1996　『金山古墳群・金山横穴群Ⅰ・Ⅱ』(第60図、第63図22～28出典文献)
袋井市教育委員会　1997　『八幡山横穴群』(第63図29・30出典文献)
袋井市教育委員会　1999　『石ノ形古墳』
袋井市教育委員会　2003　『春岡遺跡群－遺構編－』
掛川市教育委員会　1964　『掛川市城山横穴墳調査報告書』(第62図８出典文献)
掛川市教育委員会　1991　『土橋横穴群・長沢遺跡』(第59図、第61図、第62図６・７出典文献)
掛川市教育委員会　2002　『原遺跡・原横穴群・次郎丸古墳群』(第60図、第63図16出典文献)
掛川市教育委員会　2002　『掛川市長谷土地区画整理地内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』(第62図13出典文献)
掛川市教育委員会　2003　『掛川市長谷土地区画整理地内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(第61図向山横穴群・前山横穴群、第62図１・３出典文献)
掛川市教育委員会　2003　『東名掛川Ⅰ・Ｃ周辺土地整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』(第59図茶屋辻横穴群、第61図茶屋辻横穴群、第62図２、第63図19～22出典文献)
掛川市　2000　『掛川市史』資料編古代・中世(第69図９・10出典文献)
浜松市遺跡調査会　1984　『半田山古墳群Ａ小支群・半田山Ⅲ遺跡』
菊川町教育委員会　1983　『大淵ヶ谷・篠ヶ谷・西宮浦』(第61図、第64図37～第65図54出典文献)
菊川町教育委員会　1989　『杉森横穴群Ｄ群発掘調査報告書』(第66図61～65出典文献)
菊川町教育委員会　1998　『宇藤遺跡群』(第59図、第64図33～36出典文献)
菊川町教育委員会　1999　『藤谷横穴群Ｃ群発掘調査報告書』(第63図32出典文献)
大東町教育委員会　1991　『玉体横穴群』(第66図71～73出典文献)
大東町教育委員会　1993　『下土方青谷横穴群』(第66図70出典文献)
大東町教育委員会　2002　『兼情横穴群・兼情遺跡・帝釈天砦』(第68図85・86出典文献)
森町教育委員会　1992　『飯田の遺跡』(第68図87～91出典文献)

静岡考古館　1963　『駿河伊庄谷横穴墳』（第68図99・100出典文献）
静岡県教育委員会　1953　『静岡賤機山古墳』（第69図２～７出典文献）
静岡県教育委員会　1971　『宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告』（第62図14出典文献）
静岡県教育委員会　1983　『遠江の横穴群』（第62図９～12、第65図55～58、第66図66～69、第67図74～77出典文献）
静岡県教育委員会　1989　『静岡県の窯業遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所　1992　『平尾野添横穴群』（第60図、第65図59・60出典文献）
静岡県埋蔵文化財調査研究所　2000　『大谷横穴群』
日本楽器製造株式会社　1979　『観音堂横穴群発掘調査報告書』（第68図92～98出典文献）
静岡県考古学会　2001　『東海の横穴墓』（第61図堀ノ内Ｄ１号横穴、第62図４・５、第63図17・18、第67図78～84、第68図101を使用する。これらの横穴墓については全て未発表資料であるが、掛川市教育委員会松本一男氏、大東町教育委員会鬼沢勝人氏、静岡市立登呂博物館中野宥氏より御便宜を図って頂きました。感謝いたします。）
静岡県考古学会　2003　『静岡県の横穴式石室』

付載１　宝野金山古墳群発掘調査報告

１．はじめに

本古墳の発掘調査に至る経緯に関しては、調査日誌等の記録がまったく残っていないため定かでないが、柴田稔氏より聞き及んだ内容の要点を記述する。昭和42年12月から昭和43年１月にかけて、浅羽町貫名地古墳の発掘調査を大谷純仁氏の指導で、国学院大学の学生、浜松女子商業高校の生徒、誠心女子学院の生徒らと実施していた。このおりに宝野地区で茶園改植が行われており、古墳１基が発見された。当時数基の古墳が発見されたようであるが、調査の対象にできたものは１基となった。実施期間は、昭和42年12月20日前後の１週間程度であったようである。調査の担当者は大谷純仁氏を中心に、長屋正氏が主に担当していたようである。参加者を図面記載の名前から当たると、柳瀬昭彦、神林、我妻柾生、長屋正、島津義昭氏らであった。

以上の調査が実施された後にも、昭和60年度に同地点を再度茶園を改植する話が持ち上がり、昭和60年９月～昭和61年３月に袋井市教育委員会が試掘調査を実施した（袋井市教育委員会　1986）。この調査で表土下50～70cmで地山面に到達するが、昭和42年の改植のためかすでに遺構・包含層とも確認できなかったようである。遺跡の北東端で昭和42年？の茶園改植の際に採集された資料が鈴木哲司氏により保管されており、複数の古墳が存在することが判明した。今回縄紋時代中期後葉～後期初頭の資料を除く古墳出土と思われる資料や付近の菩提山横穴の採集資料も併せて掲載した。

宝野金山古墳群は、豊沢地区の東西に走る谷間と丘陵の境に形成された段丘上に位置している。付近には横穴式石室をもつ大群集墳である長者平古墳群が所在している。宝野金山古墳群は、長者平古墳群よりもさらにひとつ北側の谷間で、北側の丘陵の裾の低地面との標高差は15mを測る小段丘上、長者平古墳群より北方の直線距離して0.5kmの地点に位置している。

２．横穴式石室

発掘調査は石室に限られていたようで、墳丘規模等についてはデータが残っていないため明らかではないが、石室はさほど大きくないので直径10m以内の円墳であったと推定される。

石室の規模は全長3.5m、幅1.0mの川原石積の玄室は胴張形態のもので、立柱石は持たないため無袖型式になる横穴式石室である。側壁は基底部を長さ30cm程度の川原石を横口積にし、それ以上は一回り小さい礫で小口積してる。側壁高は奥壁部分で残りが良く80cmを計るため、本来の石室の高さは１m以上はあったと思われる。側壁の残っている部分では天井石への持ち送りはほとんど見られないため、高さ80cm以上から持ち送るものと推定される。奥壁については、幅70cm、高さ30cmの扁平な川原石２個を２段に積んでおり、鏡石を意識した積方をしている。

敷石は奥壁より２mの範囲で、比較的小さな円礫を用いている。この範囲が木棺の位置ならば、長さ1.7m、幅0.8mの木棺が縦置に設置された姿が復元できる。

遺物の出土位置から見ると、奥壁部分に45（14）のⅦ期（ＭＴ21）段階の長頸瓶が見られることと、玄室前半部に42・43のⅤ期新（ＴＫ217）段階の高坏まとめられていたものが比較的原位置を保っているものと考えられる。時期から見るとⅤ期新（ＴＫ217）段階、Ⅵ期新（ＴＫ48）段階、Ⅶ期（ＭＴ21）段階の３時期があり、玄室内・墓道部分のいずれもから３時期の土器が出土しているため、玄室内のものが盗掘で墓道に持ち出されたか、墓前祭祀に伴うか今回の資料整理では判明しなかった。

閉塞石は玄門部分で根石の部分が一部原位置を保っている以外は、墓道の中の広い範囲で散乱して検出されている。散乱している閉塞石の下層から土器や直刀の破片が出土しているため、盗掘の際に

閉塞石が墓道に散乱した可能性が高い。

3．遺　物

横穴式石室からの出土品のほか、古墳群全体の表採品や菩提山横穴出土品も含めて報告する。

須恵器　66の衛門坂窯産の提瓶、67の壺、68の甕の小型甕の口縁はⅢ期（ＴＫ43）～Ⅳ期（ＴＫ209）段階と最古の一群で、54・57の坏蓋・身はⅤ期古（ＴＫ217）段階、１～９・51～53・15～24・55・56の坏蓋・身、25・39・42・43・60の坏部の深い高坏、59の小皿、61・62の盌、37の𤭯、38・63～65の平瓶、31の装飾須恵器の壺蓋、30・32・33・35・36の長頸瓶、69の湖西系の甕はⅤ期新（ＴＫ217）段階、10～14の坏蓋、26・40・41の坏部の浅くなった高坏はⅥ期新（ＴＫ48）段階、27～29・34の高台付の坏身、44～46の高台付の長頸瓶はⅦ期（ＭＴ21）段階に該当する。

菩提山古墳出土の48･49の坏蓋？と50の盌は、Ⅳ期新（ＴＫ209）段階となるものであるが、47の坏身はⅤ期古（ＴＫ217）段階に降るものである。

鉄製品　１～52の尖根式鉄鏃の形態は、箆被部にすべて刺箆被をもつものである。先端の形状では１～15の鏨箭式、16～41の片刃や42～44の逆刺のないものなどは新しい形態のもので、ほぼ７世紀代の時期に該当すると思われる。

直刀の先端とおもわれる断片が２点と、55・56の金銅装飾大刀の鞘の足金具で２個とも出土している。責金具は確認できなかった。59の両頭金具は直刀近くから出土していおり、直刀の柄飾とも考えられるが、詳細な出土状況は明らかでないため断定はできない。54の銀環は、一部金属板が巻かれているため耳環ではなく、飾大刀の鞘口金具に固定される円環で、鞘口近くに刀子を佩するための金具と考えられる。市内では山田原１号墳で１点出土している（袋井市教育委員会　1994）。

53は幅広の片関造りの刀子である。基部の形態が欠損するためはっきりしない。

57・58の鉄釘は鍛造品である。山茶碗等の出土がないことから中世の再利用はない古墳であり古墳時代の製品になる可能性もあるが、盗掘は受けていると考えられるため断定はできない。

玉類　73は碧玉製の切子玉である。当地域の切子玉は水晶製のものが多く、石材として碧玉を使うものは珍しい。74は紺色のガラス丸玉である。

4．まとめ

宝野金山古墳から出土した遺物を見ると、飾大刀と地蔵ヶ谷22号横穴と同じ装飾須恵器の壺蓋、多数の鉄鏃などが出土しており、Ⅴ期新（ＴＫ217）段階に築造された、古墳群のなかでも有力な被葬者を想定することができた。無袖の川原石積横穴式石室は、付近の例としては袋井市団子塚３・７号墳などにも見られる（袋井市教育委員会1992）が、胴張りの玄室形態とはなっていない。むしろ磐田原の谷田４号墳や、京見塚１～３・６・７号墳などの西・中遠江系の無袖の川原石積横穴式石室（静岡県考古学会　2003）との関係を考えたほうがよいだろう。

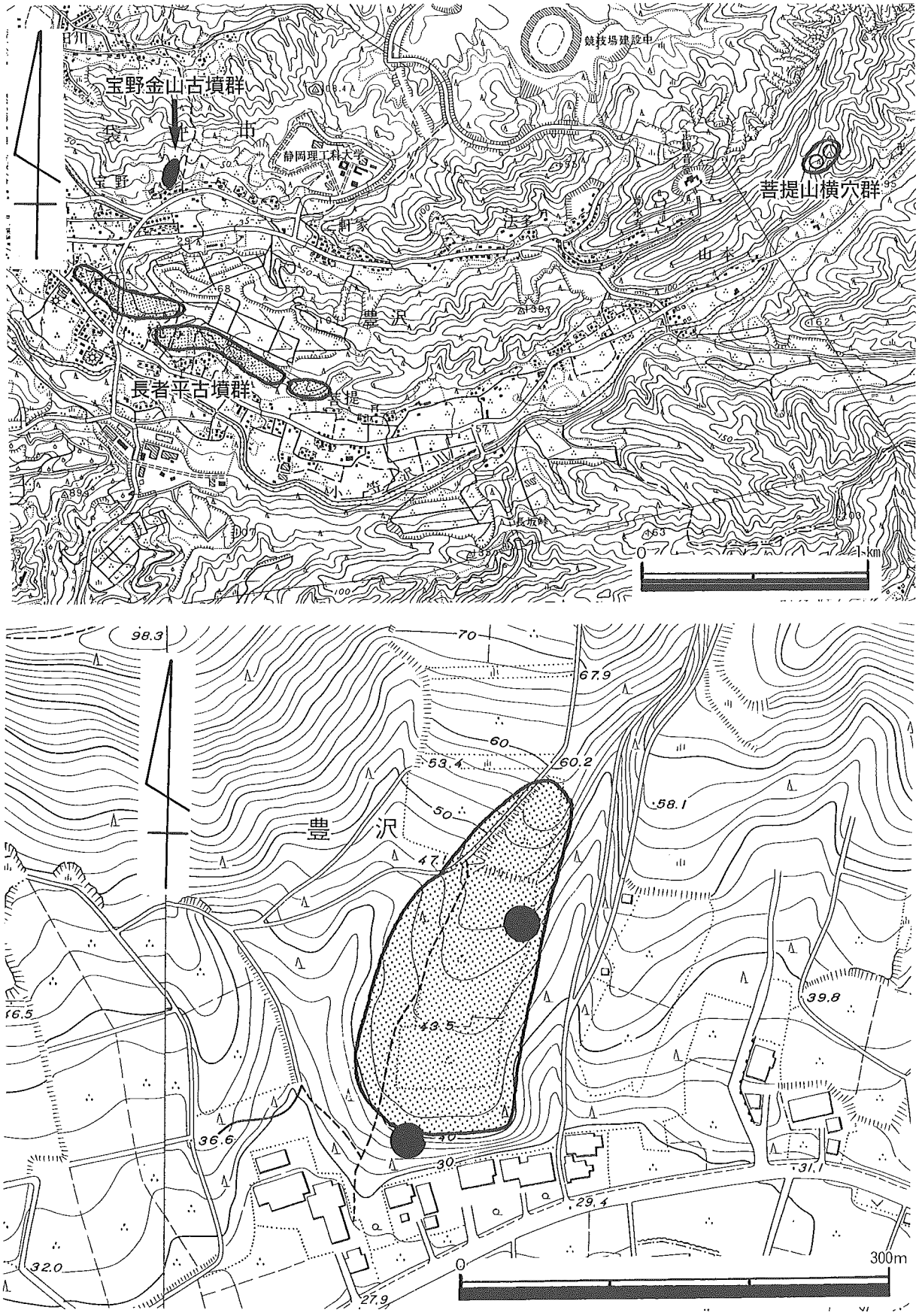
【参考文献】

袋井市教育委員会　1986　『昭和60年度国庫補助事業発掘調査報告書』

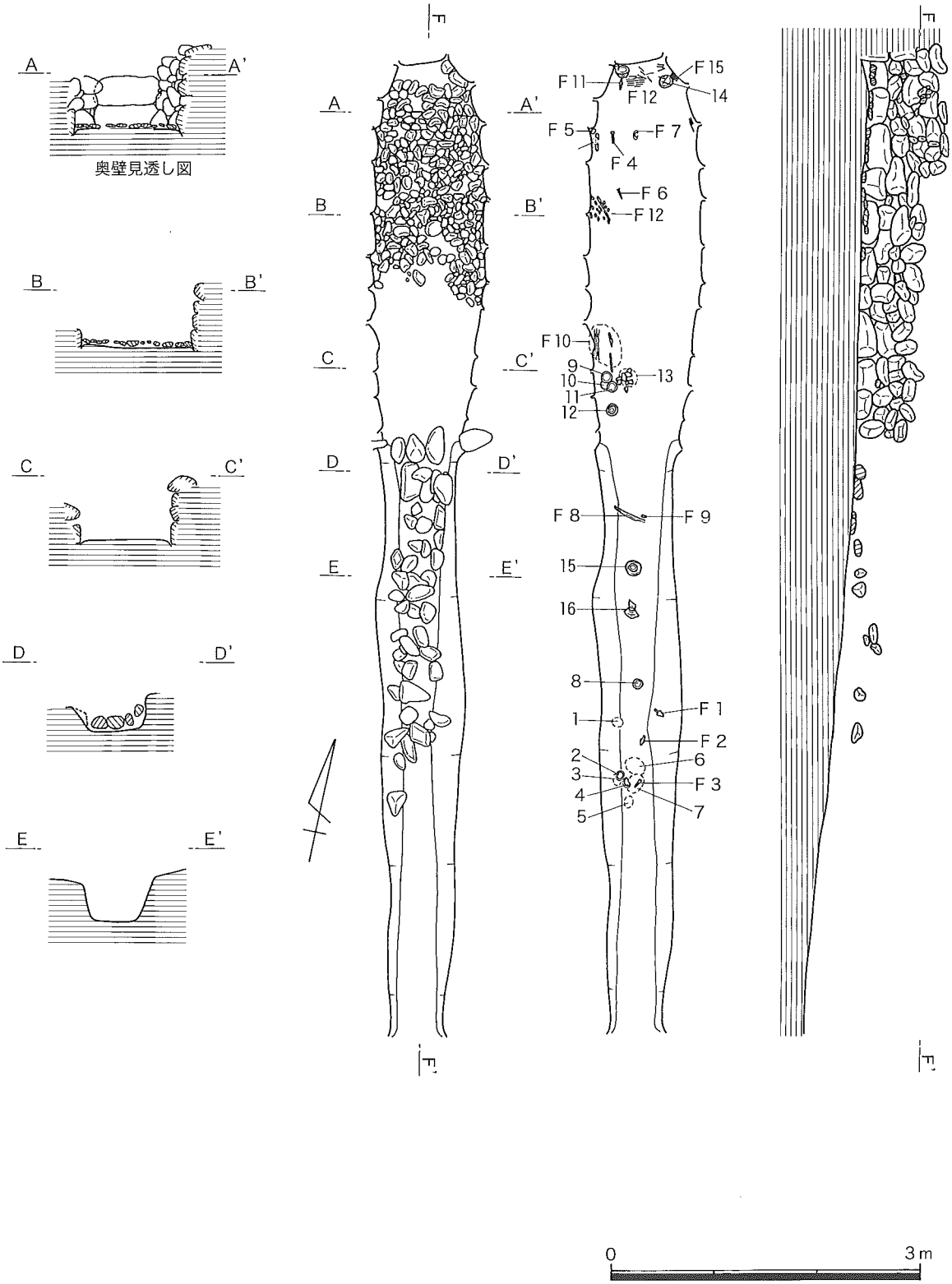
袋井市教育委員会　1992　『団子塚遺跡遺構編』

袋井市教育委員会　1994　『山田原遺跡群Ⅰ』

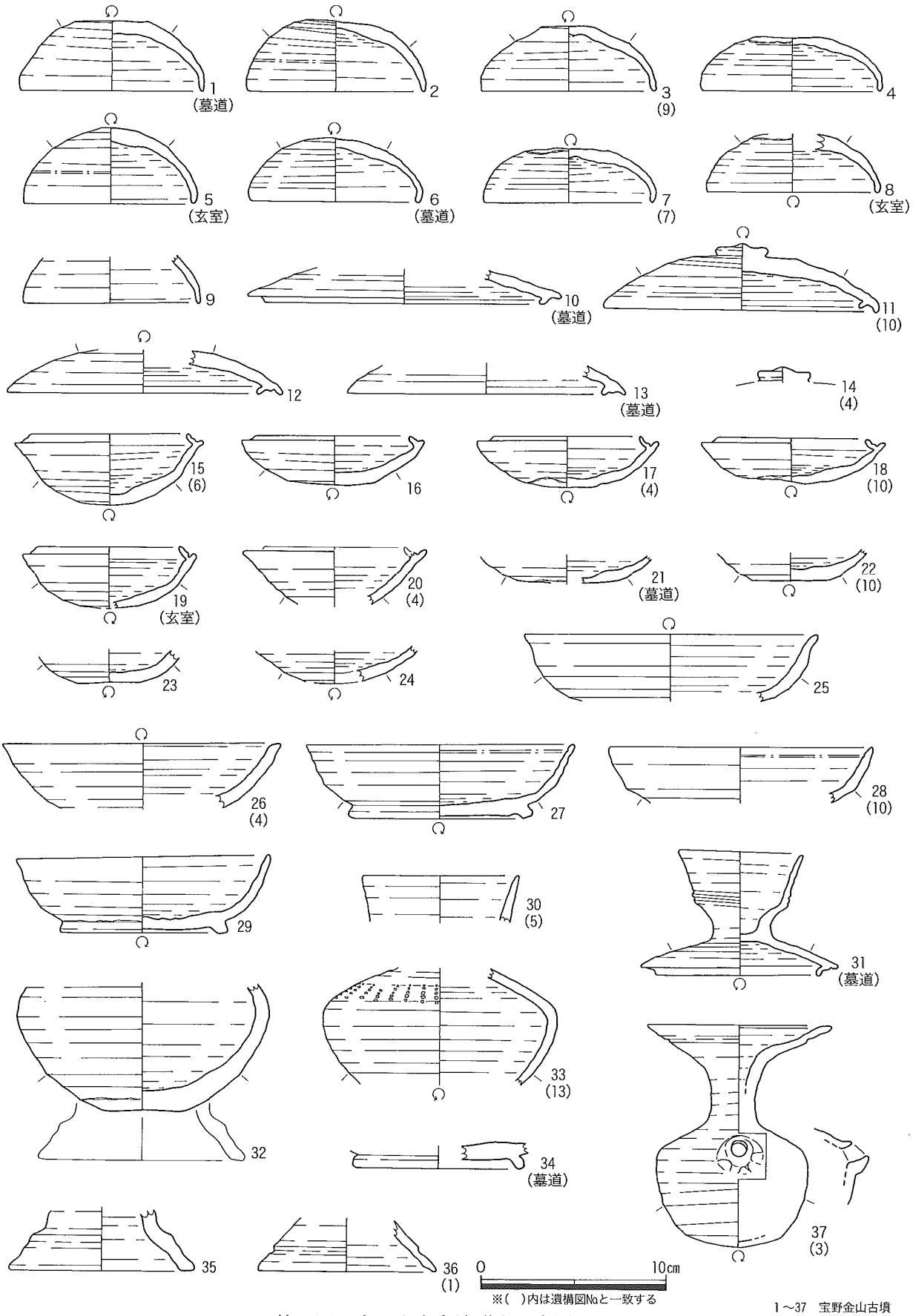
静岡県考古学会　2003　『静岡県の横穴式石室』



第１図　宝野金山古墳群位置図



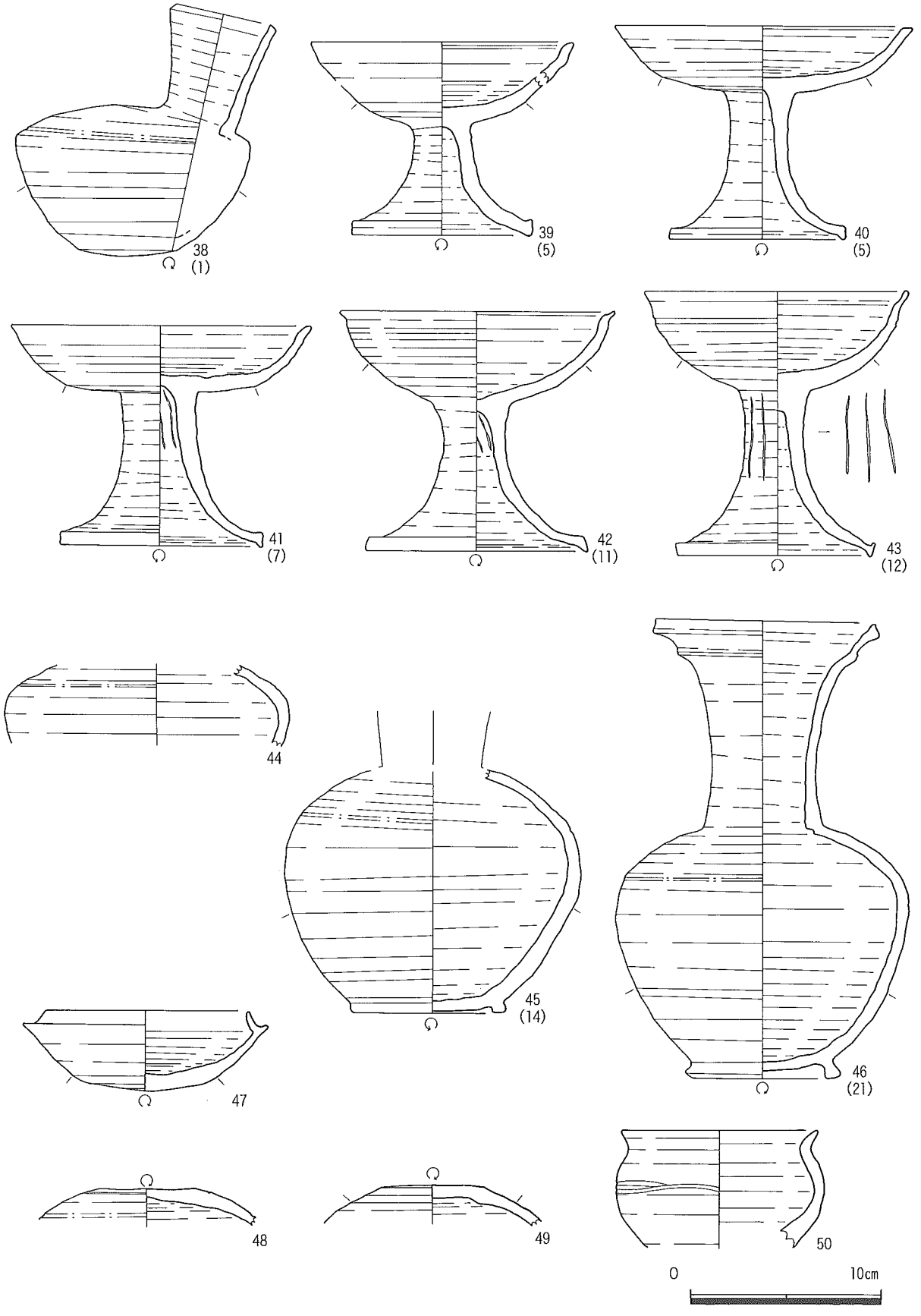
第２図　横穴式石室実測図



※( )内は遺構図Noと一致する

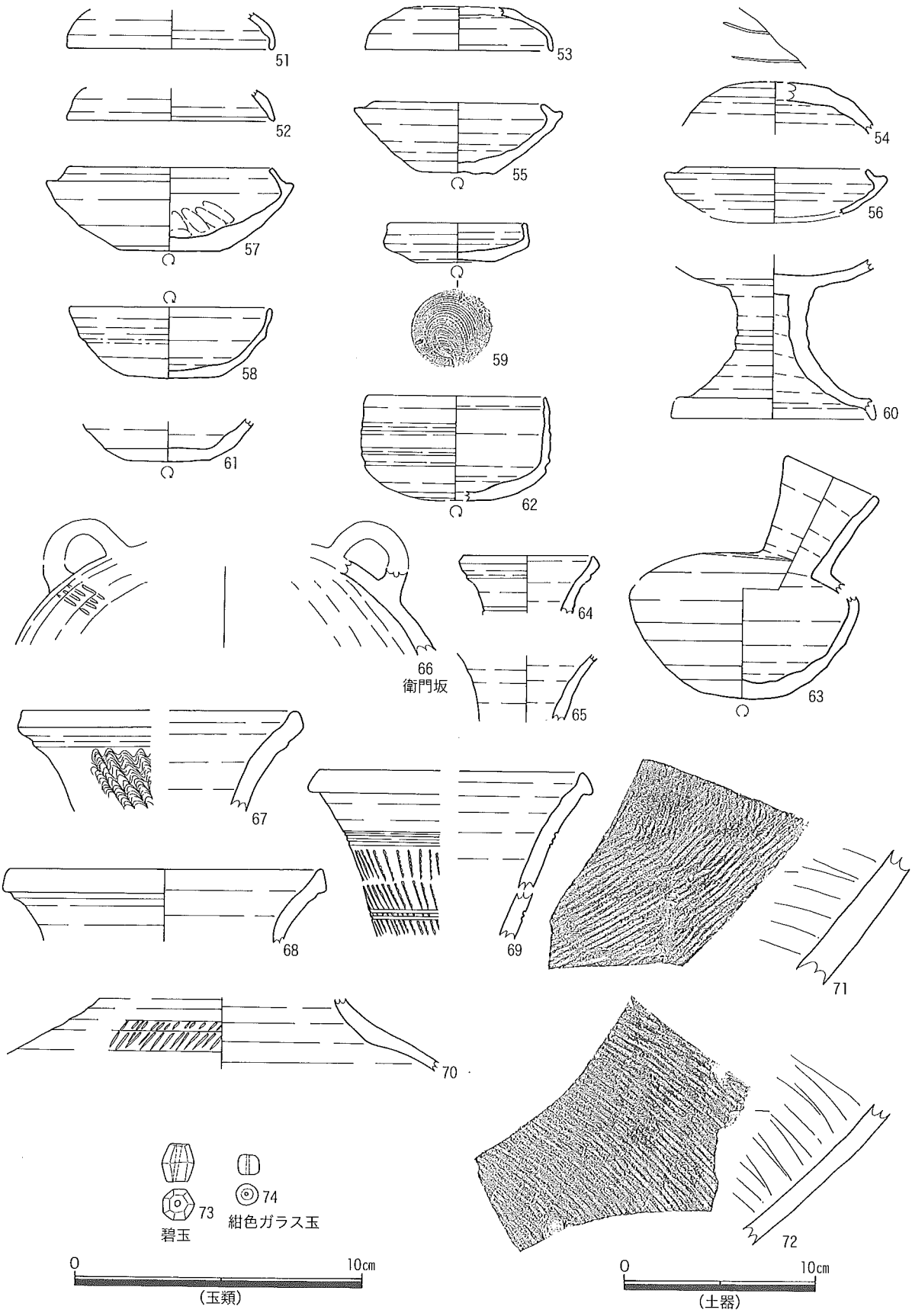
1～37　宝野金山古墳

第３図　宝野金山古墳群土器実測図１

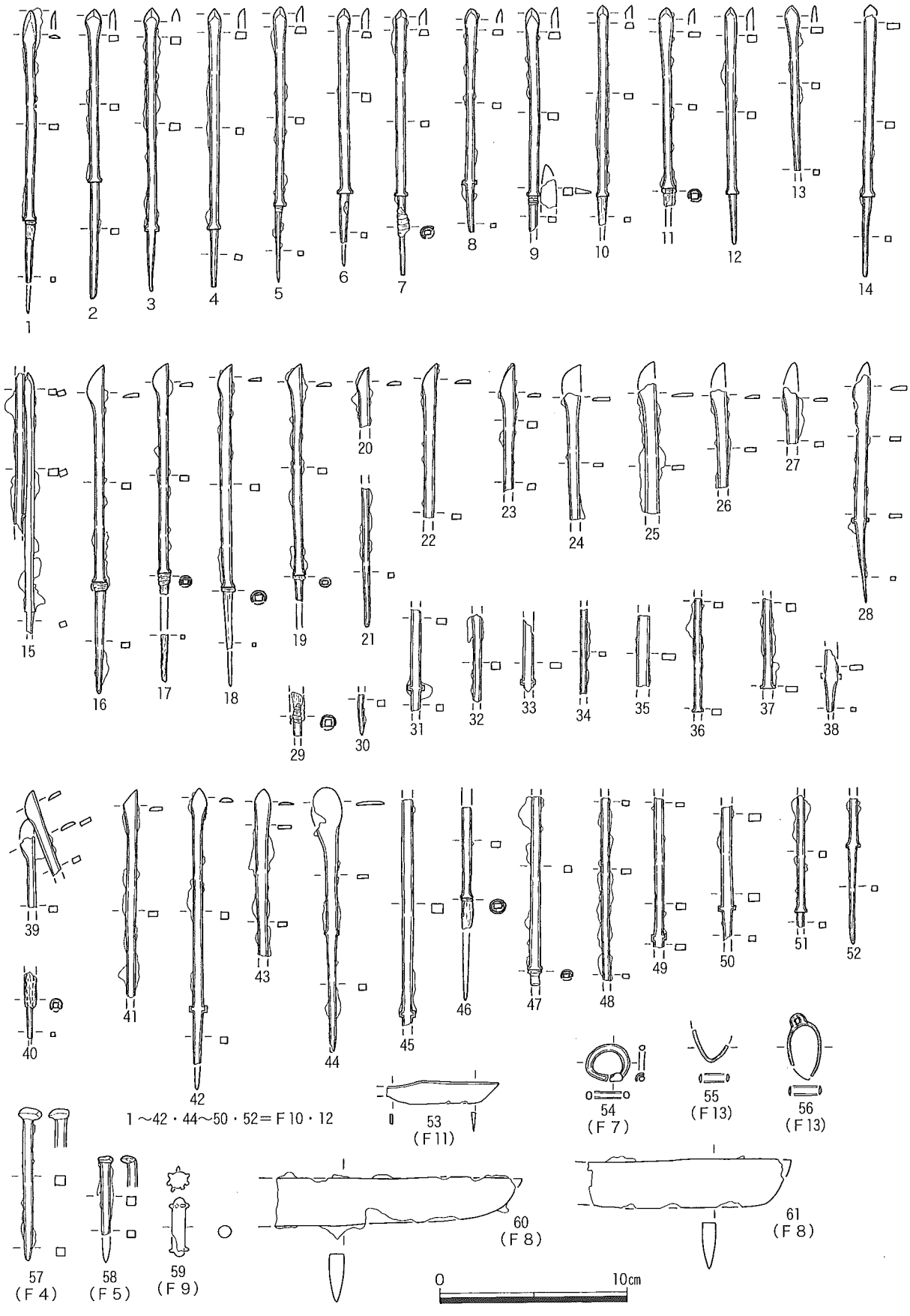


第４図　宝野金山古墳群（菩提山横穴）土器実測図２

38～46＝宝野金山古墳
47＝菩提山１号横穴
48～50＝菩提山横穴表採資料



第５図　宝野金山古墳群土器実測図３　51～74＝宝野金山古墳群　鈴木哲司氏表採資料



第６図　宝野金山古墳群金属製品実測図１

付載２　補遺　金山古墳群・八幡山横穴群の出土遺物

１．はじめに

金山横穴Ａ群は第１次調査として昭和47年度調査され、八幡山横穴群は昭和41年度に調査され横穴群で、すでにどちらの横穴群も報告書は刊行されている（袋井市教育委員会　1996･1997)。しかしながら、地蔵ヶ谷横穴群の資料整理をするなかで、金山横穴Ａ群出土の直刀と八幡山横穴の須恵器が混入していた事が判明したため、この場をかりて補遺として追加報告する。

２．遺　物

今回報告の金山横穴Ａ群出土の直刀のうち関の造りが分かるものは、１・６でいずれも片関造りである。１は無窓の楕円形の鍔と鞘口の金具が付いている。６は細身の直刀で切先は錆化して失われている。刀幅から見ると１・３が幅広で、２・６は細身の小型の部類に入るの直刀かも知れない。４・５は柄の部分で、５については１の柄になる可能性がある。

八幡山横穴群出土の７の坏身は、口径11cm代を測るものでⅤ期古（ＴＫ217）段階に該当するが、ら旋状へら削りが胴部中央まで見られるのでⅣ期（ＴＫ209）段階の要素を残している。

３．まとめ

整理ラベルからみると、１・５が金山Ａ４号横穴、２・３・６が金山Ａ１号横穴、４が金山Ａ３号横穴出土のものであることを明らかにできた。金山Ａ１号横穴から直刀２本、同Ａ３号墳から直刀３本、同Ａ４号横穴から直刀１本出土している。このうち、前回の報告書ではＡ１号横穴からは報告書第35図68の細身のものと70の幅広のものの２本、Ａ３号横穴で72の細身のもの１本と71の小刀１本が報告され、Ａ４号横穴の直刀１本は特定できていない。まず、Ａ４号横穴の１本は遺構実測図で鍔付の直刀が１本出土しており、今回報告の１・５が該当すると思われる。Ａ３号横穴出土の４についても72の柄部となり問題はない。Ａ１号横穴出土の２は細身の68の先端、３は幅広の70の先端となるが、６については記載のないものである。６の処遇は現状では不明といわざるをえないが、Ａ３号横穴出土の直刀は前回の報告書で２本しか特定できていないため、６が残りの１本になる可能性もある。

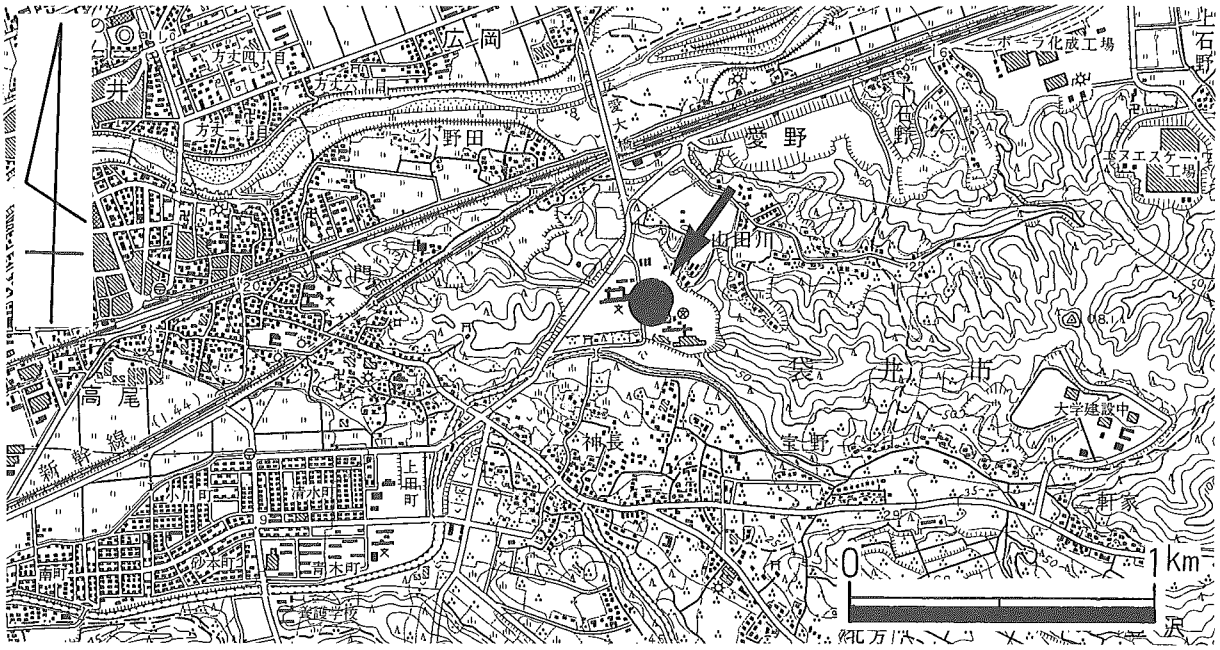
八幡山横穴出土の須恵器として、１号横穴から坏１点、高坏脚部１点、長頸坩１点のほか土師器の台付壺２点、２号横穴から高坏３点、台付長頸坩２点のほか土師器の坏２点、３号横穴から坏２点、高坏１点、平瓶１点、横瓶１点、台付盌１点、のほか土師器の小型坩１点が出土していることが概要報告書（袋井商業高校社会部　1966）に記載されている。前回の報告書では須恵器として、１号横穴からは坏１点、高坏脚部１点、盌１点、長頸瓶１点のほか土師器の坏２点、台付壺３点、２号横穴から坏１点、高坏２点、台付長頸瓶２点のほか土師器の鉢２点、３号横穴から坏２点、高坏２点、平瓶１点、横瓶１点、台付盌１点が報告されているので坏は同数となるため、今回の坏がどの横穴墓から出土しているかは分からない。時期から見ると１号か２号横穴か墓前域出土のものと推測される。

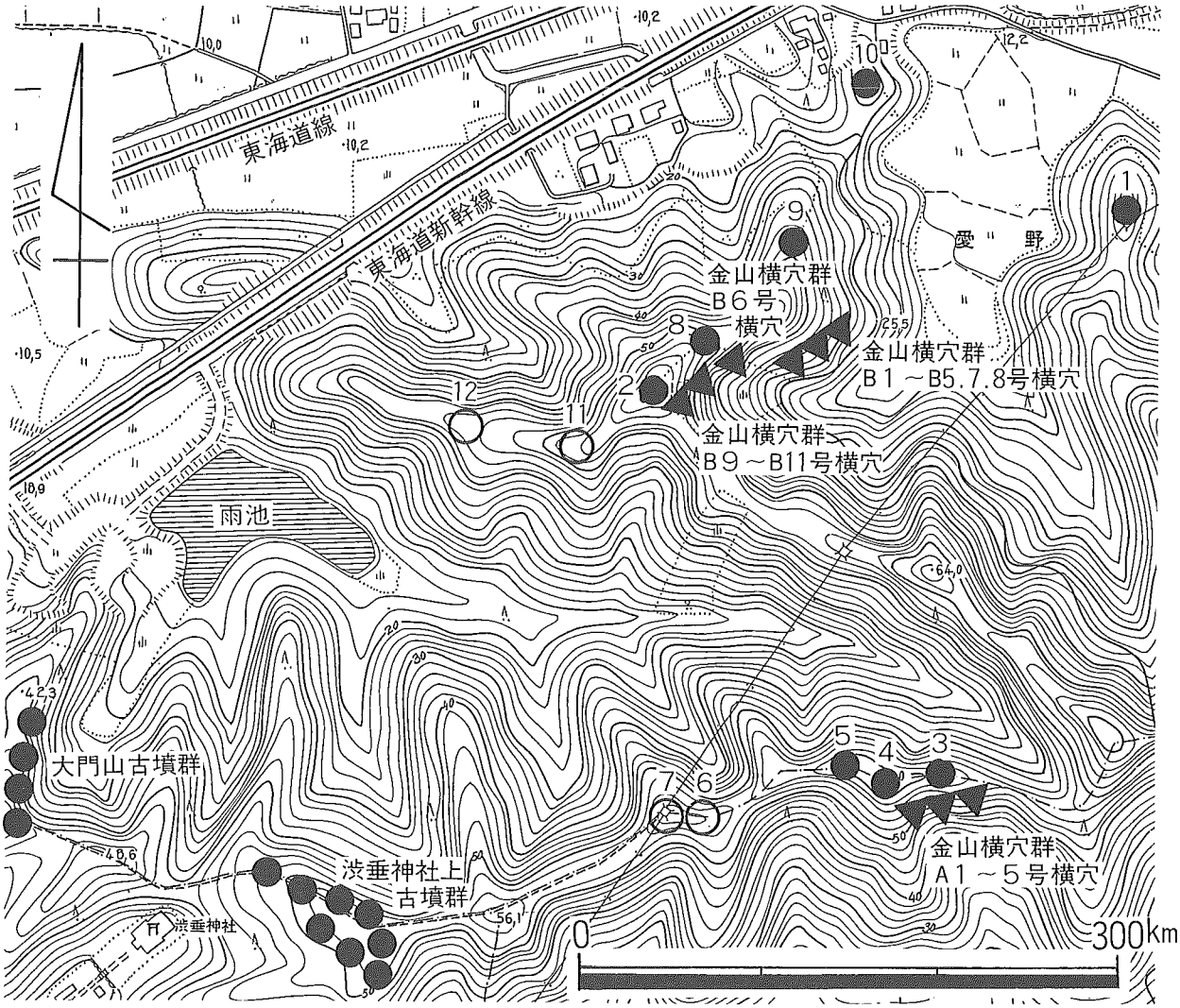
【参考文献】

袋井商業高校社会部　1966　「八幡山横穴発掘の跡」『曙』３号

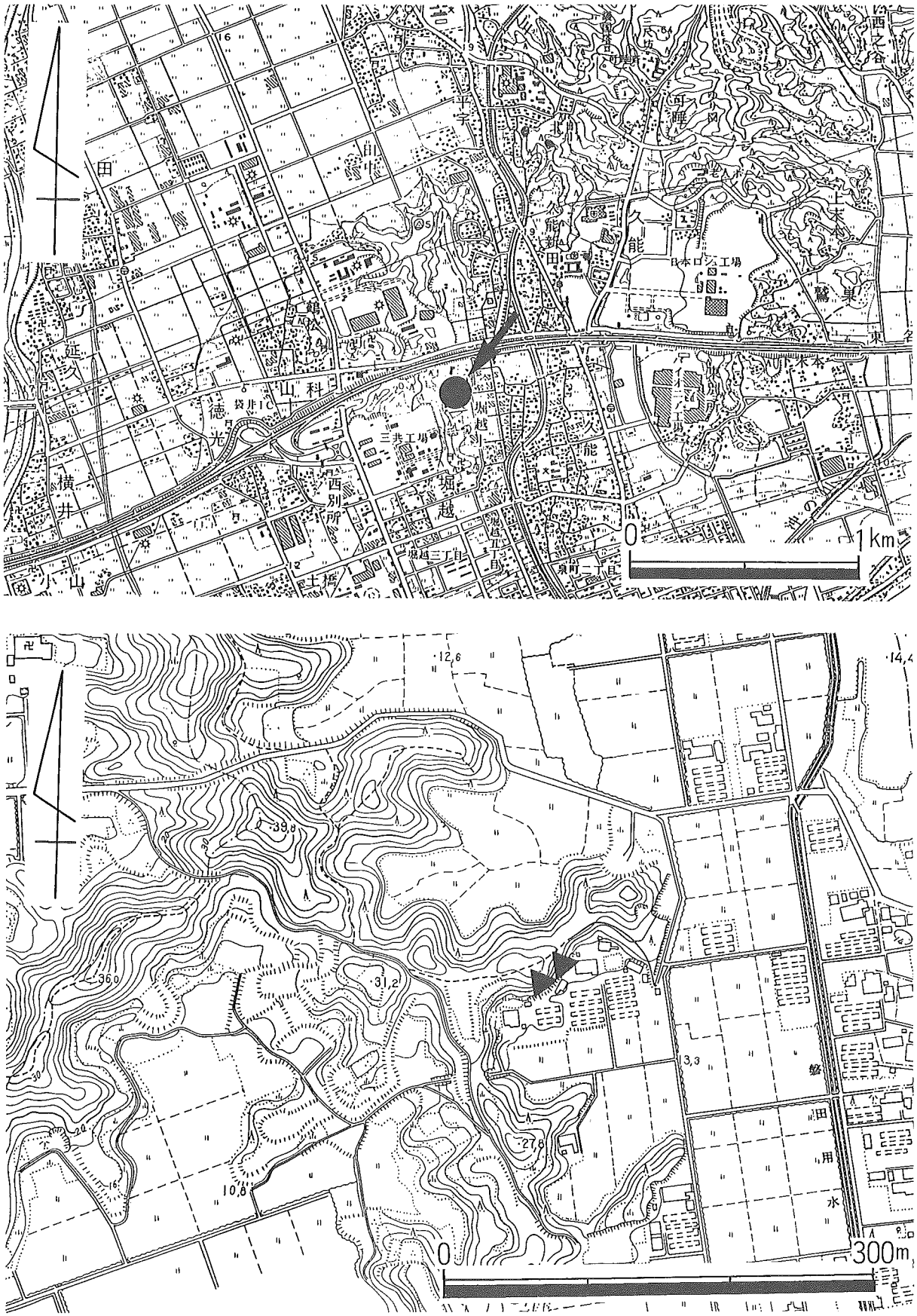
袋井市教育委員会　　1996　『金山古墳群・金山横穴群Ⅰ・Ⅱ－袋井の群集墳と横穴群を考える(1)』

袋井市教育委員会　　1997　『八幡山横穴群－袋井の群集墳と横穴群を考える(2)－』

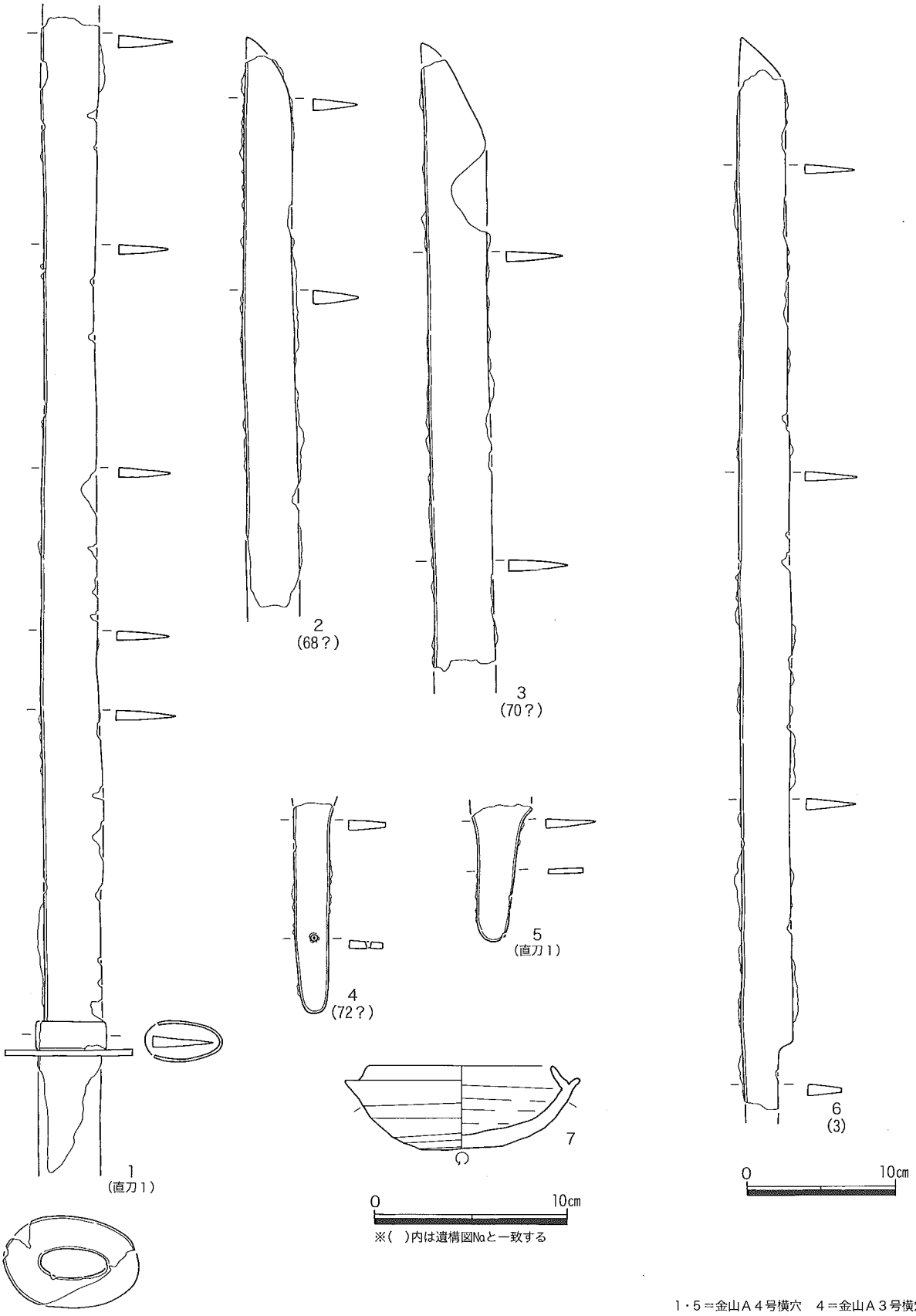




第1図　金山古墳群・横穴群位置図　1～12　金山1～12号墳



第２図　八幡山横穴群位置図



1・5＝金山A4号横穴　4＝金山A3号横穴
2・3・6＝金山A1号横穴　7＝八幡山横穴群

第3図　金山古墳群・横穴群鉄製品・八幡山横穴群土器実測図

付載３　久能東山古墳群発掘調査報告

大川　　清（国士館大学考古学研究室＝当時）

１．はじめに

昭和44年に袋井市久能鷲津地内で、日本ロッシュの工場を建設する計画が持ち上がった。これに対して袋井市教育委員会は用地内に埋蔵文化財の有無の調査を遠江考古学研究会５名に対して昭和44年11月12日付で依頼し、11月17日に教育委員会と経済課担当者立ち会いのもと所在調査を実施した。

その結果、用地内に９基の古墳が存在することが判明し、昭和44年12月17日付袋教598号袋井市教育長浅井喜作経由で東急建設株式会社取締役社長五島昇から埋蔵文化財発掘届が提出された。同時に発掘調査担当者として国士館大学考古学研究室の大川清が任命された。

発掘調査は、昭和45年１月14日から始まり３月20日まで行われた。調査主体者は東急建設株式会社取締役社長五島昇、調査担当者は国士館大学考古学研究室大川清、調査員は袋井市文化財専門審議委員大谷純仁である。さらに、調査補助員は森広樹、有吉重蔵、北原実徳（以上国士館大学考古学研究室学生）、調査参加者としては戸田和好、杉村真吾、阿形輝治、草賀和好、金沢陽一、杉浦浩己、西郷泰行、永田喜久代、桑原光江、松本一子（以上県立袋井商業高校社会部生徒）、足立順司（県立掛川西高校郷土部ＯＢ）であった。

２．調査の経過

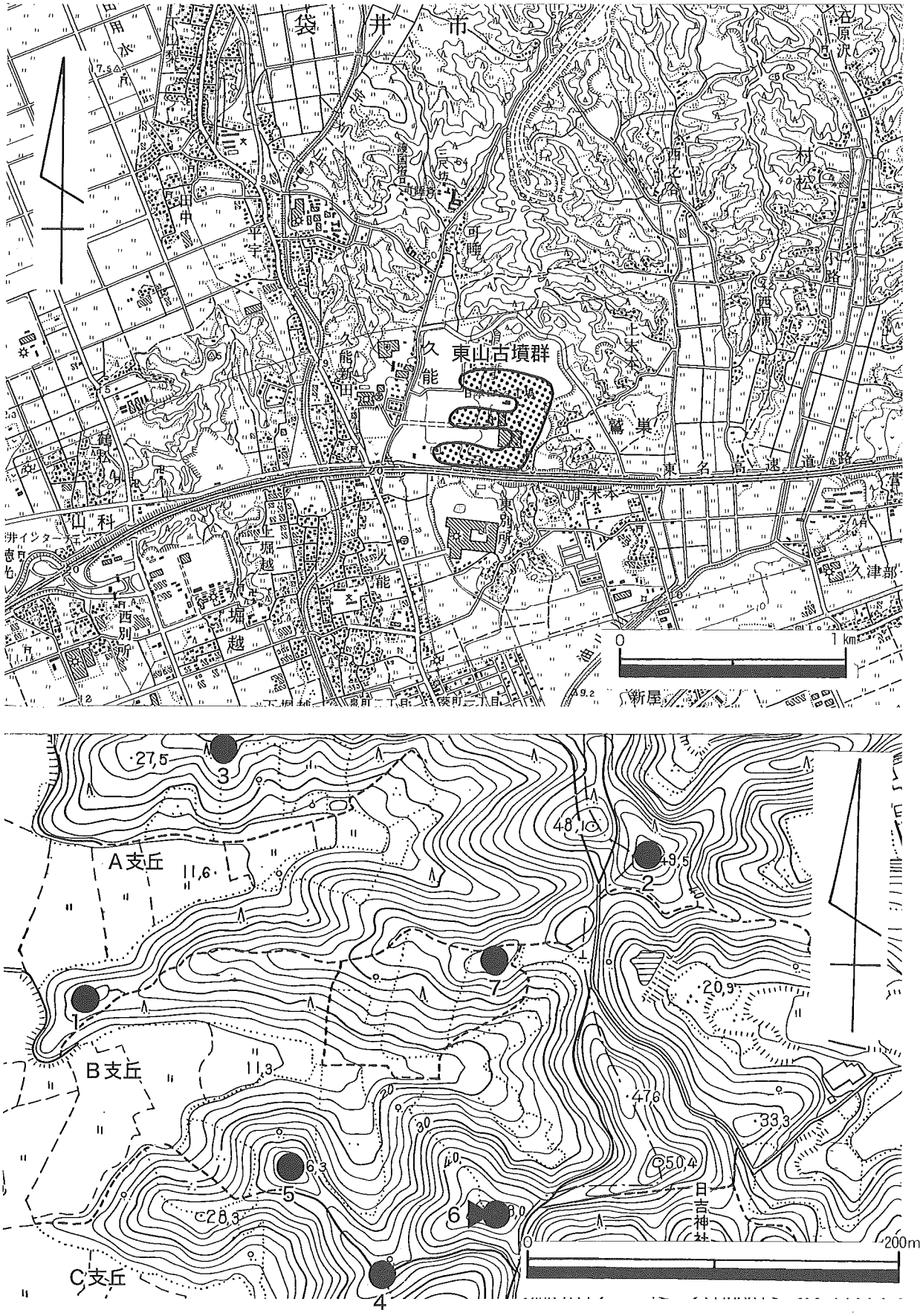
当時の調査日誌を掲載し調査の経過とする。

１月14日㈬晴　午前12時頃森、有吉、北原は器材の積み込みを終えて国士館大学を出発し、午後４時30分頃宿舎である袋井市高尾大門の牧野一氏宅に到着し機材を降ろした。同夜9時頃大川到着し、さっそく発掘調査の運営について協議する。
１月15日㈭曇　東急建設宮本・河井氏、東和開発井上氏、市教育委員会浅井氏、経済課観光係長丸尾・村井氏立会いのもと、秋葉総本殿可睡斎住職により鍬入式を行った後、現場視察をかね打合せを行う。まず６号墳より調査することになりテントを設営した。
１月16日㈮晴　６号墳の伐採を開始し半分程度完了した。中日新聞社の記者が来訪した。
１月17日㈯晴　６号墳の伐採が完了し、墳丘測量にとりかかる。
１月18日㈰晴　４号墳の伐採を開始する。
１月19日㈪曇　６号墳の墳丘測量が終了した。５号墳の伐採に着手した。袋井商業高校の生徒がこの日から参加した。
１月20日㈫晴　６号墳の表土掘削作業を行う。市文化財専門保護審議委員の大谷氏が来訪した。
１月21日㈬晴　６号墳の表土掘削作業を継続する。
１月22日㈭晴　６号墳の表土掘削作業を継続する。４号墳の調査を着手する。
１月23日㈮曇　６号墳前方部南側より内行花文鏡と、須恵器の壷、高坏などが出土した。
１月24日㈯晴　須恵器の写真撮影と実測作業を行う。
１月25日㈰晴　６号墳の北側のくびれ部の土坑を確認した。東急建設顧問平田・宮本氏、東和開発井上氏が来訪した。
１月26日㈪晴　６号墳出土の須恵器の実測を終了した。午前10時頃大川氏が到着し、大谷氏も来訪した。
１月27日㈫晴　６号墳北側くびれ部土坑（５号土坑）より土師器が出土した。中日新聞社の記者が来訪した。大川氏は夕刻に帰京した。
１月28日㈬曇／晴　４号墳の墳丘測量に着手した。並びに５号墳の伐採に取り掛かった。
１月29日㈭晴　５号墳の伐採を終了した。４号墳の墳丘測量を終了した。
１月30日㈮曇／雨　６号墳西側トレンチの排土作業を行う。東海テレビ水野氏が来訪した。森は帰京した。
１月31日㈯晴　6号墳西側トレンチの拡張を行った。4号墳の墳丘中央部に土坑を検出した。強風のため午後の作業は中止とした。
２月１日㈰晴　４号墳の土坑の調査を続行する。中日新聞社の記者が来訪した。
２月２日㈪晴　６号墳西側トレンチの掘下げと、西側トレンチの拡張を行う。
２月３日㈫晴　５号墳の測量を終了した。
２月４日㈬晴　４号墳の墳丘北西にトレンチを設置した。
２月５日㈭晴　６号墳の墳丘南北トレンチの掘下げを行う。５号墳の表土除去作業を行う。
２月６日㈮晴　４号墳の土坑の写真撮影と実測作業を行う。墳丘切断のための南北トレンチを設定した。
２月７日㈯晴　６号墳構築状態の部分実測を行う。市公報係長の寺田氏、島田商業高校の島田・平野氏が来訪した。

2月8日(日)雨　雨天のため作業は中止し、宿舎にて図面の整理を行った。
2月9日(月)晴／曇　5号墳の土坑を確認した。1号墳の伐採に着手した。大川氏夕刻に到着。
2月10日(火)晴　5号墳土坑の調査を続行する。1号墳の伐採を完了する。大川氏夕刻帰京した。
2月11日(水)晴　7号墳の伐採に着手する。6号墳の後円部に土坑（1号土坑）を確認した。土坑内より勾玉、管玉、丸小玉が出土した。
2月12日(木)晴　6号墳1号土坑出土遺物の実測を行う。1号墳の墳丘中央にトレンチ設定した。
2月13日(金)晴　6号墳1号土坑の写真撮影と実測作業を行う。7号墳の墳丘測量に着手した。3号墳の伐採作業を開始する。掛川西高校ＯＢの足立氏が調査に参加する。
2月14日(土)晴　2・3号墳の伐採作業が終了する。7号墳の墳丘測量を終了する。大川氏夕刻に到着する。
2月15日(日)晴　7号墳の調査を開始する。3号墳の墳丘測量を終了した。大川氏午後帰京する。
2月16日(月)晴　6号墳の完掘後の測量を開始する。7号墳の表土除去作業を開始する。
2月17日(火)晴　7号墳の調査を続行する。
2月18日(水)晴　3号墳の表土除去作業を継続する。
2月19日(木)晴　3号墳の表土除去作業を継続する。6号墳の墳丘東西にトレンチを設置し、掘下げる。東急建設杉本氏を来訪する。
2月20日(金)晴　8号墳の墳丘測量が終了したので、早速調査を開始した。足立氏調査に参加。
2月21日(土)雨／晴　午前中雨天のため作業を中止とする。
2月22日(日)晴　4号墳の南北セクションの実測作業を行う。3号墳の周溝を認める。大川・戸田氏夕刻に到着する。
2月23日(月)曇　4号墳の南北トレンチの東西セクションの実測作業を終了する。大川・戸田氏は午後帰京する。
2月24日(火)曇／雨　8号墳は自然地形であることが判明した。3号墳の周溝を引続き追及する。
2月25日(水)晴／雨　午後より雨天のため作業を中止し、市役所にて市内出土遺物の見学をした。
2月26日(木)雨　6号墳前方部に土坑3基（東より2～4号土坑）を確認した。戸田・下之原氏夕刻に到着した。
2月27日(金)晴／曇　6号墳の3号土坑の調査を続行する。1号墳の表土除去作業を行う。戸田・下之原氏は早朝帰京する。
2月28日(土)雨　雨天のため作業は中止とした。
3月1日(日)晴　2号墳の調査を開始する。
3月2日(月)曇／晴　6号墳の2号土坑の調査を続行する。土坑内より抉入磨製石斧が出土した。2号墳の墳頂部に川原石を認められ土師器片が出土した。足立氏調査に参加する。
3月3日(火)曇／雨　6号墳の南北トレンチの東西セクションの実測作業を行う。6号墳の4号土坑を完掘する。
3月4日(水)雨　雨天のため作業は中止する。
3月5日(木)曇／雪　6号墳の2～4号土坑の周囲の清掃作業を行う。9号墳の墳丘測量に着手する。
3月6日(金)曇／雪　9号墳の墳丘測量が完了したので、表土の除去作業を開始する。
3月7日(土)晴／曇　9号墳の表土除去作業を継続する。3号墳ＡＢ、ＢＣ、南面セクションの実測作業に取り掛かる。
3月8日(日)晴　5号墳の土坑の実測作業に取り掛かる。2号墳の墳頂部の集石の実測作業を開始する。
3月9日(月)晴　5号墳の土坑の実測作業を終了する。
3月10日(火)曇／雨　7号墳の主体部の調査を続行する。5号墳の土坑の写真撮影を行う。大谷氏が来訪した。大川氏夕刻に到着する。
3月11日(水)晴　1号墳の主体部の調査を続行したところ、鉄器片が出土した。大川氏午後帰京。
3月12日(木)晴　5号墳の墳丘切断のための東西トレンチを設置した。6号墳の2～4号土坑の写真撮影を行った。
3月13日(金)曇／雨　6号墳2～4号土坑の実測作業に着手した。1号墳で土坑3基を確認した。
3月14日(土)晴　2号墳の集石の写真撮影を行った。足立氏調査に参加する。
3月15日(日)曇　6号墳2～4号土坑の実測作業を継続する。5号土坑の写真撮影を行う。
3月16日(月)雨　雨天のため作業は中止とする。
3月17日(火)雪　1号墳の土坑の実測作業を行う。6号墳の土坑の実測作業を終了する。
3月18日(水)晴　2号墳の土坑の写真撮影と実測作業を行う。
3月19日(木)晴　5号墳の墳丘セクションの実測作業が終了した。本日をもって、全調査がほぼ終了したため、器材の積み込みを行う。
3月20日(金)晴　森、北原の両名は早朝ライトエルフにて出発し、有吉は1号墳の主体部撮影後に帰京した。

3．位置と環境

久能東山古墳群は、ＪＲ袋井駅より北方2.3kmの地点にある丘陵上に位置している。この丘陵は太田川と原野谷川によって形成された沖積平野に半島状に突き出ていて、袋井の市街地に切断された格好で市街地南側の小笠山地に相対している。丘陵東側は、丘陵に沿って太田川が形成した沖積平野が広がり緩やかな地形をなすが、西側（丘陵先端部）は侵食谷により4陵に分岐している。太田川より数えて第2丘陵目に本古墳群は位置している。この丘陵は、さらに東西両側に支丘を形成しているが、



第１図　久能東山古墳群位置図

今回の調査では東側にそれも先端部の３支丘について実施した。

この付近は、静岡県でも最大の古墳群である磐田原台地を東に望み、袋井市周辺には後期に属する小円墳が群集している。また横穴群も同様であるが、とくに丘陵の第１陵目に横穴が密集している。

４．遺　跡

今回の調査は合計９基について実施されたが、その結果２基が自然地形であることが判明した。丘陵より伸びた３支丘を記述上北側よりそれぞれA、B、C支丘とすると、A支丘に２・３号墳、B支丘に１・７号墳、C支丘に４・５・６号墳が存在する。

６号墳が前方後円墳の形態をとるほかはすべて円墳であり、主体部が確認されなかった３・７号墳を除き、いずれも木棺直葬であることが判明した。以下各古墳について述べることとする。

１号墳

墳丘　本古墳は全国遺跡地図（文化財保護委員会編　1965）に東別所２号墳と記載されているものであり、B支丘先端部に構築されている。標高は19.85mを計り本古墳群中最も低いところににある。後世茶畑として使用するための開墾を全面にわたって受けていたため四段の段丘状をなしていたが、調査の結果から巧みに地形を利用した円墳であることが判明した。精査にもかかわらず墳丘面には埴輪、葺石、周溝等の外部施設は認められなかったが、丘陵先端部を巧みに利用しているため、水田面からの眺めはまことに壮大なものである。B支丘と墳丘を画するために何らかの調整が加えられたと考えられるが、これも開墾による地形の変化が激しいため不明である。盛土は青灰色粘土質土のみであったが、これはB支丘の構成土である。

内部施設　主体部は墳丘南側よりに３基並列して確認されたが、いずれも地山を掘りこんだ土坑であった。発見順に東より１～３号の各土坑とする。

１号土坑は墳丘の南側に位置し、主軸をほぼ南北方向にとる。土坑の両端は攪乱により明確ではないが、現存長約３m、最大幅約0.6mを計る。土坑断面はU字状をなし、土坑内には灰白色粘質土に若干の黒色有機質土が混入したものが堆積していた。土坑北側より土坑底に接しＦ１のヤス状鉄器と相対するかのような状態であった。さらに、これらの中間には長さ約３m程の錆化進んだ鉄製品２個が、ヤス状鉄器と平行して発見された。

２号土坑は１号土坑の西隣りに１号土坑と同一方向をとり、長さ約４m、最大幅約0.65m、深さ約0.5mを計る。断面はU字状をなし、１号土坑と同様に木棺にあわせてこれを安定させるために掘り込んだものと考えられる。この土坑は中央部付近がやや東方にふくらみをもって張り出すほかは、南端と北端において当初の状態をよく残しているものと思われる。土坑内堆積土は１号土坑と同様に灰白色粘質土に若干の黒色有機質土が、混入したものであった。土坑中心部より北側によったところより土坑底に接して緑泥岩製の管玉Ｋ２が、さらにこの北方約0.5mのところによりのところより同質の管玉Ｋ１が出土した。

３号土坑の長軸は１・２号土坑とほぼ同方向であり、２段に土坑を掘ったものである。土坑の状態は北隅付近に攪乱の痕跡が認められたが、まず地山に長さ約5.25m、幅約1.2～1.5mの長方形に浅く掘りくぼめ、さらにその中央に木棺を収納する土坑を掘りくぼめたもので、内部の土坑の規模は長さ約4.5m、幅は南端付近が約0.6mを計る他は、0.4～0.5mであった。土坑（内部）断面はU字状を呈しており、最も深いところで約0.3mある。断面および土坑の状態からして木棺を直葬したものと考えられる。土坑内に堆積していた土も１・２号土坑と同様に灰白色粘質土に若干の黒色有機質土が混入したものであった。

土坑中央部の底に接して緑泥岩製の管玉Ｋ３、一段目の掘り込みの長辺東側中央部よりやや北側に鉄鏃Ｆ２が出土した。径５～10cmの川原石が約30cmの範囲で認められていたが、これは木棺の安定のために置かれたものと思われる。

２号墳

墳丘　Ａ支丘とＢ支丘が連なる丘陵の中間に位置し、本古墳群中最も高いところにあり標高50mを計る。図より東西に長い方墳状をなしていたるが、西側は切り通しの山道となっているため相当削り取られて急傾斜となっているが、本来はもっと全体に丸味をもっていたものと思われる。墳頂部は割合平坦である。表土下はほとんど地山と同じ地質になっているが、北と南では地質が幾分違うようである。すなわち北側では赤褐色小礫混合土の柔らかい土であり、南側では礫の少ない黄褐色の固い土である。以上の他は何ら土層に変化はみられなかった。

また、墳丘の規模は西側の流出部分を考慮に入れ実測図より復元してみると、長径約11～12mの不整楕円形をなすものであろうと考えられる。

内部施設　盛土の流出が激しいためか、調査前の段階ではすでに径12～13cmほどの川原石数個が露出していて、上部に土師器の甕の口縁部等の破片が散乱していた。この川原石を掘りだし、さらに川原石を取り除いたところ長さ約1.85m、幅約0.6m、深さ約0.15mの不整長方形を呈した土坑が検出された。この土坑は壁を径約15cmほどの川原石で構築しているが、石はそれほど整然としたものでなく土坑を囲むような格好となっている。土坑内からは遺物は全く出土しなかった。

３号墳

墳丘　南端のＡ支丘上にあり、墳丘の北側および東側は工事のために削り取られていた。西側は土砂の流出が激しく大きく窪んでいるが、東西約８m、南北約11.5mの不整円形を呈している。墳丘の高さは溝底より約0.9mであり、墳頂部は幾分平坦になっている。

墳丘の構築にあたっては、Ａ－Ａ’の東西断面図に観察されるように地山を削って構築している。盛土は淡褐色砂質粘土（４）と茶褐色土（２）であり、（４）の上部に（２）があったものと考えられる。なお、茶褐色土（２）は西半分には観察されないが、これは東側に比較してかなりの変化を受けていて裾の方に流出したものらしい。遺物は全く出土しなかった。

内部施設　本古墳に関係する埋葬施設は全く認められなかった。なお、墳頂中央部において東西約0.55m、南北約0.65m、深さ0.5mの隅丸方形をなす遺構が検出されたが、Ａ－Ａ’東西断面図に見られるように淡褐色土層最上面より地下0.5mほどのところまで掘り込まれており、淡褐色土（２）がかなり流出した後に掘られたのであろう。内部には豆粒大の小石を含む茶褐色土が堆積していたが、この中からは何ら遺物は検出されなかった。

溝　墳丘東側に位置し、墳丘の南北に沿って走っていて、幅約1.5～2.5m、表土から溝底までの深さ約0.5～0.6m、現存長さ約10mを計り、断面は緩やかなＵ字状を呈している。この溝が周溝か尾根を区切るためのものかは前述したように、墳丘西側がかなりの変形を受けているために判断し難いが、もし周溝であったとしても全体をめぐったものではないことは明らかである。いずれにしても墓域を明瞭にするという点で一致している。

４号墳

墳丘　本古墳は東名高速道路に面した支丘のほぼ中央に位置する。現状では尾根づたいの山道のためかかなり変形を受けているが、長径約13m、短径約7.5mの東西方向に長い不整楕円形をなし、高さは約0.75mほどである。墳頂部は６号墳からの尾根の傾斜が、４号墳付近で急に緩やかになり平坦面を作っている。

墳丘の構築については西側断面を観察すると、表土（1）は約3～8mの厚さを計り、また盛土である軟質の黄褐色礫混合土（2）は、墳頂部で約20cmを計り、墳頂裾部ではかなりの堆積をみる。（3）以下は地山であり、褐色礫層（7）においては幅約50cm、深さ約20cmの地山の落ち込みが認められたが、トレンチによる確認の限りでは周溝ではないようである。

また、褐色礫層（7）の落ち込み上部より褐色砂質土（6）まで、約60cmほどの立ち上がりが観察されるが、これは地山を構築した際に見かけの高さを増すという視覚的効果を考えてなされたものと考えられる。遺物は全く出土しなかった。

内部施設　墳丘の中央部よりやや東側に発見されたが、何分にも表土下約20cmの非常に浅いところにあるため、墳頂部に近い北側でかなりの破壊を受け、やっとの想いで壁の立ち上がりを確認することができた。しかし、南側・西側は破壊を受けずに比較的良く残っていた。これらより長さ約1.7m、最大幅約1.25m、深さ約0.14～0.20mの地山を掘り込んだ隅丸長方形の土坑であることが判明した。土坑の主軸は墳丘の長軸と大体一致しており、東西方向をなしている。土坑の南半分には粘土が認められたが、これは地山を構成する粘土の一部であり、自然的なものであった。散在する小石も同様である。遺物は全く出土しなかった。

5号墳

墳丘　本古墳は4号墳より北西方向約80mの同支丘上にある。墳丘の南東は4号墳からの尾根続きのため緩やかな傾斜をなし、墳丘の輪郭が明瞭ではないが、径約11mほどの不整円形をなすものと考えられ、高さは約1.8mを計る。

墳丘の構築については、北側断面で観察すると、軟質の褐色礫混合土（2）は盛土であり土坑上で約20cm、墳丘中腹では約10cmを計る。墳丘下部では盛土の流出のため40cmほどの堆積が認められる。また黄褐色礫混合土（3）も軟質であり、盛土の一部である。黄褐色粘土（4）以下は地山で、黄褐色礫混合土（3）の西側では、東側と比較して急傾斜になっている。これは4号墳と同様に地山を削り取り、その土を盛土としたものであって、地山を削る際、墳丘の東側に比較して傾斜の少ない西側を大きく削り取り、墳丘の均正化を計ったものと考えられる。周溝は認められなかったが、墳頂部より南方約7.5m、表土下60cmのところより土師器片が出土している。

内部施設　墳丘中央より南東に位置し、主軸をほぼ南北におく長さ約2.2m、最大幅約1.4mの隅丸長方形の土坑である。土坑南側は墳丘の傾斜のため削られていて、保存状況はあまり良くない。断面は緩やかな傾斜のU字状をなしている。土坑内からは、埋土中に若干の焼土と炭化物が認められたが、何ら遺物は発見されなかった。

6号墳

墳丘　南北に長い丘陵は、これより分かれた支丘との境で急に丘陵が高くなり、4号墳へと暫時低くなっていく。本古墳はこの高くなった尾根に構築されていて、全国遺跡地図掲載の東別所1号墳に該当するもので、古墳群唯一の前方後円墳である。

この丘陵は全体的には流出度の高い土壌であるため変化を受け易いことと、前方部が4号墳に向かって傾斜しているため墳丘自体があまり明確ではなく、とくに南側のくびれ部はそれが著しい。南北と東西に土層観察のためにあぜを残し、全面的に表土を取り除いた結果知り得た墳丘の規模は、全長約30m、後円部径約14m、前方部端の幅約11mである。高さについては巧みに地形を利用しているので確実なところは決めかねているが、約2.5mほどになると思われる。しかし、これはあくまでも実測図から推測したもので、視覚的効果、つまり北側における平坦面（比高44m）から見れば、約2倍の高さに見え、雄大なものとなっている。

構築方法については、墳丘の基底部を考えるとB－B'の東側断面による観察の結果、北側については中心より北方約５m、墳頂下約３mのところで地山である黄褐色礫混合土（６）が平坦になっていて、その上部に盛土の流出したものと考えられる（２）～（５）の各土層が堆積しているいると考えられる。一方南側については、中心より南方約３m、墳頂下約1.2mの地点と南方約5.2m、墳丘下約2.4mの地点の２箇所に地山である黄褐色礫混合土の平坦面が見られるが、後者が基底部として妥当な面であるようだ。また地山と盛土の間には墳丘築造時の地表面と見られる何らかの形跡が認められないことにより、本古墳が地山を削り取り墳丘を構築したと考えられるが、その際に墳丘の北側においては現在の地形にかなりの平坦面を残している事等から、大幅な削除が加えられていたようであり、南側においては平坦面が僅か約60cmほどしか認められない。これは急傾斜という地形的制約のために、より墳丘を形づける程度の削除しか行われてなかったのであろう。A－A'の東側断面についても同様のことが言えると思う。ただ南側において平坦面が認められないのは、ここでは黄褐色砂質土になっていて、上部に盛土が認められないことから盛土の流出が激しく、またそれにともなう墳丘の変形を受けたため平坦面がなくなったものであろう。周溝および埴輪・葺石等の外部施設はまったく認められなかった。

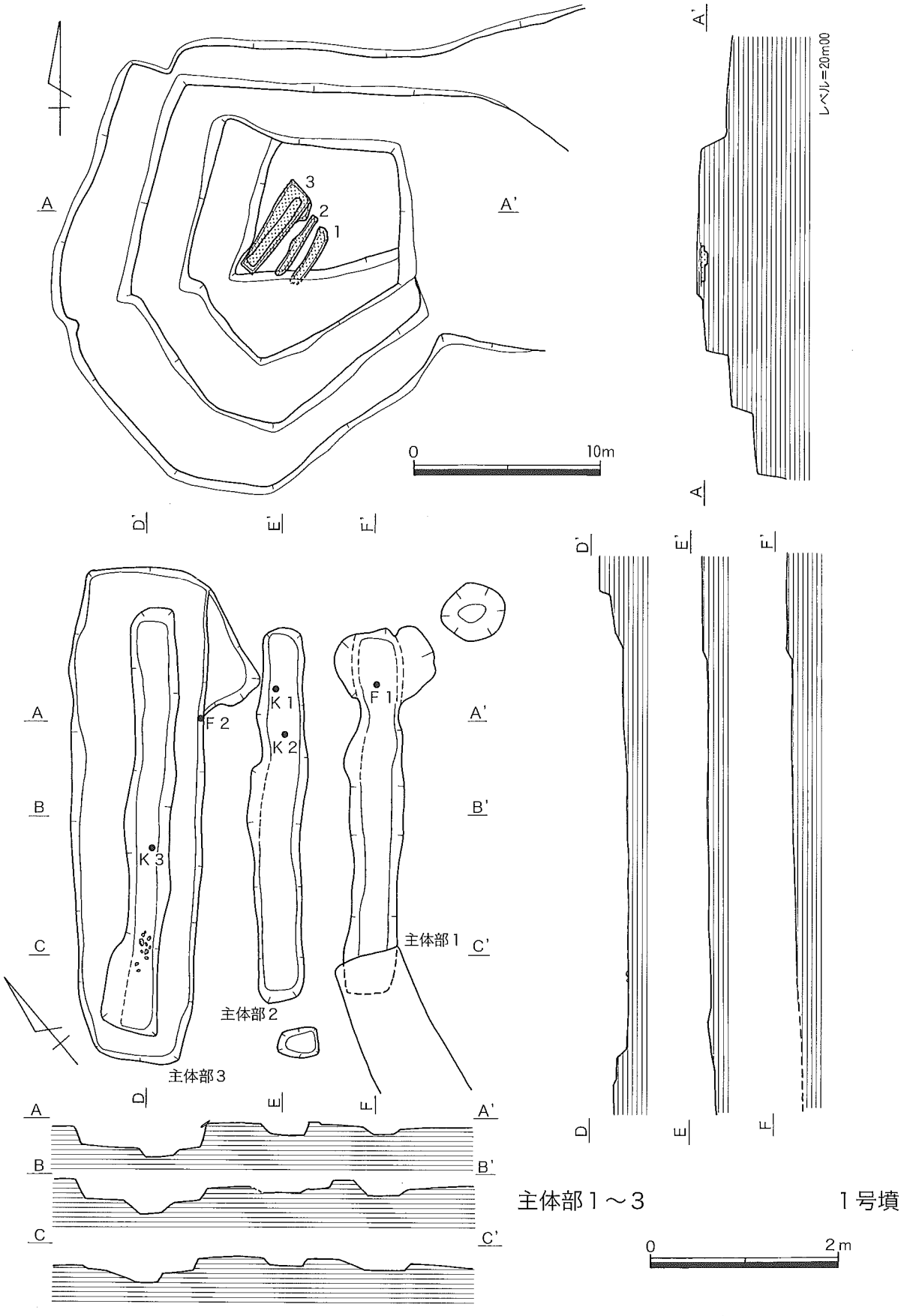
内部施設　主体部は後円部中央に１基、前方部くびれ部墳頂より３基、くびれ部北側に１基の合計５基が検出された。いずれも土坑であった。調査順に東より１～５号土坑と命名した。

１号土坑は後円部のほぼ中央に位置し、主軸東西方向に置くがこれは墳丘の主軸とほぼ同じ向きである。調査以前に掘られた楕円形の盗掘坑によって東側部分については破壊されていた。現存部分では長さ約1.6m、幅約1.1m、深さ約0.25mの隅丸の不整長方形を呈し、断面は緩やかなU字状をなしている。土坑内には中央部西側よりには朱と思われる赤色顔料が多量に認められ、その東側約20cmのところから勾玉１個、菅玉３個、ガラス玉３個が出土した。また土坑内の埋土をふるいにかけたところ、さらに菅玉とガラス玉が各１個が出土した。

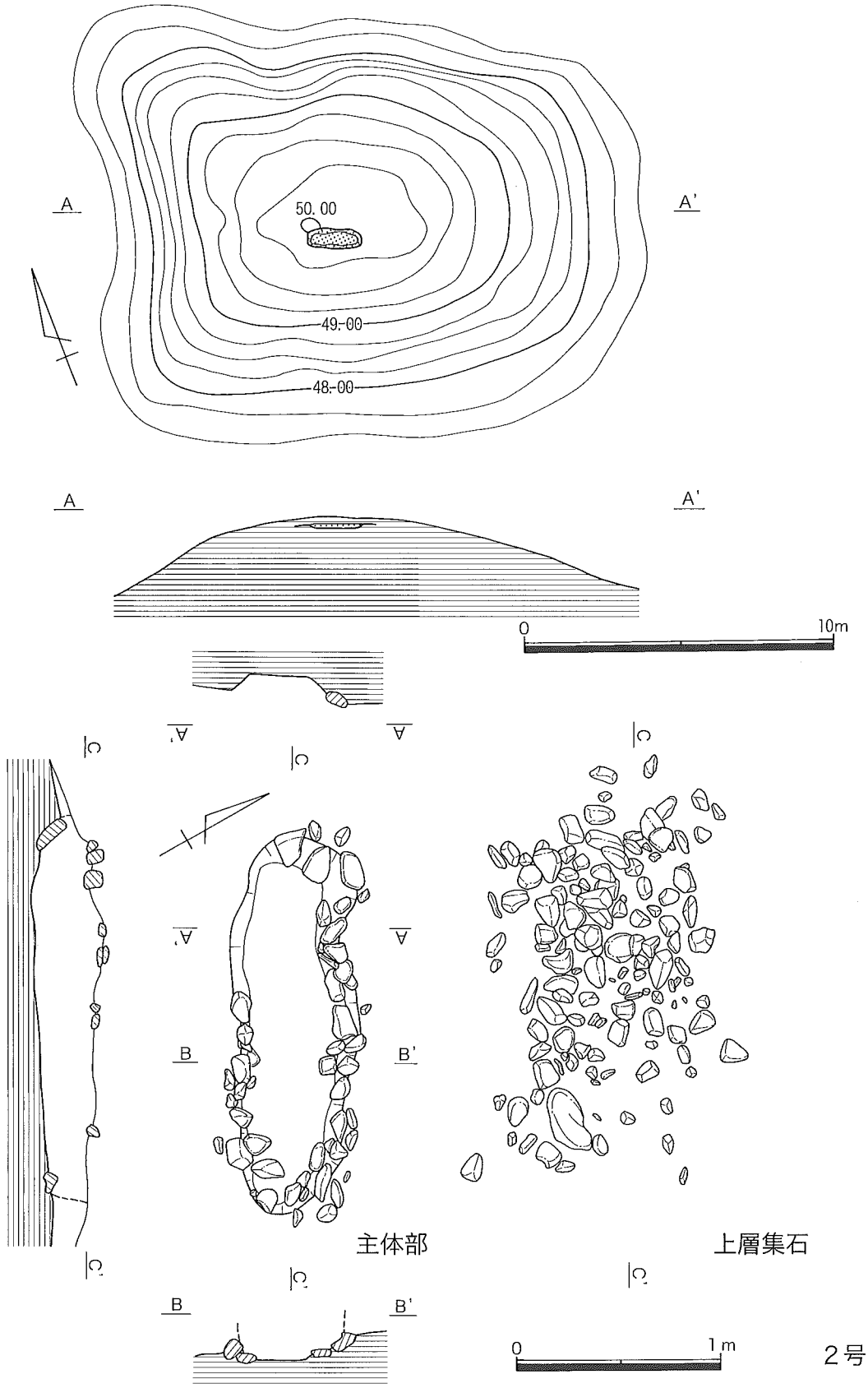
２号土坑は前方部のくびれ部付近の墳頂に土坑３基が検出された東端に位置するものである。主軸をほぼ南北に置き、墳丘の主軸方向とは直交するものである。墳頂部南側よりに面しているため、地形の変化により相当破壊を受けている。現存長約1.9m、最大幅1.25m、深さは遺存状態が良好な北側で0.45mを計り、隅丸の不整長方形をなしている。土坑内からは、中央南よりから磨製の抉入柱状片刃石斧が１点出土した。

３号土坑は２号土坑より約１m西側に位置し、主軸方向は南北で墳丘の主軸とは直交する。本土坑も２号土坑と同様に墳頂部の南側に面しているため、相当破壊を受けている。現存長約1.9m、最大幅1.15m、深さは0.40mを計る、隅丸の不整長方形を呈している。本土坑の注目される点は、それが組み合わせ式の木棺を用いているということである。すなわち、南・北壁際に沿って幅約15cmの掘り込みが認められ、これは木棺の小口板のための掘り込みと考えられる。側板のための掘り込みは認められなかったが、両掘り込みの立ち上がりが土坑の壁に続くことからして、小口板より側板があまりはみださない形式のものであったと考えられる。土坑から南東よりから小型内行花文鏡が１点出土したが、これは土坑が検出される以前に出土したものであることから見て、流出した土の存在を考慮にいれても、３号土坑に伴わない棺外の遺物と考えられる。

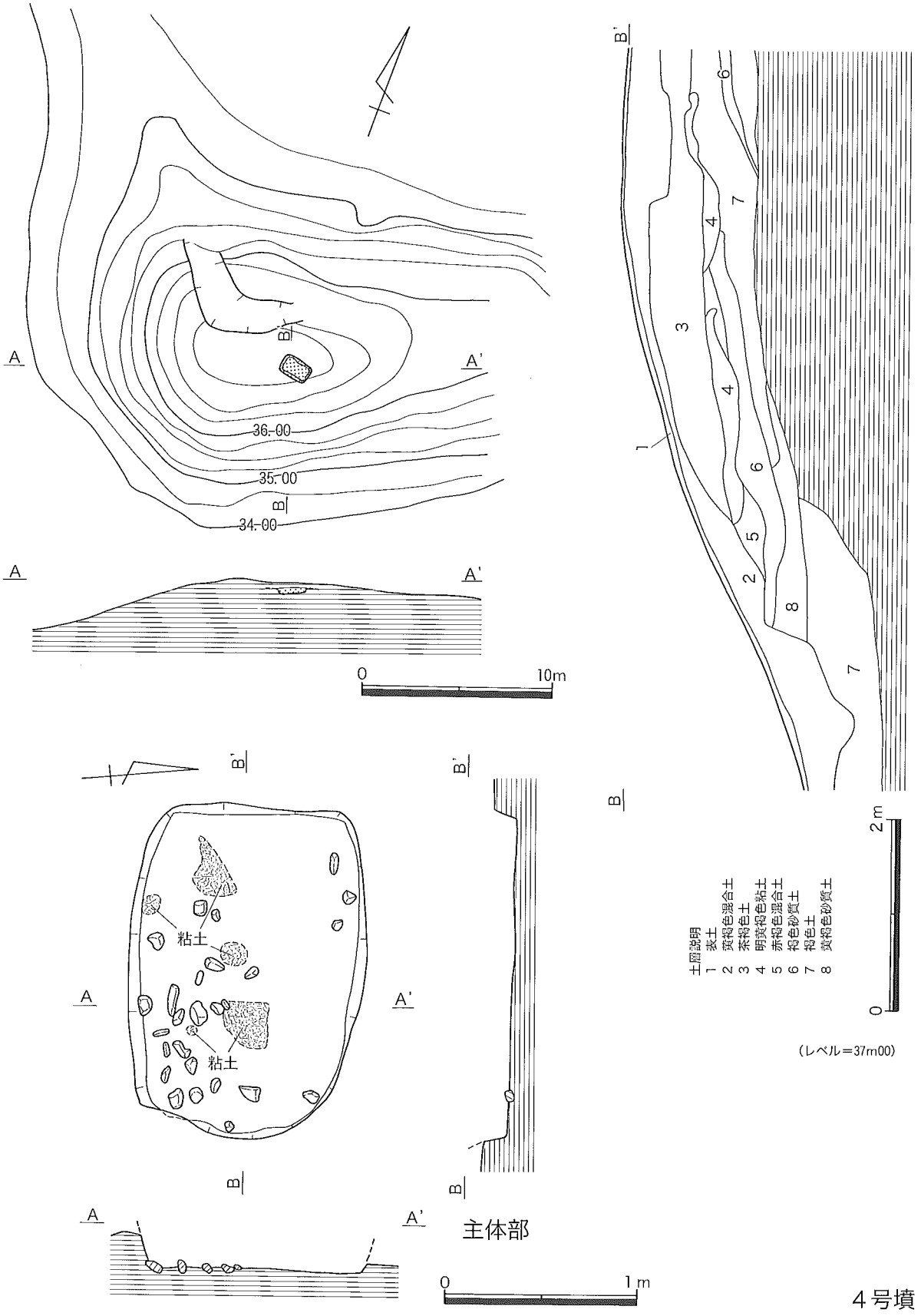
４号土坑は３号土坑の西隣に位置し、主軸方向は３号土坑と同様に墳丘の主軸方向と直交する。南側は同じく破壊を受け、僅かに壁の立ち上がりが確認できた程度であった。現存長約2.1m、最大幅1.20m、深さは0.30mで東壁は西壁の半分程度の残存状況であった。形態は隅丸の不整長方形をなしている。土坑南側1.5mの位置より須恵器の壺１個、高坏２個が立った状態で出土した。壺は口縁部を、高


A
A'
3
2
1
0
10m
D'
E'
F'
レベル＝20m00
K 1
K 2
K 3
F 1
F 2
主体部1
主体部2
主体部3
B
B'
C
C'
主体部1～3
1号墳
0
2m

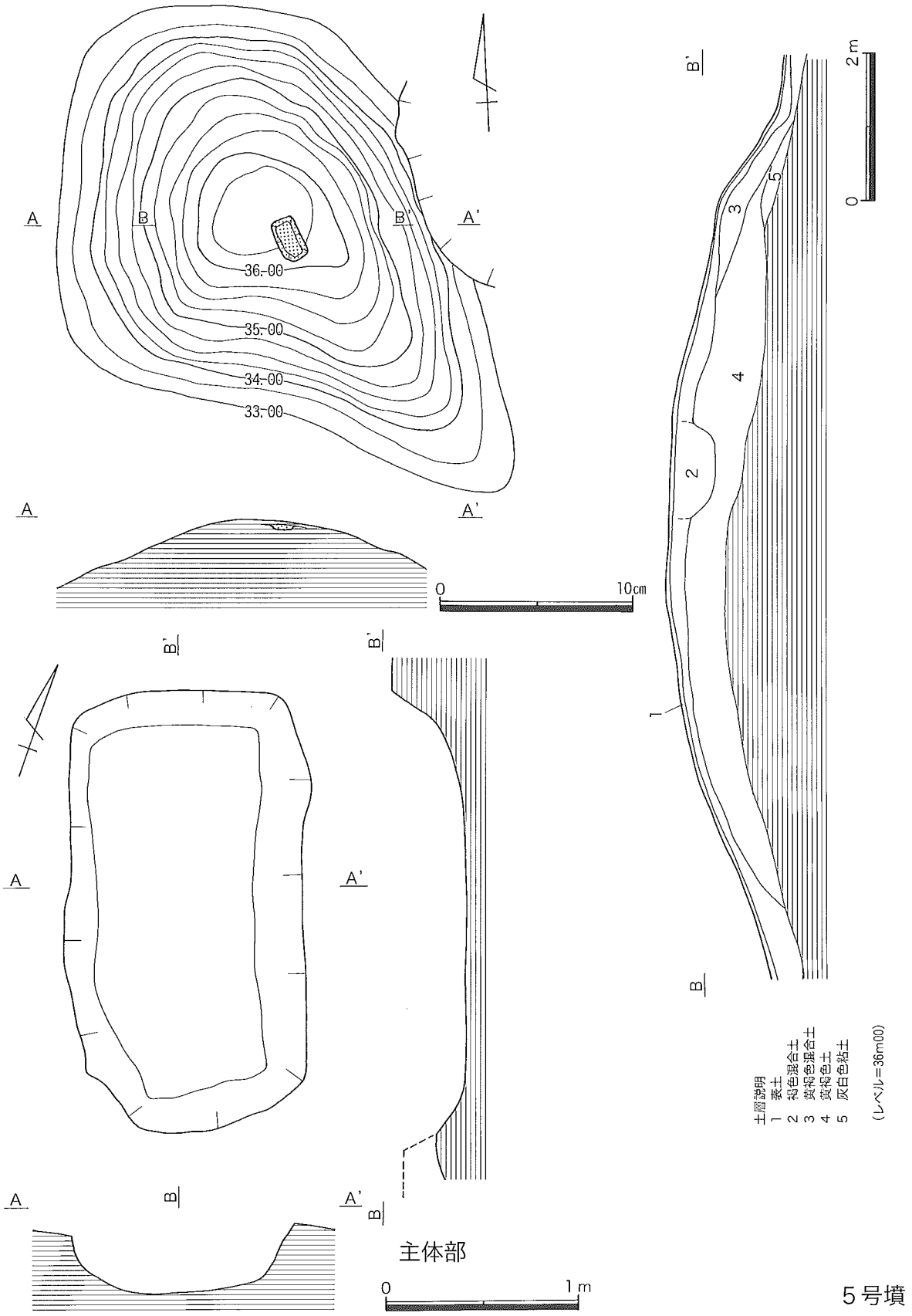
第2図　1号墳実測図



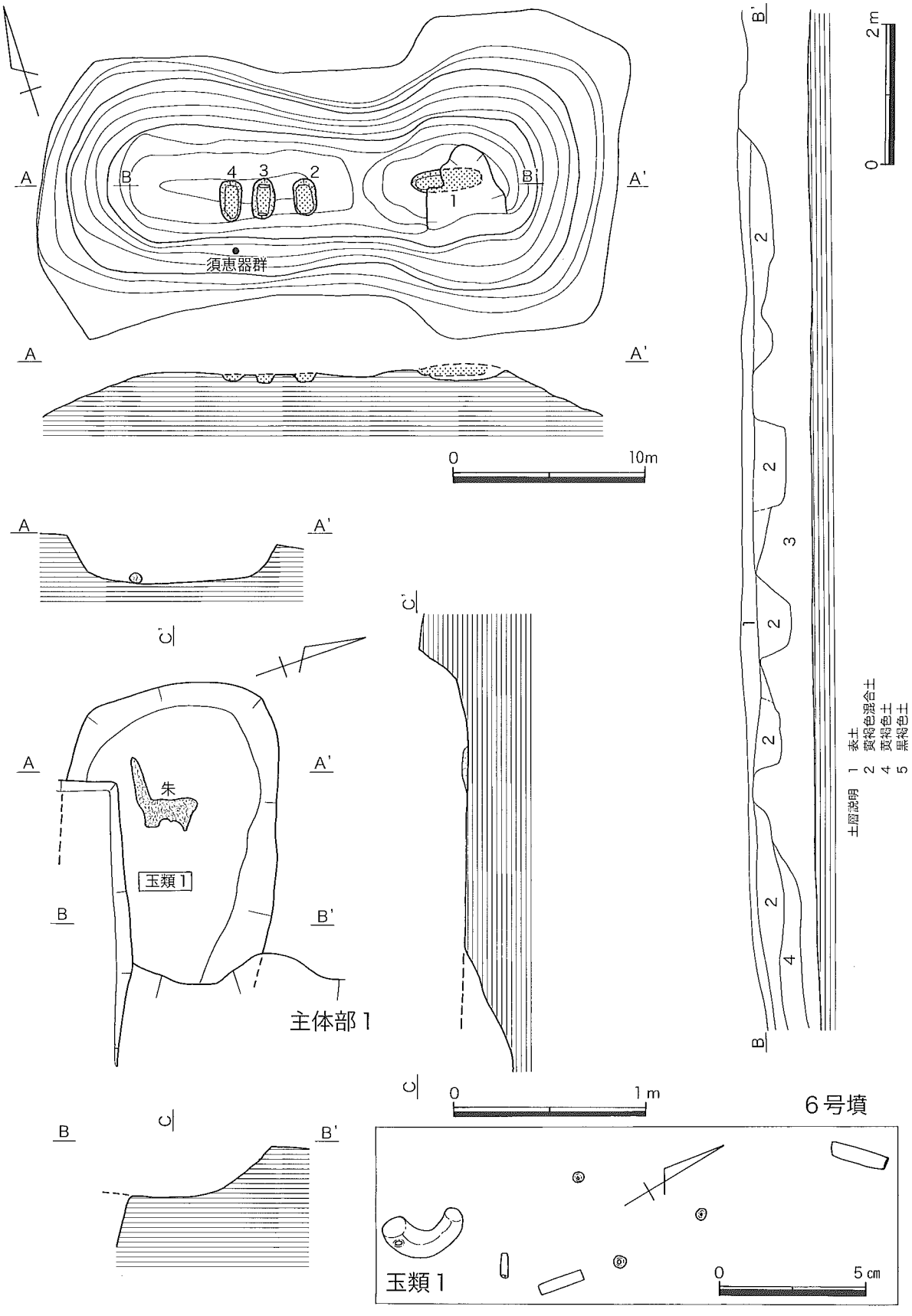
第3図　2号墳実測図


A
A'
B
B'
36.00
35.00
34.00
0
10m
粘土
粘土
主体部
0
1m
土層説明
1 表土
2 黄褐色混合土
3 茶褐色土
4 明黄褐色粘土
5 赤褐色混合土
6 褐色砂質土
7 褐色土
8 黄褐色砂質土
2m
(レベル=37m00)
4号墳

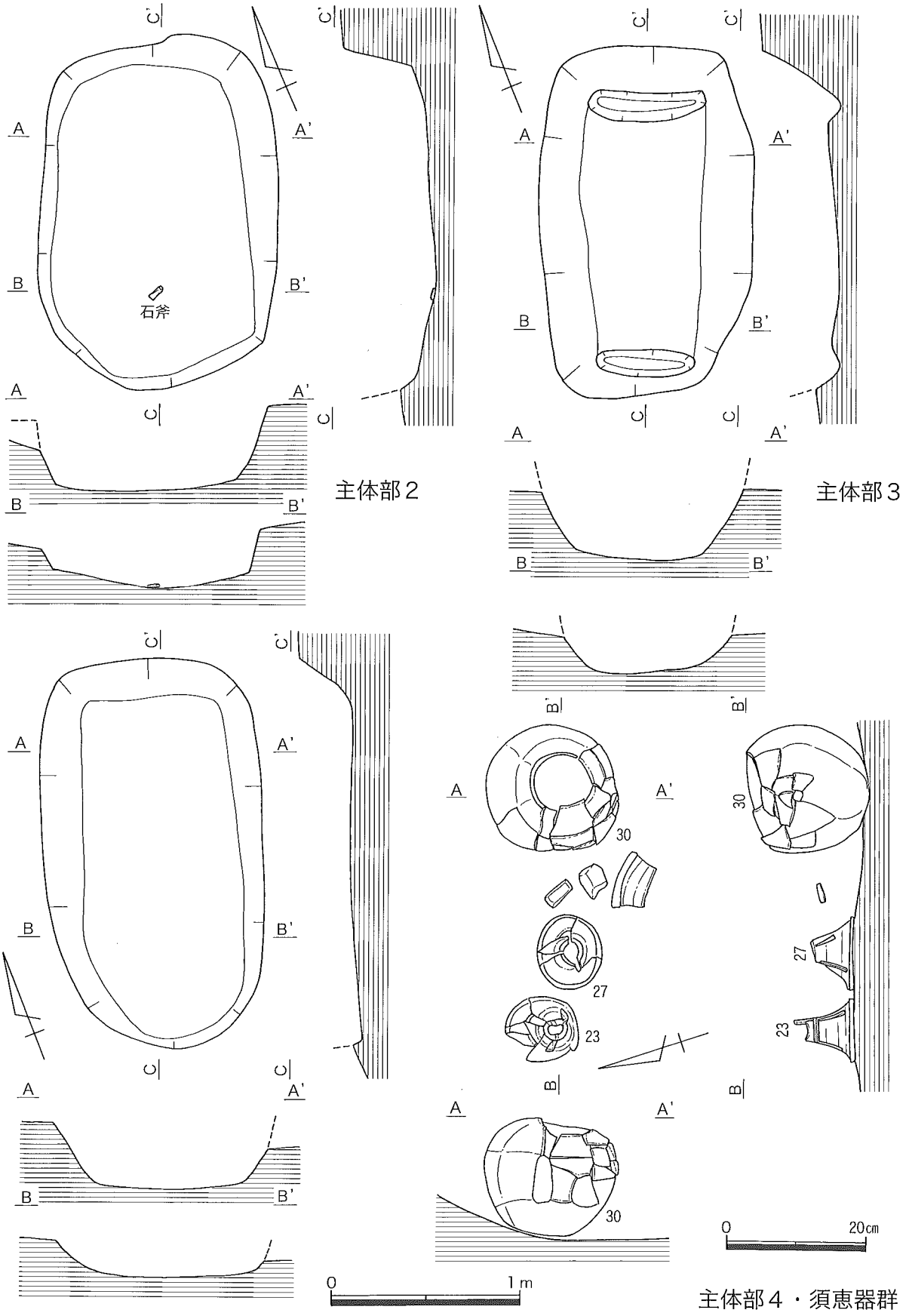
第４図　４号墳実測図


A
B
B'
A'
36.00
35.00
34.00
33.00
0
10cm
0
1m
0
2m
1
2
3
4
5
土層説明
1 表土
2 褐色混合土
3 黄褐色混合土
4 黄褐色土
5 灰白色粘土
(レベル=36m00)
主体部
5号墳

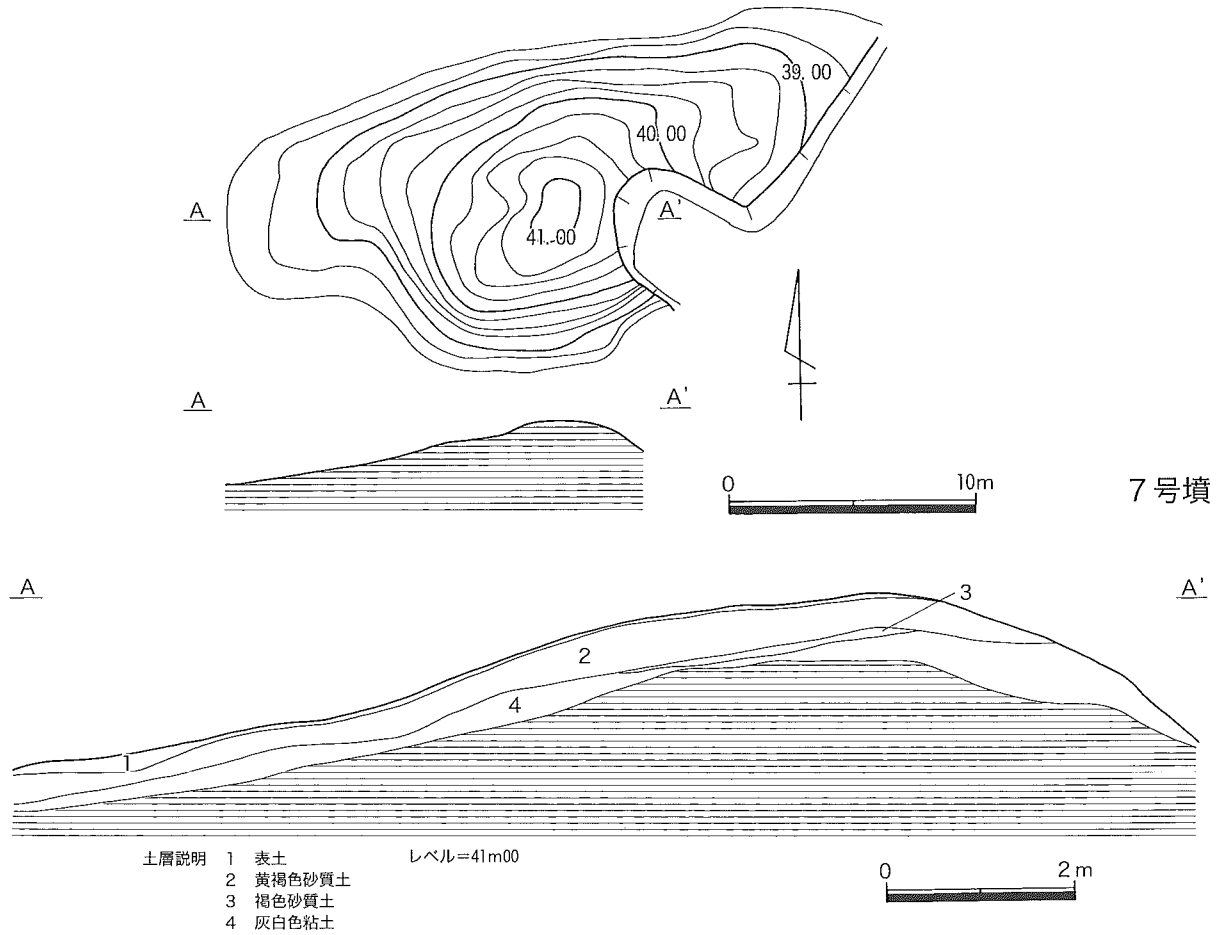
第５図　５号墳実測図


A
A'
B
B'
C
C'
4
3
2
1
須恵器群
0
10m
朱
玉類1
主体部1
0
1m
2m
土層説明
1 表土
2 黄褐色混合土
4 黄褐色土
5 黒褐色土
6号墳
玉類1
0
5cm

第6図　6号墳実測図



第７図　６号墳主体部２～４実測図



第8図　7号墳実測図

坏は坏部を故意に打ち砕いたのか、その破片が付近に散乱していた。また壺と高坏の間には、若干の焼土と炭化物が認められた。

5号土坑は墳丘の北側くびれ部の基底部に位置し、調査開始の頃はB－B'東側断面図に地山の落ち込みとして認められ、周溝の一部ではないかと考えられていたものであるが、調査の結果土坑であることが判明した。すなわち長さ約2.0m、最大幅1.20m、深さは0.35mを計る隅丸の不整長方形を呈するが、西側にも長さ約0.7m、最大幅0.40mの張り出しがある。さらに北西隅には径約0.25mの小穴があり土坑外に通じている。土坑内からは、土坑南壁すなわち墳丘の傾斜が変わる地点に土師器坏と破片1点出土した。

なお、1～4号土坑の関連を調べるために、東西方向にトレンチを設定し観察したところ4基とも盛土である軟質の黄褐色礫混合土（2）ただ1層のみが堆積していた。

7号墳

墳丘　本古墳は6号墳の北方約140mのB支丘上に位置する。墳丘西側は大きく破壊を受けてはいるものの、墳丘の規模は径約13mほどの不整楕円形を呈している。

墳丘の構築については、北側断面を観察すると表土（1）は盛土としてもよいもので、径約15cmほどの丸石を混入しており、北側半分に見られる。他は地山である黄褐砂質土（2）が露出している。地山面と盛土の間に何ら変化を認めないので、ある程度の地山の調整がなされていたらしい。盛土に使用されている丸石混じりの土は、A支丘以外の丘陵の堆積土として認められる。主体部、遺物等は

まったく検出されなかった。

5．遺　物

本古墳群中遺物を出土したのは、１・２・５・６号墳であった。なかでも１号墳と６号墳の遺物出土量は他を圧倒している。以下これらの遺物について述べる。

銅鏡（内行花文鏡）　18は６号墳３号土坑南東隅より鏡面を上にして出土したものであるが、土坑確認以前に出土したものであること、土坑南側はかなりの土層の攪乱が認められることから、棺外副葬品でしかも現位置ではなく移動したものと考えられる。

直径９cmを計り、鈕・円座を中心に内区は７花文が配され、７花文の間には珠文と小乳がやや不規則にあって、文様の表現は粗雑な印象を受ける。外区には３条の平行沈線文帯、櫛歯文帯と続き、縁はやや丸味を帯びた三角縁をなす。全体に錆化がひどいが、鈕孔には紐の痕跡が認められる。これらのことより仿製鏡であると考えられる。

玉類　勾玉の５は６号墳１号土坑より出土したもので、水晶製である。長さ2.6cm、孔は両面より穿孔されている。材質としては比較的透明度の高いもので、一部に成形時の擦痕が認められる。

管玉の９～12は６号墳１号土坑より勾玉と共に出土したもので、11・12は緑色凝灰岩製であるのに対して、９・10は石英質で白と黒の斑を含む石材を使用している。孔は４個共両面穿孔である。６～８は１号墳から出土したものである。６・７は２号土坑出土の緑色凝灰岩製、８は脆い石質で色調は淡鶯色をなした長さ約３cmの比較的大型の碧玉製の管玉である。孔は３個共両面穿孔である。

ガラス玉の13～16はいずれも６号墳１号土坑より勾玉１、管玉３個と共に出土している。13・14は濃青色、15・16は濃紺色をしていて、径は約0.3～0.45cm、厚さ0.2～0.3cmを計る。

鉄製品　鉄製品はいずれも１号墳からの出土で、ヤス状鉄器と鉇は１号土坑、３号土坑からは大型の鉄鏃が出土している。鉇の１は先端部を欠失するが、現存長12.3cm、幅は先端部が1.2cmを計る。関部はなめらかで茎は次第に窄まり一方に偏る。刃部は若干上方に反る形式のものと考えられる。

ヤス状鉄製品の３は現存長11.0cmを計るもので基部を若干欠失している。幅は先端部が0.7cm、厚さ0.6cmを計り、先端部より約２cmのところにかえりがある。また、この付近より方形断面をもつ２個の鉄器が出土したが、これらはこのヤス状鉄器の本体に直接接合できるものではないが、出土状態や形状より組み合わせのヤスの一部を構成するものと考えられる。したがって、16.5cm以上の長さを有していたものと推測される。

鉄鏃の４は錆化のため刃部が欠損していることから、全体の形態は不明といわざるをえないが、刃部の形状は菱形の平根式の大型鏃となるものであろう。現存長14.0cm、最大幅は3.4cm、厚さ0.3～0.5cmを計る。茎部に依存していた矢柄より、装着は竹に茎部を挿入し、その上を樹皮で巻いたものと思われる。

須恵器　すべて６号墳から出土したもので、とくに25・26を除きその外は前方部４号土坑の南側より出土している。坏の21は口縁が若干内傾気味に立ち上がり、蓋受けは短いものである。色調は淡青灰色をなし、焼成は堅緻である。胎土は良好でロクロ痕が良く残っている。

高坏は20・23・25・27が出土している。20は坏部の破片で、色調は外面で自然釉がかかっているため一部黒灰色を呈するがおおむね青灰色となっている。胎土は精選されており、焼成も良好である。胎土や焼成の状態から見ると23の脚部と同一個体になる可能性が高い。25は前方部西側より出土しており、無蓋の高坏の坏部と考えられるものである。坏部には二条の突線が認められ、その間に波状文が施されている。色調は内外面ともに青灰色を呈し、胎土は若干の粗砂を混入するが、よく精選され

ている。焼成は良好で内外面ともロクロ痕を残す。23の脚部は浅い二条の沈線により上下に区切られ、２段に３方向、上下合計６箇所の透かしが均等に穿たれている。裾部は若干外反気味に終わっている。色調は外面が自然釉がかかっているため一部黒灰色を呈するが、内面は灰白色となっている。胎土は若干砂粒を含むが、焼成は良好である。なお脚部内面にはしぼり目が見られる。27の高坏坏部は巻き上げによる成形の後、ロクロを使用したものである。脚部は23と同じように浅い二条の沈線により上下に区切られ、２段に３方向、上下合計６箇所の透かしが均等に穿たれている。色調は内外面ともに青灰色を呈し、胎土は若干の微小石を含む。焼成は良好である。

壺の26は６号墳裾部付近より表面採集されていた小型壺である。全体にロクロによる整形痕を良く残し、底部はヘラおこしで若干の凹凸がある。色調は灰白色、胎土は若干の粗砂を含み、焼成は不良である。30の中型壺は口縁部の大部分を欠損するが、胴部は完形品である。口縁部は緩やかに外反しながら内傾気味に終わる。色調は灰白色を呈し、胎土は良く精選されており、焼成は良好である。口縁部は横撫調整で、胴部はたたき調整後櫛歯状具による条痕（カキ目）が見られる。

土師器・弥生土器　土師器は２・５・６号墳から、弥生土器や石器に関しては６号墳のみから出土している。土師器の坏の19は６号墳５号土坑の南壁中央から出土したものである。色調は内外面ともに赤褐色で、胎土に砂粒を含む。焼成は良好であり、器面全体にヘラによる調整が見られる。

土師器の甕の22は２号墳集石上から出土したもので、甕の口縁部の破片であると考えられる。色調は内外面とも赤褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。焼成は良好で、口縁部に横撫でによる調整が見られる。

ほかに土師器としては５号墳より出土した写真図版61－Ｃは、甕の口縁部の破片であると考えられる。焼成は不良好でもろく、櫛歯状具による条痕とヘラ状具による調整が見られる。色調はどちらも赤褐色を呈し、胎土は粗粒を多く含む。

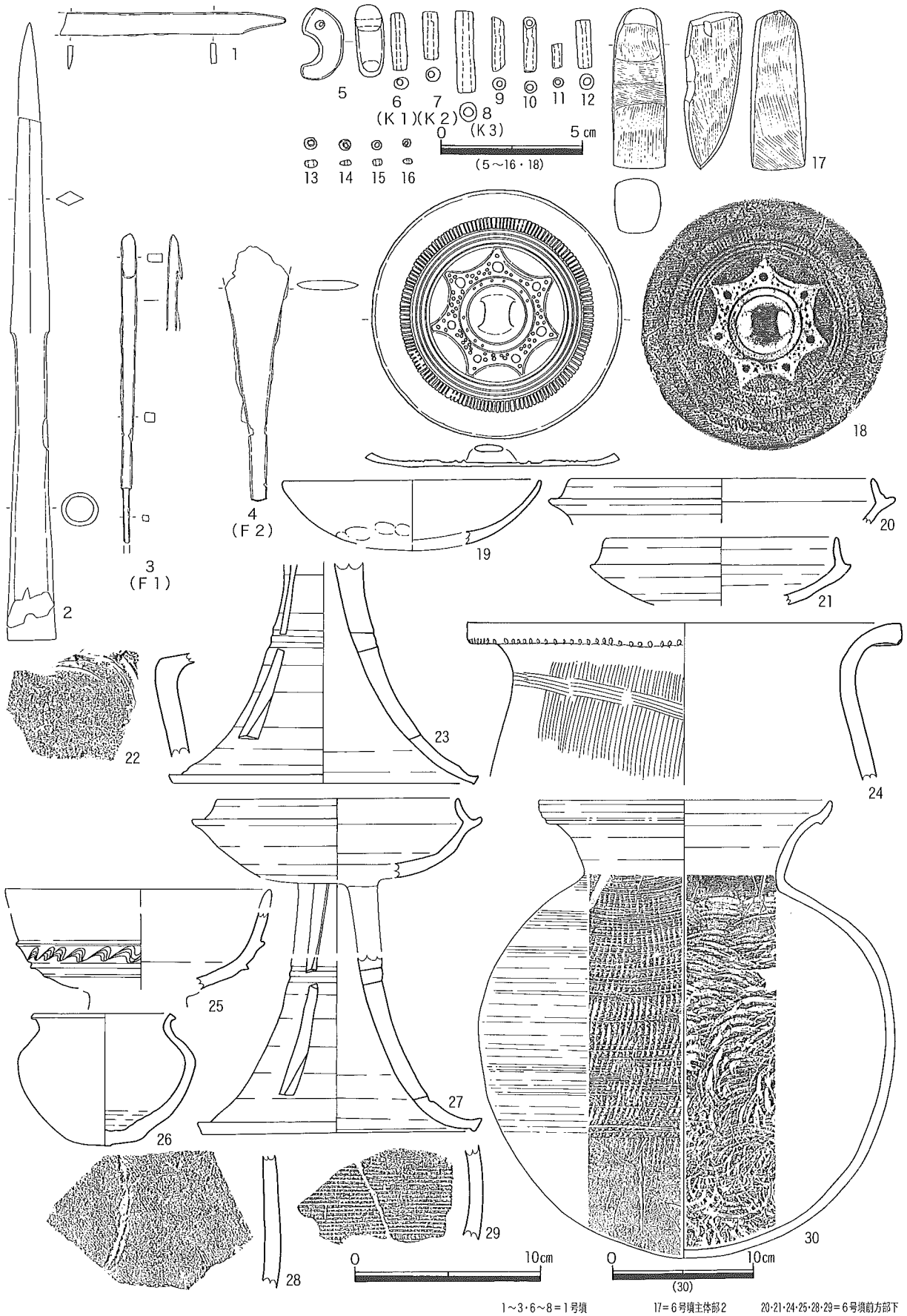
弥生土器の甕の24は台付甕と考えられる。色調は内外面が黒混じりの褐色、内面は褐色を呈する。焼成は不良好でもろく、胎土は砂粒を多く含む。口縁部は大きく外反し、口唇部に刻み目が加えられている。口縁部の内外面には刷毛状具による調整、胴部外面には刷毛状具による縦方向の調整が見られる。28は24と同一個体と考えられる。29の色調は外面が黒褐色、内面は黄褐色を呈する。焼成は不良好でもろく、胎土は砂粒を多く含む。口縁部は大きく外反し、器面全体には縦方向の条痕調整が見られる。他に写真図版61－Ｂの色調はともに赤褐色で、外面の一部が黒褐色を呈する。焼成は不良好でもろく、胎土は粗砂を若干含む。ともに刷毛状具による調整が見られる。

磨製抉入柱状片刃石斧　17は６号墳２号土坑内より出土したもので、石質は淡緑色を示す砂岩である。長さ8.7cm、最大幅2.8cm、厚さ3.1cmを計る比較的小型の部類になる柱状片刃石斧である。表面全体は入念な磨き調整がなされているが、刃部等には刃こぼれなどの使用痕が認められないので、小型品であることと考え合わせると実用品ではないだろう。弥生時代中期の土坑墓の副葬品として認められるものであろうか。

６．まとめ

今回調査した合計７基の古墳を精査したにもかかわらず、１・６号墳を除いた他の古墳は築造時期を決定する積極的遺物に乏しいため、まず比較的遺物が多く出土した６号墳について述べたい。

前にも述べたように、６号墳は本古墳群唯一の前方後円墳であり、最も高所に位置している。墳丘の現状は後円部に対して前方部がわずかに高いが、墳丘の断面を見ると地山（削られた面）では、遥かに後円部のほうが高い。後円部の封土が全く遺存していないことからして、封土の流出は前方部と



第９図　土器・金属製品実測図

1～3・6～8＝1号墳　17＝6号墳主体部2　20・21・24・25・28・29＝6号墳前方部下
4＝1号墳主体部3　18＝6号墳鏡(内行花文鏡)　22＝2号墳丘中
5・9～16＝6号墳主体部1　19・26・30＝6号墳　23・27＝6号墳前方部

比較すると後円部のほうがある程度激しかったものと思われる。とすると、前方部より後円部のほうが高いという比較的古い様相を示すものであったとも想定される。古墳の占地に際しては、丘陵の頂部を利用していること、また主体部が木棺直葬であること等は、遠江においては６世紀前半にその傾向を求めることができる。

副葬品については、銅鏡（内行花文鏡）・玉類・須恵器等が認められたが、出土状態からは被葬者と同時に納められたものと、その後納められたものの２者に分けられた。前者としては銅鏡・玉類で、後者は須恵器である。銅鏡については森浩一氏によると「小型内行花文鏡は大半が前期古墳より出土し、製作の主要な時期を前期古墳に求める」とされており（森浩一　1970）、６号墳出土の小型内行花文鏡についても同様に理解されるのかもしれない。しかし、古式古墳に見られる武器・玉類・鏡の斎一性は備わっていないため、６号墳の築造時期については５世紀後半頃と比定しておきたい。なお、前方部における土坑群の南側より出土した須恵器については、遠江における須恵器編年（大崎辰夫他1968）によれば第Ⅲ期中葉（６世紀中葉）にあたり、築造後に献ぜられたものと考えたい。

１号墳については副葬品として菅玉・鉄製品・土師器破片があり、築造時期時期を決定するには乏しいものがあるが、大型の菱形の鉄鏃、鉇・ヤス等の工具や漁具の出土をみているので６世紀前半頃に比定しておきたい。

以上１・６号墳については築造時期を明らかにしたが、他の古墳については占地に際して丘陵の頂部を利用していること、主体部が木棺直葬であること、副葬品が乏しいこと等が共通していることがあげられる。このような傾向は、遠江において古墳の群集化が著しくなる６世紀前半、すなわち掛川市本村１・２号墳（向坂鋼二　1968）、袋井市地蔵ヶ谷３・４号墳（本報告書）、井守塚５号墳（平野和男　1966・本書）に類例が求められることと連動した動きで、６世紀中葉までの時期と考えておきたい。従って本古墳群は５世紀後半より６世紀中葉までの時期幅で築造が継続された古墳群と考えられ、小古墳群の群集化の発展段階を示す好例となるものといえよう。

【参考文献】

文化財保護委員会編　1965　『全国遺跡地図（静岡県）』

大崎辰夫ほか　1968　「遠江地方における須恵器編年」『古代学研究』№50　古代学研究会

平野和男　1968　「袋井市地蔵ヶ谷古墳及び横穴墳」『東海道新幹線静岡県内工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県教育委員会編

向坂鋼二　1968　「掛川市本村古墳群発掘調査概報」『東名高速道路関係遺跡調査報告［遠江分］』遠江考古学研究会

森　浩一　1970　「古墳出土の小型内行花文鏡の再吟味」『日本古文化論攷』

編者追記

本付載については大川清氏より提出のあった原稿と図面を再編集して掲載したが、長年の図面の劣化で内容が不明な点と、原稿の内容についても一部の不明瞭な点については、できるだけ原資料を尊重したが、変更せざるをえない部分については編者のほうで再トレースと訂正を行った。事実誤認があったらご容赦願いたい。また、３号墳の図面については現状の保管図面からでは見いだすことができず、今回掲載することはできなかった。発見できれば後日報告したい。

なお、遺跡名であるが冒頭の大川氏が記載したように「東別所古墳群」から原稿提出時に「久能張ヶ

谷古墳群」に古墳群の名称は変更されているが、その後刊行された1989年刊行の『静岡県文化財地名表Ⅱ』に記載されている「久能東山古墳群」に本報告書では名称変更をして統一を計った。

遺物のうち１の鉄矛については、提出された遺物図面には１号墳出土との記載はあったが、遺構図面と原稿のなかでは触れられていない。よって、この資料がはたして本当に１号墳出土の遺物なのかどうか、今回の図面整理からでは明らかではないが参考までに掲載した。

内行花文鏡については、その後類例が増加し研究が進展したので、大谷宏治氏（静岡県埋蔵文化財調査研究所）に調査を依頼しコメントをもらうことができたので以下掲載する。

大谷宏浩氏コメント－久能東山６号墳の鏡について－

久能東山６号墳の鏡は七弧内行花文鏡である。表面は摩滅が進行している。本来鋳出が不鮮明であった可能性が高い。直径8.8cm、鈕径2.0cm、鈕高７㎜をはかる。鈕孔は半円形である。半球形の鈕で、鈕座は円圏座でその周囲に凸帯が巡る。内区は七花文で、花弁の間には小乳を配し、またその小乳の間を珠文で埋めている。内区外周には３重の凸帯が巡り、その外側には櫛歯文が巡らされる。縁は平縁である。

文様については、中国製内行花文鏡と比較すると、鈕座は四葉座を欠き、花文外側の３重凸帯は雲雷文（有節松葉文）の省略であり、久能東山６号墳出土の内行花文鏡は倭製鏡である。

久能東山６号墳出土鏡は、森下章司氏分類仿製内行花文鏡Ｃ系２式に比定でき、古墳時代前期後半に位置づけることができる（森下章司　1991）。また、清水康二氏分類では内行花文鏡類Ｂ類３式に比定でき、鋳造時期はⅢ期以降であり古墳時代前期中葉以降に位置づけられている。（清水康二　1994）さらに、車崎正彦氏森下・清水両氏の意見を受け、４世紀後半としている（車崎正彦　2001）。

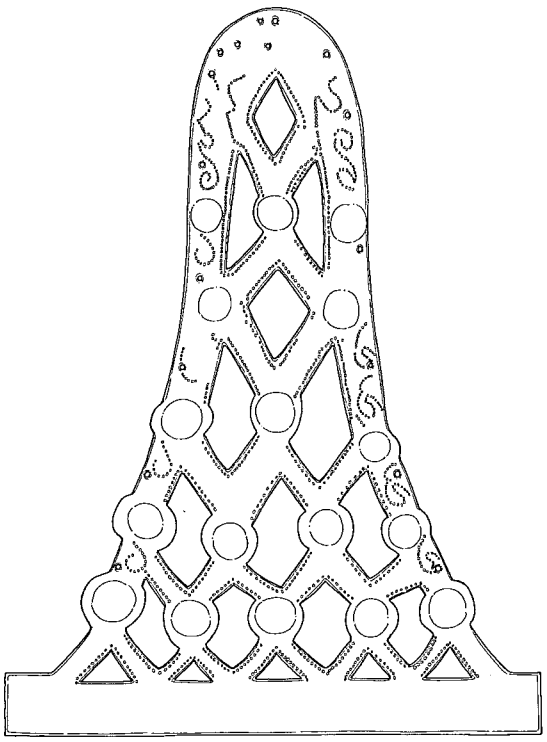
ここで、類例から時期を推測しておく。まず、まず静岡県内において類似する鏡が幾つか出土している。まずは、五花文で珠文を充填するものが、焼津市小深田西２号墳から出土している。この鏡は花文の外側に凸帯が巡るものである。さらに、七花文で花文の外側に２重の櫛歯文を巡らせるものが磐田市相月氏邸内古墳より出土しており、花文の間には中央が大きい４珠文が配されている。また、珠文を配置する鏡が細江町馬場平１号墳、藤枝市五鬼面古墳から出土している（静岡県教育委員会2001）。上記４古墳はすべて前期後半～末葉に位置づけられている。また、鈴鏡であるが五花文で珠文を充填するものが焼津市猪谷神社古墳から出土している。鈴鏡は古い文様構成が残存すると考えられており（森下章司　1991）、単純にこの鏡と比較することはできない。

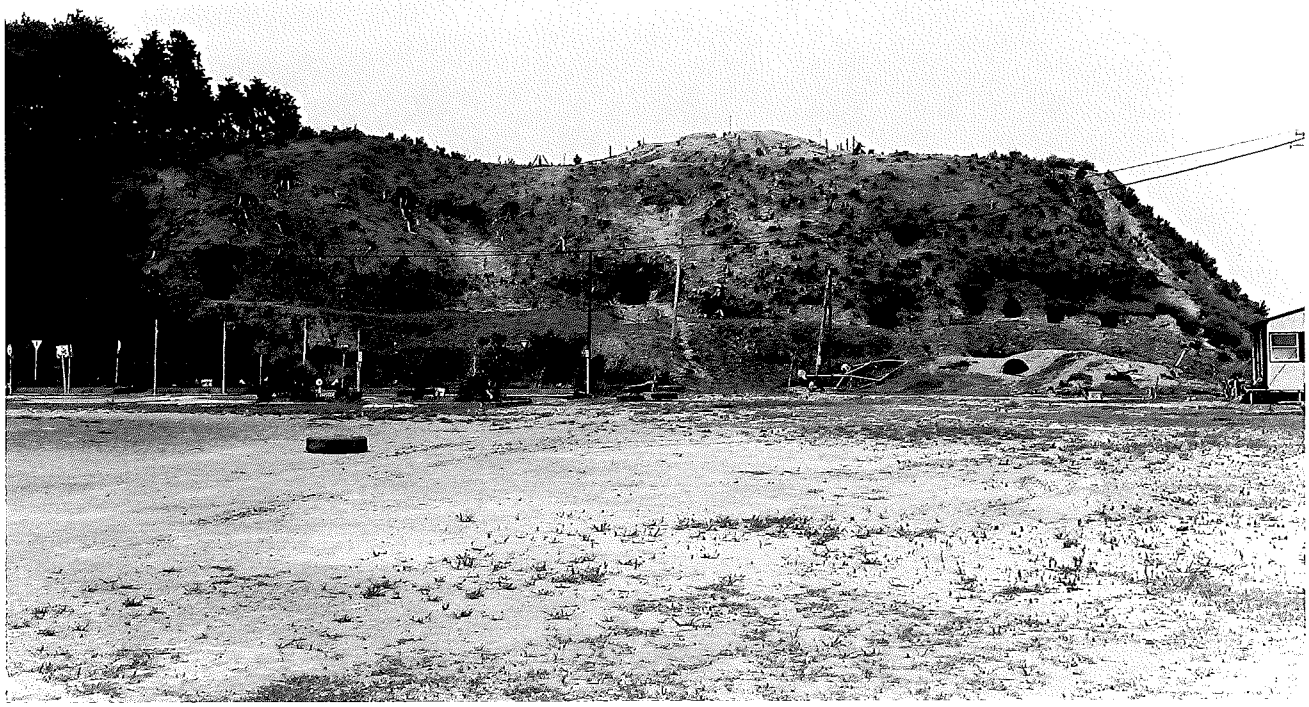
他県では、愛知県春日井市篠木古墳群出土鏡が乳を持つ唯一の事例である。内区外周は鋸歯文であり東山６号墳とは異なるが、他の内行花文鏡のうち鋸歯文が内区外周に巡らされるものは、新しい傾向にあると考えられている。また、この鏡に乳が抽出されていることから、乳も内行花文鏡の中で新しい傾向にあるとされる（清水康二　1994）。したがって、花文間に配された小乳歯、三珠文のうち一つが大型化したもの、あるいは珠文のうちの一つを大型化したものというよりも、仿製内行花文鏡に描かれる珠文（清水氏分類ｄ類）と乳（清水氏分類ｆ類）が組み合わされた可能性が高いと考えられる。つまり、乳と珠文が合成されていることから、珠文や乳だけのものよりも新しいと考えることができ、前期後半以降に位置づけることができる。静岡県出土の同様の文様を有する鏡と、愛知県篠木古墳群出土の乳を有する鏡から、久能東山６号墳の鏡は前期後半～末葉、４世紀後半～末葉に位置づけるのが妥当であろう。

【参考文献】

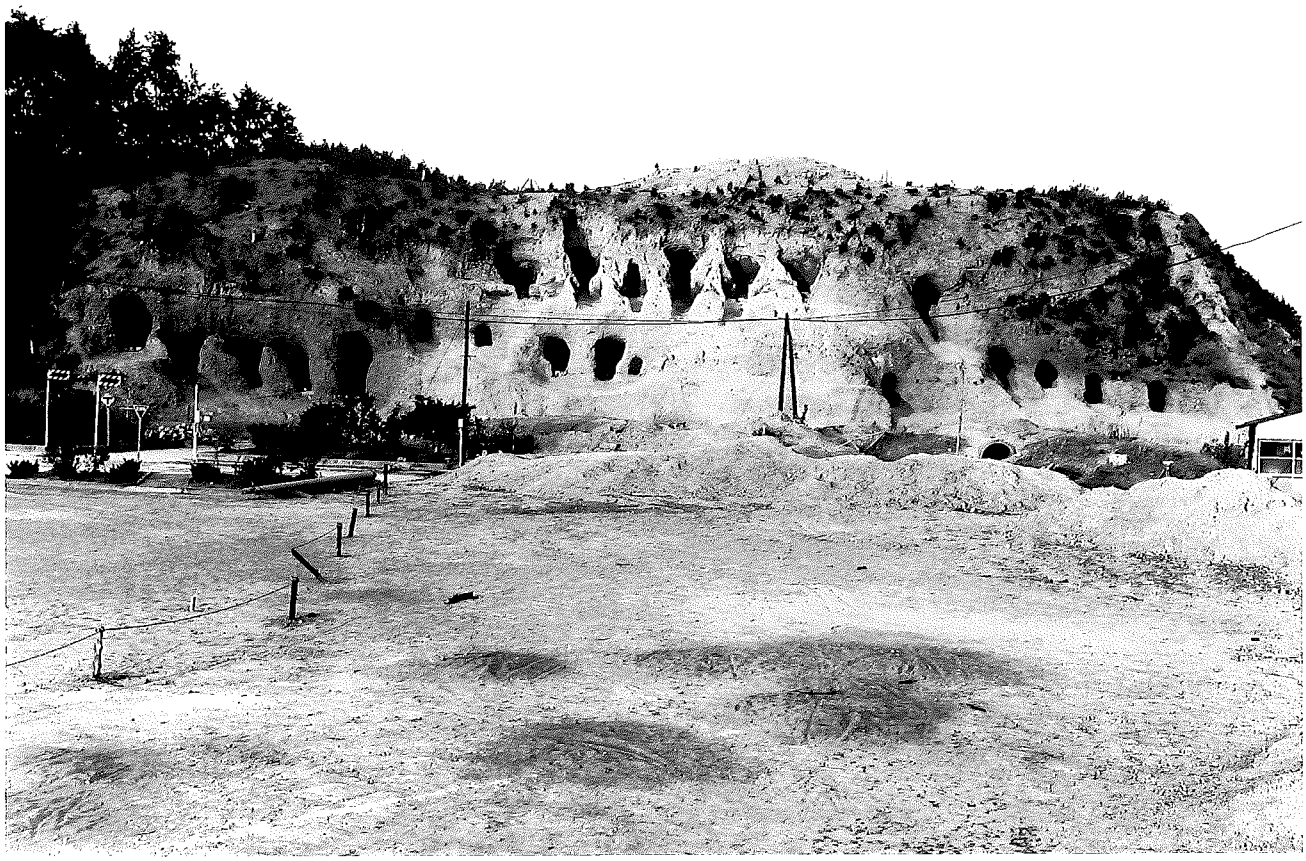
車崎正彦　2001　「鏡」『静岡県の前方後円墳－総括編－』静岡県教育委員会
静岡県教育委員会編・発行　2001　『静岡県の前方後円墳－総括編－』
清水康二　1994　「傲製内行花文鏡類の編年」『橿原考古学研究所論集』第十一　吉川弘文館
森下章司　1994　「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』74巻６号　史学研究会

写 真 図 版





（１） 第２次調査前全景（南より）

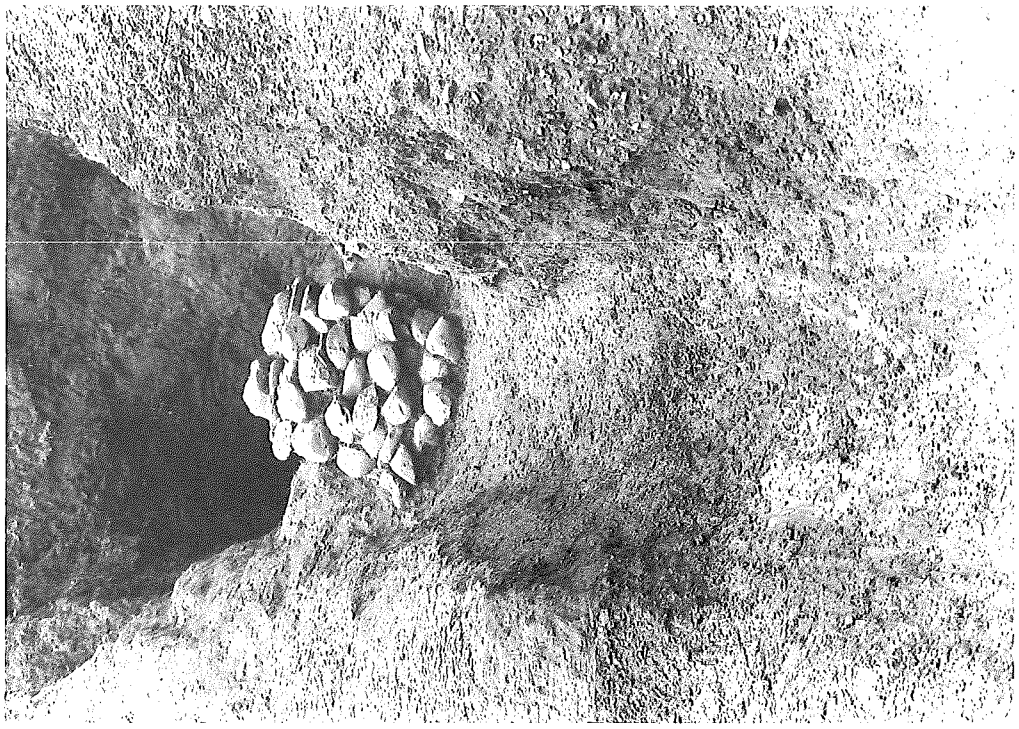


（２） 第２次調査完掘全景（南西より）

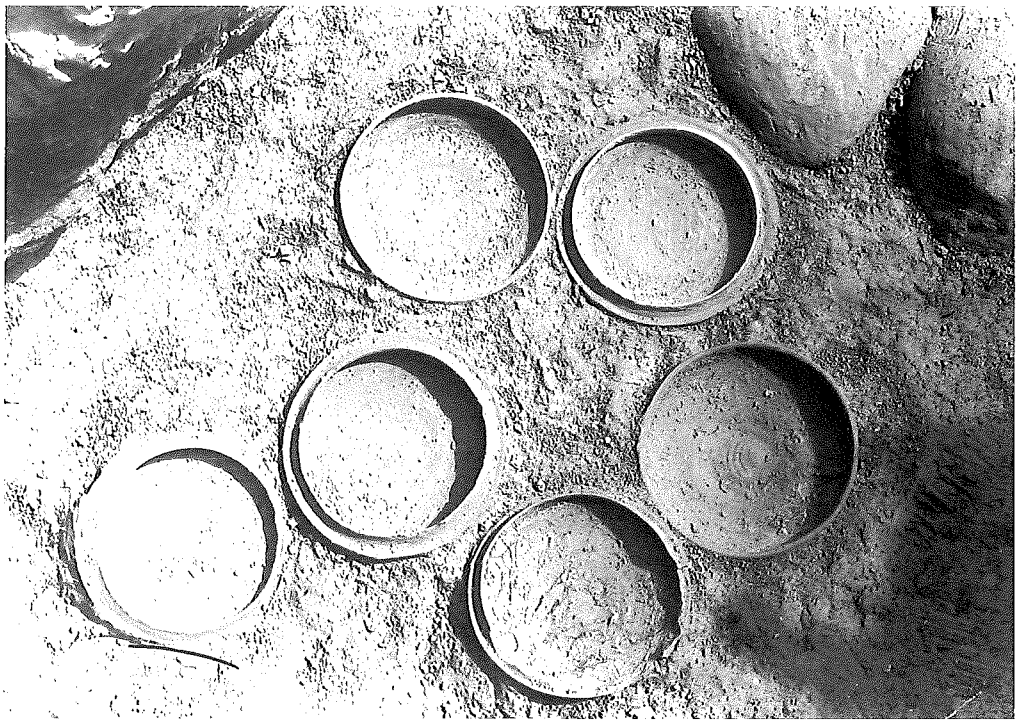
図版２



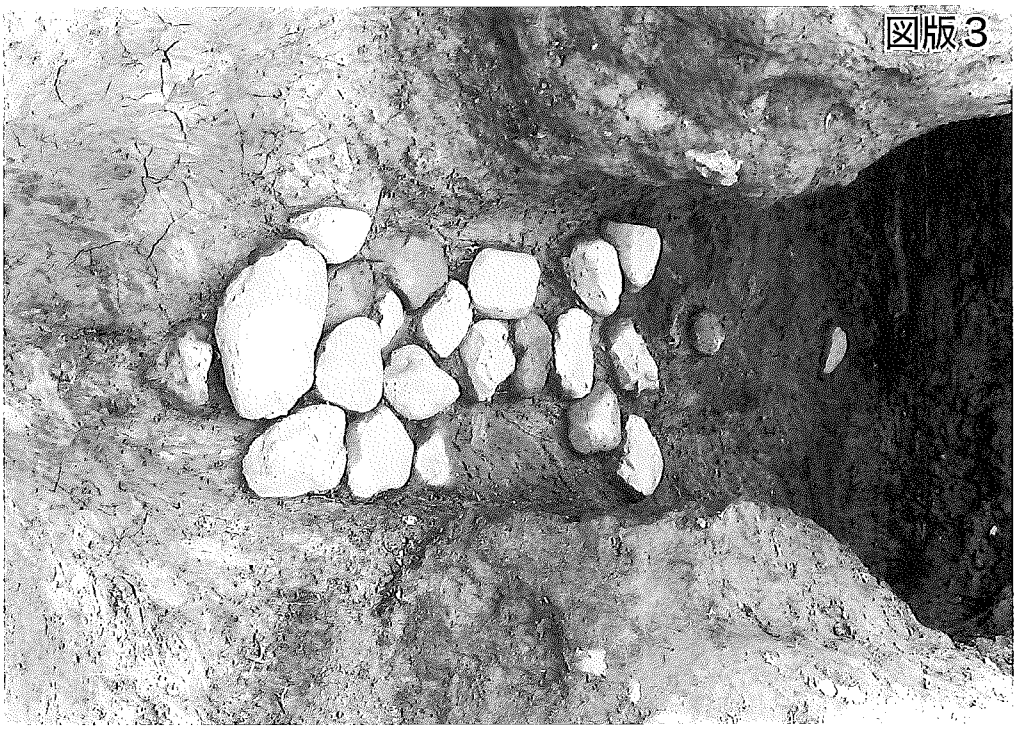
（１）　１号横穴内部
（棺の部分のみの敷石、南より）



（２）　１号横穴墓前域
（単独墓前域、南より）



（３）　１号横穴土器出土状況
（№２～６、羨道付近）



（１）　２号横穴閉塞石下部
（大型の礫使用排水溝有り、南より）

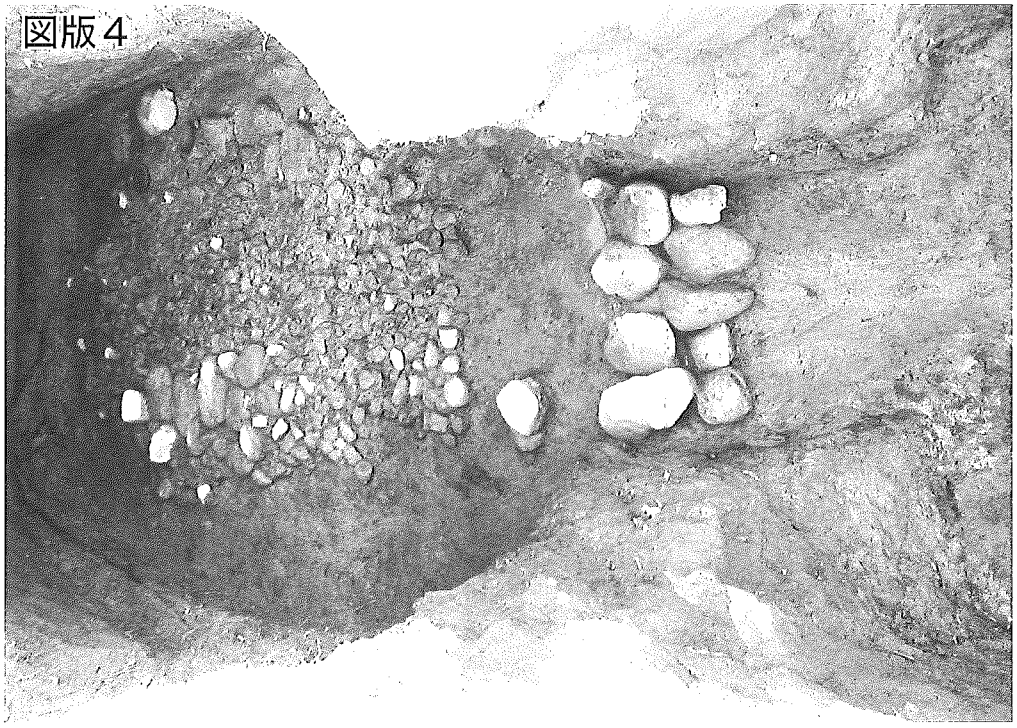


（２）　２号横穴墓前域
（単独墓前域、南より）

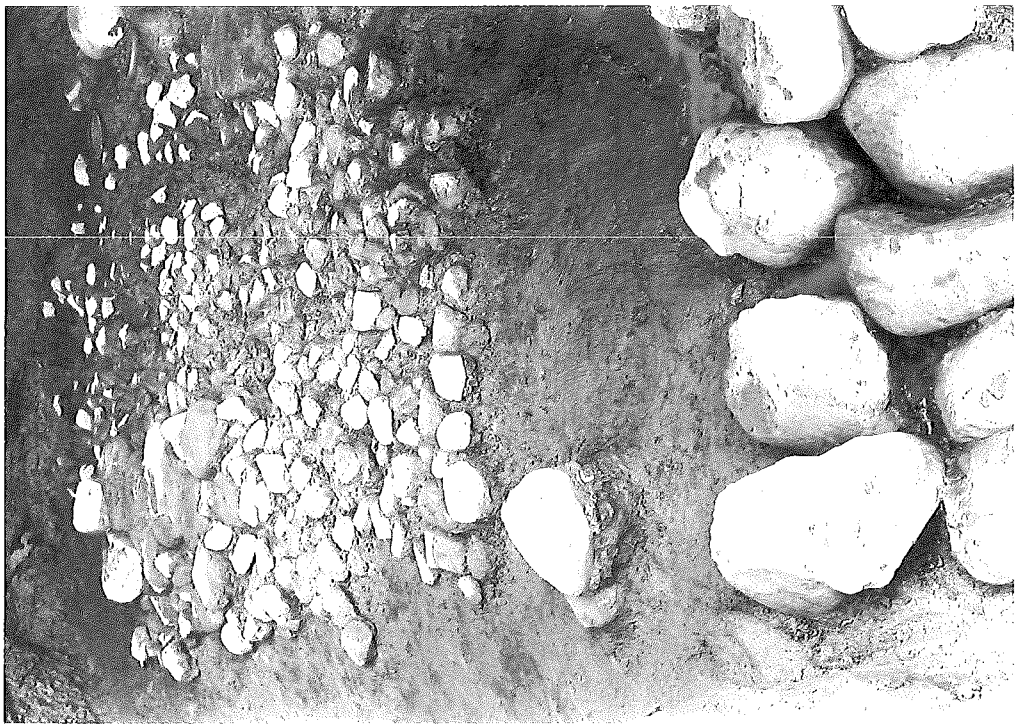


（３）　２号横穴内部
（棺座石、南より）

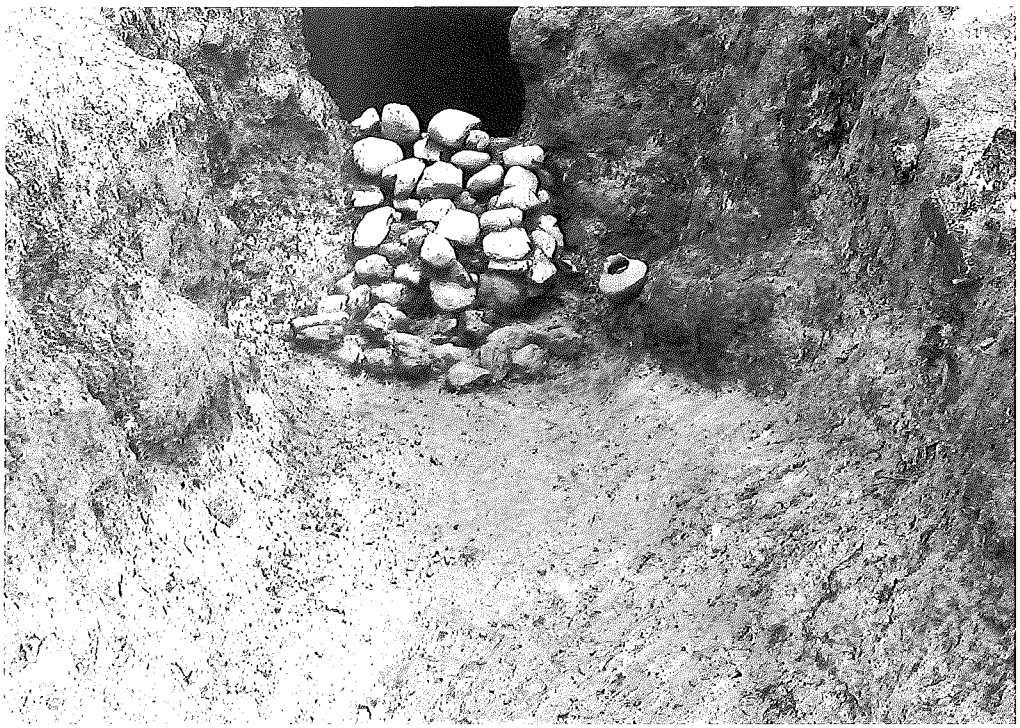
図版４



（１）　３号横穴（南より）



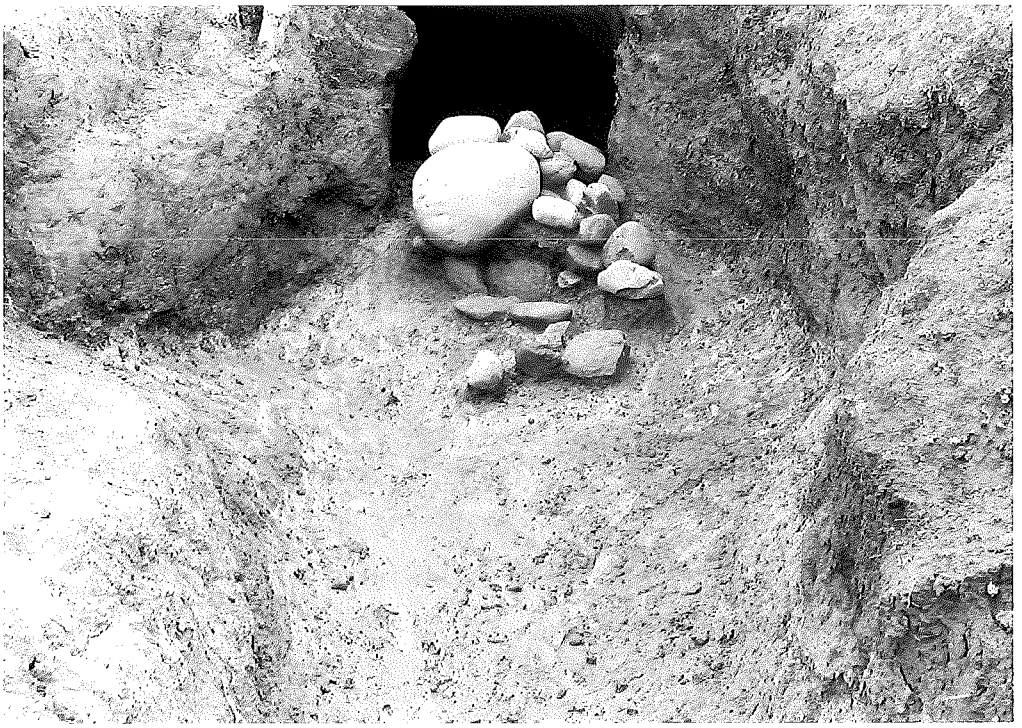
（２）　３号横穴内部
（敷石有り、南より）



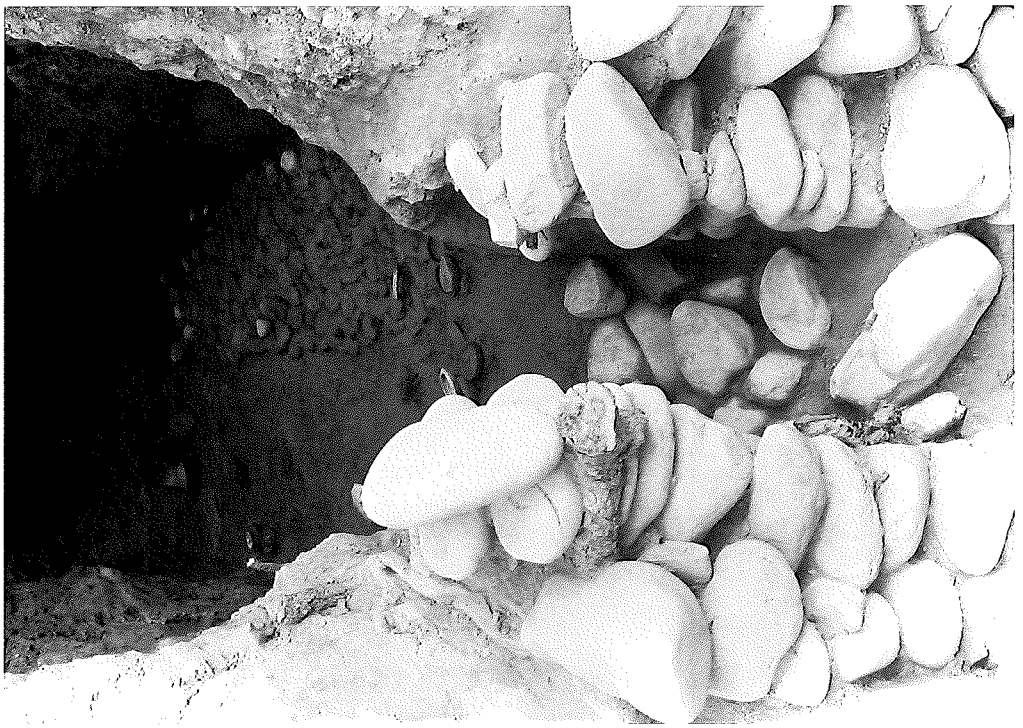
（３）　３号横穴羨門（南より）



（１）　４号横穴（南より）



（２）　４号横穴墓前域
（単独墓前域、南より）

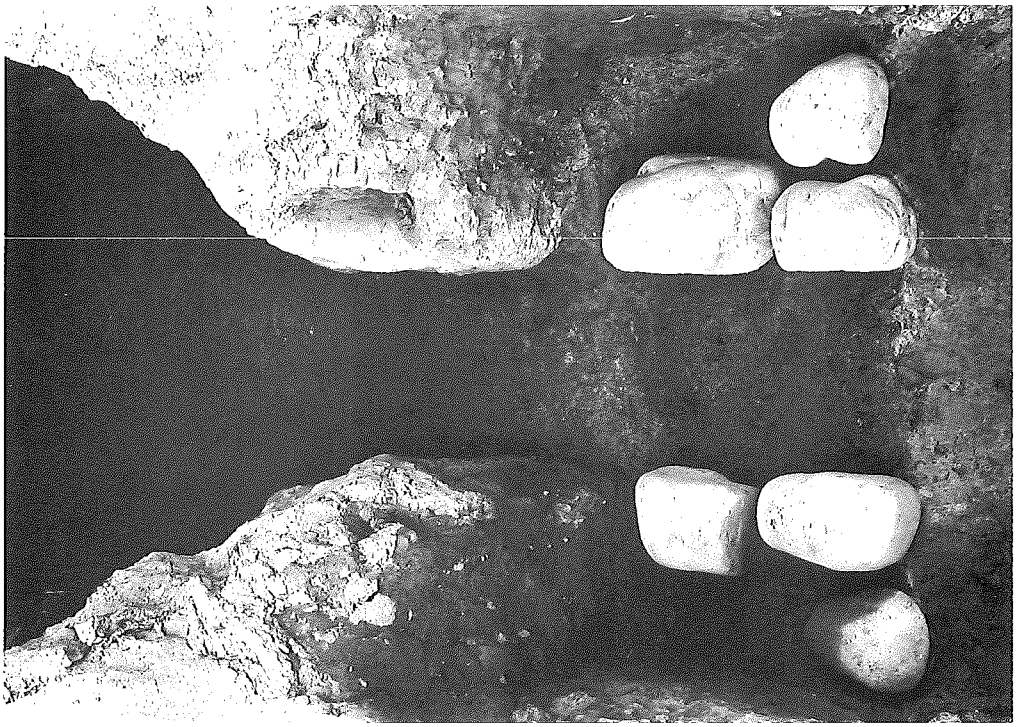


（３）　５号横穴
（羨道部石室状の石積、南より）

図版６



（１）　５号横穴内部
（棺の部分のみの敷石有り、南より）



（２）　５号横穴閉塞石根石
（石室と同じ横口積、南より）



（３）　５号横穴玉類出土状況
（耳環・玉類まとまって出土、
頭部付近の飾りか？）



（１）　６号横穴内部
（敷石無し、南より）



（２）　６号横穴閉塞石
（大型の礫使用、南より）

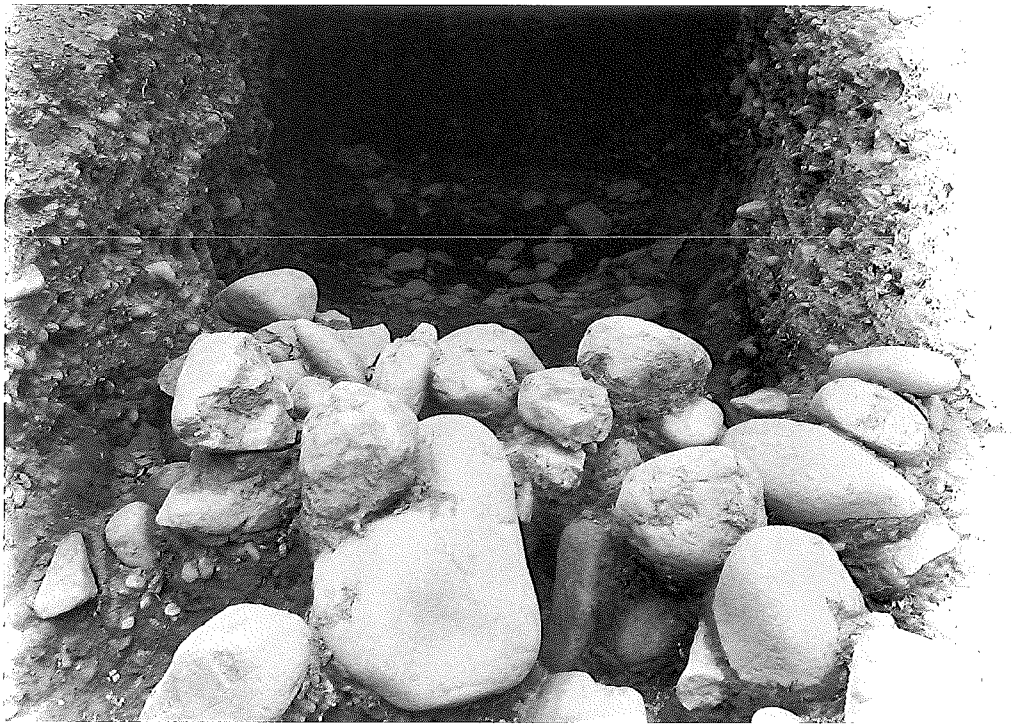


（３）　６号横穴土器出土状況
（奥壁部分、№２～14、南より）

図版8



（1）　8号～10号横穴墓前域
（共有墓前域、南より）



（2）　7号横穴（南より）



（3）　7号横穴閉塞石（南より）



（1） 8号横穴
（小型横穴、南より）

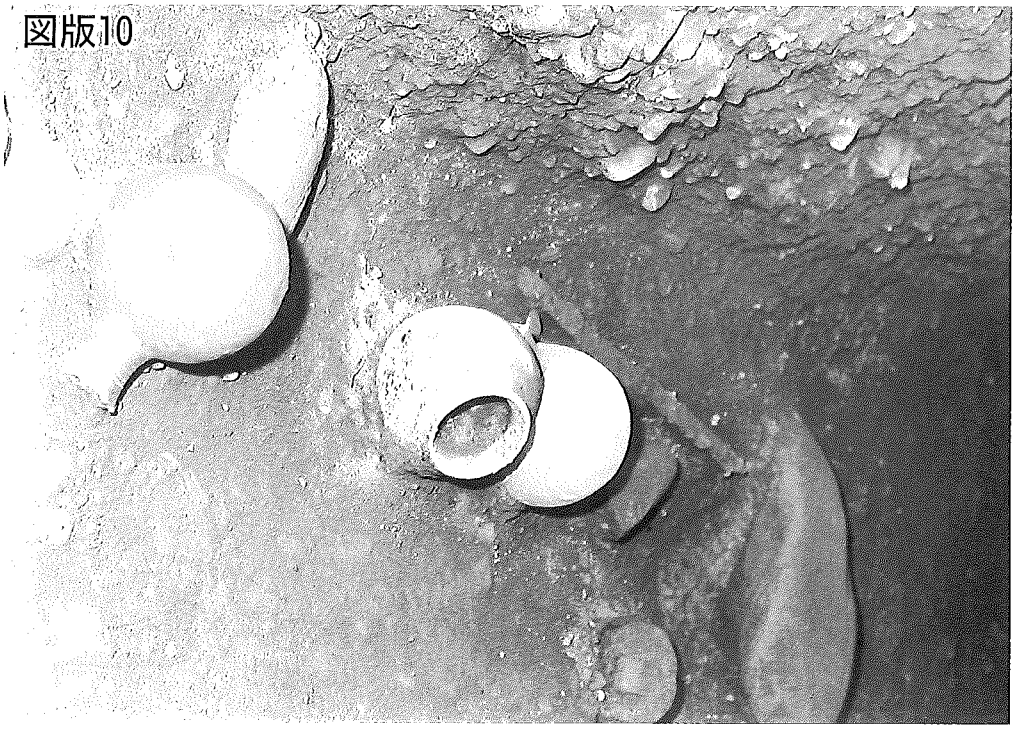


（2） 9号横穴内部
（敷石が有るが乱れている、南より）

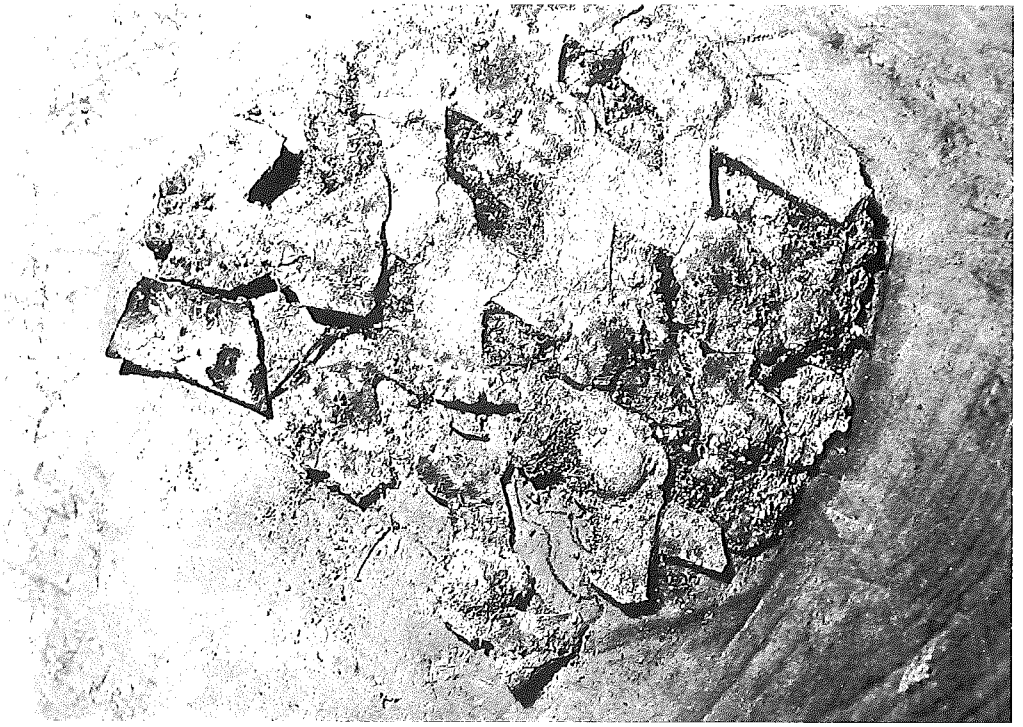


（3） 10号横穴（南より）

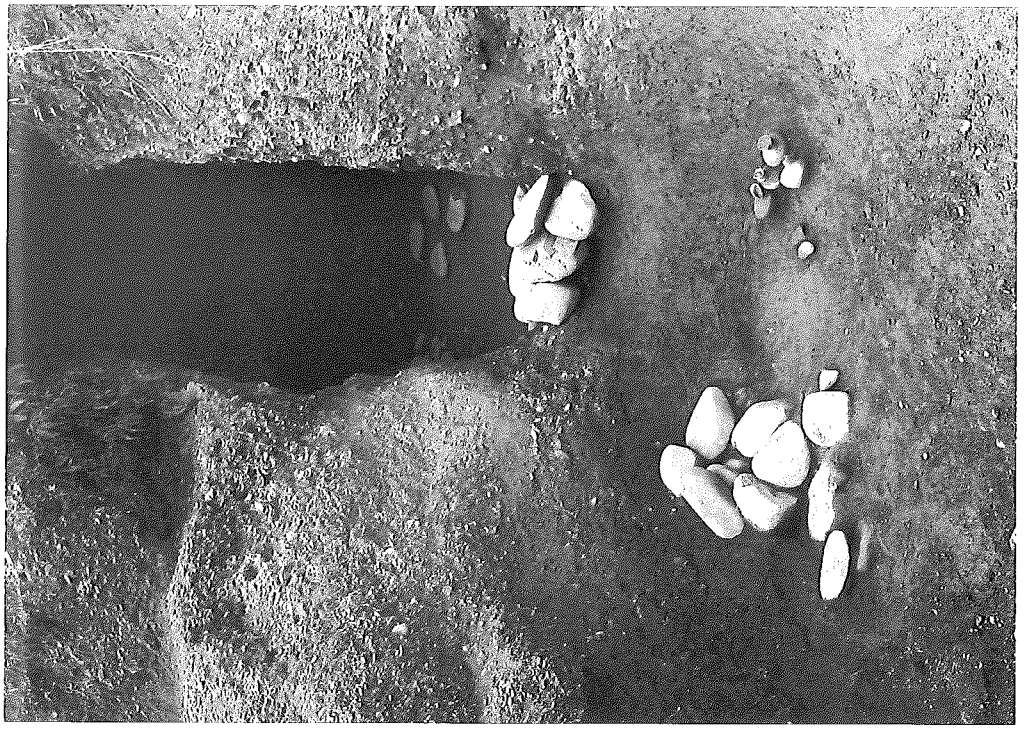
図版10



（1） 10号横穴土器出土状況
（№3～6、直刀も出土、南より）



（2） 10号横穴金銅透彫金具（冠帽）
出土状況
（棺座石下より出土）



（3） 11号横穴（南より）



（1） 11号横穴内部
（棺座石と敷石が併存する、南より）

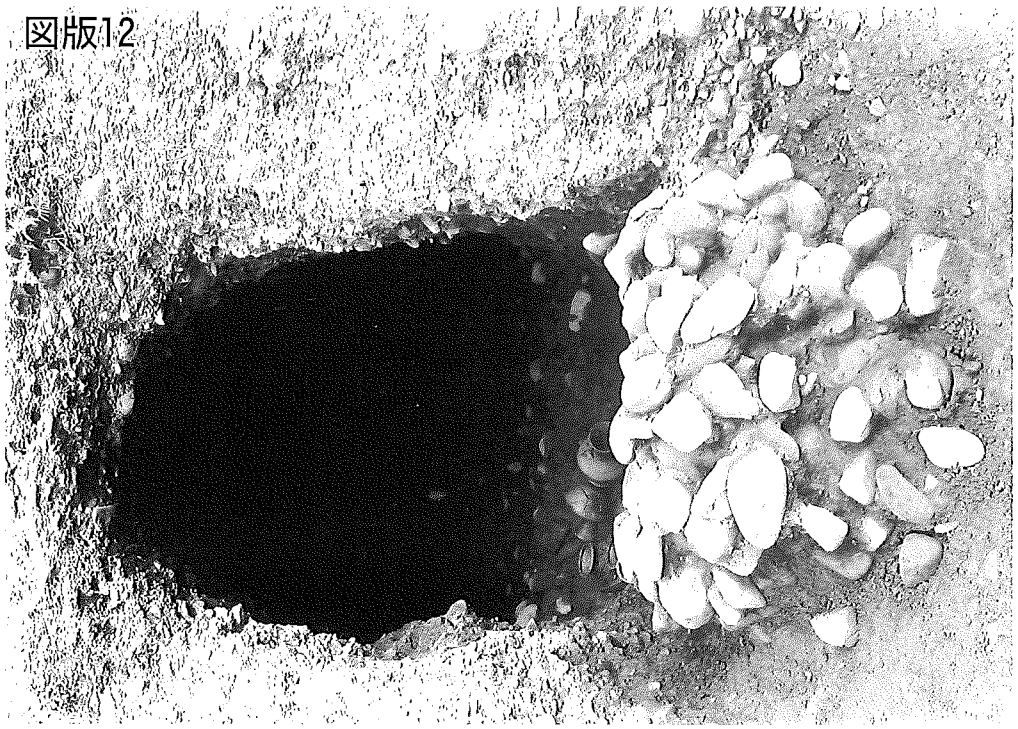


（2） 11号横穴土器出土状況
（奥壁部分№1～4、南より）

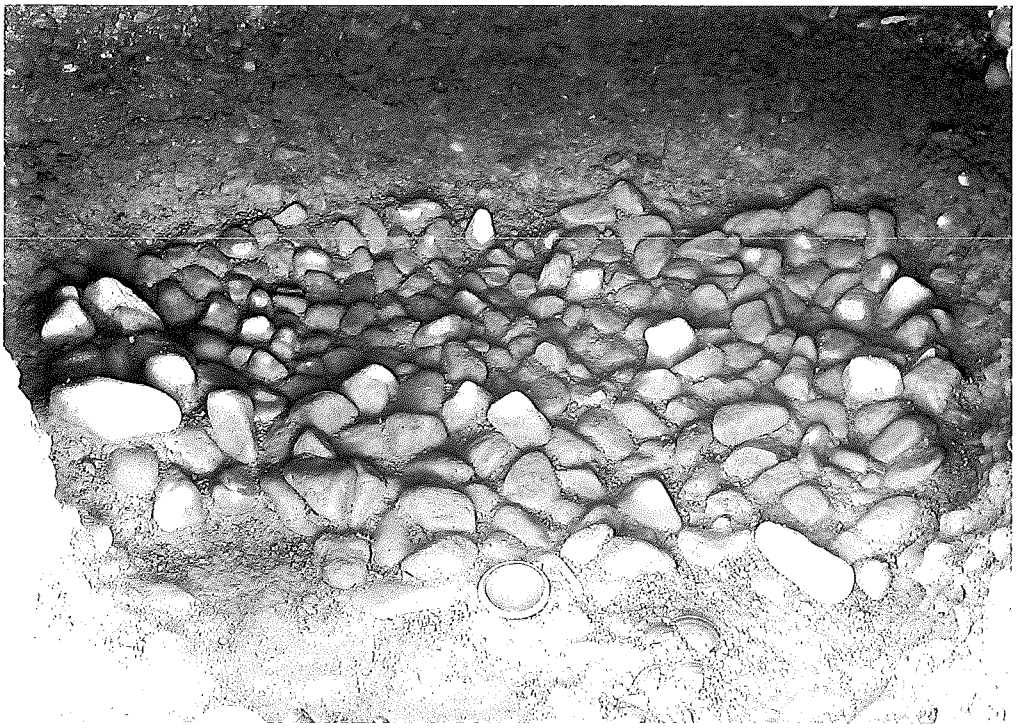


（3） 12号～15号横穴墓前域
（断差があり墓前域が分かれる、
南より）

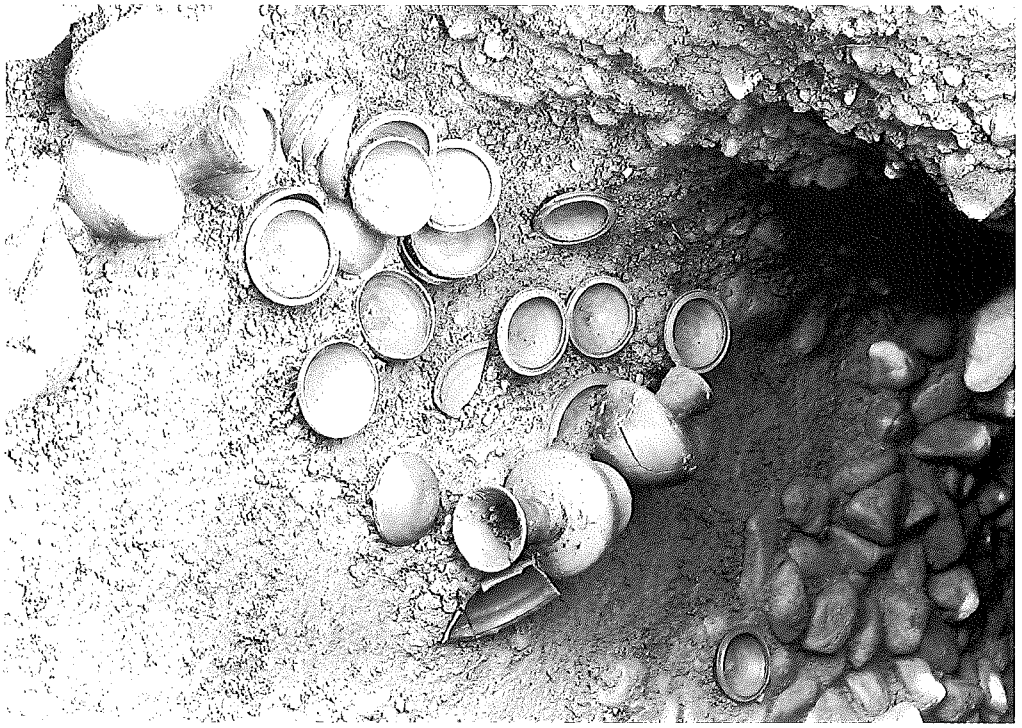
図版12



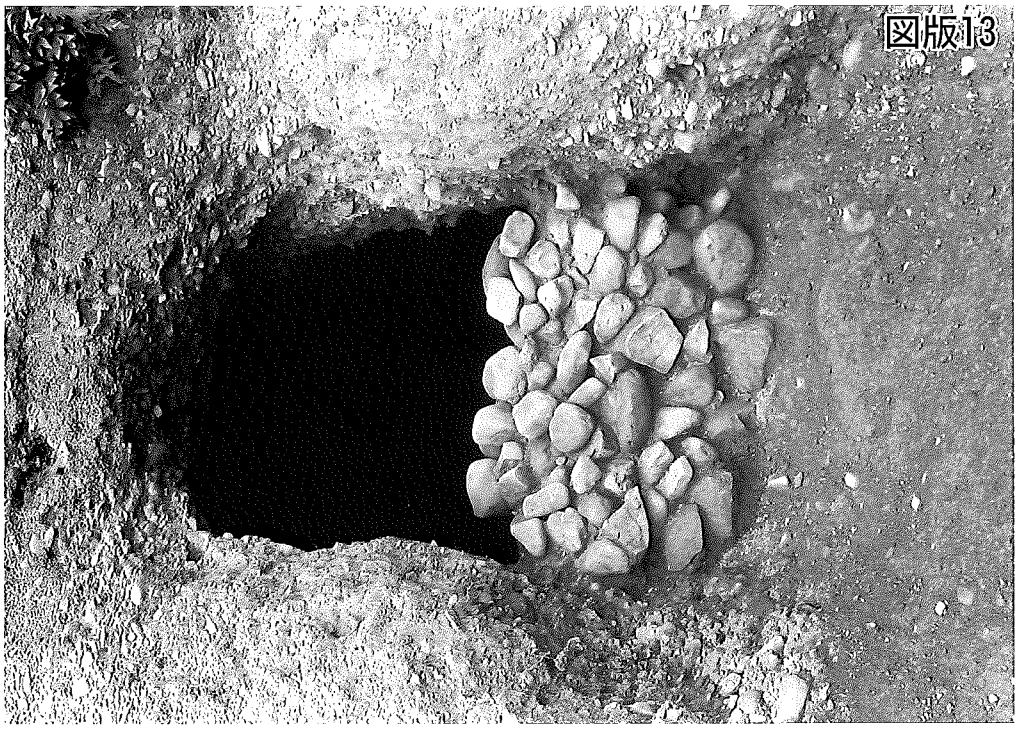
（1） 12号横穴（南より）



（2） 12号横穴内部
（敷石が玄室全体に見られる、南より）



（3） 12号横穴土器出土状況
（坏類が多い、№3～24、南より）



（1） 13号横穴（南より）



（2） 13号横穴内部
（棺座石有り、南より）

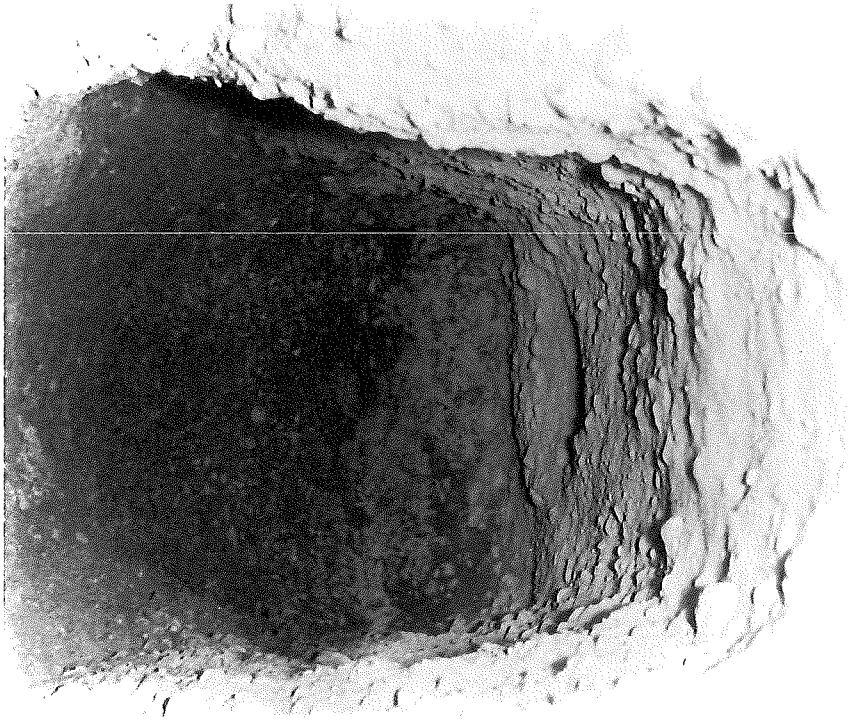


（3） 14号横穴（南より）

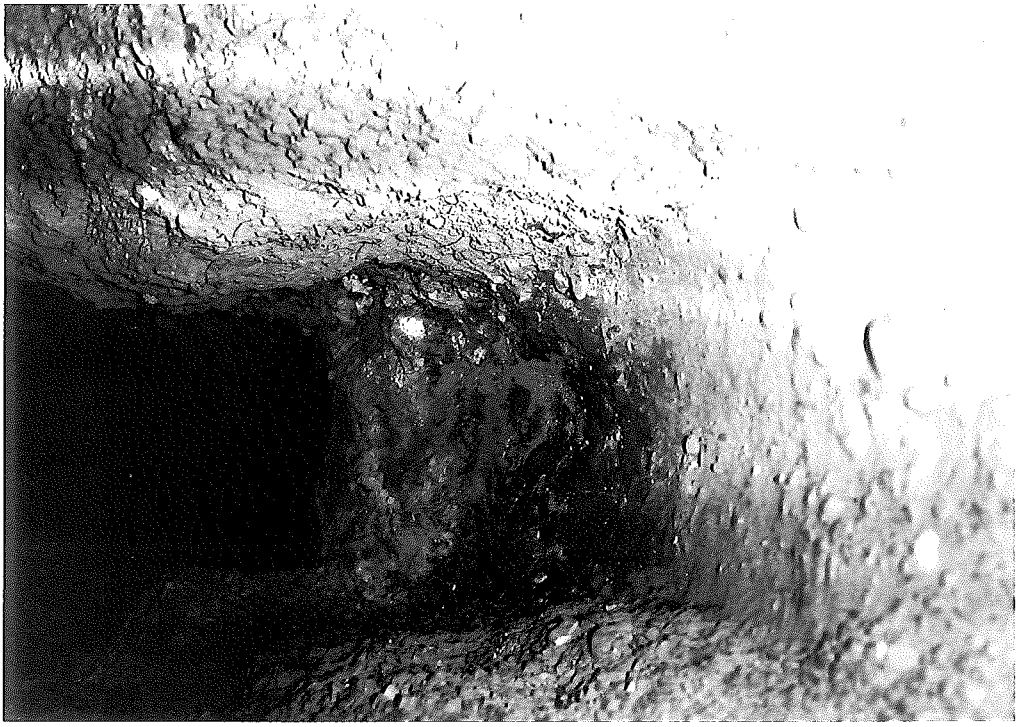
図版14



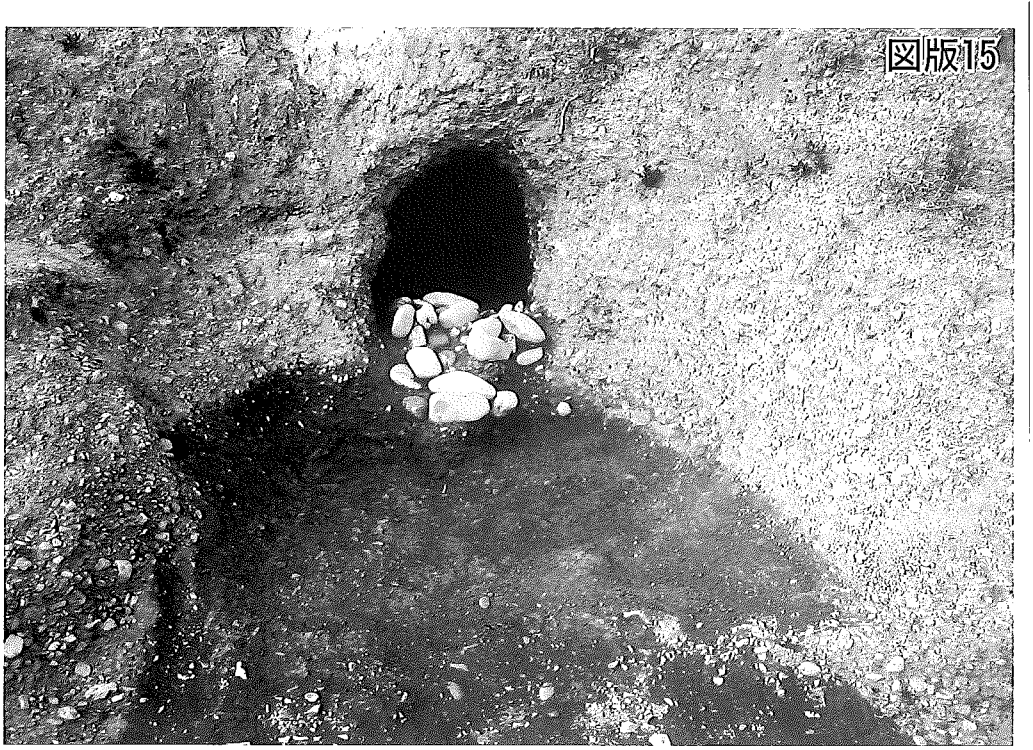
（1） 14号横穴土器出土状況
（坏類が多い、№.1～12、南より）



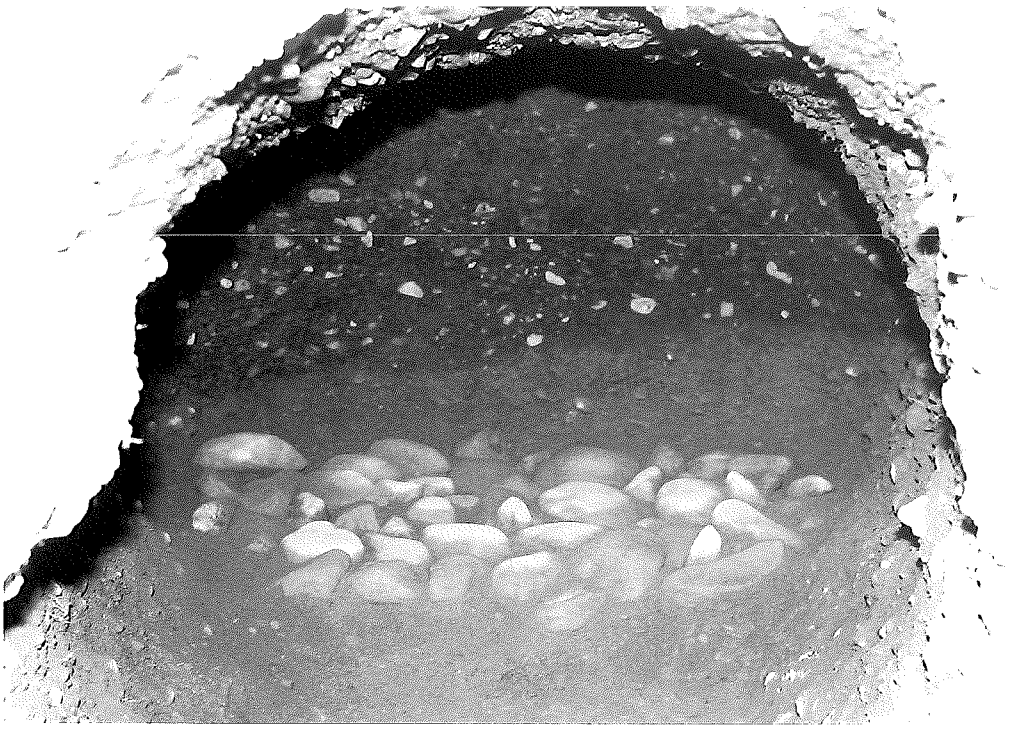
（2） 15号横穴内部
（敷石無し、盗掘か？南より）



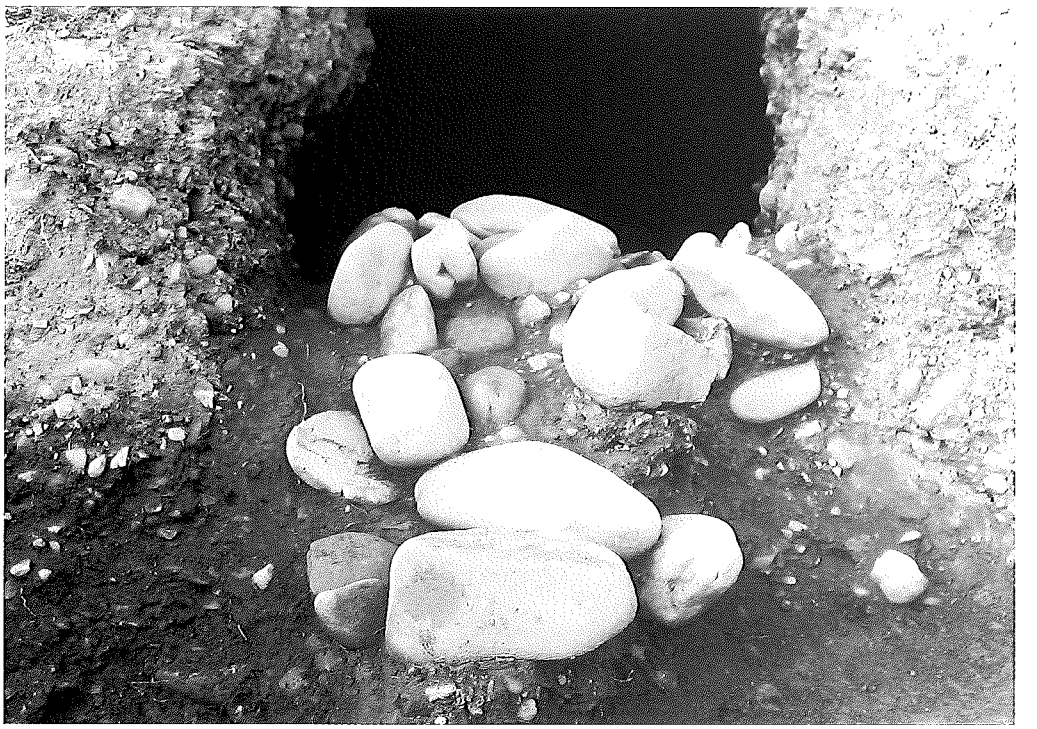
（3） 16号横穴内部
（未完成横穴、南より）



（1） 17号横穴
（方形墓前域をもつが単独、南より）



（2） 17号横穴内部
（敷石大型礫を使用、南より）



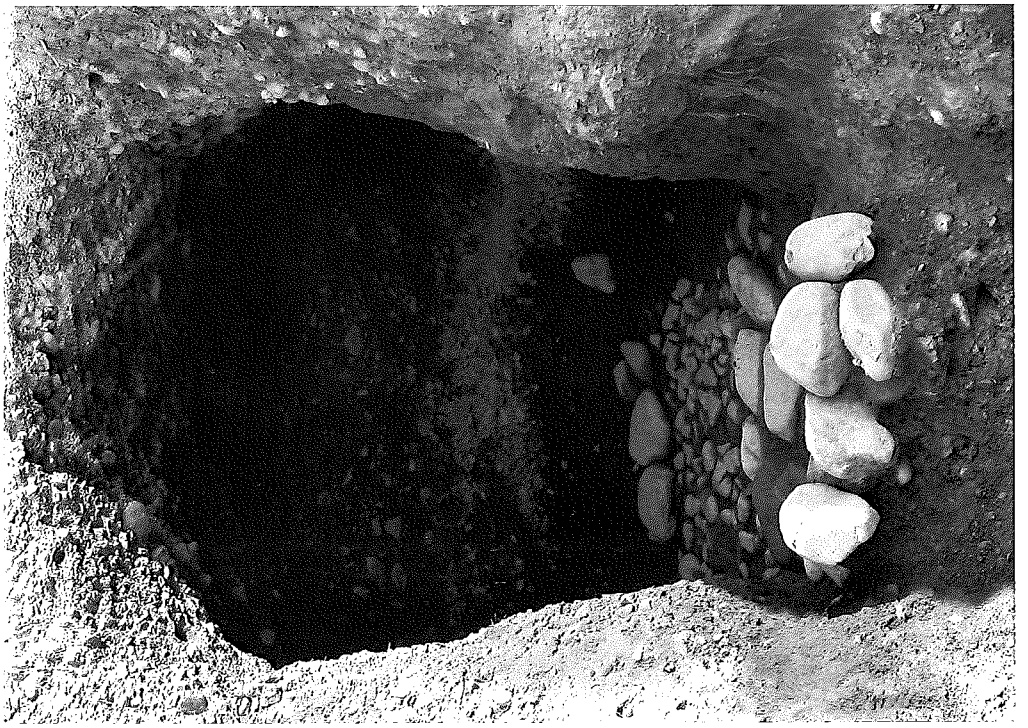
（3） 17号横穴閉塞石
（大型礫を使用、南より）



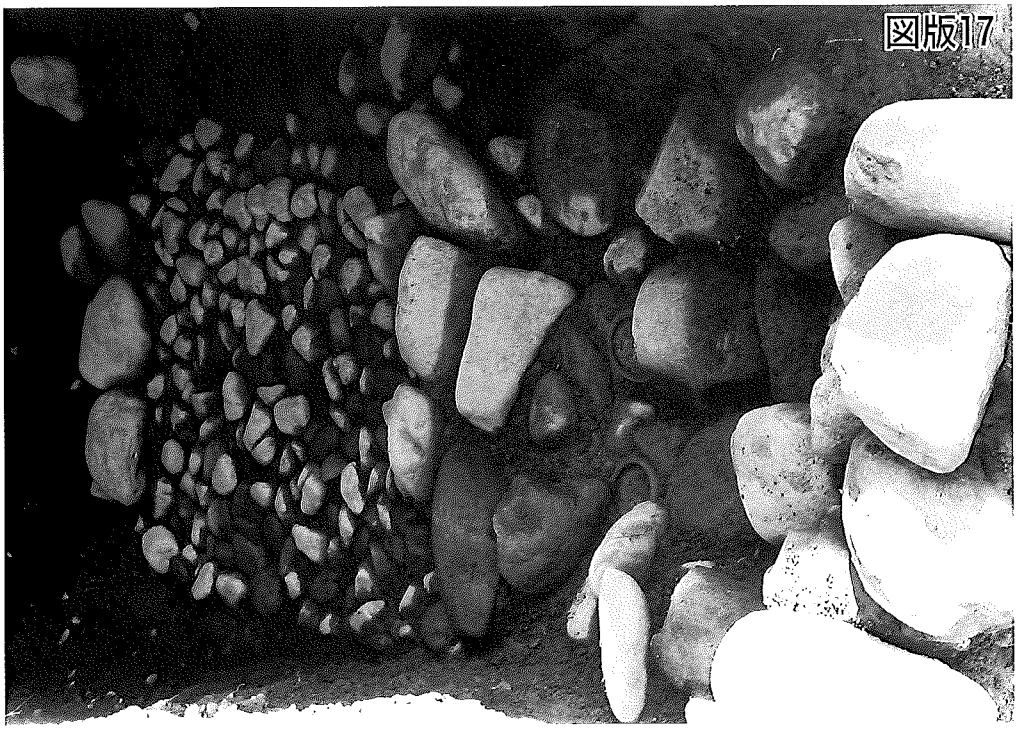
（1） 18号～20号横穴墓前域
（共有墓前域、南より）



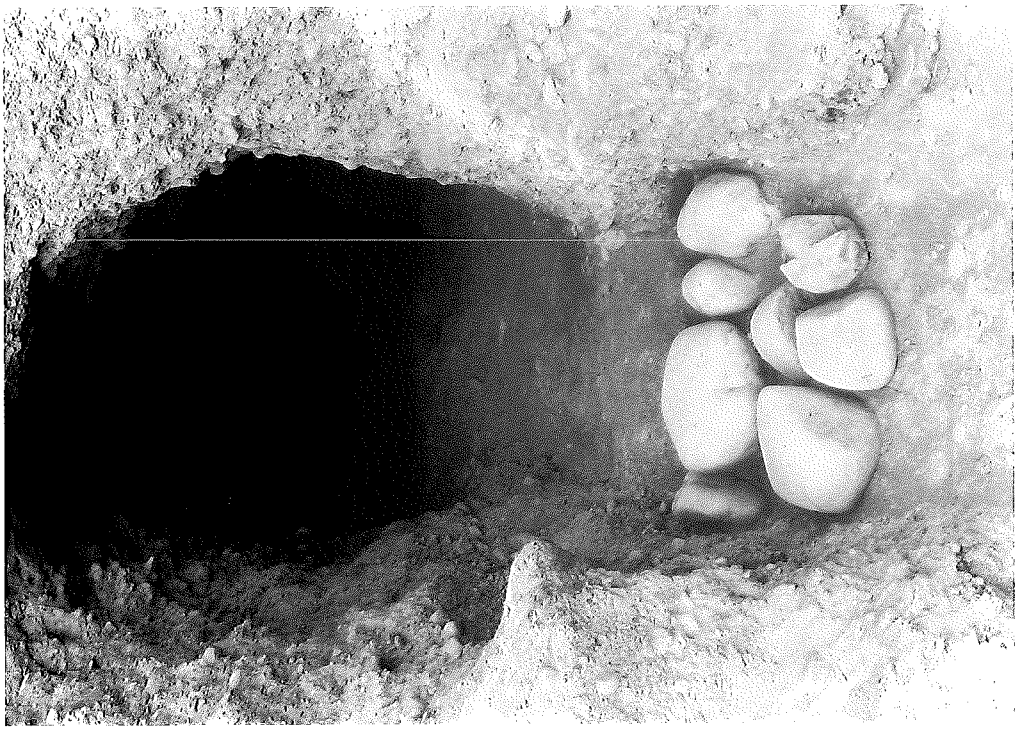
（2） 18号横穴
（極小型横穴、南より）



（3） 19号横穴
（小型横穴、南より）



（1） 19号横穴内部
（玄室全体に敷石有り、南より）



（2） 20号横穴（南より）

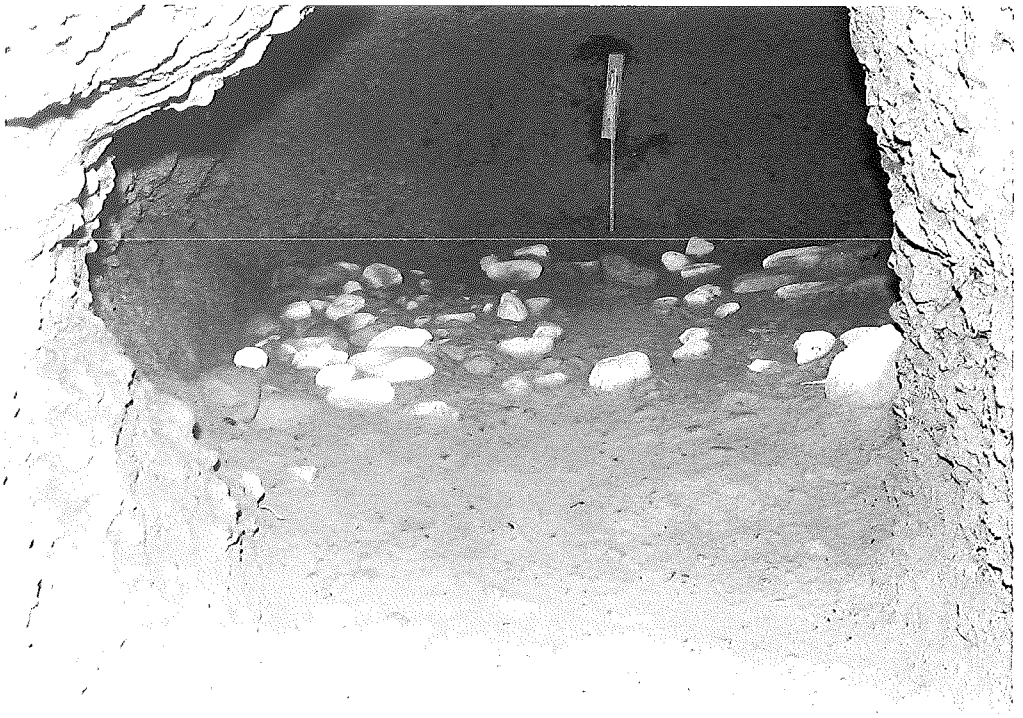


（3） 21号・22号横穴墓前域
（共有墓前域、南より）

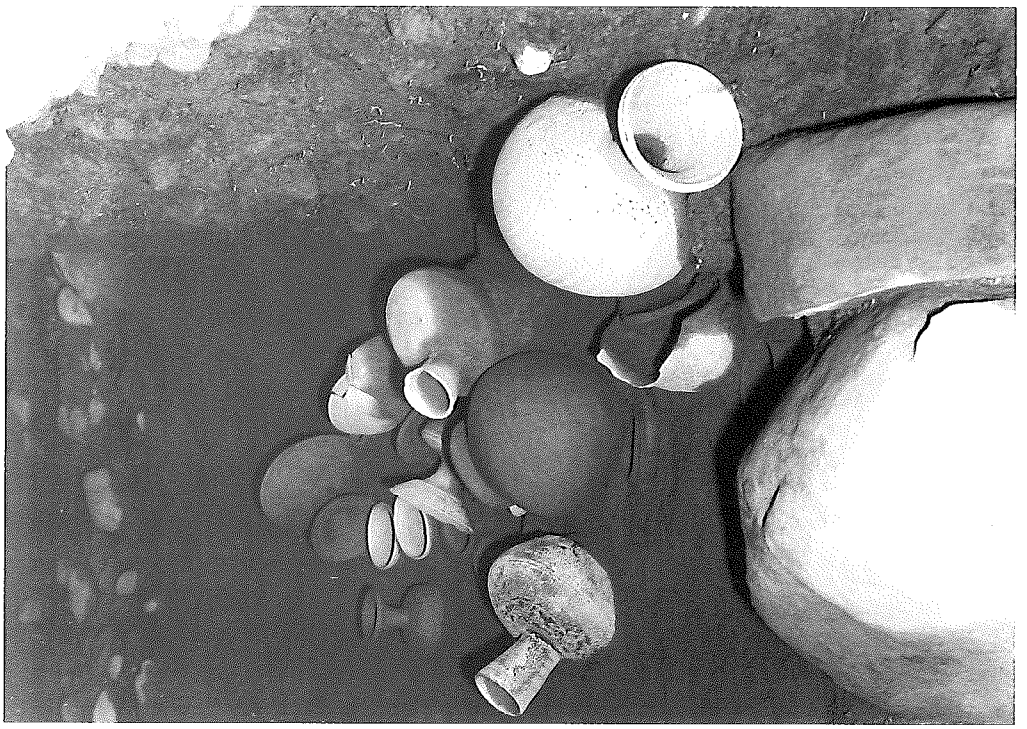
図版18



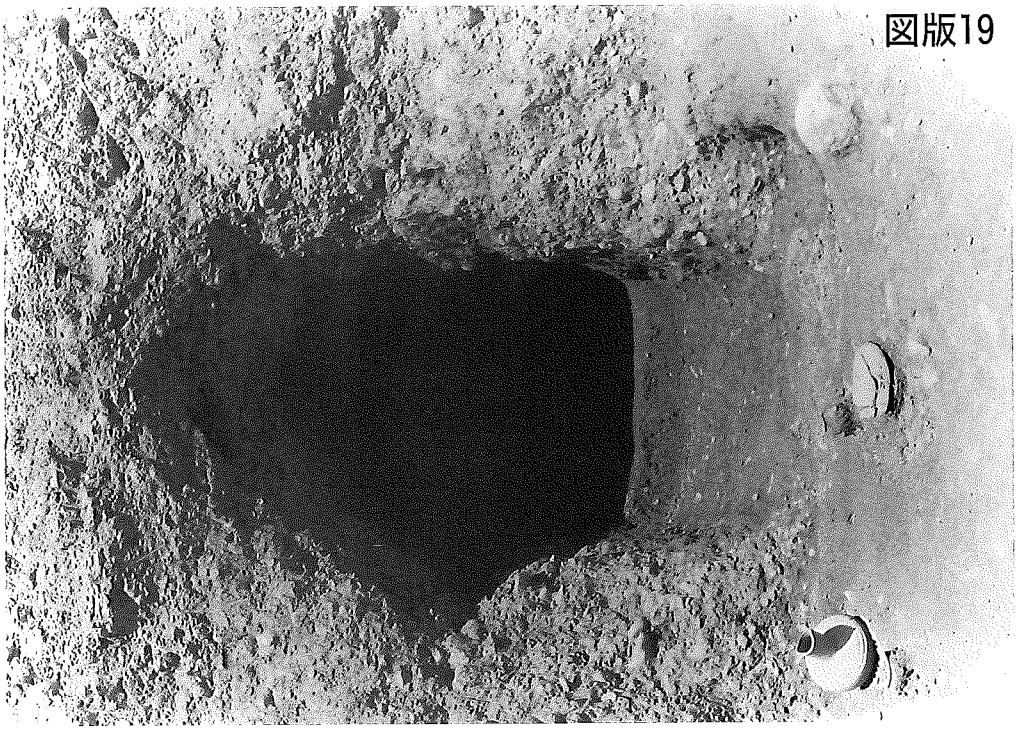
（1） 21号横穴（南より）



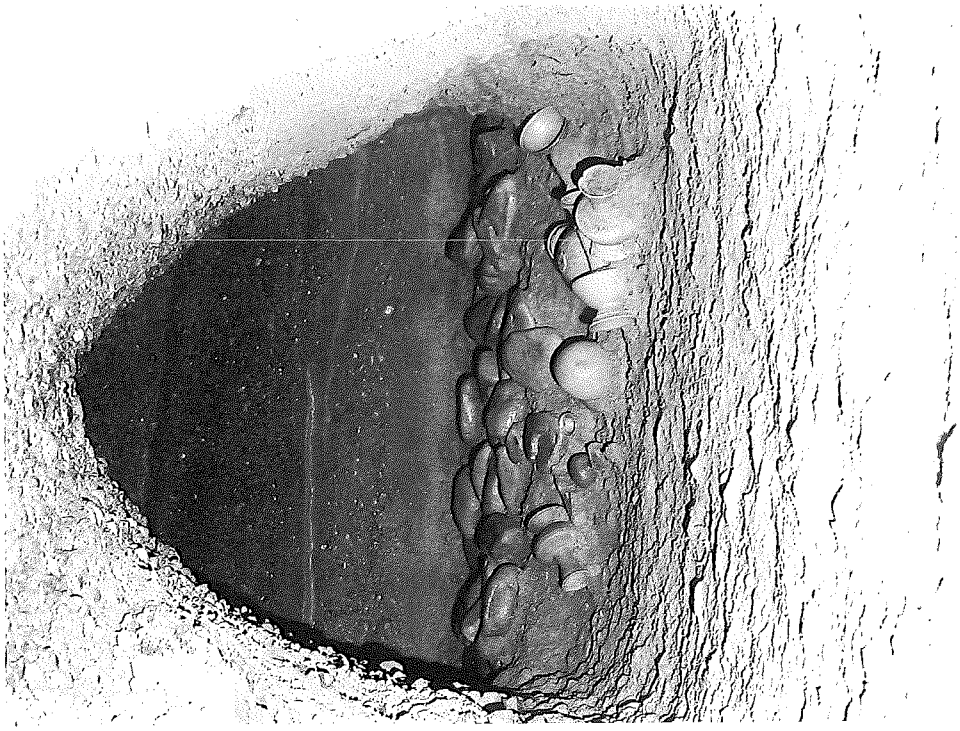
（2） 21号横穴内部
（まばらな敷石有り、南より）



（3） 21号横穴土器出土状況
（羨道部分№1～27南より）



（1） 22号横穴（南より）



（2） 22号横穴内部
（棺台、敷石有り、南より）

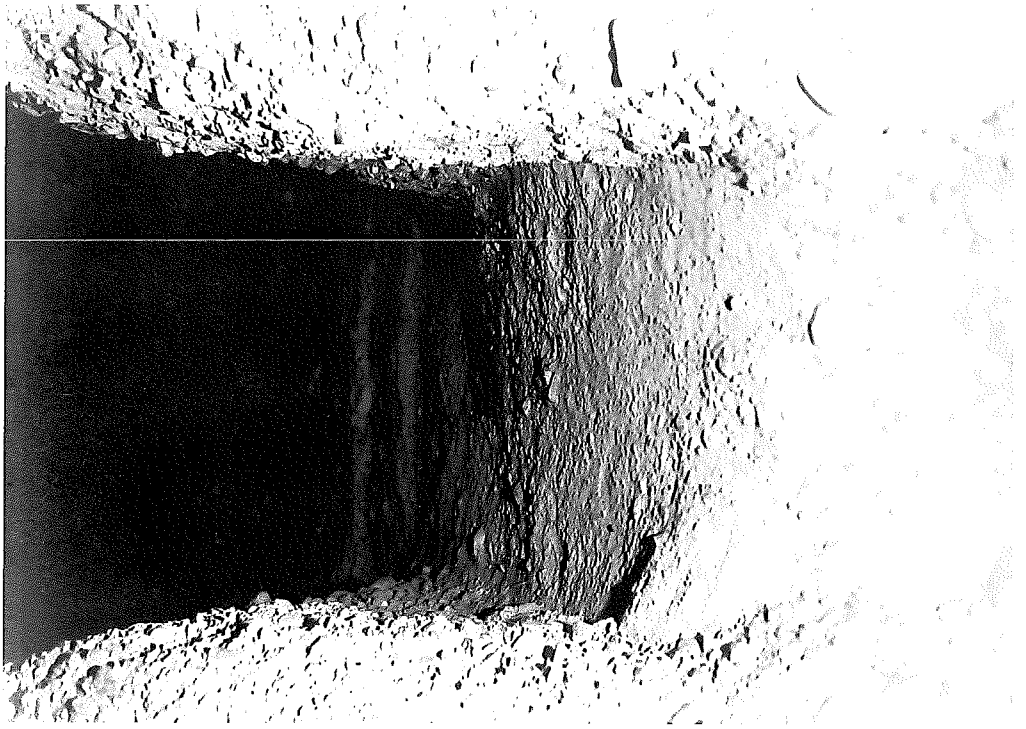


（3） 22号横穴土器出土状況
（棺台前より出土、№1～12出土、
南より）

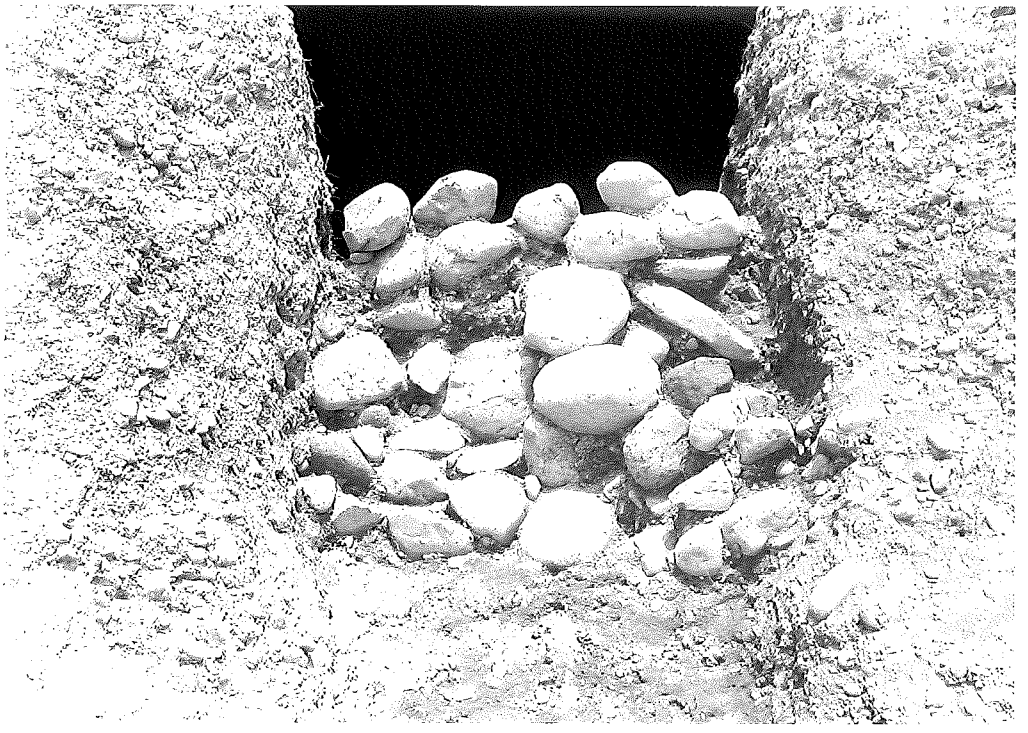
図版20



（1） 23号～27号横穴墓前域
（共有墓前域、南より）



（2） 23号横穴内部
（棺台、敷石有り、南より）



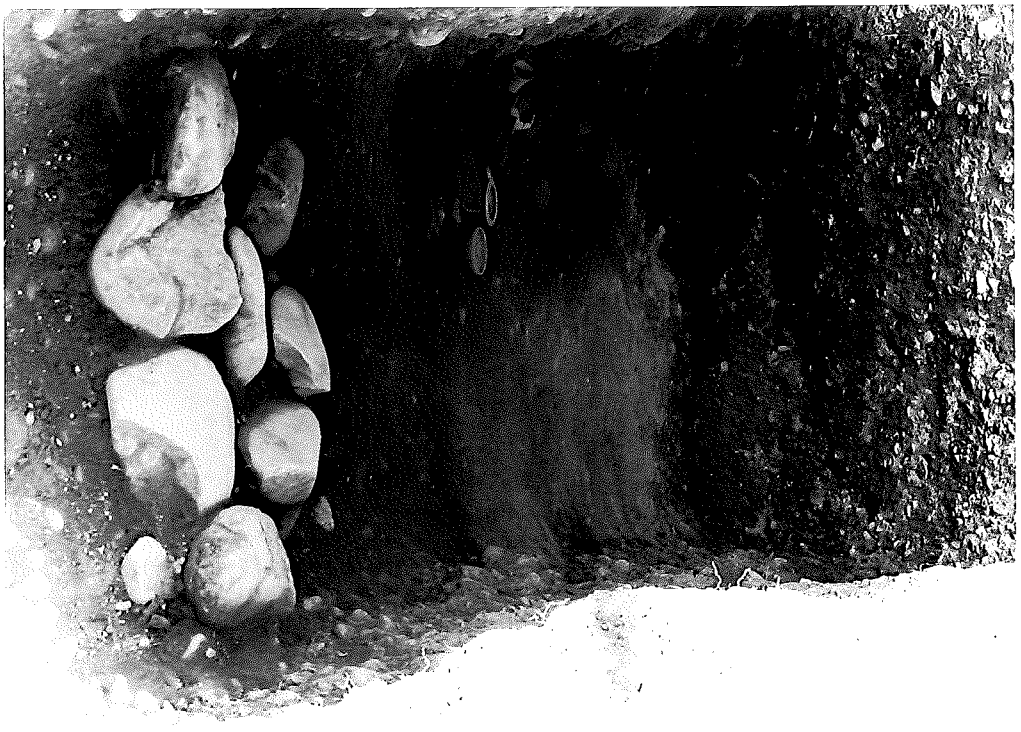
（3） 23号横穴閉塞石（南より）



（1） 24号横穴内部
（敷石無し、南より）



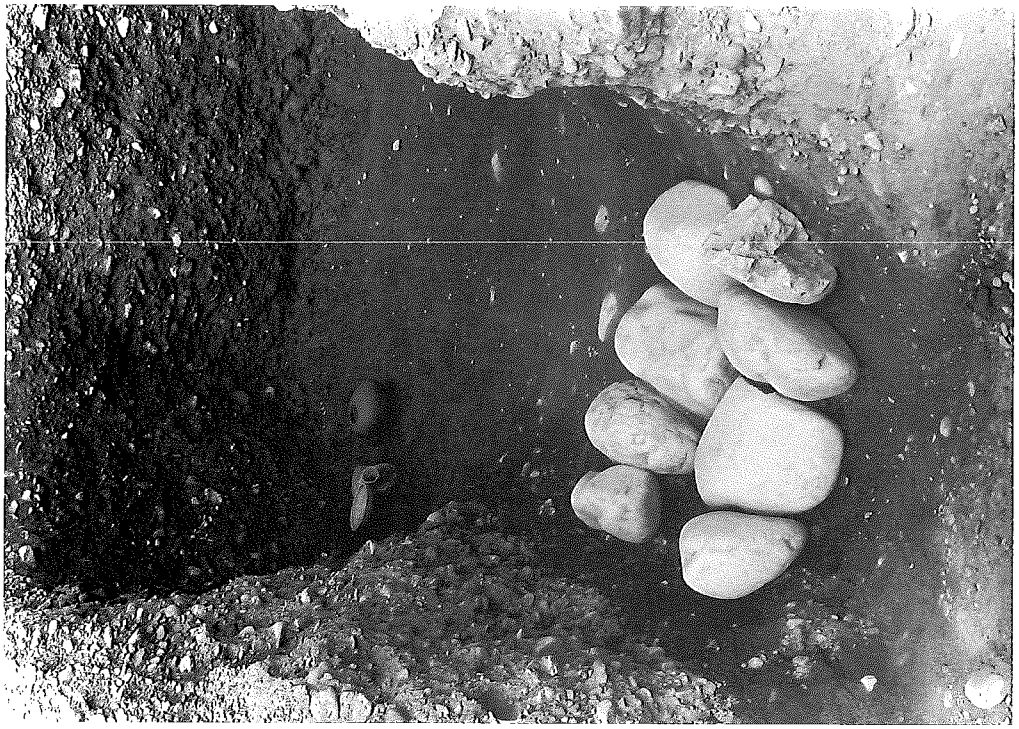
（2） 24号横穴土器出土状況
（西側壁付近、№1～15、北より）



（3） 25号横穴内部
（敷石無し、南より）



（1） 25号横穴墓前域土器出土状況
（坏類主体）



（2） 26号横穴
（敷石無し、南より）



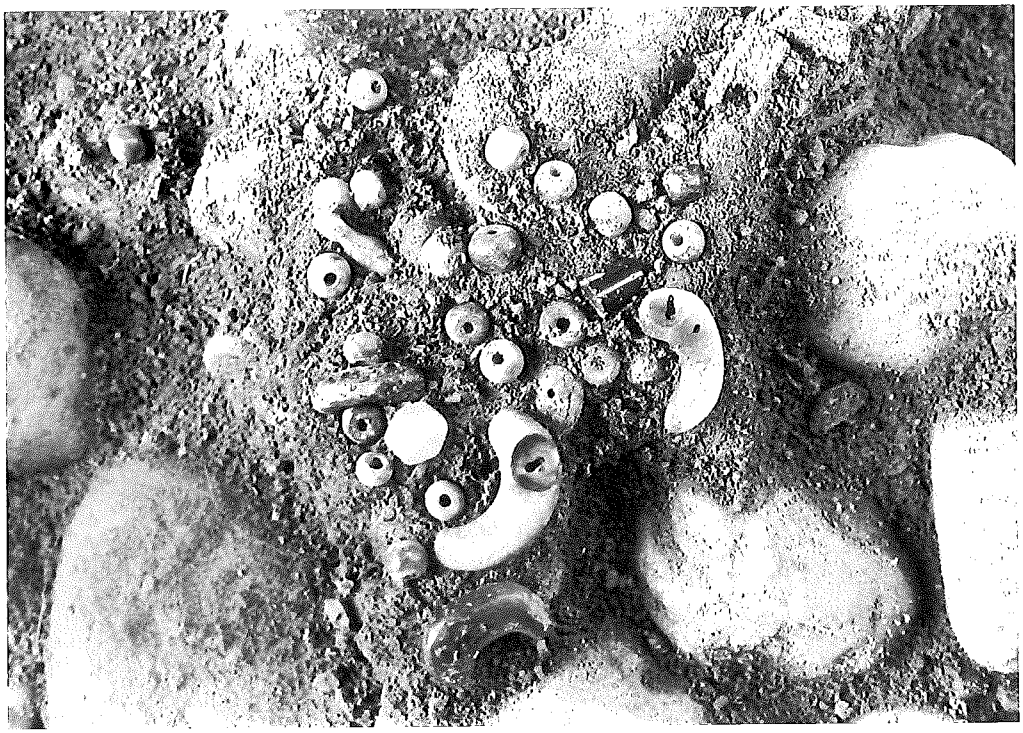
（3） 26号横穴土器出土状況
（西側壁付近出土№1～7、東より）



（1） 27号横穴（南より）



（2） 27号横穴内部
（敷石有り、南より）



（3） 27号横穴玉類出土状況
（集中して出土、首飾りか？）

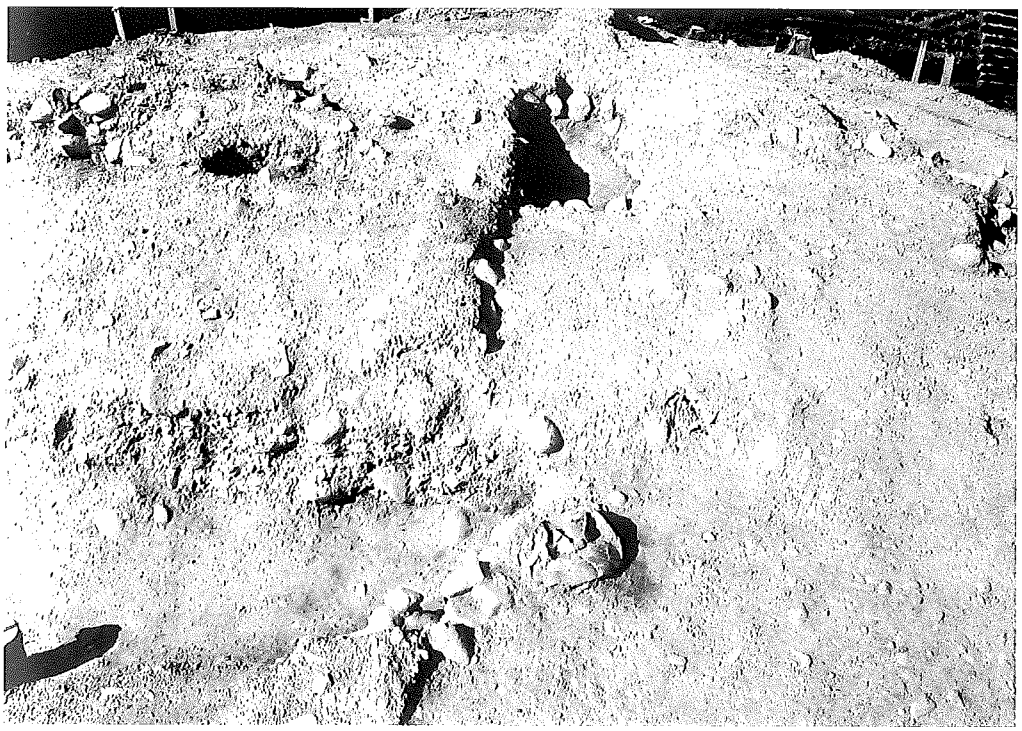
図版24



（1）　3号墳（西より）



（2）　3号墳葺石
（東側部分、東より）



（3）　1号方形周溝墓
（3号墳丘下層検出、弥生後期末、南より）



（1）　1号方形周溝墓出土土器棺
（礫で囲まれている、西より）



（2）　4・5号墳遠景（西より）



（3）　4号墳（南より）

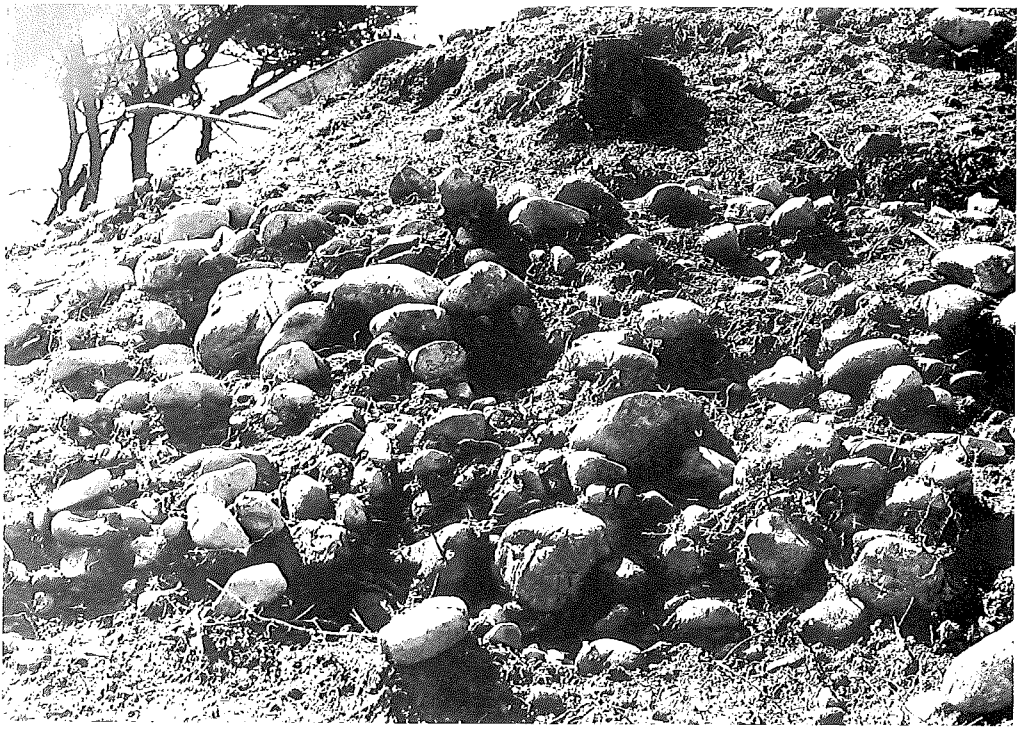
図版26



（1）　４号墳第２主体部
（割竹形木棺？西より）



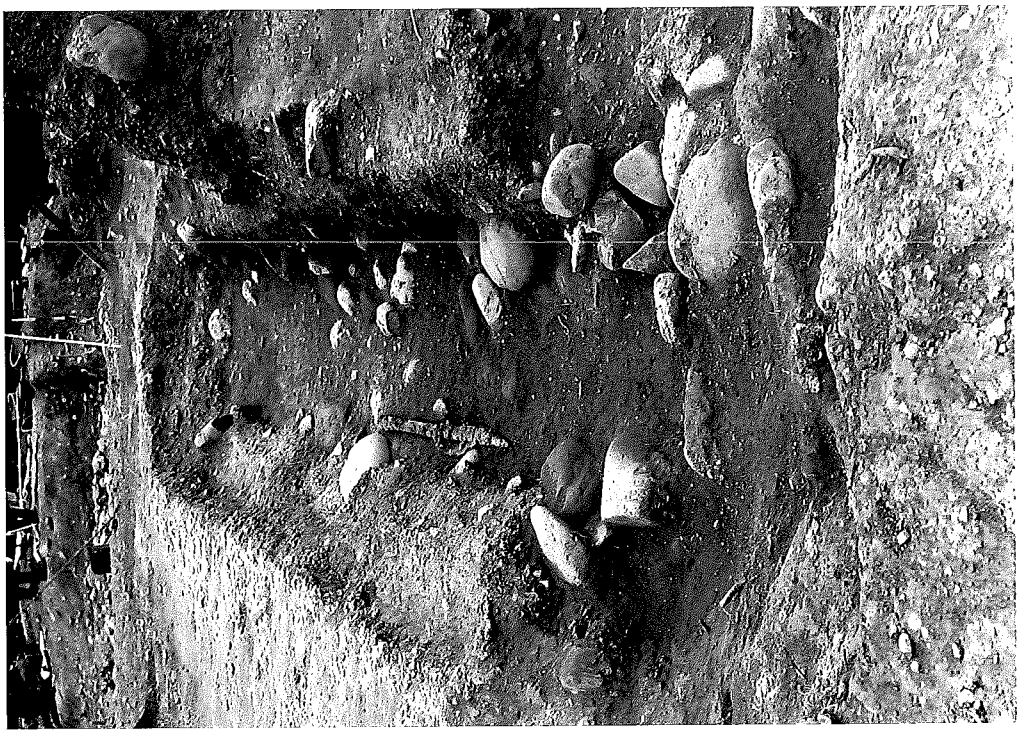
（2）　４号墳第２主体部鉄鏃出土状況
（西より）



（3）　５号墳葺石（一部分）



（1）　５号墳主体部
（２棺が直交して重なり合う、東より）

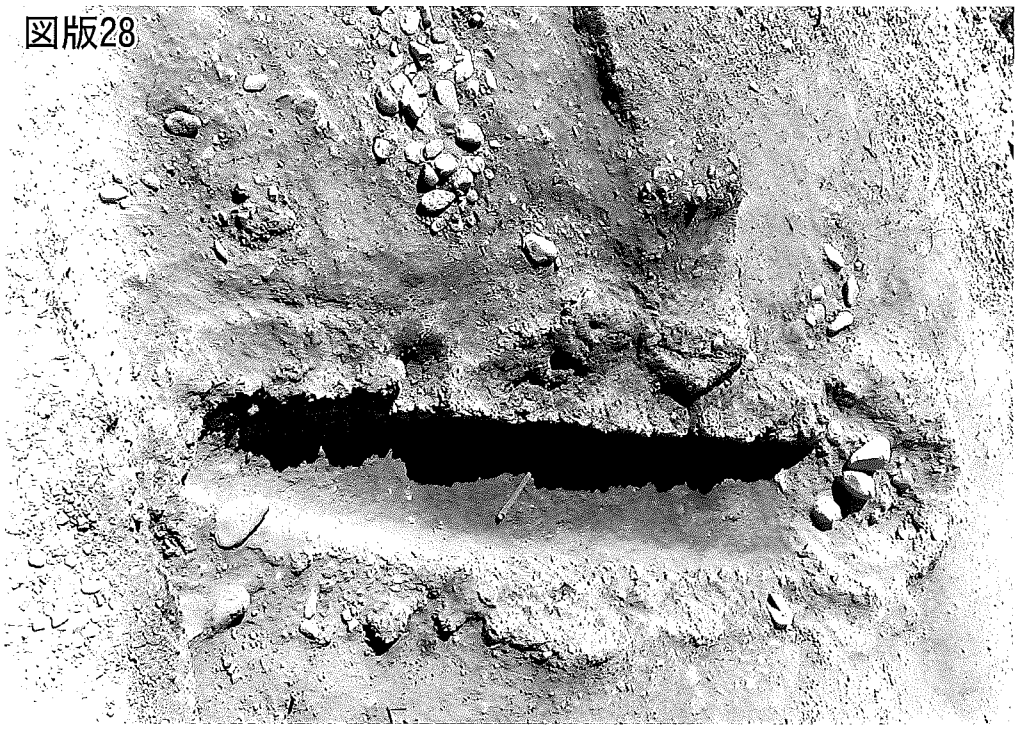


（2）　５号墳主体部
（割竹形木棺？棺底に礫有り、東より）



（3）　井守塚５号墳（西より）

図版28



（1） 井守塚５号墳第１主体部
（割竹形木棺、西より）

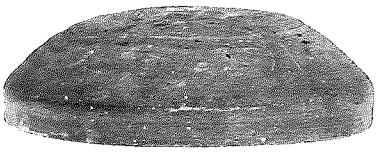


（2） 井守塚５号墳第１主体部
鉄刀出土状況
（割竹形木棺、西より）

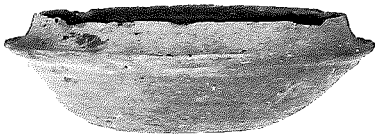


（3） 井守塚５号墳第２主体部
馬具等出土状況
（西より）

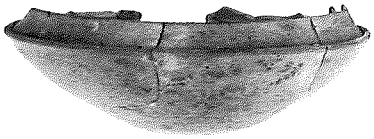
1・5～7＝1号横穴



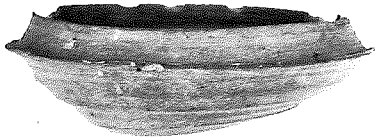
1



5



6



7

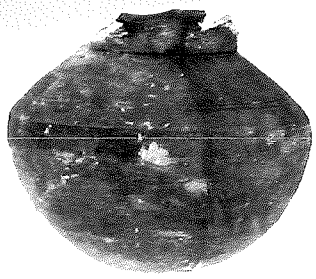


9

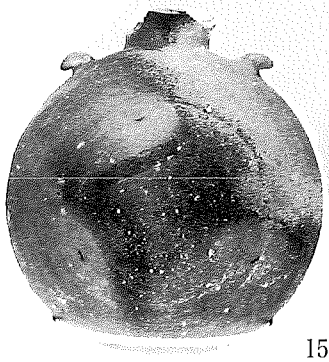


10

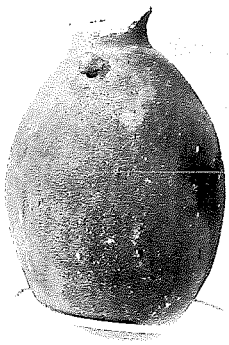
9・10・13・15＝3号横穴



13

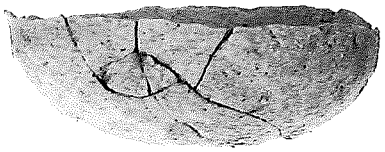


15

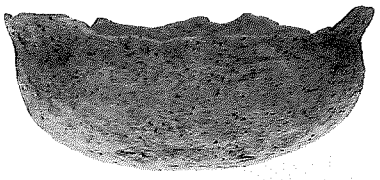


15

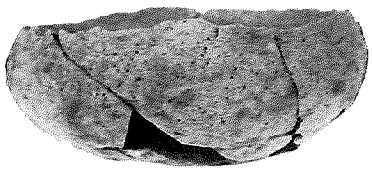
17～20＝4号横穴



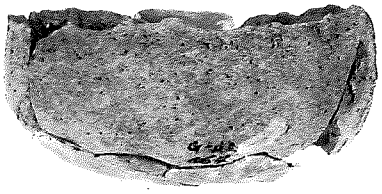
17



18

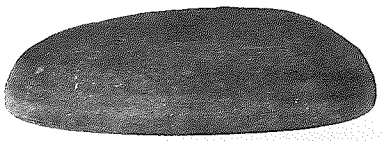


19

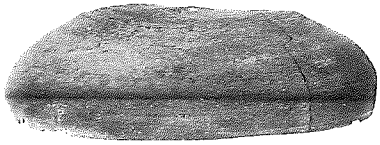


20

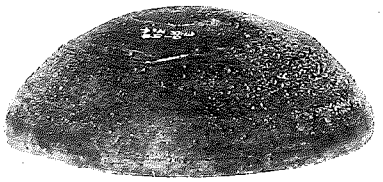
22～25＝5号横穴



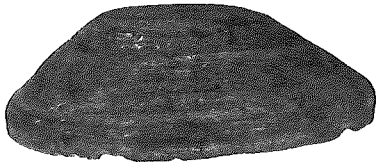
22



23



24

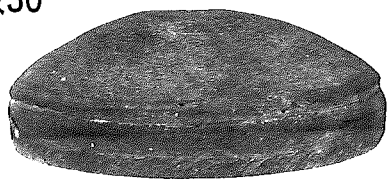


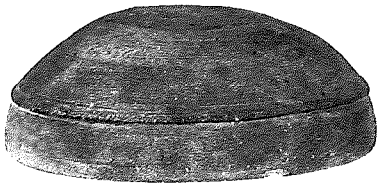
25

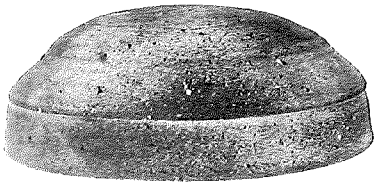
遺物写真（1）

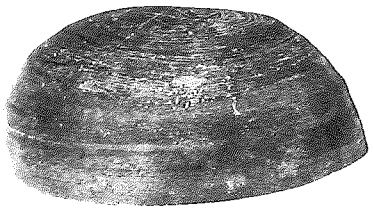
※No.は図版No.と一致する。

図版30

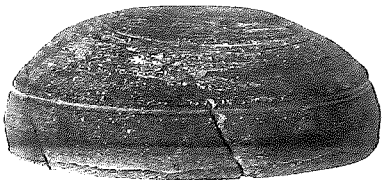

26

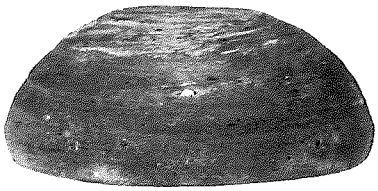

27

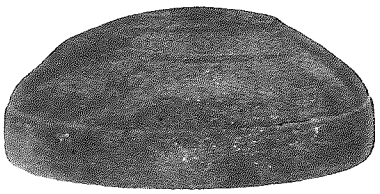

28

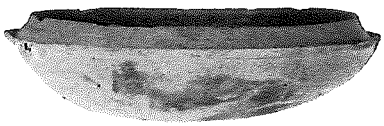

29

26～33・35～38・
40～45＝5号横穴


30

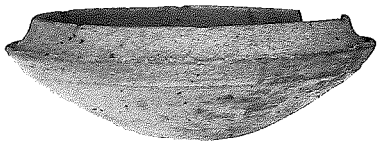

31


32

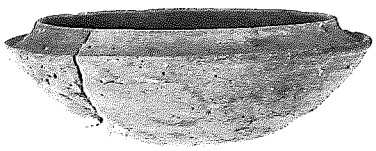

33


35

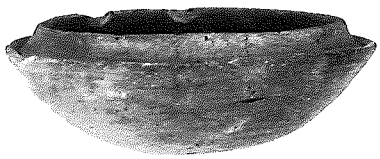

36


37


38

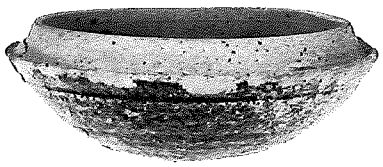

40


41


42


43


44


45

遺物写真（2）

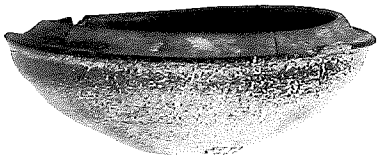
※No.は図版No.と一致する。



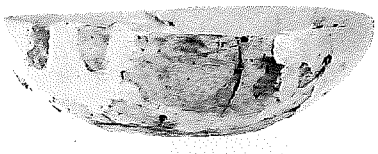
46



47

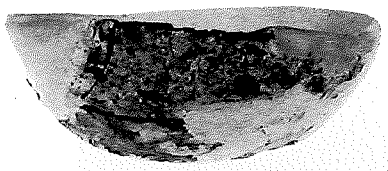


48

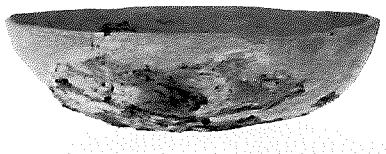


50

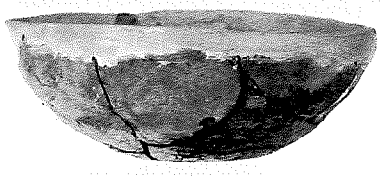
46～48・50・51・
53～55・57・59・
61・63・65～67
＝５号横穴



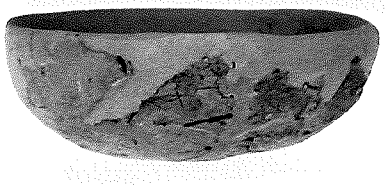
51



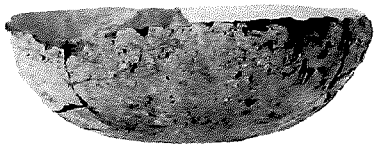
53



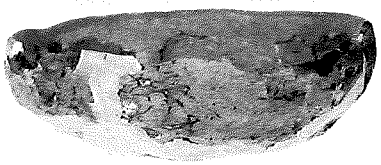
54



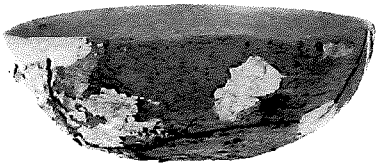
55



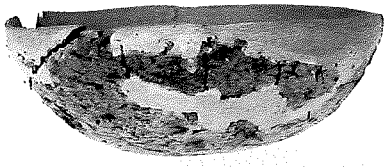
57



59



61



63



65

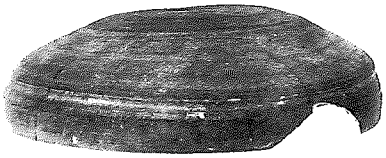


66

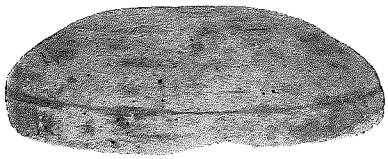


67

68・69＝６号横穴



68

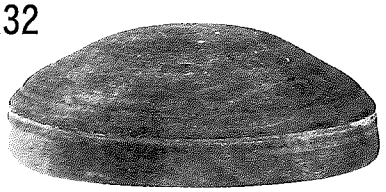


69

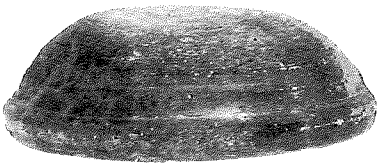
遺物写真（３）

※No.は図版No.と一致する。

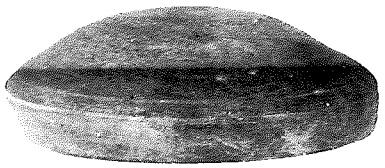
図版32



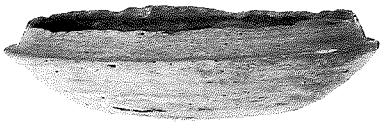
70



71



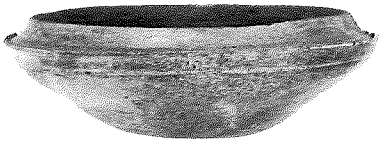
72



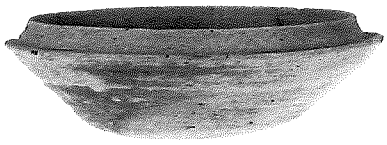
73



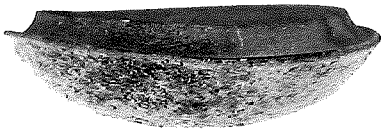
74



75



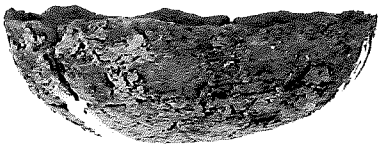
76



77

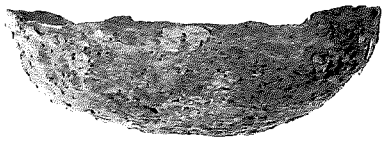


78

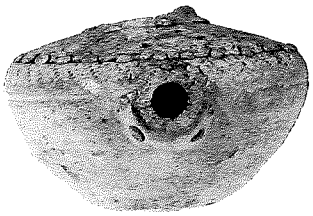


79

70～80・82・83＝６号横穴

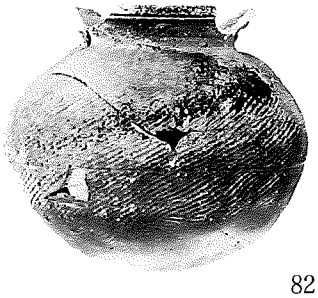


80



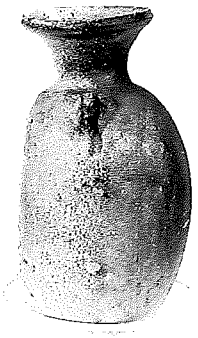
84

84・86～88＝７号横穴

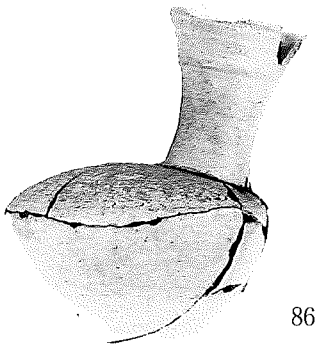


82





83



86



87

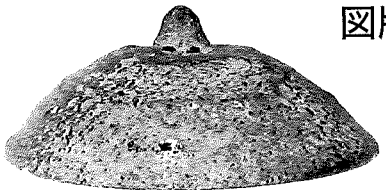


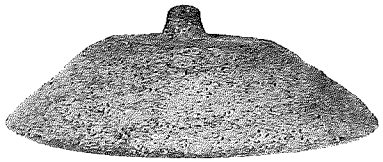
88

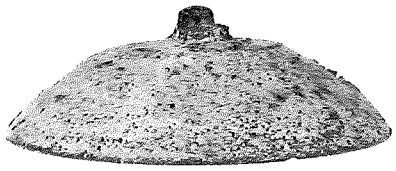
遺物写真（４）

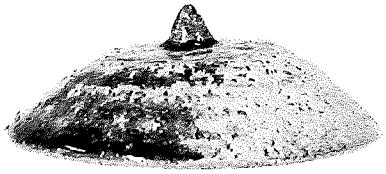
※No.は図版No.と一致する。

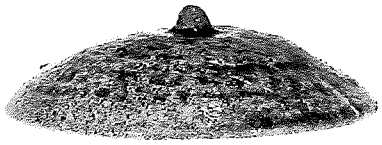

89


90

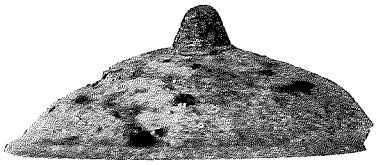

91

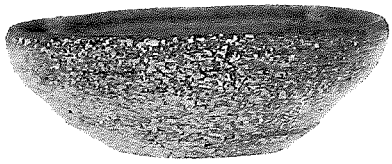

92

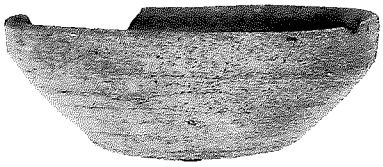

93

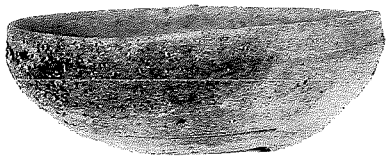

95

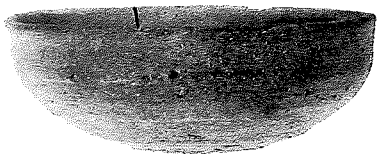
89～93・95～101・
103＝９号横穴

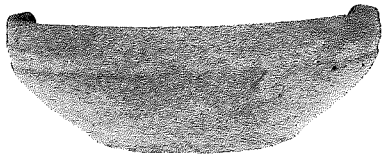

96


97


98

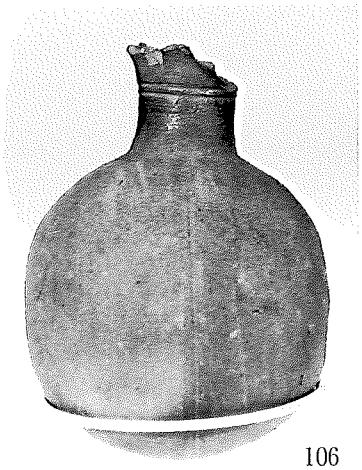

99

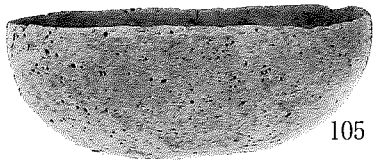

100


101

105～109＝10号横穴

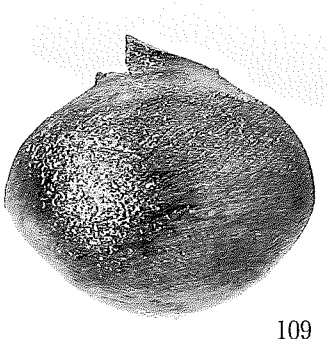

103


106


105


107

112＝11号横穴


109

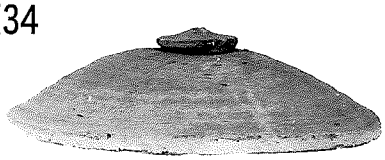

108


112

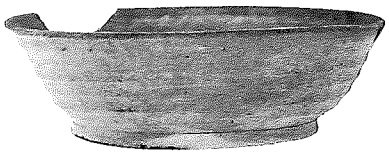
遺物写真（５）

※No.は図版No.と一致する。

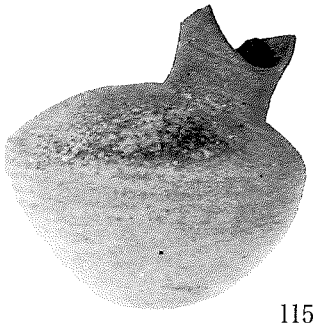
図版34



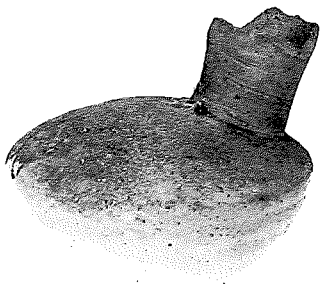
113



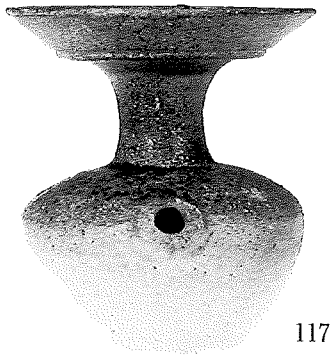
114



115



116

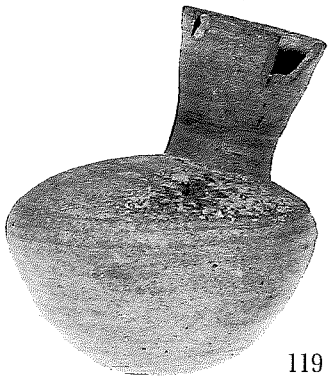


117

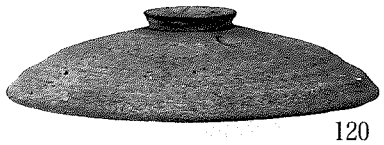
113～119＝11号横穴



118

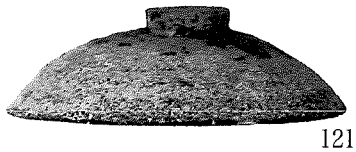


119

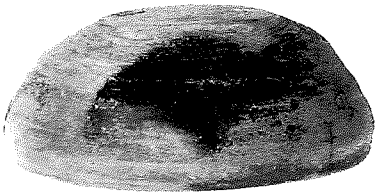


120

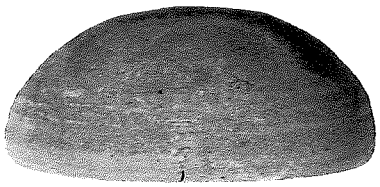
120～131＝12号横穴



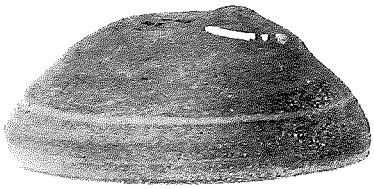
121



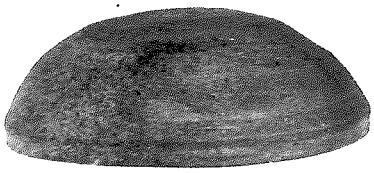
122



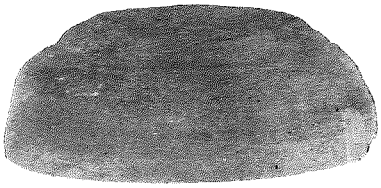
123



124



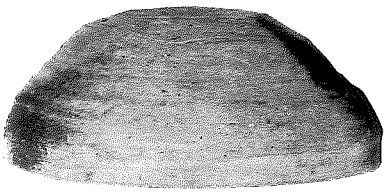
125



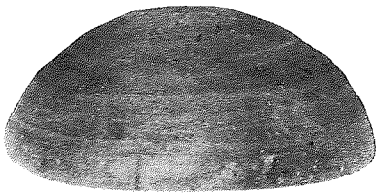
126



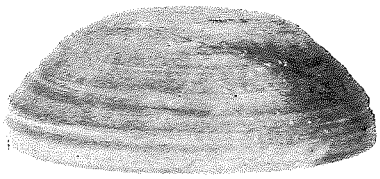
127



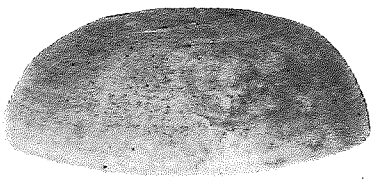
128



129



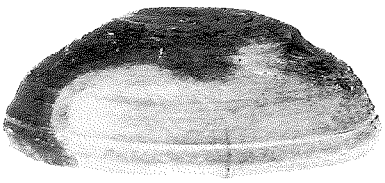
130

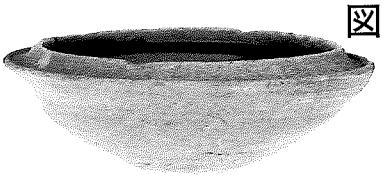


131

遺物写真（6）

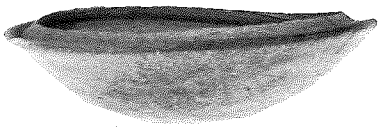
※No.は図版No.と一致する。


132

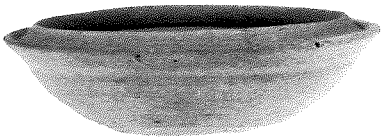

133

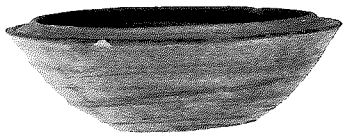

134


135


136

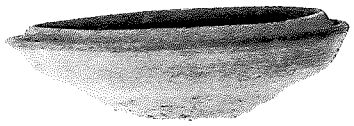

137


138


139

132～144・146～148
＝12号横穴

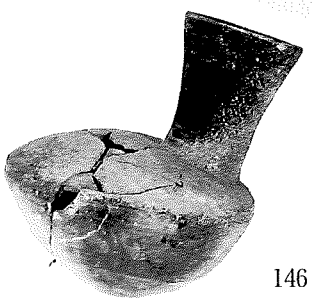

140


141


142


143


144

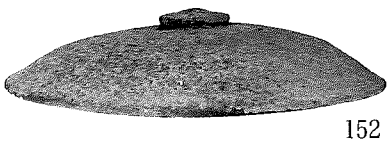

146


147

150＝13号横穴


150

152・153＝14号横穴


152


148


153

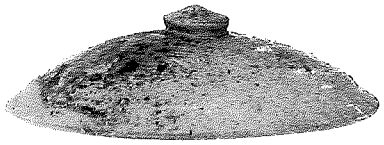
遺物写真（7）

※No.は図版No.と一致する。

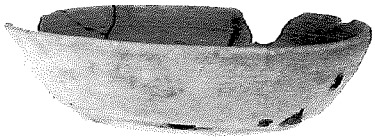
図版36



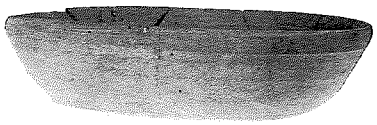
154



155

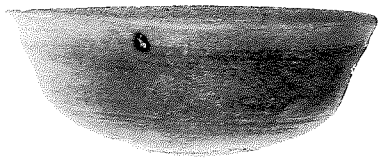


156

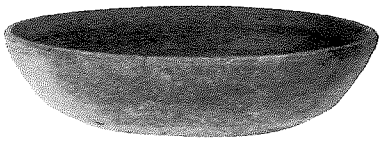


157

154～162＝14号横穴



158



159



162



173



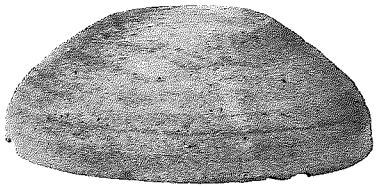
189

166・173＝15号横穴

189＝17号横穴



166

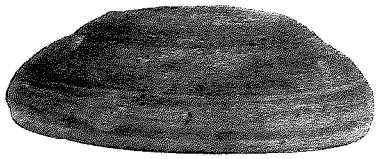


181

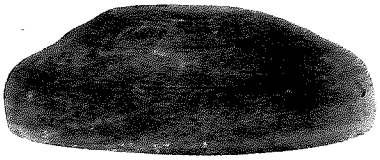
181・182＝12号～15号横穴
墓前域



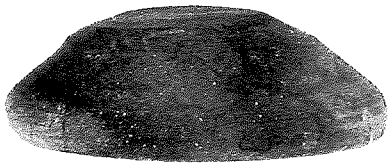
182



190

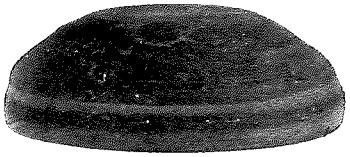


191

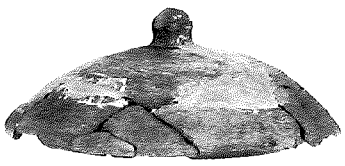


192

190～196＝19号横穴



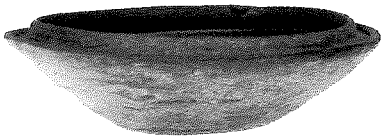
193



194



195



196

遺物写真（8）

※No.は図版No.と一致する。

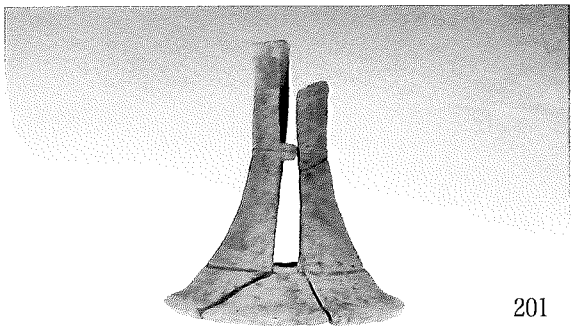
197・198・201＝
19号横穴



197



198



201

202～205＝20号横穴



202



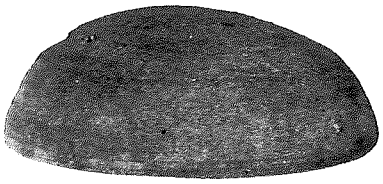
203



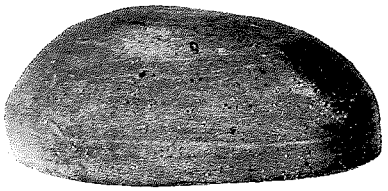
204



205

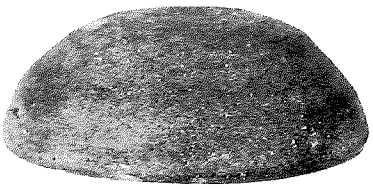


206

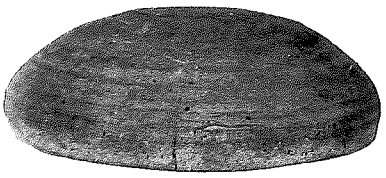


207

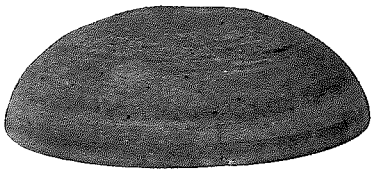
206～215＝21号横穴



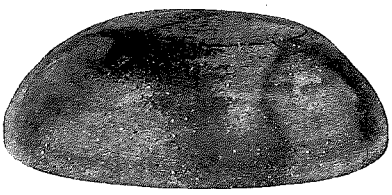
208



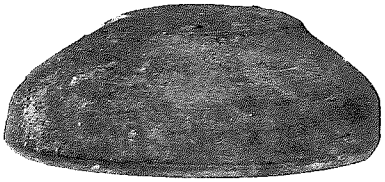
209



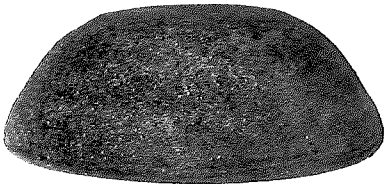
210



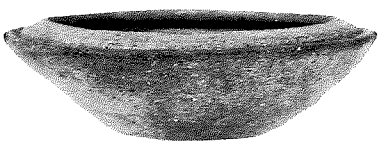
211



212



213



214

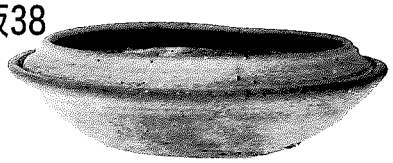


215

遺物写真（9）

※No.は図版No.と一致する。

図版38


216


217


218


219


220


221

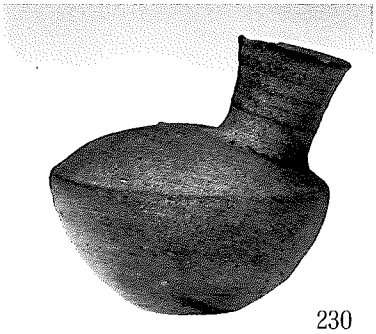
216～224・226・227・
230～234＝21号横穴

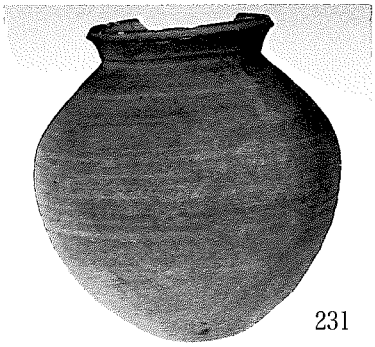

223


224


226


227


230


231


232

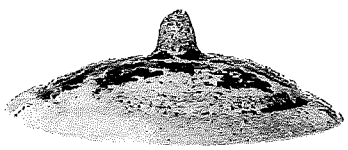

233

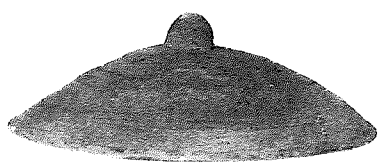

234

236・238・239＝22号横穴


222

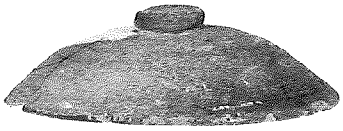

236

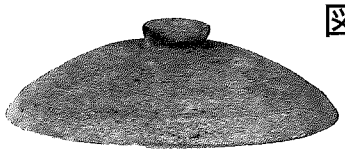

238

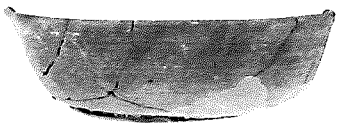

239

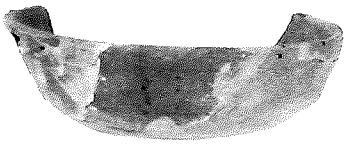
遺物写真(10)

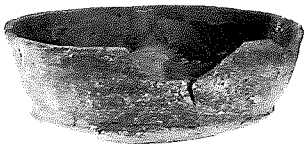
※No.は図版No.と一致する。

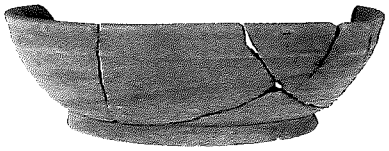

240


241

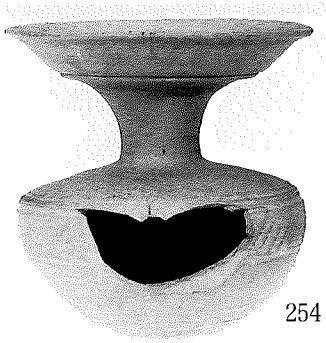

246


247


248


250

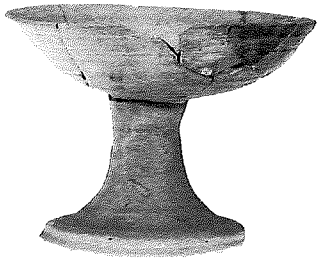
240・241・246～248・
250・254～259・
262～267＝22号横穴


254


255

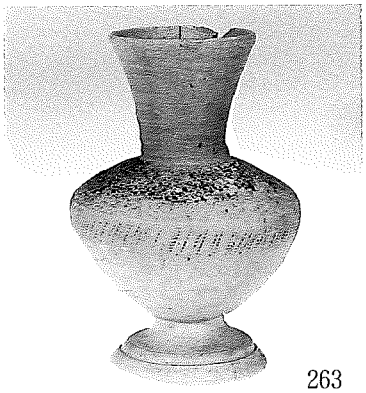

256


257


258

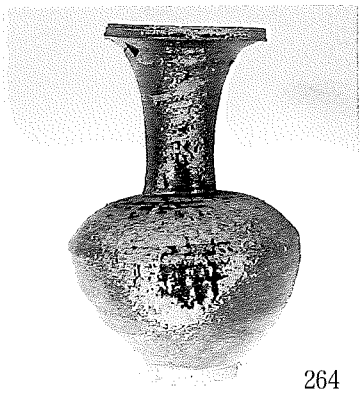

259

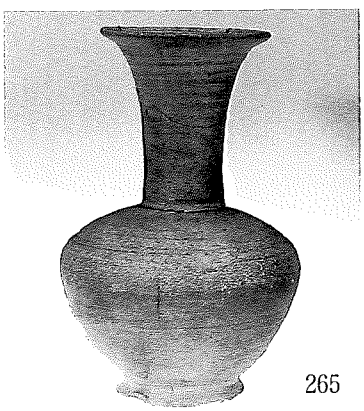
274＝18号～20号横穴
墓前域


263


262


274


264


265


266
267

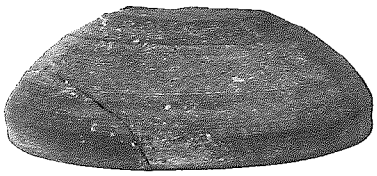
遺物写真(11)

※No.は図版No.と一致する。

図版40

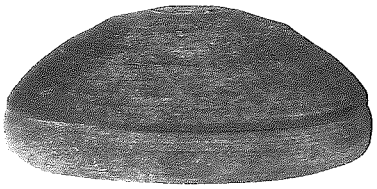


278

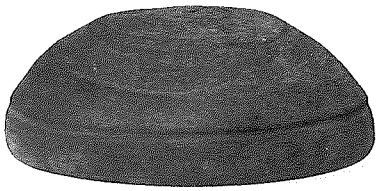


281

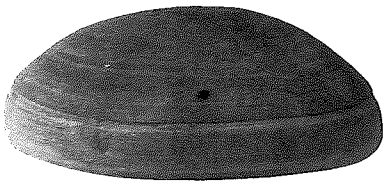
278＝21号～22号横穴
墓前域



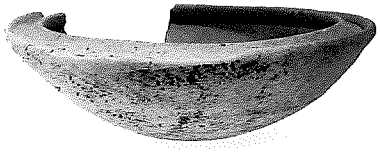
283



284



285

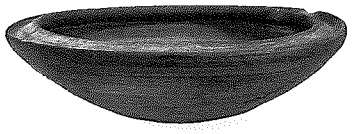


288

281・283～285・288・
290～294・301・
305～309・313
＝23号横穴



290



291



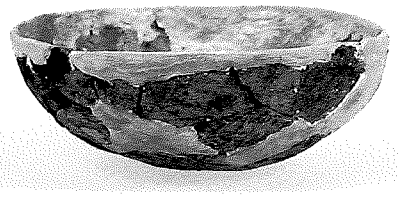
292



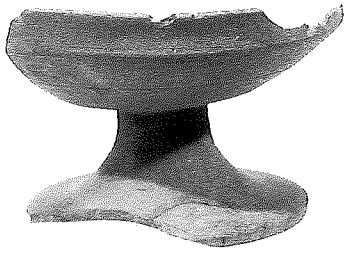
293



294



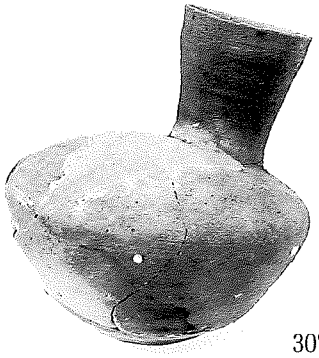
301



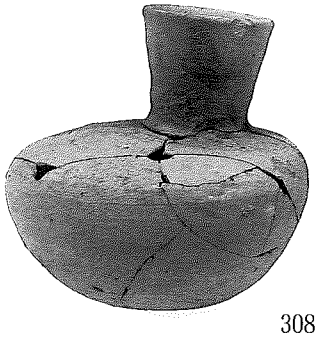
305



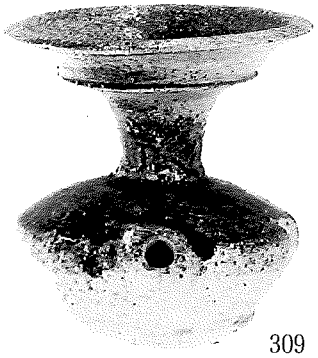
306



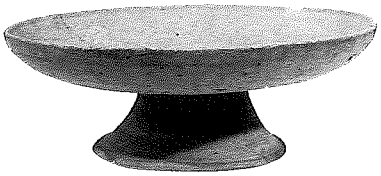
307



308



309

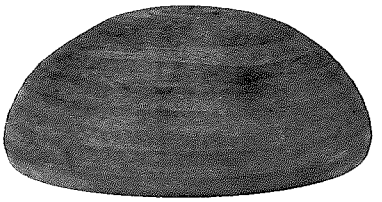


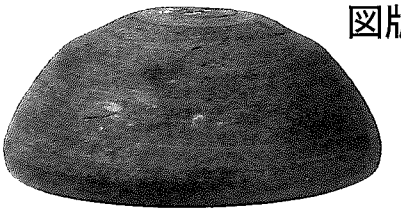
313

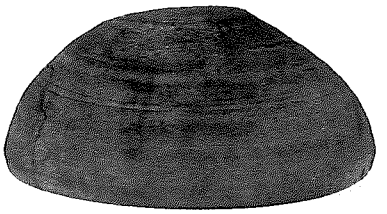
遺物写真(12)

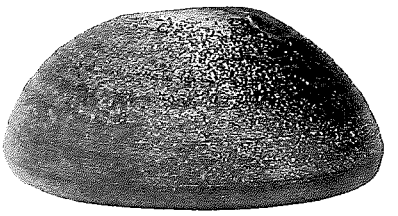
※№は図版№と一致する。

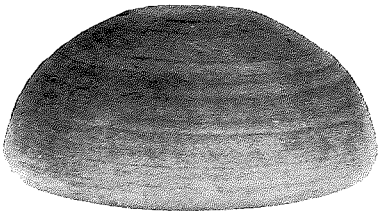
315～330・333・336
＝24号横穴

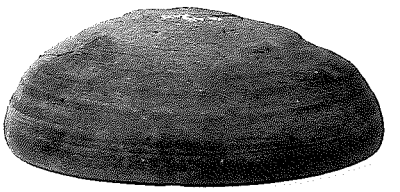

315


316

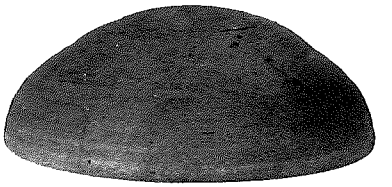

317


318

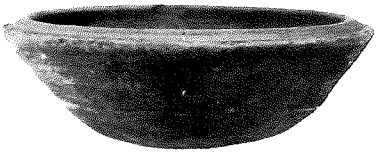

319


320


321


322


323


324


325

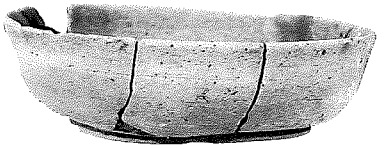

326

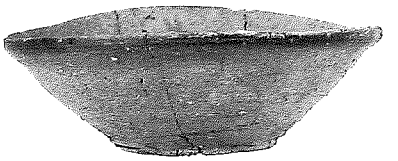

327


328


329


330

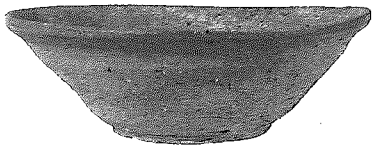

333


336

遺物写真(13)

※No.は図版No.と一致する。

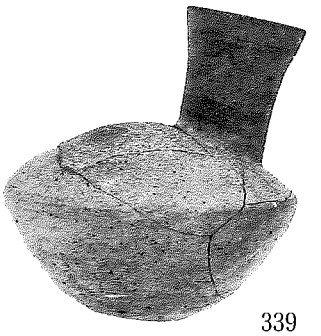
図版42



337



338

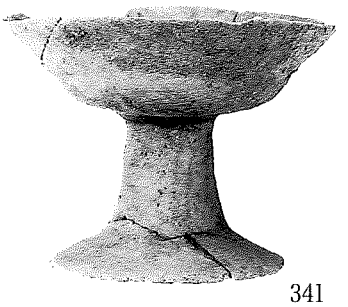


339

337～343・345
＝24号横穴



340



341



342



343



345

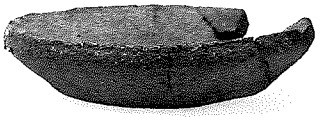


348



349

348～351・353・354・
358～360＝25号横穴



350



351



353



354



358



359



360

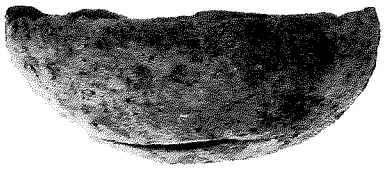
遺物写真(14)

※No.は図版No.と一致する。

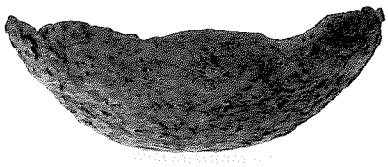
362＝25号横穴



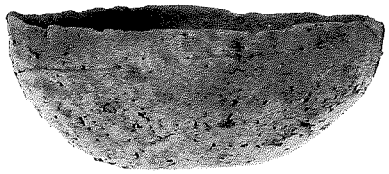
362



365

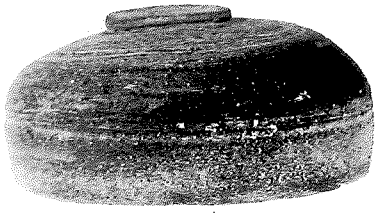


366

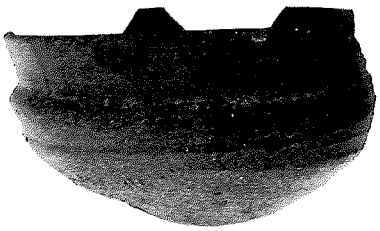


367

365～373＝26号横穴



368



369



370



371



372



373

375＝26号横穴墓前域

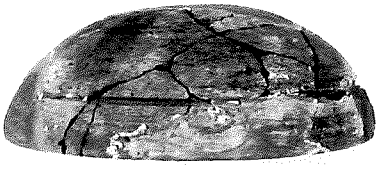
376・378・382・383
＝27号横穴



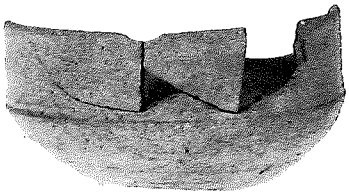
375



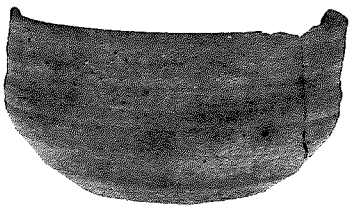
376



378



382

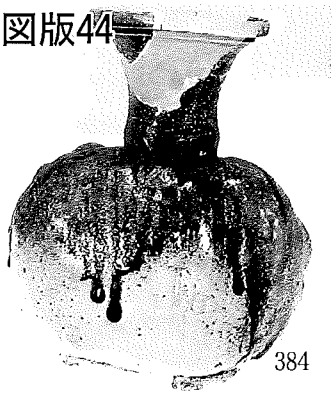


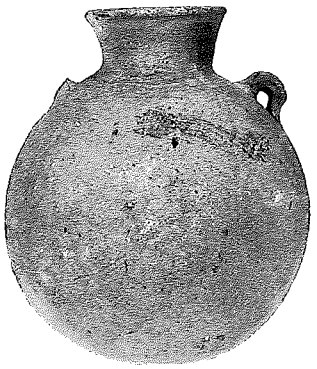
383

遺物写真(15)

※No.は図版No.と一致する。

図版44


384



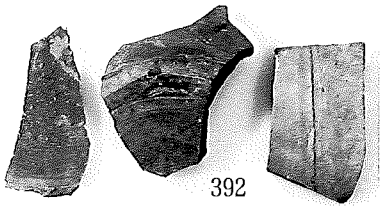

385

384＝23号～26号横穴
墓前域

385・387＝27号横穴


388

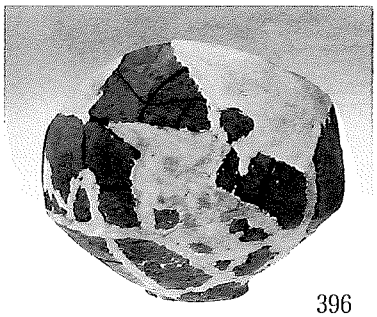


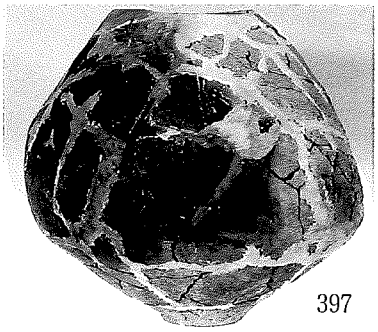

392

388＝４号墳？

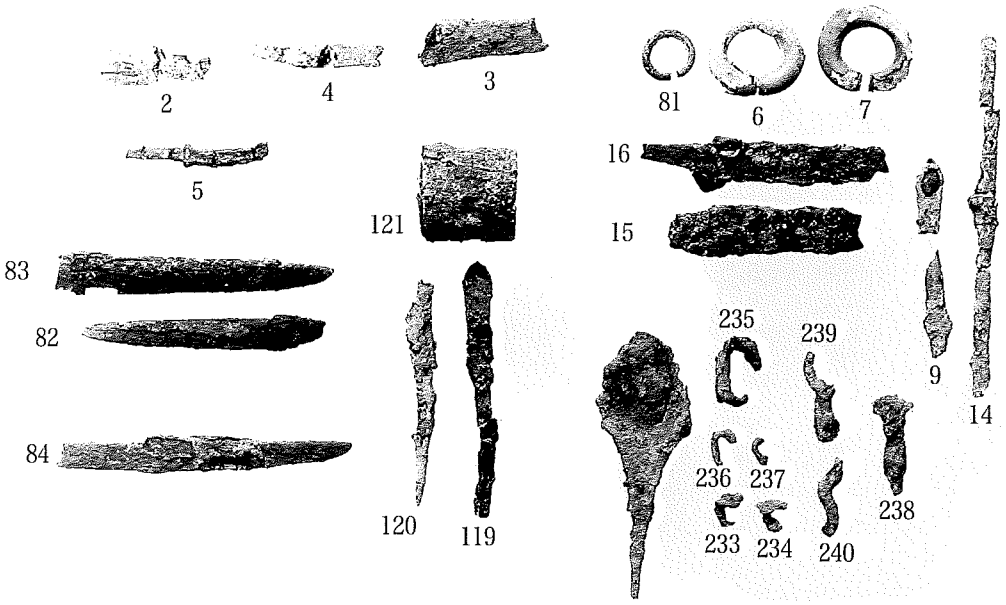
392＝３号墳


387


396


397

396・397＝１号方形周溝墓
土器棺



2～4＝１号横穴

5＝４号横穴

6・7・9・14～16
＝５号横穴

81＝13号横穴

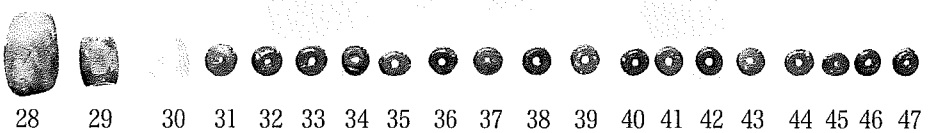
82・83＝17号横穴

84＝18号横穴

119～121＝23号横穴

216・233～240
＝不明横穴





17～69＝５号横穴

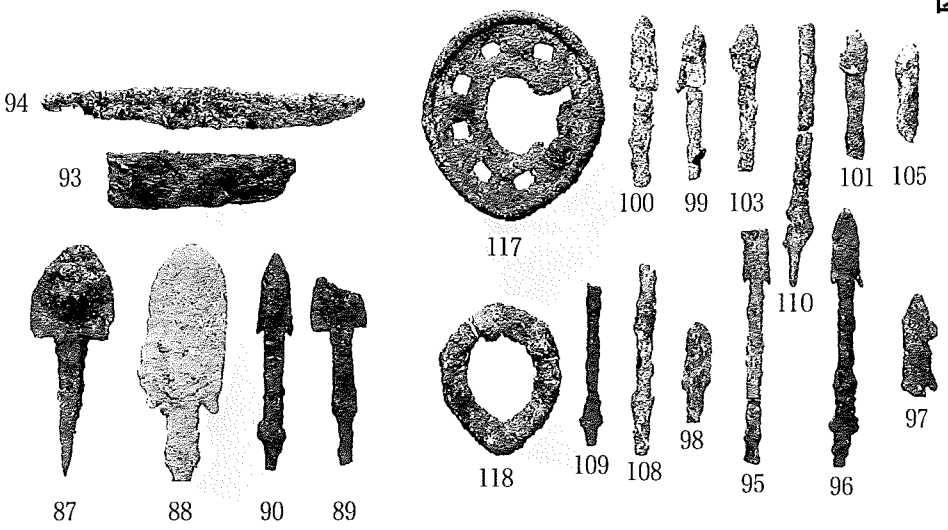


遺物写真(16)

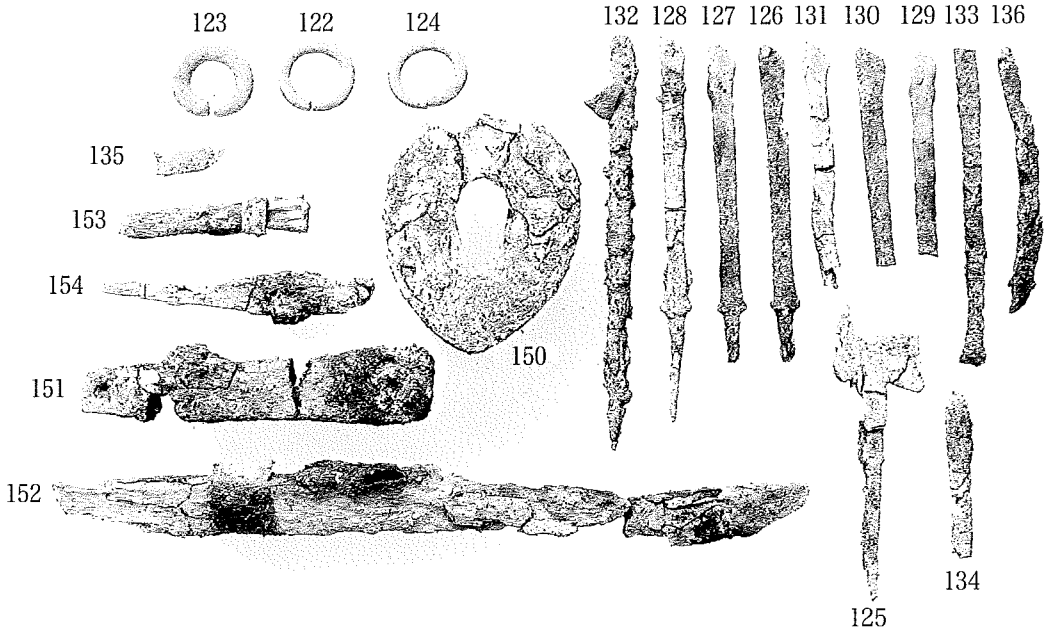
※№は図版№と一致する。

87～90・93・94
＝21号横穴

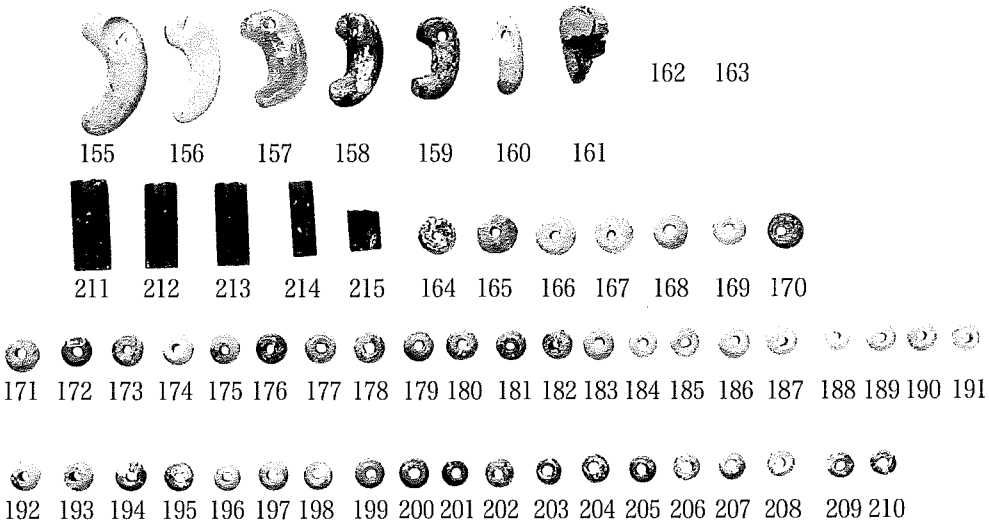
95～101・103・105・
108～110・117・118
＝22号横穴



122～136・150～154
＝27号横穴



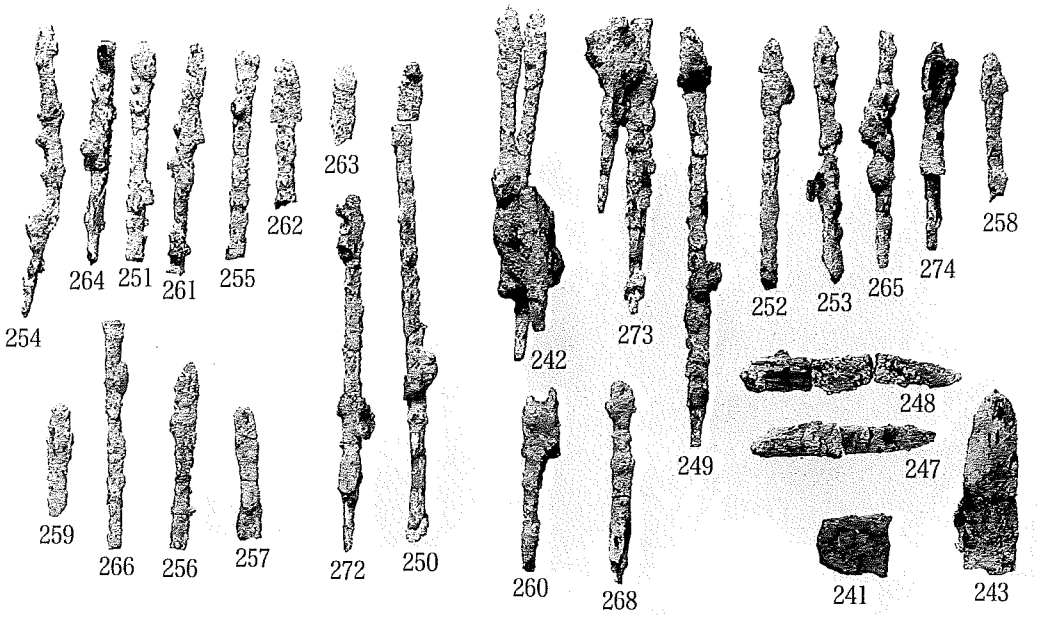
155～215＝27号横穴



遺物写真(17)

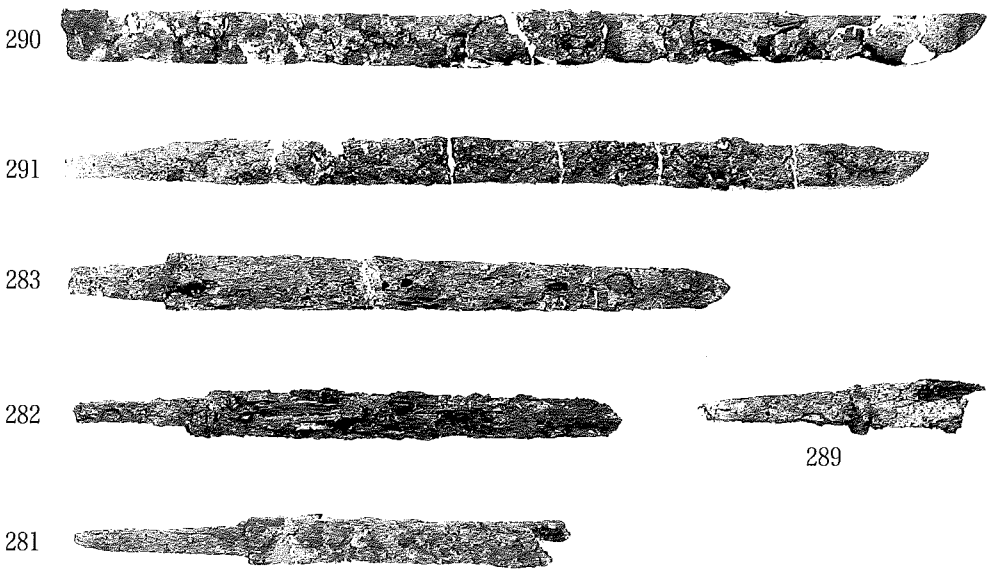
※No.は図版No.と一致する。

図版46

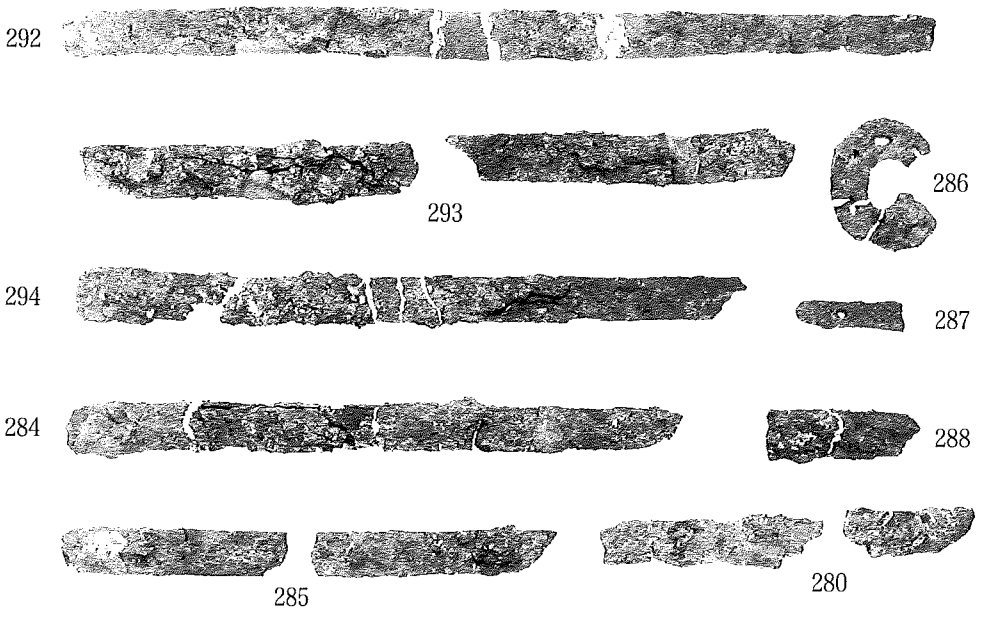


241＝２号墳

242・243・247～266・
268・272～274＝３号墳



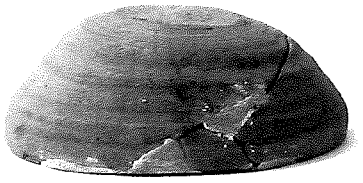
281～283＝３号墳



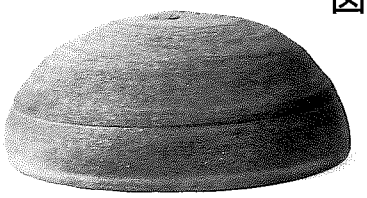
280～294＝不明

遺物写真(18)

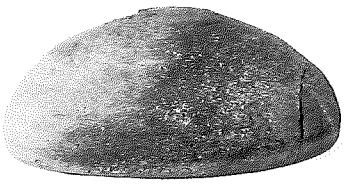
※No.は図版No.と一致する。



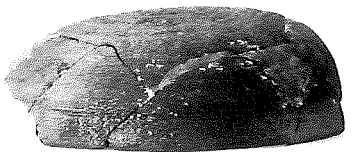
1



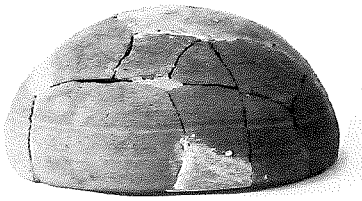
2



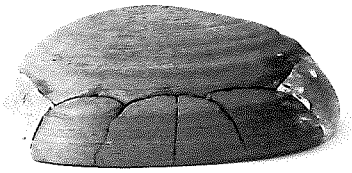
3



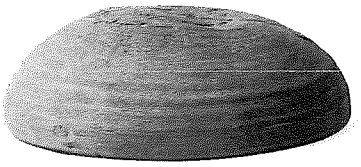
4



5



6



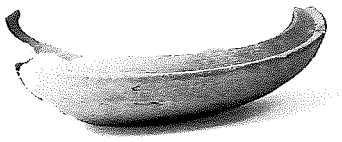
7



11



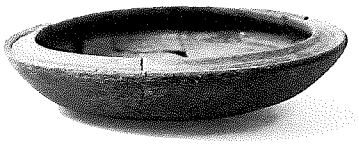
15



16



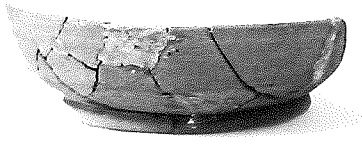
17



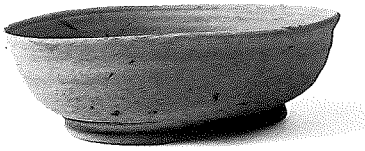
18



19



27



29



31

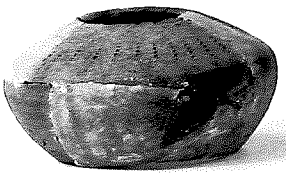
宝野金山古墳群遺物
写真(1)

※No.は図版No.と一致する。

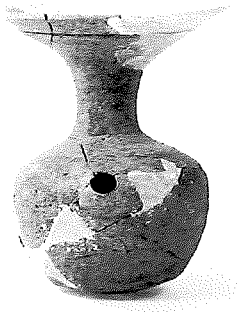
図版48



32



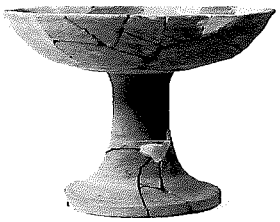
33



37



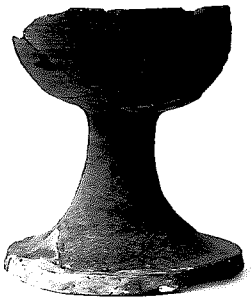
38



39



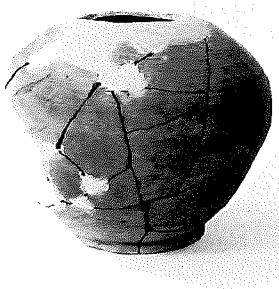
41



42



43



45



46

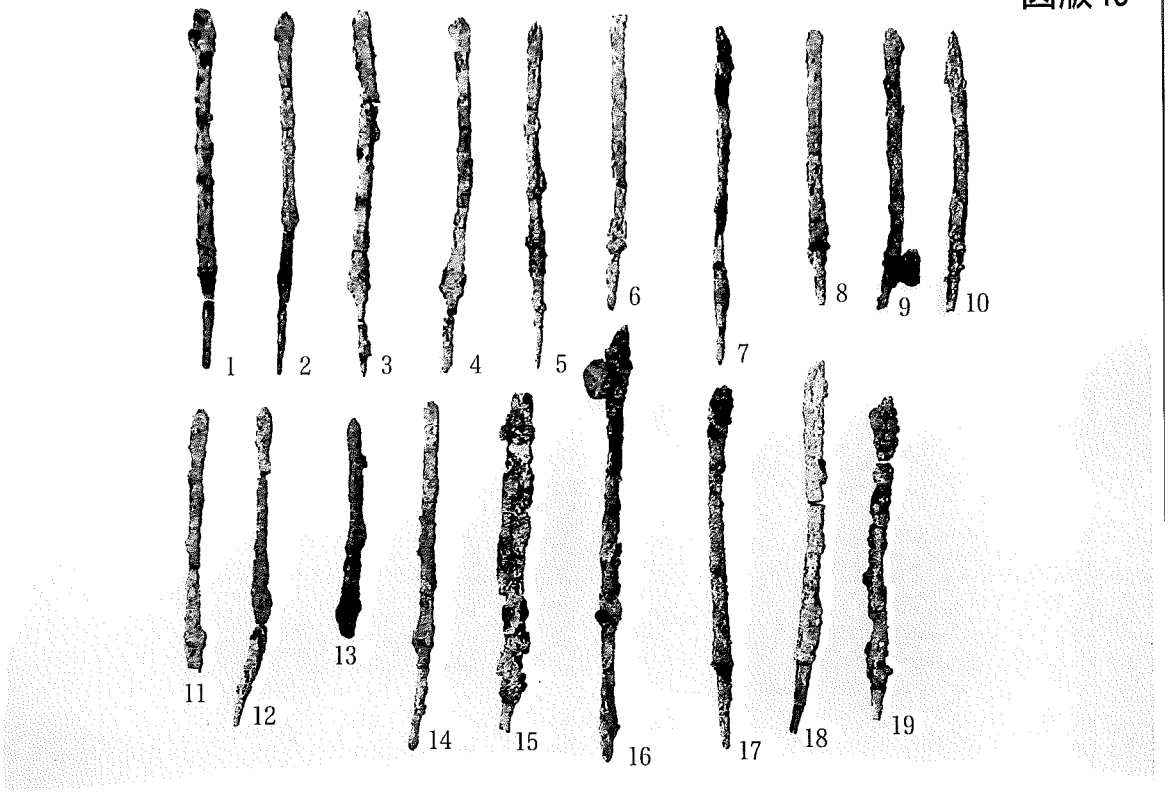


31＋46

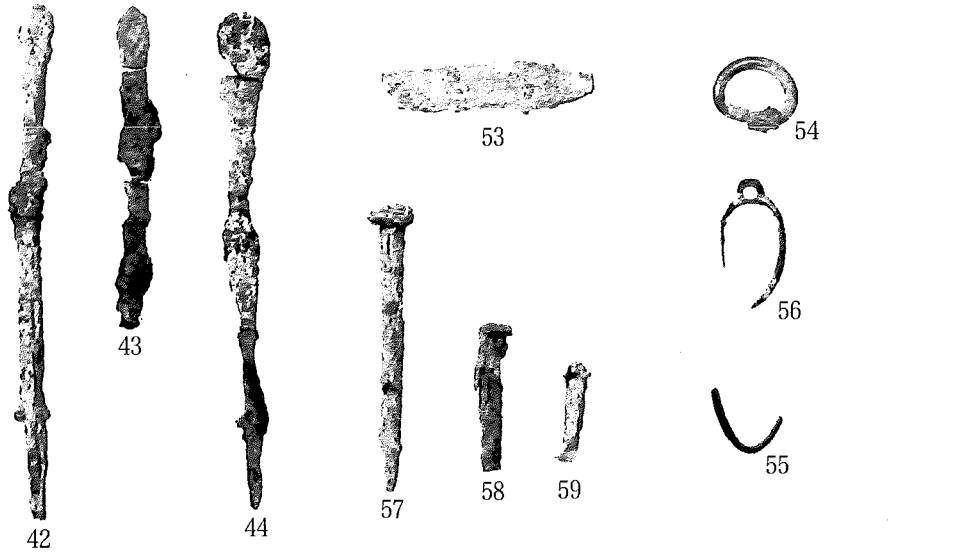
宝野金山古墳群遺物
写真（2）

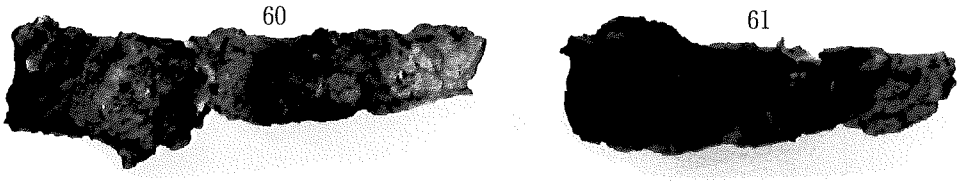
※No.は図版No.と一致する。

1～19＝宝野金山古墳



42～61＝宝野金山古墳





1・5＝金山A４号横穴
2・3・6＝金山A１号横穴
4＝金山A３号横穴



宝野金山古墳群遺物
写真(3)

金山横穴群遺物写真

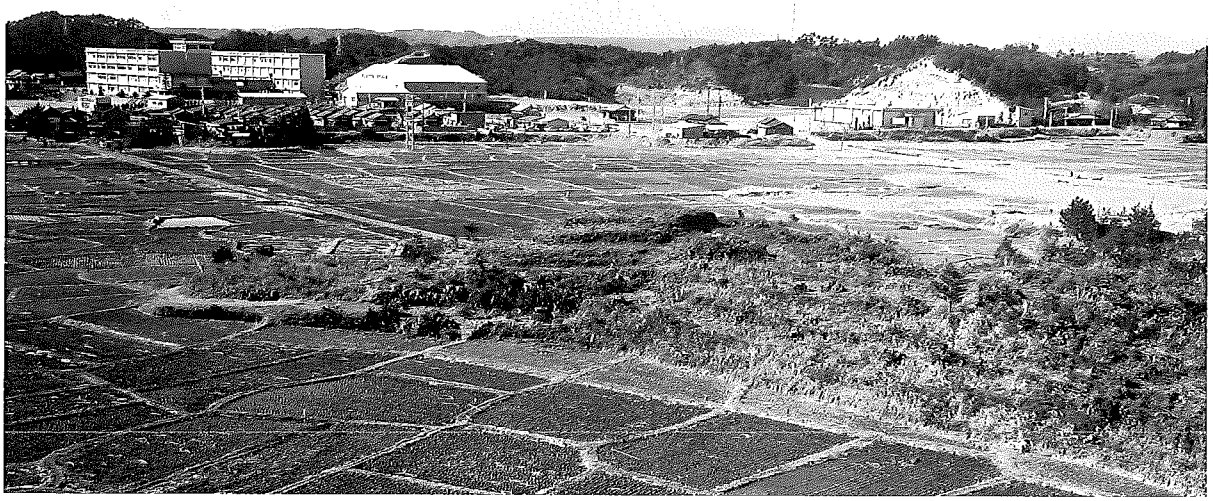
※No.は図版No.と一致する。



図版50



（1） 久能東山古墳群



（2） 1号墳全景



（3） 1号墳主体部



（1）　2号墳全景



（2）　2号墳主体部上層集石



（3）　2号墳主体部



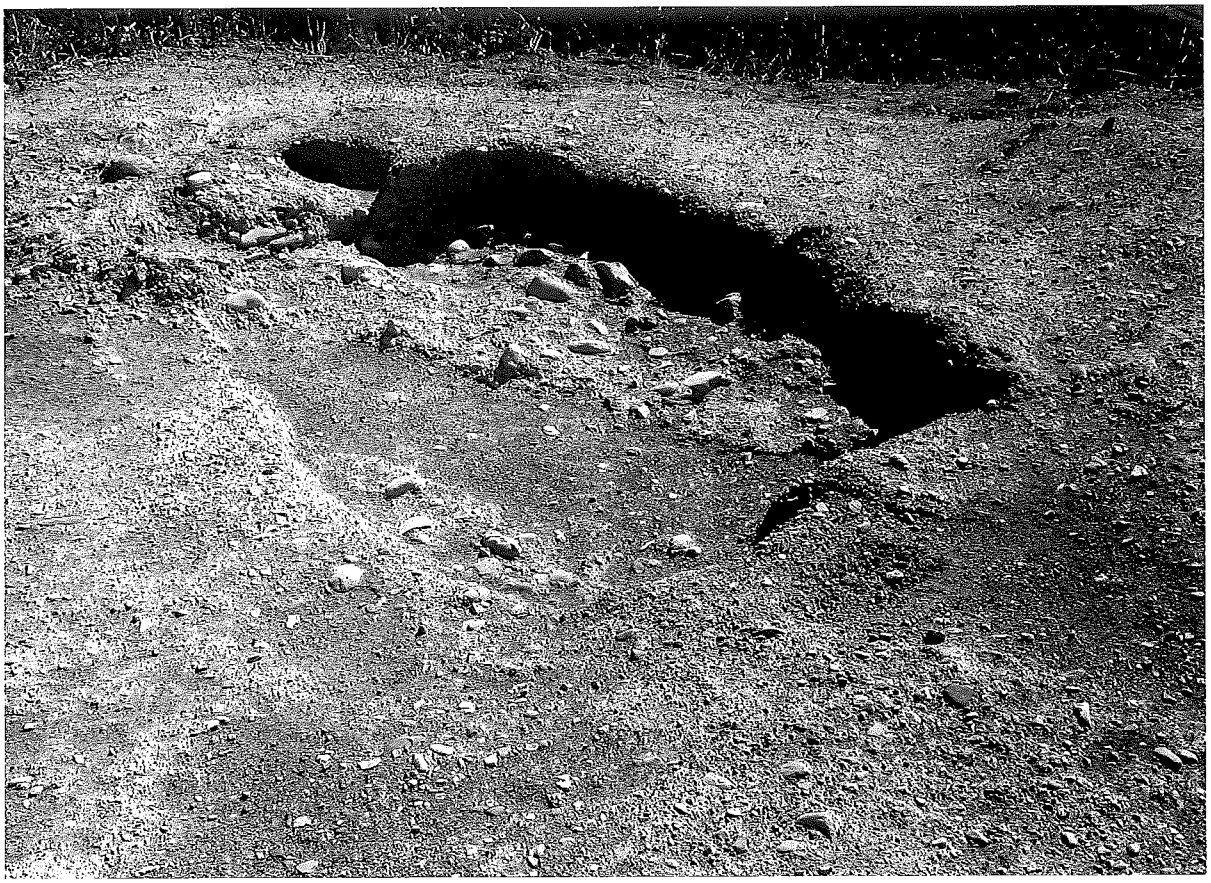
（1） 3号墳全景



（2） 3号墳周溝



（3） 4号墳全景



（1）　4号墳主体部



（2）　5号墳主体部

図版54



（1）　5号墳全景



（2）　1号墳　鉇・鉄鉾出土状態



（3）　1号墳鉄鏃出土状態



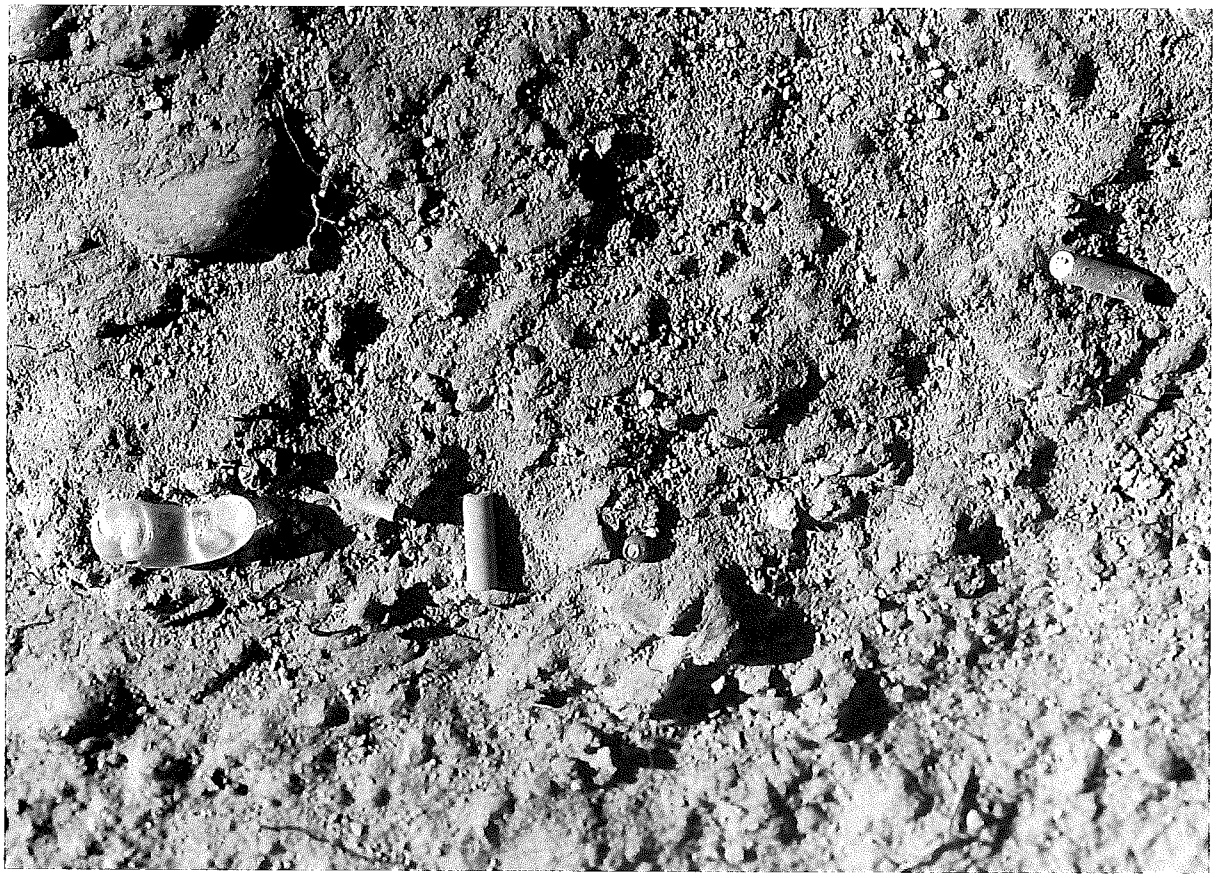
（1）　6号墳全景



（2）　6号墳主体部2～4（前方部より）



（1）　6号墳主体部1



（2）　6号墳主体部1内玉類出土状態



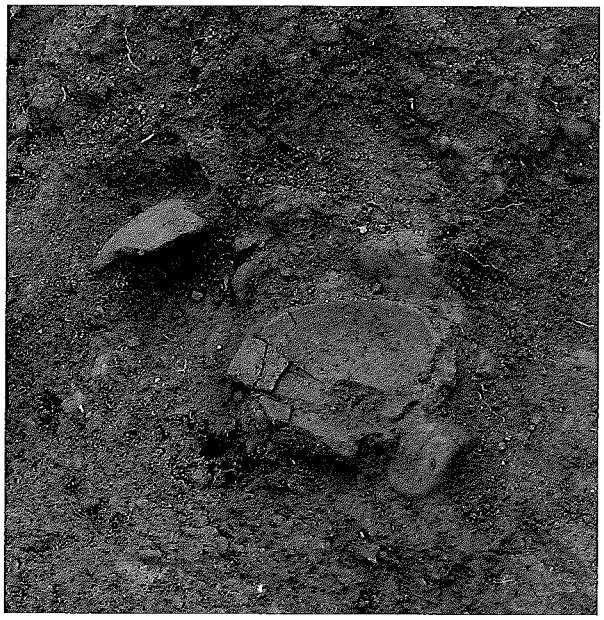
（1）　6号墳主体部3



（2）　6号墳鏡(内行花文鏡)出土状態



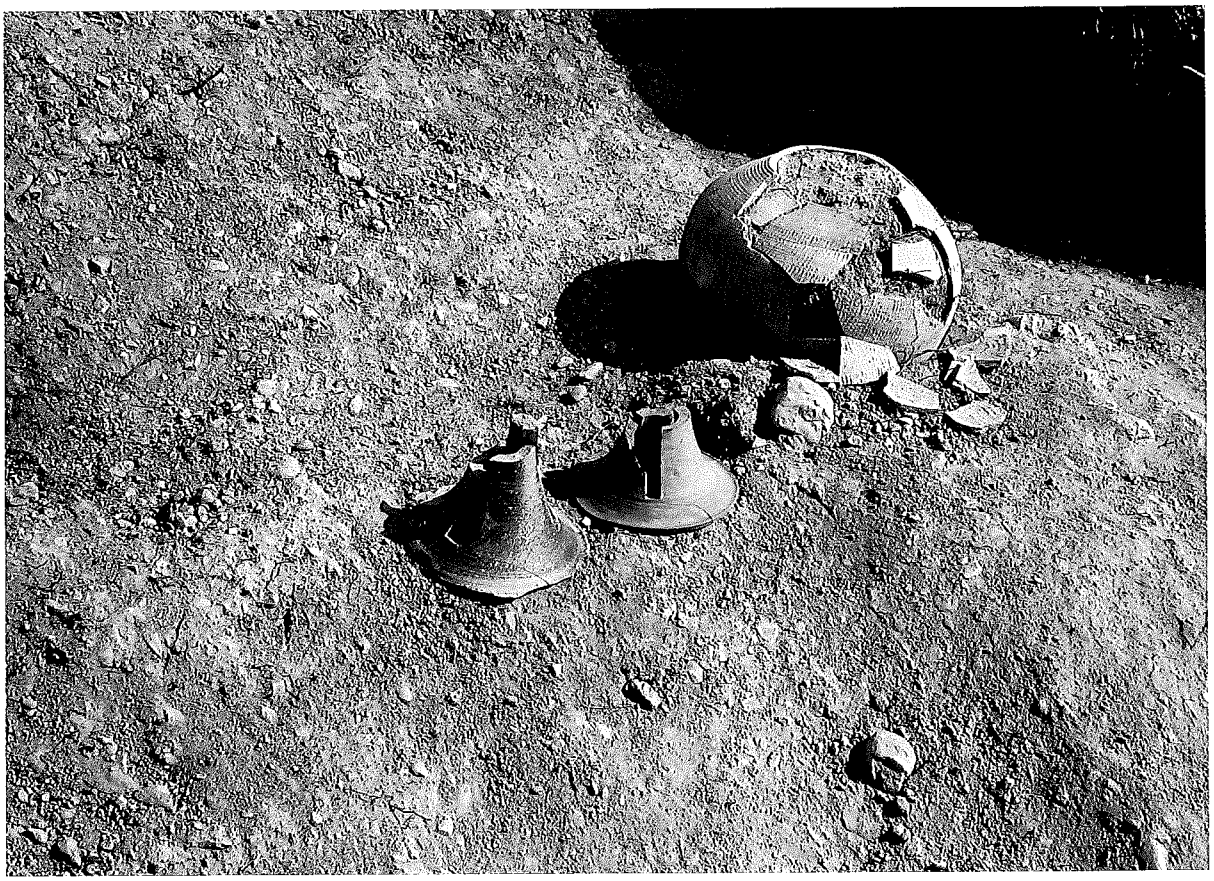
（1） 6号墳主体部5



（2） 6号墳主体部5内坏出土状態



（3） 6号墳主体部2石斧出土状態



（1）　6号墳前方部須恵器出土状態（主体部4南側下方より出土）



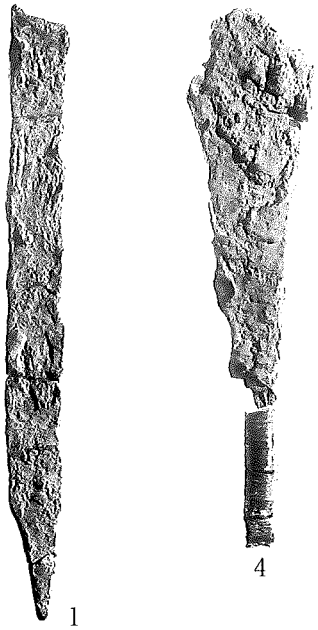
（2）　7号墳全景



（1）　7号墳全景



18



1

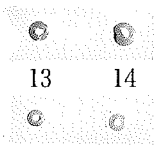
4



3

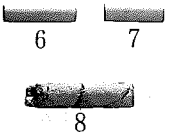


5



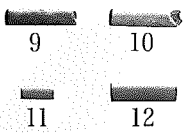
13　14

15　16



6　7

8

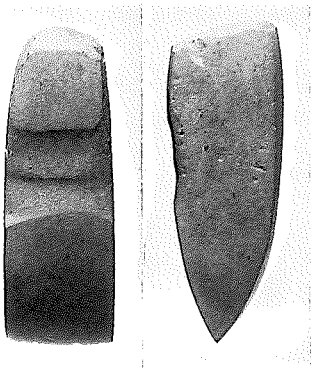


9　10

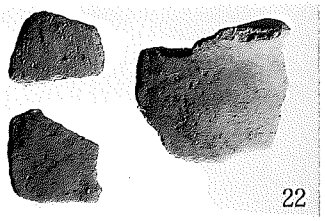
11　12

※№は第９図№と一致する

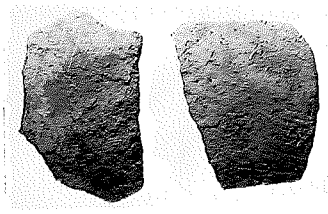
遺物写真（1）



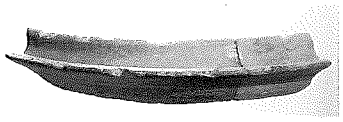
17



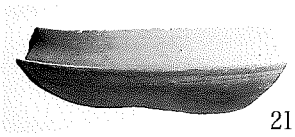
22



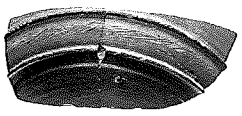
C



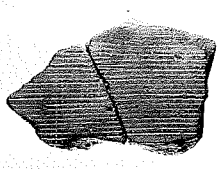
20



21



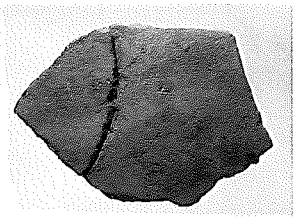
25



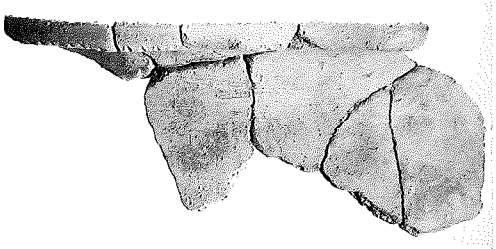
29



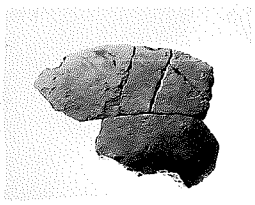
B



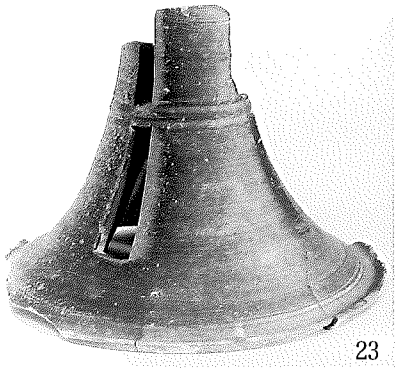
28



24



A

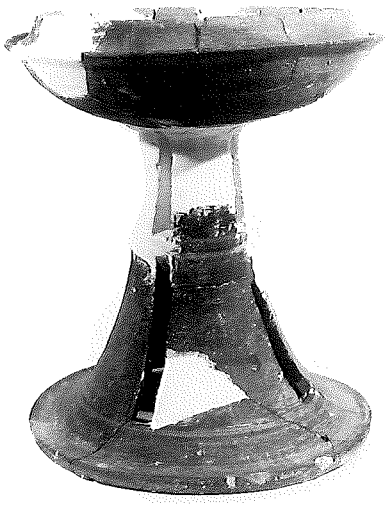


23



30

※Noは第９図Noと一致する



27

遺物写真(２)

A＝６号墳 左側溝
B＝６号墳 前方部 下
C＝５号墳 墳丘

【抄　録】

フリガナ	ジゾウガヤコフングン　オウケツグン
書名	地蔵ヶ谷古墳群・横穴群Ⅰ・Ⅱ
副書名	袋井市考古資料集第４集
編集著者名	松井一明・大川清・大谷宏治
編集機関名	袋井市教育委員会
所在地	〒437-8666　静岡県袋井市新屋一丁目１番地１
発行年月日	2004年12月24日
フリガナ 所収遺跡名	ジゾウガヤコフングン　オウケツグン　イモリヅカゴゴウフン　ホウノカナヤマコフン　クノウヒガシヤマコフングン　イセキ 地蔵ヶ谷古墳群・横穴群　井守塚５号墳　宝野金山古墳　久能東山古墳群・遺跡
フリガナ 所在地	シズオカケンフクロイシタカオ　ヤグ　イモリヅカ 地蔵ヶ谷古墳群・横穴群　井守塚５号墳　静岡県袋井市高尾・谷田・井守塚
	シズオカケンフクロイシトヨサワ　ホウノカナヤマ 宝野金山古墳　静岡県袋井市豊沢・宝野金山
	シズオカケンフクロイシクノウ　ヒガシヤマ 久能東山古墳群・遺跡　静岡県袋井市久能・東山

コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号					
22216	160～163	34° 44′ 20″	137° 56′ 12″	19620316～19620331 19710301～19710430 19710701～19711130	600.0㎡ 800.0㎡	新幹線建設 保育園建設
	199	34° 43′ 38″	137° 58′ 21″	19671220～	50.0㎡	茶園改植
	128 129	34° 45′ 48″	137° 55′ 31″	19700114～19700320	2400.0㎡	工場建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
地蔵ヶ谷古墳群 ３～５号墳	古墳群	弥生時代 古墳時代	方形周溝墓１基 土器棺１基 古墳４基	弥生土器・土器棺 直刀・鉄鏃・刀子・ 玉類	初期群集墳
地蔵ヶ谷横穴群 １～27号横穴	横穴群	古墳時代	横穴27基	須恵器・土師器 耳環・冠帽・直刀・ 鉄鏃・刀子・玉類	後期横穴群 装飾須恵器
井守塚５号墳	古墳群	古墳時代	古墳１基	馬具・直刀・鉄鏃 刀子・須恵器	初期群集墳
宝野金山古墳	古墳群	古墳時代	横穴式石室１基	須恵器・飾大刀・鉄 鏃・刀子・鉄釘	終末期古墳 装飾須恵器
久能東山古墳群	古墳群	古墳時代	古墳７基	須恵器・鉄鏃・刀子 ヤス状鉄製品・鉄鉾 銅鏡	初期群集墳
久能東山遺跡	墳墓	弥生時代	土坑１基	弥生中期土器・柱状 片刃石斧	

袋井市考古資料集第４集

地蔵ヶ谷古墳群・横穴群

－袋井の群集墳と横穴群を考える(3)－

発行年月日　2004年12月24日
編集・発行　袋井市教育委員会
〒437-8666　静岡県袋井市新屋1-1-1
☎0538－43－2111
印　　刷　松本印刷株式会社
〒437-0022　静岡県袋井市方丈3丁目3-11